
God's Seed

由城 要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

God's Seed

【Nコード】

N7635R

【作者名】

由城 要

【あらすじ】

神の撒いた種『God's Seed』として育てられた少女は、初めて見る外の世界で大切なものを見つけていく。しかし彼女の力を巡る混乱は、大きな運命によって導かれるものだった。

現在第2編更新中。運営サイトにも投稿しております。

序章 少女の詩

深く息を吸い込むと、そこに宿った温かいものに気付いた
心臓がいつもの音をたてて動くことが、こんなにも愛しい

頬に触れる風を初めて感じたのは、暗闇から抜け出したあの日
何処までも続く果てしない空 あなたにも見えるでしょう

太陽の日差しを見上げて、初めて渴きを覚えて
雨が降ると、その恵みに初めて感謝した

雲の流れに身を任せ、その後姿を追いかけて
雪が降ると、幼き頃を懐かしんだ

忘れかけていた追憶 胸に宿る鼓動
紡ぎだし花を咲かせよう、神の遺した最後の種
溢れ出すこの言葉が 全ての人に届きますように
最後の願いと祈りを此処に記そう

初めて誰かを信じたのは、小さな小さな出来事で
殻を破ることを知りながら、それをずっと恐れていた

外側から触れる優しさに気付いたのは、暗闇を捨て去ったあの日
消えることのない永遠の居場所 あなたにも分かるでしょう

春が来れば、花々が命を残すために咲き乱れて
夏の暑さを感じると、生きていることを改めて知った
秋が来れば、大地の実りに感謝して

冬の寒さを感じると、ぬくもりの温かさを改めて知った

太陽がその光で世界を照らしている

大地は森と砂漠と街を支えて、海は誰よりも優しく全てを抱いた
人も神も、同じ地上の上の命

忘れることはない記憶 胸に眠る鼓動

紡ぎだし花を咲かせよう 神の撒いた最後の種

溢れ出すこの想いが 貴方の心に届きますように
最初の願いと祈りを此処で歌おう

?? 歌声が響く。世界が、終わる。

第1章 風の彼方

初夏の日差しが揺れる、海岸沿いに広がる市場。

熱気のこもる人通りの多さに、誰もが空に浮かぶ太陽を恨めしく眺める。休日ともなれば貿易船による各国の商業の中継点として、様々な人々が行き来する港。そしてそこから城下町へと伸びる大通りの賑わいは正午にかけてピークを迎えていた。

ここは周りを海で囲まれた島。本来1人の王が統治していた国を2人の息子が譲り受け、2つの国を作り上げた、珍しい国だ。『兄弟国』とも呼ばれるその国々は安定した自治の許、友好な関係を保ち続けている。島の西はティスニー国、島の東はティスファール国と呼ばれる。両国は十数年前の戦いの際にも、共に協定を結び戦ったこともあった。

「……やっぱり近場で済ませばよかったか……」

行き来する人混みの中、1人の青年が爛々と光り輝く太陽を見上げそう言った。風もさほど吹かないという最悪な条件下、金髪をかきあげて心底困ったように溜息をつく。とりあえず、直射日光を避けようと狭い路地に足を踏み入れ、通い慣れた店までの道を目指して歩く。額にはバンダナ、耳にはピアス。服の襟に付けられた小さな銀の勲章は、兵士か軍人の印だった。

彼の名はシヨウ・レイン。島の西、兄弟国の兄にあたるティスニーの兵士である。否、そう言うことが出来るのはあと数日の間だけなのだが。

彼は旅に出るのだ。自分を知る為に。

必要最低限の食料を買いに城下町の近くまで立ち寄ったのだが、あいにくの快晴と日光。雲一つあればまだマシだろうと彼は思った。うんざりする程の熱気に、出発当日を思い描いたシヨウは更に深い

溜息を漏らす。

その時だった。

『砂塵の向こうに見えしもの』

城下の大通りから迷い込んだ微風が、頬を撫でた。耳元を掠めた小さな言葉に、ふと顔を上げる。

「……？」

すぐに街の喧噪に掻き消された小さな言葉。風と共に旋律を奏でたそれは、明らかに唄と呼ぶにふさわしいものだった。凜とした声。優しい歌声は、涼風のように通り過ぎた。空耳かと思うほど、幻かと思うほどに。

綺麗だと、彼はそう感じた。

そこから少し時間を遡る。ティスファアの中心に位置する丘に1人の青年が立っていた。港から吹きこむ潮の香りを含んだ風が丘の緑を揺らしす。心地よく響く葉擦れの音はまるでいつかの思い出を呼び起こすように、彼の髪を撫でていった。

城下と港、そして果てしない彼方まで一望できる、広い土地。踵を返し、幾度と無く眺めた馴染みの風景を眺めていた青年はゆっく

りと足を踏み出した。小さく心の中で告げた別れの言葉と、幼い頃の思い出に終止符を打ち、歩き出す。

石畳の階段に足をかけ、ゆっくりと歩き出すと風が彼の赤い髪を撫でて消えていった。ふと足下から視線を離れた彼は向こう側から登ってくる知人の姿に目を止めた。相手も気付いたように目を細める。

「来ていたのか、リヨウ」

リヨウ・ティスファア。兄弟国の東を統治する王の息子……3番目の王子である。17という歳ではあるが、その見た目も中身も実年齢より若く見える。彼はいつものように笑顔を浮かべて応えた。

「……明日は早いだろうから。だったら今日来といった方がいいかなと思ってさ」

足を止めると腰に掛けた軽めの剣がカチャリと音を立てた。相手も足を止め、丘の上を見上げるとゆっくりと髪をかきあげる。リヨウより幾分年上に見えるその知人は、隣国ティスニーの第1王子。次期王として期待をかけられている青年だ。名をハル・ティスニーといい、リヨウの従兄弟にあたる。

「またいつものように城下に降りているんじゃないのかとっと思っってたんだがな」

「もちろん行くけどさ、でも……一応……」

海からの涼風が葉擦れの音と共に、2人の間を通り過ぎていく。石畳の階段のまわりにはいくつもの墓標が影を伸ばし、傍らの雑草が花を咲かせ、くすぐったそうに揺れていた。ハルはまた丘を登るようになり、1歩、2歩と歩みを進めると振り返らず言った。

「……出発は明日だ。城下に遊びにいくのもほどほどにしておけ」
「……うん」

笑顔を浮かべるリヨウは、ハルのその言葉を聞いてゆっくりと街に向かつて歩み始めた。青空に反して、墓標は異様なまでの数で広がっている。すべては、思い出になりつつあるあの夜が作りだしたもの。還らない者達の証。

慣れ親しんだ城下はいつもと変わらない風景をリヨウの目に映し
てくれる。街の人々にとってもこの腕白王子が城下に降りてくるこ
とは珍しくなく、剣の腕に覚えもあることから城の人間も黙認して
いる。しかし今日の人混みの多さの中に混じってしまえば、その姿
も街行く人の1人となってしまう。

「……ふう、今日は何処に行くかな……」

人の流れが多い中、ふと足を止めたりリヨウはそう呟いた。特に行
きたい場所があるわけでもないが、とりあえず人の流れに向かつて
歩みを進める。だが、いつもばらばらと行き来する人の群れが今日
に限っては1つの流れとなっているような気がする。皆の行く方向

が一定なのだ。

「……………今日何かやってたっけ？」

お祭り好きのリヨウとしてはそういうものは全部把握している。祭りの日に限って城を抜け出すため、いつもハルに呆れられているのだ。不思議な感覚を覚えながら、街の喧噪の中を歩いていくリヨウ。大通りを曲がり、市場を抜けるといつそう潮の香りが強まった。潮騒が街の賑わいと共に耳を攪る。

ふ、とその瞬間リヨウの視界に人垣が目に入った。

『砂塵の向こうに見えしもの』

視界にその風景が映ったのと、声が聞こえたのはほぼ同時だった。発生源は確かにその人垣の中、今リヨウのいる場所からは見えないがそこから『唄』が聞こえてくる。吟遊詩人か何かと一瞬思ったが、その声はどう考えても女の声。今時女の詩人は珍しい。

リヨウは首を傾げ、その人混みに近づいて行つた。歌声はゆつくりと喧噪の中に響き渡る。いままで城で聞いた歌い手達の中にもこんな歌声で歌う人はいなかった。それほど、その歌声は耳通り良く、琴線に触れる。

（何処にいるんだろう）

その歌声に、足は勝手にその人混みの中に向かっていった。歌っている人の姿が、どうしても見たくなつた。探し求めるように…リヨウは足を進める。

『砂塵の向こうに見えしもの 逆さの塔か逆さの城か』

路上に立ち並ぶ煉瓦造りの店の壁にもたれかかって、彼女は歌っていた。海のように深い青の長髪が潮風に揺れる。瞳を閉じ、何かを想うように紡ぎ出す旋律は誰も聴いたことのない、美しく綺麗な歌声。ただ歌うためだけに作られてきたような、1人の少女がそこにいた。

歌声は市場を抜けてまるで風のようにしなやかに、その場を包み込む。その場に自然と人垣がで始めたのも、ただの野次馬が集まったからではない。人の流れから1人、また1人と足が止まり、幾つもの視線が少女へと向かう。

『陽炎に隔てられた水源は砂地に消え
枯れた木々が砂煙に揺れ……』

少女はふと空へその瞳を向けた。白い肌の柔弱な印象とは異なり、彼女の歌声は潮騒に阻まれることなく、風に乗って通り抜けるように城下の隅々まで響き渡った。少女の傍らには大型の犬が歌声に酔うように眠りにについている。

人垣が出来ていることに気付いていないのか、少女の視線は別の方向へと向いていた。人垣のその向こう、水平線の広がる彼方と空の境目。

『誰が知ろうか風の終わりを 砂にまみれた千の物語を』

たとえそこに歌声を追ってここまで辿り着いた、2人の青年の視線があつたとしても。彼女の見つめる先はどこまでも果てしない青い空間。彼方まで終わり無く続く無限の世界。

『一夜に消えた幻の 語られることなき表紙絵を』

運命の女神も、まだその系に手をかけてはいない。誰が見せたわ

けでもない、果てしない物語への最初の交差。それはもしかしたら、神さえも気付かない一瞬の出来事。繰り返される幾つもの時間の中で、歯車の1人が外れた瞬間。

『記憶を持つ者 皆死に逝き 存在さえも砂塵の中に
誰も知り得ぬ物語、それを語るは果てしなき風』

夏の日差しは暑いほどに降り注ぐ。陽炎に揺れた街の風景はこの日、今まで以上にならない程澄んだ風と晴れ渡った青空に彩られた。何ら変わりなく感じるその風景が、1つの物語の始まりだと知るものは少ない。

第1章 空色の瞳

首筋を撫でるような熱風に、髪が揺れた。海岸から吹き付ける潮の香りを交えたそれは自分の慣れ親しんだものとは違ったが、不快ではなかった。彼女はその青い髪をなびかせ、山道を歩いてゆく。その隣には、黒い毛並みをした一匹の犬が後ろをついてきていた。

最小限の荷物しか手にしていない彼女は旅人にしては華奢であり、旅路には不似合いな程年若い少女。今はもう眼下に存在するものとなったティスファアの城下では街を出る際、何度も街の人間に止められた。

最近の山道は危険が多い、と。ただでさえ魔物や魔獣が潜んでいるとされている、ティスニーから北東の森。今、彼女が歩いている山道はその中央を通らなければならないのだ。街の人間はこの命知らずな少女に、何度も考え直すように言い聞かせようとした。しかし、彼女の答えは1つ。

「危険なのはいつものことだから」

彼女は比較的珍しいとされる青髪を耳にかけ、隣を歩く忠実な黒犬に語りかける。大きさに似合わずあまり迫力のない犬は少女の言葉に顔を上げた。しかし、足は止めない。

何も言い返さずただこちらを見つめる黒犬に少女は笑ってみせた。その表情は、城下で唄を歌っていた時の表情より幾分幼く見える。実際彼女は16であり、大人とは言い難い。

「ねえ、ミエル」

ミエル、と呼ばれた犬は言葉を解したかのように目で何かを訴える。それに気付いたように少女は悪戯っぽく微笑み、人差し指を立て

て、それを口元に持っていく。

「分かってるよ。それくらい……」

瞬間、少女と犬の間を裂くように突風が吹いた。それは風というには強すぎる程のもので、鎌鼬にも似ている。少女は瞬間的に半歩足を引き、それをすんでのところで回避する。犬は威嚇するように鎌鼬の起こった木々の間を睨みつけ、唸り声を上げた。

鎌鼬の残りの風が、少女の髪を揺らす。それは夏空に似合わない、寒気のような冷たい空気。けれど、少女はその微笑みを崩さなかった。

ふと少女が腰に手を伸ばす。そこには細身の剣が装備されていた。街の人間も誰もその剣の存在には気付かなかった。なぜならそれは誰も気付かない程、彼女の雰囲気の中に溶け込んでいたため。人が服を着ているのと同じように、剣は彼女の手にあっても違和感はなかった。

「……危険はいつものことだし」

地を蹴る音が、再び起きた鎌鼬の中に消えた。湿り気を伴った薄暗い林の中で、赤い瞳が瞬きをしている。迷うことなく剣を構え、彼女の青眼がそれをしっかりと捉える。真夏の日光の下、魔獣の奇声と血飛沫が上がる。

この島は『兄弟国』それぞれの港町以外に北端にもう1つの港がある。貿易の窓口として利用される城下の港に対して北端は北の大陸への船が出ていることで有名だ。他の国と違い、まだ文明の発達が完全ではないこの島の船では隣の大陸へ行くにもまる一日かかるけれどそれでも旅人の行き来は多い。

その港町に、シヨウはいた。今まで仕事で何度か来たことがあったので、宿をとるのもさほど問題ない。宿屋の人間とはもう顔馴染みにもなってしまったし、部屋を取るのも簡単だった。

この日の船は全て出航してしまっただけでなく、港には漁船の姿しかない。宿の窓から街を見下げると、海へと続く道には旅人らしい人々が行き来していた。彼方まで望むことが出来る海はゆつくりと闇色を誘うように暗くなりつつある。

ふ、とシヨウは窓硝子に映る自分の姿を見つめて、顔を顰めた。

（……また……）

殴られた時のような鈍い頭痛。偏頭痛にも似た痛み、シヨウは頭を押さえてベットに座った。

「……っ」

頭痛が起きるのはシヨウにとってはいつものことだ。原因は分からない。時折痛みが襲うのだ。それでも、これ程の頭痛は珍しかった。シヨウはバンダナの上から額を抑えると、ただひたすらにその痛みに耐える。医者に診てもらったことはない。色々理由はあるが、医者の所に行く気がおきないのだ。

（……最初からこれだと先が思いやられるな）

大きく息をついて、痛みが和らいだ隙にベットに横になった。天
上を見上げて、ゆっくりと深呼吸を続ける。休んでいる時に頭痛が
起きるのは仕方がないことだと思う。けれど、魔獣や魔物に遭遇し
た時等は危険きわまりない。

溜息をついて、シヨウは目を閉じた。睡魔はなかったが、鈍い痛
みはゆっくりと消えつつある。

船に乗る、という経験は幾度かあった。空とどこかで繋がるよう
にも見える青い海が果てしなく広がる。その風景に少女は1つ背伸
びをして、潮風の心地よさに微笑んだ。

甲板には数人の人々が集まっていた。チラチラとこちらを見てい
るのは、どうやら少女が珍しい青髪だからだろう。あまり良い気分
はしなかったが、少女はあえてそれを無視することにした。隣にい
たミエルはその視線に気付いていないようで、少女を見上げて尻尾
を振っている。少女はその頭を撫でて苦笑した。

「皆、この髪が珍しいんだって。……注目されるから嫌なんだけど」

確かに彼女の髪は深海の色をしている。太陽の下だとそれは美し
いまでの青に染まるのだ。しかし、生まれてから今までこうして同
じ髪を見つめてきた少女としてはそれ程珍しいものにも思えない。

少女は仕方なく、船室に戻ることにした。何処にいても視線をかうのは同じ事なのだが寝てしまえばそんなこと気にはならない。具合が悪いフリでもして大陸に着くまで寝ていようと彼女は呟いた。

船室は思ったよりガランとして静まりかえっていた。人も数人しかおらず、少女は意外に思った。この船は一等客船ではない。一般人が大陸との行き来に使う船なので、船室が個室ではないのだ。旅人や商人を乗せることを目的とした船なので、皆広い船室にころ寝することになる。

(……できれば誰とも関わり合いになりたくないし……)

少女は仕方なく、一番端に座って膝を抱えた。黒犬が隣に伏せ、少女と同じように目を閉じる。まだ昼の時間帯。眠りに堕ちることはなかったが、静かな時間を過ごすことは出来た。

第1章 宵闇の願い

丁度同じ船に居合わせていたのはシヨウだった。昨夜の頭痛は辛かったが、翌日にはすっかり治まっている。だからこそ、医者に行く気が起きないのだと彼は心の中で思った。彼は甲板で船員達に大陸の話聞きながら、街に着いた後、何処へ行くか検討していた。宛のない旅でもしているように思えたのか、船員達は口々に自分の薦める街を紹介してくる。

シヨウは苦笑しながらもそれらの1つ1つに耳を傾けた。宛の無い旅、言われてみればそうかもしれない。実際、自分の探している場所があやふやなのだから。それに手がかりもない。

そんなことを思っていたとき、船員の1人がふと甲板に立つ人物に目を止めた。

「なあ、あれ……」

「……青髪？珍しいな」

船員達や、近くにいた旅人達の数人がそちらに目を向けている。青髪、という言葉にシヨウもその視線の先を追った。そこには、隣に黒犬を連れた青髪の少女の姿。目を惹かれる青髪も確かに印象的だったが、それ以前にシヨウは思い当たることがあった。

（ティスファアの港街にいた……？）

瞬時にあの歌声が思い出された。一回聞いただけなのにその旋律も歌声も、全てが鮮やかに甦ってくる。背伸びをして海の方こうを眺めている姿はあの時の表情よりまだ幾分幼く見えた。けれど、その姿の印象は変わらない。纏った雰囲気が違うのだろうか。少女は街にいるような同年齢の女の子達とは何処かが違った。

少女は一瞬こちらに視線を向け、すぐに逸らした。どうやら皆が少女の青髪を珍しがっているのに気付いたらしい。黒犬に何かを口にし、その頭を撫でるとすぐ船室へ向かって歩き出した。その様子を見ていたシヨウは、ふと首を傾げる。少女は旅をしているように思えた。けれど、同行者らしき姿はない。いるのは隣を歩く黒犬だけ。

（……一人旅？）

珍しい、というより正直異様にも思えた。この時世に好きこのんで旅をする人間は少ない。自分も同じように見えているのかもしれないが、とシヨウは心の中でそう呟いた。けれど、彼には旅をする理由がある。

少女は船室へと続く扉を開けた。その姿が奥に消えると、船員達の話がまた始まった。話題を街の話から、先程の少女の話に変えて

夜の帳が降りるのは早い。少女はふと人の気配に気付いて顔を上げた。どうやら甲板にいた人々が船室へと入ってきたらしい。その賑やかな声に反して、少女は顔を顰めた。数人が船室の中央まで入ってきたところを見計らって、外へと出ていく。隣にいたミエルはどうやら眠っているらしく、吐息で体が上下していた。

(……少しくらいなら、外に出ててもいいよね)

少女は犬のその様子を見つめて、扉を開けた。同時に隙間を割って入ってくる涼風に髪が揺れる。軽い夕立でもきたのか、甲板が少し濡れていた。少女は海の彼方を見つめ、暮れゆく海に深呼吸をする。船室の光が段々と暗闇の中に浮かび上がってきていた。

少女はその青い瞳で甲板を見渡し、誰もいないことを確認する。どうやら全員が船室へと戻っていったようだ。誰の視線も気にすることはない。少女は悪戯な微笑みを浮かべると、スツと息を吸う。

『外海を渡り、虚空を見上げ
陸路を仰ぎ、星々を見上げ』

旋律が水面に吸い取られるように消えてゆく。ふわりと肌をくすぐる風が心地よい。賑わう船室から1人離れて夜空を見上げるとそこには満天の星空が広がっている。

『遠雷を遙か彼方に 南風はざわめきに消え
陽は弧を描き 我は千の夜に散る』

唄うことは好きだ、と少女は思う。蒸し暑さが残る甲板は静まりかえり、多分歌声を聞く者はいない。ゆつくりと続きを唄うことが出来ると少女が息を吸った、その刹那。妙な空気の流れが足下をすり抜けていった。否、それだけではなく体全体に寒気が走る。少女は船室の光のあたらない、船の後方を見やった。漆黒の暗闇の中に一瞬感だけ妙に蠢くものがある。

「……！」

声を上げようと思った。けれどその瞬間に少女の体が傾く。船全

体を揺らす、嫌な衝突音。横に揺らされた船が、転覆すんぜんのところデバランスを取り戻す。大きく揺れたせいで船が軋み、波をかぶった。少女は一瞬波に体を引きずり込まれそうになる。何かにつかまらなければ、と思っただけで引く波の強さは予想以上に強かった。

(……引きずり込まれる！)

その瞬間、少女は誰かに腕を掴まれた。塩水をかぶったせいで上手く息が出来ず、苦しい。何度か咳をして、腕を掴んでいる相手の顔を見上げた。

こちらを見上げた少女にシヨウはすぐ腕を放した。偶然船室の外にいた彼は、丁度少女の唄を聞いていたのだ。誰もいないことを確認するように辺りを見回していた少女。まさかそこを堂々と通るわけにもいかず、困っていた所だった。その時、船が揺れた。シヨウは何とか体勢を立て直すことが出来たが、少女はそうはいかなかった。だから、助けた。

「あ……」

少女はすぐ腕を引く。その反応に、礼を期待していたわけではな

いが、シヨウは少しムツとする。

(……なんだよ)

唄は上手いけど中身は性格悪そうだ、それが彼女に対しての第一印象だった。けれど、そんなことを気にしているわけにはいかない。シヨウは剣の柄に手を伸ばし、船の後方に視線を切り替えた。少女も同じ方向を向いている。

「……海にも魔物っているの？」

少女はこちらを向かずに、そう言った。どうやら自分に向けた言葉らしいと気付いたシヨウは同じように視線を向けず、答える。先程の返答が気に入らないのか、シヨウの言葉もそっけないものだった。

「知らないのか？まあ、最近殆ど見かけないって聞くけど……」

少女はふと視線を船室に向けた。混乱している船員や客の様子と、窓からこちらを見つめているミエルの様子が見て取れる。ミエルの視線ははつきりと少女に向かっていて。けれど、主人が危険な目に遭っているというのにその目はまるでただの傍観者だ。少女は呆れたように溜息をつく。

「……薄情者」

そう呟くと少女はす、と足を踏み出した。一步、二歩と足を踏み出し、段々と早めてゆく。向こうに見える巨大な黒い塊が、波間から顔を出した。波が船の後方を襲う。少女は真っ向から波を被る形になった。突然の揺れにシヨウは叫ぶ。

「おいつ、待つ……！」

波を被る刹那、足が踏み込んだ。シヨウの視界は次の瞬間海水によつて阻まれたが、しっかりと見ることができた。少女が剣を構え走り出す瞬間を。船の最後尾、そこから刃を振り下ろす瞬間を。

「……！」

まともに波を被つた為、気管に塩辛い液体が入り込む。詰まる苦しさに何度も咳き込み、少女の姿を探した。だが予想に反して、彼女の姿はあっさりと見つかった。剣を腰におさめ、ゆっくりとその青髪を耳にかける。口を動かし、何かを言う。耳に水が入ったのか、シヨウにははつきりと聞き取ることが出来ない。

（……唄？）

『首枷は愚物なる証』

愚答を求めし我が道に、その現像を追う』

それは言葉とは違う、旋律。けれどそれはティスファアで聞いたときのものとは違っていた。唄が違えば当然だったが、彼女の雰囲気からして違う。その表情は真剣で、近寄りがたい。ふ、と時間が止まったような感覚がして、一足遅れて目の前が真っ白に染まった。

（！？）

『願い叶えたまえ、空隙より生まれし神』

一線の光なる者のもとへ、我を運びたまえ』

彼女の声だけが、その光の中で響き渡る。真っ白な世界はまるで太陽が爆発を起こしたかのようなのだ。

『険路を漂う賢人よ、譴責知らぬ人々を見よ
剣舞を踊り狂う人間の、生きる術知らぬ
刹那の願いを…』

それはあまりにも綺麗な歌声だった。潮の香りも全て消え、そこは清められたような風が吹く。シヨウは目を瞑った。あまりの眩しさに、そうするしかなかった。そして闇がまた自分の上を覆ったとき、シヨウはまた少女の姿を目にした。

(……なん、だ……?)

一瞬にして力が消えたような、そんな感覚がした。船の最後尾には先程まで蠢いていた魔物の姿がなく、影のようなものが崩れて消えた。少女はそれを見つめながらゆっくりとこちらに向かって歩き出した。シヨウの存在を完全に無視して、未だに状況が把握できていない船室へと歩いていく。すれ違い様、シヨウは呟くように言った。

「……お前、何者……?」

無視されることを予想してそう尋ねたのだが、相手は意外にも足を止めた。

「……理解できないよ、多分」

その言葉に少女はふと空を見上げて、先程とはまた違った表情をした。自嘲するような、泣くような、無表情のような、そんな顔だ

った。少女は星空を見上げてそう告げ、またゆっくりと歩き出す。青い瞳を虚空に向けたまま。シヨウは瞬間的に少女の腕を掴んでいた。

「……！？ちよつと、離して」

「あ……」

どうしてそんな行動をしたのか自分でも分からなかった。言ってしまうば、言い訳になってしまいかもしれないが、勝手に手が動いていたのだ。シヨウは自ら空気を重くしてしまい、会話に詰まりながらも何かを口にしようとした。けれどありきたりな話題しか出てこない。

「さつきから気になってたんだけど……もしかして一人旅か？」

「……は？」

突然の質問に少女はあからさまに顔を顰めた。シヨウは慌てて質問の理由を口にする。

「この間ティスファアで見かけたから、ここまで1人で来たのかと

……」

「そうだけど？」

こちらが会話に困っているのを知っているのか、少女はそう言って切り返す。次の話題への糸口も何も掴めない返答だ。シヨウはますます言葉に詰まった。少女は呆れたようにこちらを見て、息を吐いてこう言った。

「……アオイ・リィヌ。あなたは？」

「……え？」

少女は波のせいで絡まった髪をかきあげ、そう問う。いきなりの言葉にシヨウが首を傾げると、少女は大袈裟なまでに溜息をついてぶっきらぼうに言い直す。

「名前はって聞いてるんだけど」

まるで人を馬鹿にするような物言い。けれど、会話の糸口が出来たことはたしかだ。気を使ったにしてはあまりフォローになっていない気もするのだが。

シヨウは顔を上げて、アオイと名乗る少女を見た。

「……シヨウ。シヨウ・レイン」

自分より1つか2つ年下といったところだろうか。アオイはふと笑うと船室へと歩き出した。その後ろをシヨウが追う。辺りはもうそろそろ闇に包まれる。星空の中心に満月がのぼり、ゆっくりと傾き始めるだろう。ゆっくりと、だが少しずつ、運命の歯車は回り始める。

終わりと始まりを繋ぐ1つの芽が、もうすぐ顔を出し始める。

第2章 播種期

海沿いの街は貿易と漁業によって栄えていた。大陸の玄関口でもある港には漁船や貿易船の姿が数多く見られる。ハルはその黒髪を風に揺らし、ふと後ろを振り向いた。もうすぐ到着だというのに、リヨウが出てくる様子がない。船が駄目だとは聞いていたが、これほどまでとは思っていなかったとハルは密かに溜息をつく。

前の船が魔物に襲われたという情報が伝わっている。おかげで客は殆どと言って良いほど乗っていないかった。ハルは船室の扉を開け、中でうんうん唸っているリヨウを呼ぶ。

「……リヨウ。もうすぐ着くぞ」

「もうすぐつてどれくらい？俺今すぐ降りたい……」

真っ青な顔を半分だけ覗かせたリヨウは力のない声でそう言う。船員に毛布を借りて寝ていたのだが、どうやら吐き気で眠れなかったらしい。ハルはその返答に息をつき、荷物を纏めるよう言った。

船室から出ると、リヨウはハルの手を借りてゆっくりと歩き始めた。港に降りても、まだ波に揺られている感覚がとれず、しばらく「気持ち悪い」「具合悪い」「休みたい」を繰り返していた。

リヨウとハルの2人旅に従者はいない。リヨウの面倒を見なくてはいけないハルは、しかたなくその街で宿をとることにした。

魔物騒動のせいか宿に人の数は少なく、2人はすぐに部屋をとることが出来た。リヨウは部屋に入るとすぐベットに倒れ込み、またうんうんと唸っている。どうやら一日の航海はかなり応えたようだ。ハルは呆れ顔でその様子を眺めると、荷物をベットの隣に置き、部屋を出た。

「夕食はこっちに運んでくる。それまで寝ている」

「……で？なんでついてきてるんだよ」
「それはこっちの台詞」

アオイは呆れ顔で相手の顔を見返した。椅子の隣に座っている犬のミエルが2人の顔を見比べて首を傾げている。彼女が船を下りたのは丁度数時間ほど前。とりあえずは宿をとろうと探してはいたものの、ミエルを連れて泊まれる宿など殆ど無い。散々探して店員に頼み込んだあげく、やっと見つけられたのがこの宿なのだ。しかし、そこに見たことのある男がいる。

2人共、1人で来たということで店員に合い席にされ、面と向かって言われたのがその言葉。アオイは口元を引きつらせながらも、なんとか笑顔をつくった。

「……シヨウだったっけ？そっちも一人旅なんじゃない」
「別にいいだろ、大人なんだから」

飄々と答えられ、アオイは密かに握り拳をつくった。自分と2つか3つ程しか変わらないくせに、と心の中で毒づく。アオイはとりあえず、シヨウに構わず夕食を食べることに専念した。時折隣で餌

を請うミエルに1口2口分けてやっては、外の景色に視線を向ける。外はもう闇に染まっていたが、それでも星が輝いていた。

「……本当に最悪。すいません！お酒ください」

手を挙げて店員を呼び止めたアオイ。瞬間、水を飲んでいたシヨウはそれを吹きそうになってしまった。もともと、酒を飲むのに年齢は関係ない。旅人というのはもとより大人も子供も関係なく、個々の人間として扱われるものであるから、世俗に左右されることはない。そんなものを気にしては、武器を持つことも出来ない。だが、シヨウは驚きと呆れの混じった表情でアオイを見返した。

「お前……酒飲むのかよ」

「そうだけど？何、もしかして飲めないの？大人なのに？」

先程の言葉を根に持ったのか、アオイは相手を小馬鹿にするような目でそう言った。それにシヨウは引きつった笑みを浮かべた。そしてアオイのグラスを持ってきた店員に、意を決して宣言する。

「……すみません。同じものを1つ」

「……俺も絶対船なんか乗らない……」

体調の戻ってきたリヨウはベットに座り、溜息をついた。夕食は腹を埋める程度に食べたのだが、まだ足下が揺れている気がする。吐き気はなくなったが、この感覚が嫌で嫌でたまらない。足をバタバタと動かしてみるが、それでも簡単には治らない。

呆れたような表情をしているハルが、なにやら暴れている従兄弟に視線を向ける。

「……リヨウ。静かにしろ」

「だってさ、すごい足が変な感じがして……うわ、気持ち悪い……」

そう言つて更に足を動かすリヨウ。ハルは溜息をつき、地図に視線を落とすところ言つた。

「少し歩いてきたらどうだ？……気にしすぎているんだろう」

「うん、それじゃちよつと行つてくる……」

ベットから立ち上がるとリヨウは部屋の扉を開けた。食堂あたりまで歩いてこよう、と廊下を階段の方へと歩き始めた時、ふと聞き覚えのある声に顔を上げる。至極不満そうな言葉が反対側から響いてきた。

「確かに、馬鹿にした私も悪かったけど……飲めないなら飲めないつて素直に言つてよ。だいたい一気に飲めるわけないんだから」

（？……あつ）

階段から見覚えのある姿が歩いてくる。青髪に、青眼。しっかりと覚えてる、ティスファアの港で見かけたあの少女。隣には鍵らしきものをくわえた黒犬の姿もある。リヨウは瞬間声を上げそうにな

ってしまった。けれどよくよく考えてみれば自分は他人。
とりあえず、不自然にならないように自分も歩き始めた。少女は
しきりに階段の下を振り返っては何かを言っている。

「お前、酒強すぎ……」

シヨウは手すりにつかまり、また1つ息を吐いた。先程飲んだ酒
がまわったのか、頭がぼうつとして体に力が入らない。十数段しか
ない階段に何度も何度も立ち止まるシヨウに、アオイは呆れたよう
な表情をしていた。

あの後、アオイと同じものを注文したシヨウは、強がって一気に
飲んでしまったのだ。それが店内でも一番強い酒だということも知
らずに。ちなみに彼は昔から一滴であろうと酒は飲めない。そして
今にいたる。

「お前さ、手を貸そうとかそういう考えはないのかよ……」

「部屋まで見送ってあげるだけまだマシ」

リヨウはすれ違い様にその様子を窺う。階段で何やら言い合いを
しているらしいその様子に首を傾げた。こちらの視線に気付いたの
は少女でも隣にいた青年でもなく黒犬だ。首を傾げてこちらを見つ
め返す様子が愛らしい。

しかしその犬の視線がふと廊下の窓に向いた。途端、足下が揺れ
る感覚に3人は顔を上げる。

「……!？」

横殴りに突き動かされるような感覚。リヨウはバランスを崩して
壁にぶつかりそうになった。アオイは咄嗟に手すりを掴み、シヨウ
もなんとか階段を転げ落ちることだけは回避した。ふとアオイが何

かに気付いたようにリヨウの方に視線を向けた。
瞬間アオイが叫ぶ。

「危ない！」

「え？」

その言葉の意味を理解したのは、廊下に並んだ窓が音を立てて割れた瞬間だった。細かく割れた硝子の破片が降りかかる。身をかがめたのが幸いしたのか大きな破片は免れたが、頬に小さなかすり傷が出来たのか痛みがはしった。

「大丈夫？」

駆け寄ってきた少女の姿に顔を上げたりヨウは苦笑いをして言った。

「な、なんとか」

もともとかすり傷くらいなら城を抜け出す度につけて帰ったものだった。だからこれくらいはなんともない。肩についた小さな破片を払いながらリヨウが立ち上がると、アオイはふと下に散らばった破片を見つめながら呟いた。

「…………ごめん…………」

「…………え？」

突然の謝罪の言葉にリヨウはふと目の前にいる少女を見返した。街で見かけたときと雰囲気は少し違ったが、それでもあの時と声は同じだ。俯いている様子に顔を覗き込もうとした瞬間、アオイが顔を上げた。その表情に先程までの空気は微塵も感じられない。

「あ、私ちよつと行く場所があるから、アレお願いできる?」

無遠慮に指を差した先には、未だ頭を抑えつつ階段の手すりに掴まっている状態のシヨウの姿。

「い、いいけど……」

「じゃあ、私ちよつと行ってくる」

アオイは階段へと駆けていく。その様子に気付いたのかミエルがその後ろについて走る。シヨウの前にくわえていた鍵を落とすと、首を傾げてその様子を見つめ、また走り出した。リヨウは慌てて制止の声を上げようとしたが、何に對して彼女を止めようとしているのか分からず、ただ慌てるばかりだ。

けれど、何か嫌な予感がする。

「リヨウ。今の音は……」

騒音に気付いたのか部屋から出てきたハルにリヨウは今起きた事態を説明しようとした。けれどただでさえ少ない知識や言葉では説明しきれないらしく、ただわたたと慌てるリヨウにハルは首を傾げるばかりだ。

「えっと、と、とりあえずあの人よろしく!」

「リヨウ?」

ハルが聞き返すより先にリヨウはアオイの後を追いかけて飛び出していく。1人残されたハルは突然の地震と割れた硝子に騒然となる周りの様子を見て、とりあえず任された見知らぬ人物に歩み寄る。何故こんなに手すりに頼っているのか定かではないが、相手の顔を

覗き込んだ。

「あ、すいませ……」

「……」

視線が合った瞬間、シヨウの表情が固まった。同時にハルは驚いたように目を細めた。もちろん他人から見ればそれは無表情にしか見えないだろうが。シヨウはもともティスニー軍、そして軍の所有者はもちろん国だ。

そして目の前にいるのは、紛れもなくティスニーの第1王子だつた。

第2章 刃携えし者

とりあえず外に出ていったらしいアオイの後を追ってリヨウもまた扉を開けた。ハルの言う通り船酔いを気にしすぎていたのか、今は全く吐き気も眩暈もしない。この異常な事態の中にいれば、それを忘れてしまうのは仕方ないのかもしれないが。

リヨウは暗闇に染まった街に出、そして頭を抑えた。どっちへ行ったのか分らない。けれどもしかしたら、と宿の表から裏にまわり、先程の窓硝子が割れた方の廊下に面している場所に向かった。確か、公園のような場所だったと思う。何故先程あんな衝撃にみまわれたのか、そして何故窓硝子が割れたのかは分らない。でも何となくリヨウは頭の何処かで理解していた。

(……多分、人間じゃない)

魔術とか、そういうものかもしれないと一瞬思ったが、それでもあんな大きな衝撃を起こせる人間なんて滅多にいない。角を曲がると、リヨウは足を止めた。やっぱり、という眩きが声と共にもれた。でも事態はリヨウの予想を遙かに超えるものだった。

少女は剣を構え、対峙していた。後ろで呻き声をあげるミエルを片腕で制止させ、闇に紛れる存在を睨みつけた。月明かりに魔物の姿が浮かび上がる。少女より遙かに大きなそれは黒犬獣を思わせる形を成していた。けれどもっとタチが悪い。それは黒犬獣以上の大きさで、牛にも似た角を2つ持っていた。目は赤く、そしてその牙は狼よりも鋭い。そして首は2つに分かれ、4つの血走った目が彼女を捉えていた。

睨み合い。視線を逸らせば、確実に自分の負け。そんな細い糸を張ったような緊張感の中でアオイはリヨウの存在に気付かなかった。ただ青い瞳を相手に向けて、そして言う。

「……いい加減にして。そんなにしてまで私を連れ戻したいの？」

リヨウの視線はアオイに向かった。アオイはそれに気付かず、睨みつける相手に返ってこない返答を求める。愚かなことだと心の中で自嘲しているのがよく分かった。

「私は他人まで巻き込むつもりはないし、こんなところで暴れればどうなるか分かるでしょう？」

ミエルの唸り声がすぐ後ろで聞こえてくる。アオイは視線を逸らさず、相手を見つめて剣を握りなおした。カチャ、という音が小さく響く。夏の蒸し暑い空気はアオイの体にまとわりついて、離れない。緊張と湿気で湧き出た汗がゆっくりと頬を伝って流れた。体が剣では無理だと警告を発している。相手は大きく、船を襲ったものより力があることは確か。

「私は……」

先に攻撃を仕掛けても、相手が動くまで待つても、多分結果は同じだ。アオイは呟くように何かを口にした。剣を構え、果てしない空へと切っ先を向ける。

リヨウから見てもアオイが不利なことは分かっていた。加勢するべきだと直感で判断したのだが、柄に伸ばした手を動かせない。彼は人を相手にしたことはあっても、魔物を相手にしたことはないのだ。魔物がどう動き、どう攻撃するか、それがしっかりと把握出来ていない。

（……人さえ相手に出来ればいいと思ってた……）

自分の経験と力量の無さ、そしてこの状況からくる圧力に動けなくなっている自分を悔やむ。確かに彼の剣は人を相手とするために鍛錬してきたもの。だがそれだけでは、旅をするには足りないのだ。国を離れて分かった、己の力の無さ。

アオイは動かず、何かを口にした。瞬時に魔物の目の色が変わる。恐怖が牽制か、リヨウには分からなかった。ただ何かを唱えるように口を動かすと、彼女の周りで風がおこった。髪が一瞬ふわりと風を含み、次の瞬間突風に変わった。足下から広がった光が、徐々に弧を描きつつ広がりいつしか木々を揺らす。

目の前を覆い尽くす真っ白な情景。リヨウはあまりの眩しさに目を瞑り……

「……シヨウ・レイン、だな？」

抑揚のない顔で彼はそう言った。酒の酔いが醒めて来た頃、シヨウは目の前にいる人物が確かに本物だと理解することが出来た。いつか軍の定例会で一度だけ顔を見たことがある。

自分と同じ年齢だと聞いてはいたが、実際会話をしてみるとシヨウより年上のような印象を受けた。

「え、ああ、あの……」

「敬語を使い慣れていないのなら、普通に話していい」

迷うようなシヨウの反応に、ハルは無言でそれを促す。元々軍の中でも下の方にいたシヨウは同期の者達と会話することが多く、敬語を使う機会はあまりなかった。苦手と言えば苦手なのだ。シヨウは戸惑いながらも、口を開いた。酔いはまだ完全に醒めてはいないが、会話はなんとか出来るようになったようだ。

「……なんで王子が俺の名前を？」

その問いにハルは椅子に腰を下ろし、相手を見返した。

「……ハルでいい。王子と呼ばれると騒ぎになる」

「あ……」

「……何故名前を知っているか、だな？一度定例会に出ていただろう。あの場で堂々と居眠りをしていたのはお前だけだった」

シヨウは一瞬反応した。冷や汗に引きつった笑いを浮かべながら、無表情のハルに視線を向ける。ハルを初めて見た、軍の定例会。堅苦しい挨拶や、何度も繰り返し返される同じ議論に飽き、会場の片隅にいることをいいことに途中から居眠りをしていたのだ。

「もしかして気付いて……」

「議長が気付いていなかったのは幸運だな」

シヨウは安堵したように息を吐いた。今更バレたからと言って何があるわけでもない。けれどその話を掘り返すのは止めておきたいので、話を変えることにする。

「それより、王子……じゃなかった、ハルはどうして従者も連れずにこんな所に？」

話題を変える為に持ち出した疑問。ハルは一瞬だけ顔を顰め、黒髪の間から覗く漆黒の瞳で相手を見返した。まるで相手を観察するかのように。信用できる人間か見定めているようにも思える。シヨウはその視線を不快には思わなかった。ただ返答を返さない相手にふと首を傾げるだけだ。

ハルはふと外の暗闇に視線を移して言った。

「……13年前の事件の調査と事後処理の為だ」

「……負けられないんだから、私は……」

光が止み、また夜の帳があたりに降りた。耳の中に木霊した魔物の奇声も消え、耳の中に木霊するのは木々の葉擦れの音だけだ。アオイは息をつき、宿への道に戻ろうとした。力を使いすぎたのか、体が重く感じる。昨日、今日と力を使うのは無謀だったのかもしれないと自嘲の笑みを浮かべた。

ふ、と振り返る。青髪が揺れた。

「……あ」

「……あ」

2人の声がまるでそろえたかのように同時に聞こえた。けれど、リヨウの言葉は間違いなくアオイの発したものと違っていた。視線が合つて、リヨウは混乱した。アオイはどうやら自分の存在に気づいていなかったらしい。

一瞬の静寂が、リヨウにはとてつもなく長いものに感じられた。

第2章 同じ道を往く

ショウとハルの会話を中断したのは、捕まった猫のように部屋に連行されたリヨウと、ご立腹な様子のアオイだった。混乱しながらも目の前で起ったことを話すリヨウ。ハルは大体の話を聞き終えたと、アオイに視線を向けた。

「魔物に狙われているように聞こえるが……どうゆうことだ？」

「解釈はご勝手に」

部屋の扉の隣に背を持たれてむすつとした表情を浮かべるアオイは、淡々とそう言った。先程から現実を把握しきれていないリヨウとショウが顔を見合わせている。アオイはまた溜息をついて隣にいたミエルを撫でた。何かを心配するようにこちらを見つめるミエルに、アオイは苦笑する。

会話として成立しない一方的な発言にハルが答えた。

「魔力に関係があるのか？」

アオイは視界からショウとリヨウの姿を消して、ハルへと視点を向けた。どうやら、彼が一番まともな会話が出来ると判断したらしい。

「……まあ、そうとも言えるかもしれないけど」

「個人が魔物に狙われるケースは聞いた事がないな」

2人の間でそんな会話が交わされる中、リヨウは首を傾げてショウに問う。

「……魔力って」

「……そんなレベルのものじゃないだろ」

実際に目で見た2人は、そろって首を縦に振っていた。アオイは横目で2人の様子を見つめ、頭を押さえて息をついた。ミエルが周りを見回し、アオイに何かを訴えかけるように見上げてくる。

アオイはその頭を撫で、床を軽く蹴った。

「そろそろ部屋に戻っていい？これ以上話す気はないし、明日は早いかにもう寝たいんだけど……」

返事を聞かずにアオイは踵を返した。ふとその背中にリヨウが問いかける。

「そういえば、どこか行くところでもあるの？」

なんの悪気もなく聞いた言葉だったが、返ってきた答えと視線は剣呑なものだった。

「そんなこと聞いてどうするの？」

「えっ……」

刺すような視線にリヨウは一瞬息を詰まらせた。その目は魔物と対峙したときのものに似ている。けれど言ってしまった手前、引くことができず恐る恐るながらこう口にした。

「い、いや……ただ疑問に思ったただけだけど……」

冷や汗をかきながらそう言うと、アオイはふと視線を逸らして息を付いた。刺々しい空気が一瞬和らぐ。

「別に……とりあえず此処から北上しようと思ってるけど」
「……またかよ……」

シヨウが密かにそう呟いた。どうやら目指すルートがアオイと同じらしい。それを聞いたアオイがまた顔を顰める。地図に視線を落としていたハルがふとリヨウの方を見た。どうやら次に何を言うか分かったらしい。けれど、何年も共に過ごしてきた従兄弟には何を言っても聞かないということもまた知っている。ハルはまた地図へと視線を戻した。

リヨウの爆弾発言はハルの予想通り、アオイとシヨウの言い合いを割って入ってきた。

「じゃあさ、皆で行こうよ」

リヨウの突拍子もない発言により、2人の口喧嘩は中止せざるを得なくなった。無垢な笑顔を浮かべてこちらを見つめる姿に、シヨウもアオイも思わず聞き返してしまった。

「……は？」

「4人一緒に行けば安全だし……俺もハルも北の方に行こうって言うたところだったんだ」

対岸の火事を決め込んでいるハルは自分の名前を出されても何も反応しなかった。いつの間にか彼の隣で寝ころんでいるミエルが1つ欠伸をしている。

先に事態を飲み込んだらしいアオイが大袈裟に頭を抑えて溜息をついた。

「……北の方って言ったって、皆同じ場所へ行くわけじゃないでし

よ？」

北、と決めたのは目的地があつてのことではない。アオイは無意識に右手を握りしめた。あてのない旅に、仲間を作っても仕方がないと彼女は知っている。いや、それ以前に誰かと共に旅することは、出来れば避けたいのも事実。

「そうだけど……」

アオイの言葉に、リヨウはふと自信無さ気に視線を逸らした。まくしたてるように彼女は続ける。

「それにこんな時世に旅をするってことは、皆それぞれに理由があつてのことなんだし……」

「……」

助けを求めるようにリヨウは横目で向こうの椅子に座っている従兄弟に視線を向けたが、気付いているのかいないのか、どうやら手助けをしてくれる様子はない。

リヨウは小さくなりながらも、こう言った。

「……一緒に嫌？」

「え？」

「一緒に行きたくないみたいだから……」

「それは……」

拗ねた子供のような表情をしているリヨウの視線が、こちらを見ている。アオイは言葉に詰まり、答えを求めるように空中に視線を彷徨わせた。

「……私は……」

ふと話を逸らすようにアオイはシヨウに視線を向けた。

「……そっちは？どうするの？」

シヨウは考えるように腕を組んで、すぐアオイに向き直った。

「はつきりした行くアテが見つかるまでなら、いいと思うけどな」
「本当？やった」

嬉しそうな笑みを浮かべるリヨウにアオイは息をついた。一人旅が危険だということは、いままでそれを続けてきた自分が一番よく知っている。はしゃいでいるリヨウがふとこちらを振り向いて答えを促すように笑った。

アオイはまた頭をおさえる。

「……誘ったのはそっちなんだから、苦情は一切受け付けられないからね」

第3章 闇が語りだす

快晴の空は今日も続いている。視線のとらえうる限りの世界は蒸し暑い夏へと姿を変えていた。何度消えて、何度現れたか分からない逃げ水がまた遠くで消えた。アオイはいつまでも変わらない周辺の景色にうんざりしながらご機嫌の様子のリヨウに声をかけた。

「……暑くないの？」

「え？暑いけど……でもほら、寒いのはましだよ」

この日光の熱に文句の1つも言わないのはリヨウとハルだけだ。少し後ろを歩くシヨウも何度目かも分からない文句を発している。どうやら彼は暑いのが苦手らしい。それはアオイも同じ事だったが、アオイは肩まである青髪を1つにまとめ、額から吹き出す汗を拭った。北へと向かう旅のはずなのに、涼しくなる気配は全くない。それどころか天高く昇った太陽に遮る物はなく、絶好調の直射日光を大地へと降り注いでいる。まだ限界を訴えるほど体力が減ったわけでもない。それでもアオイは同じくらいの年齢とはいえ、リヨウ達の歩く速さについていくだけで一苦労だった。それでも、休憩をとろうとは言わない。もとより意固地な性格なのか、アオイは躍起になって歩き続けた。時折、ミエルが心配そうにアオイを見上げ、見かねたハルが休憩をさせてはいたが。

「そつえばシヨウウから聞いたんだけど……2人とも王子って本当？」

リヨウから離されないよう、足を速めながらアオイは言った。するとリヨウもアオイの足の速さに合わせてスピードを緩める。多分無意識だろう。

「うん、本当」

「……ハルは別として、リヨウはそうは見えないけど」

アオイの言葉にリヨウは笑った。今まで同じ事を何度言われたかは分からない。けれど、今までそれに嫌悪の念を持ったことはなかった。リヨウにとって王子、という肩書きはあまり良いものではなかったからだ。自分は王室にいるより、外の世界にいる方が楽しいと何度も感じたことがある。別に城の中が嫌い、というわけでもないが、どちらかと言えば自由な外の世界は好きだった。

「……でも王子って言うわりに剣持ってたり、従者もなしに旅してたりするのは凄く異様なんだけど」

相手の表情を見つめ、アオイは言う。4人で一緒に旅を始めて2人の剣の扱い方を見てきたが、2人とも王子とは思えないほど剣の扱いに慣れている。シヨウは職業柄らしいが、リヨウとハルはそうとは言えない。たしかに実際の戦い方も実践で慣らしてきたシヨウとは違う。だが、下手ではない。

基本的に、しかし無駄はない。ハルの剣術はそうだ。基本がしっかりしているが故に行動は読まれやすく思うが、相手を見る判断力がそれをカバーする。元々ある程度の重みのある剣なのでどちらかというとそういう剣の振るい方が合っていると思う。

リヨウは基本がしっかりしているというわけではない。時折思わぬ隙が出来たりもする。性格が出ているのかも知れないと、アオイは思った。そしてリヨウの場合それをカバーするのはスピードだ。隙は出来るが、相手の攻撃を避けることが出来る。

「えっと……ほら、従者がいると好きな場所にも行けないし」

「……まあ、別にいいけど。ところで、まだ着かないわけ？まさか

迷ってないでしょうね？」

「えっ、ああ……ハルは地図を持つてる限り迷わない……はず」

リヨウは恐る恐るながら前を歩くハルに視線を向けた。地図を持つているということで、先頭はハルが歩いている。しかしアオイはリヨウの最後の「はず」という言葉を聞き逃さなかった。

「『はず』って何、『はず』って」

「いや、あの……ハル、方向音痴だから……」

アオイに詰め寄られ、リヨウがぼそりとそう呟いた。瞬間、アオイは一瞬頭から血の気が引いた気がした。この山道を、引き返さなければならぬという事態だけはどうしても避けたい。アオイは祈るような気持ちで涼しい顔をしているハルを見つめた。どうやらこれからアオイはずっと旅に対する少しズレた不安を抱いていかなければいけないらしい。

夕立が降り始めたのは、丁度4人が隣町へと足を踏み入れた頃だった。宿に着いた時には土砂降りの雨に代わり、彼等はまず体を温めねばならなかった。

アオイは3人とは別室をとり、さっさと服を着替えると剣を立てかけ、ベットへ倒れ込んだ。疲れた体に柔らかな感触が気持ちよく、

睡魔が襲ってくるのは早かった。夕食をとらなければ、と頭の何処かで訴える自分。しかし、それも暇が重くなるに連れて、ゆっくりと消えていった。

「アオイは？」

部屋へと戻ってきたシヨウに、リヨウは問いかけた。シヨウは首を振ってみせる。

「寝てる。起きる気配もないしな……ミエルも一緒に寝てた」

「寝かせておいた方がいいだろう。明日も同じ位歩くことになりそうだから」

地図を眺めながらそう言うハル。その言葉にシヨウはがつくりと肩を落としたが、当人は気にする様子もなく明日の計画を立てている。リヨウは窓のカーテンを閉めながら、月の光もない外の世界に視線を向けた。先日のような騒動も、今日は起きないだろう。カーテンを閉め切ると、リヨウはベットに座ってふとシヨウを見つめた。

「そういえば……この間のあれって何だったんだろ……？」

「あれって、あの宿を襲ってきた奴？」

ベットに寝転がっていたシヨウが顔を上げた。シヨウはあの事態をはっきりとは覚えていない。それでなくともあの時宿の中にいた2人は事態の把握をリヨウの説明によってしか出来なかったのだ。リヨウは頷き、視線を空中に転じた。

「アオイは何で旅してるんだろ……」

視界が天井をとらえ、ふとリヨウは呟いた。詮索するのはいけな

いと思いながらも、どうしても気になるところではある。アオイは今まで1人で旅をしてきたと言っていた。先日、剣の振るい方を見てもそれは分かる気がする。戦うことに慣れているし、なにより彼女の動きには無駄がない。だが、見たことのない剣術を使う。

リヨウは寝転がりながら一回りすると、向かいのベットで同じようにしているシヨウに言う。

「そういえば、あの剣の使い方って見たことある？」

「ん？ああ、あれか……俺も始めて見たんだよな……」

でも、とシヨウは何かを思い出すように視線を上げた。

「あの剣は実戦用じゃないだろ？」

「え？そうなの？」

アオイの剣は3人のものとは違い、細く軽い。刀身は長いという程でもないが、彼女にとっては扱いやすそうに見える。武器のことはよく知らないリヨウだったが、実戦用ではないと聞いて納得がいった。

シヨウは首を傾げながら言う。

「実戦用っていうより、儀式用に近いように見えた」

「儀礼用の剣を持つのは貴族と聞くが……」

「げ、あれが貴族なんて考えたくもないな」

2人の話を聞きながら、リヨウはまた仰向けになって天井を見つめた。眠気はこない。けれどふと、頭の中に先日のアオイの声が甦ってくる。

『いい加減にして。そんなにしてまで私を連れ戻したいの？』

雨足は夜から朝にかけて激しくなり、翌日も弱まる様子はなかった。ハルは出発を遅らせることに決め、皆それに従った。ただアオイは一瞬だけ不服の表情を浮かべたが、それを訴えることはなかった。

朝食をとった後、アオイは剣を持ち外へと出かけた。雨を避けるようにして街の中心へと歩いていく。目的があつてのことではない。気分転換、と言うべきだろうか。ミエルは汚れるので部屋で留守番をさせている。

雨音は単調で、気分を憂鬱にさせる。

「早く行かないといけないのに……」

雨音は激しく、足下をぬかるませる。洗い流すような水滴がアオイの声をも覆い尽くし、洗い流していった。

宿へと戻ると、真っ直ぐ自分の借りた部屋を目指した。服は僅かに濡れてしまっていた。幾つも持っているわけではないので、早く乾かしてしまわないと後々困る。

アオイは自分の部屋の扉に手を掛けようとした。その時、後ろから声を掛けられる。

「……あれ、アオイ？」

「!」

着替えることにしか気が向いていなかったせいか、アオイは後ろにリヨウがいることに気付かなかった。

「……え、あ、ごめん。驚かせた……?」

振り返ると、気まずそうに謝るリヨウの表情。アオイは息を吐いて、引きつった笑みを浮かべた。

「驚くに決まってるでしょう?……そういえばリヨウ、何処かに行ってたの?」

気まずそうな表情を浮かべたリヨウは、さらに曖昧な表情を浮かべて頬をかいた。彼の来ている服にもいくつか水滴がつき、髪も湿っているように見える。そして手には何処かで買ってきたのか、小さな紙袋を持っていた。ハルにでも頼まれたのかとアオイは首を傾げる。

「あ、そうなんだけど……実は」

さっさと着替えを終わらせて、ハル達の部屋の扉を開けるとアオ

イは溜息をついた。室内では世話をする気があるのか無いのか、椅子に腰掛け本を読むハルト、頭痛にうなされているらしいシヨウの姿があつた。リヨウは買ってきた薬の説明を手に取りながらアオイに曖昧に笑って見せた。

「……で、何？頭痛？」

ベットで寝ている状態のシヨウを見下ろし、アオイは深く溜息をついた。あからさまに嫌そうな態度にシヨウは力の入らない視線で訴えた。

「……元々なんだよ」

「それは仕方ないにしても」

返ってくる言葉を予想していたのか、アオイはシヨウの言葉を遮って言い放つ。

「何処のお子さまよ、薬飲みたくないだなんて」
「嫌なもんは嫌なんだって」

自分の声が頭に響いたらしく、頭を押さえて痛がるシヨウにアオイは軽蔑の視線を向けた。リヨウは、そんなアオイを宥めつつシヨウの目の前に買ってきた薬を差し出す。

「はい、薬」

「……ほら、やっぱり人それぞれ嫌いなものはあるだろうし」

アオイは大袈裟に溜息をつき、投げやりに呟く。

「お子さま」

「俺より年下じゃないか、お前」

はいはいそうですね、と手をヒラヒラさせてみせるアオイ。その隣にいるミエルは状況が飲み込めず、ただ首を傾げた。ハルはやはり本に視線を向けたまま、こちらの話には加わってこない。アオイは空いている椅子に腰掛けてミエルの頭を撫でた。

「薬飲みたくないんだって。私より年上のはずなのにね？」

「悪かったな」

シヨウはそう言うと思いを決めたように一息つくとしヨウから手渡された粉薬を一気に口の中へと流し込んだ。用意していた水を飲むと顔を顰めて苦みに耐える。リヨウはその様子に苦笑するとハルの方を振り返った。

「そうそう、さっき店の人に教えてもらったんだけど、ここから少し西の方に大きい街があるんだってさ。一日くらいで行けるところらしいから、明日はそっちの方に泊まったらどうだろ」

「西か……確かに歩き通しになるよりは良いかも知れないな」

地図で場所を確認するハルとしヨウを横目にアオイはシヨウに視線を戻す。どうやらまだ薬の味が残っているらしく眉間に皺を寄せ、2杯目の水を飲んでいた。

「……で、元々頭痛持ちなわけ？シヨウは」

「多分」

「多分って……」

呆れた様子のアオイに、シヨウはさりごとく言った。

「俺、昔の記憶殆ど無いからな」

まあ、昔って言っても子供の頃の記憶だけど、と付け加え、シヨウは水を飲み干す。その発言に虚をつかれたアオイは、言葉を探すように焦りの表情を浮かべた。

「……記憶喪失、とか？」

「親の顔も、生まれた場所も覚えてないから多分な。ま、医者に診て貰ったことがないから確証はないけど」

苦笑するシヨウにアオイは困惑したような表情を見せた。何かを言おうとするのだが、結局は口をつぐんでしまう。もう慣れてしまったシヨウはリヨウにもう一杯水を貰って、言った。

「気にすんなって、子供の頃なんて覚えてること殆ど無いだろうし」
「……そうかもしれないけど」

椅子に座って地図を確認していたハルがふと2人の方に視線を向けた。

「アオイはこのルートでいいのか？」

突然話を振られ、アオイはハルの方に振り返る。ハルは西のルートは少し遠回りになるがそれでも良いかという確認をとって、ルートの説明をし始めた。シヨウはリヨウから水を受け取り、小声で言った。

「……調子狂うな」

「まあ、いつもがいつもだから」

忍び笑いを漏らす2人に、アオイが振り返って首を傾げた。ハルはその様子に小さく息をつくとき、窓の外へと視線を向けた。暗雲が薄まり、雨は勢いを緩めつつある。

第3章 鳥籠への誘い

「それで、今日中にそこに着くの？」

ハルの隣を歩くアオイが、地図を見つめながら言った。晴れ渡った空の向こうに太陽が照っている。最も暑くなる昼にはまだ早いが、蒸し暑さに汗が出るようだ。それでも昨日まで歩いてきた山道よりは緩やかな道が続いている。

「……夕刻には着くだろう。地図を見てもさほど遠いとは思えない」
「夕立にあわないといいけど」

澄んだ空に雨の気配は微塵もないが、それでも夏の気候は予想できない。息をついて、アオイはふと前を歩くシヨウとリヨウを見つめた。

「……そういえば」

2人とアオイの間には少し距離がある。それでも声を小さくして、アオイはハルに尋ねた。

「ハルとリヨウって王子なんですよ？」

「ああ」

「……何で旅なんかしてるの？」

無言でアオイの問いを聞いていたハルがふとこちらを振り向いた。答えを求めるように見上げてくるアオイに、ハルは視線を道の向こうに向け、話し始めた。

「……13年前、大きな戦争があった」

「戦争？」

「そうだ」

「戦争って……国同士の、戦い……？」

ハルは頷き、手持ちの荷物の中から1つの紙を取り出した。そこにはしっかりとした文字で両国の戦死者数が書き込まれている。その他にも、地域別の被害の様子、敵の侵入場所などを事細かく記されていた。どうやらハルが書き込んだものようだ。

「戦争の原因は貿易と宗教の違いと言うべきか……以前から緊張状態にあった関係が悪化し、戦争になった。ティスニーの解釈はそうだが、あちらはそれを否定している」

アオイは渡された紙の文字を1つ1つ見つめながら、その想像も出来ない死者の数に驚きを隠せなかった。以前、あの街を訪れたときには、そんな気配は全く感じられなかった。

「……2つの国が一緒に戦ったのになんでこんなに犠牲者が多いの？」

「戦争というより襲撃に近かったからだ。島国とはいえども、国力に差はなかった。それに戦闘に長けた種族がいたからな」

「戦闘に長けた種族？」

首を傾げるアオイの様子に、ふとハルは違和感を覚えた。有名な種族だ。いくら遠くの大陸で育ったとしても、その忌み嫌われた種族の名前を誰でも知っている。それを剣術や魔力については詳しいアオイが、何故知らないのか。

（本でしか読んだことのないような口振りだな……）

そう思いながらも、ハルは話を続けた。

「北方の、体に特殊な刺青をした種族だ。人並み外れた戦闘能力を持つているために、『人の形をした魔物』とも呼ばれる」

「だからってこんなに被害が？」

アオイはその紙をハルに返し、同じように道の先を見つめた。ハルは首を振る。

「被害は先に、王族に出た」

「え……？」

「一番上にいる人物を襲うことで、戦況を有利にしようとしたんだろう…突然のことだったからな。城の中まで入り込まれ、何人も殺された」

アオイの脳裏に海辺の街から見上げた城の姿が浮かび上がった。

長閑に見えた風景の裏側に隠れていた記憶が、そこにあったのだと胸を締め付けられるような思いに駆られる。

ふと視線を上げ、アオイはハルを見上げた。

「ハルとリヨウは？城にいたの？」

「ああ。追いつめられていたところを、リヨウの兄に助けられた」
「今のティスファアの第1王子？」

ハルは首を振った。

「リヨウは元々3人兄弟だった。俺達を助けたのは、一番上の兄。だが、俺達を助けた後亡くなった」

「……」

「被害は大きかった。ティスニーは王女……俺の姉と、ティスファ
ーは 第1王子と王妃を亡くした」

アオイはふと向こうを歩くリヨウの姿を見つめた。ミエルをから
かつて遊んでいる今の姿からは、そんな過去は予想も出来ない。ハ
ルもそうだ。

「その後、周辺諸国からの援軍で国はなんとか敗戦を免れた。王が
無事だったのが不幸中の幸いだったが」

「……それじゃあ、ハル達はその戦争のことで旅をしてるの？」

言いにくそうに下を向いていたアオイが、やっと口に出た言葉
はそれだった。ハルは頷き、こう付け加える。

「ああ。戦況は結局どちらの敗戦、という結果にはならなかった。
つまり、犠牲者を出したただけの利益を得られなかったということだ。
またの戦争が起こっても不思議ではないからな」

「でも、なんで王子自ら出向く必要があるの？危険じゃない？」

見上げてくるアオイにハルは地図の現在地点を確認しながら、言
った。

「リヨウが、自分が行きたいと言い出したんだ」

「リヨウが？」

ハルは頷き、地図を荷物の中に戻すと、先を歩くリヨウとシヨウ
の方を見た。

「それに俺は一度他の国の様子を眺めてみたいと思っていたからな」
「それで王様を言いくるめた？」

引きつった表情でハルを見るアオイは、こちらへ走って戻ってきたミエルの頭を撫でつつ、そう言った。

「結果としてそうゆうことになるか」

「だろうと思った」

アオイは溜息をつく、こちらの様子に気付いて手を振っているリヨウを見つめた。ミエルだけが、アオイを見上げて小さく首を傾げた。

時計台の音が鳴る。少女は目的地を目指していた。陽が傾くにはまだ早い、彼女は帰らなければいけないところがある。つい先程購入した買い物大きく振りながら帰り道を歩いていく。

肩までの髪を揺らし、ご機嫌の様子で細い路地に入った。鼻歌交じりに歩みを進める度、髪飾りがシャラシャラと音を立てた。近道をスキップ混じりで歩きながら、表通りへと出る。

その瞬間。死角になっていた、彼女の進行方向から誰かの影が現れる。

「……きゃあ!？」

「!」

突然の衝撃に、相手は大きくバランスを崩してしまった。気付かなかった少女は慌てて頭を下げる。

「すつ、すみませんっ！」

四人連れなのか、他の3人がその様子に振り向いた。すぐに赤髪の青年が駆け寄ってきて、尋ねる。

「アオイ、大丈夫？」

「……なんとか」

少女がぶつかってしまった相手は、アオイという名のようにだった。少女は起き上がりうとしているアオイに手を貸そうと手を伸ばした。しかし、首を振って拒否される。

「いい。自分で立てる」

少女は仲間らしき人間の手も、少女の手も借りず、自分で立ち上がった。もしかして怒っているのだろうかと少女はますます恐縮した。全員に頭を下げて、ぶつかってしまったアオイにも頭を下げる。

「あのっ、本当にすみませんでしたっ！」

「別に……」

「でも、あの……」

少女は顔を上げて、初めてぶつかった相手の顔を間近に見た。珍しい青髪と、海のように深い色をした青い瞳に一瞬だけ、我を忘れた。だがそれは、珍しいものを見たという驚きからではなかった。

また逆にアオイも少女の姿をはっきりと目にして、後退りする。

「……アオイ？」

リヨウの声。アオイは丁度隣に寄ってきたシヨウの後ろに隠れる。アオイの様子に、3人は首を傾げる。

「お前、何やってんの」

「……」

シヨウの問いにも、アオイは答えない。何かに怯えるように少女から視線を逸らす。魔物と対峙しても見せない表情に、シヨウがまた何かを言おうとした時だった。

少女の表情が笑顔に変わる。まるで花が咲いたような表情だ。

「アオイ様……？アオイ様ですよね！？」

「アオイ、『様』？」

4人分の視線が、アオイに集まる。アオイは視線を逸らしたまま、答える。少しだけ、その唇が震えていた。

「人違いだと、思うけど。私、先に宿屋に行くから……後、よろしく」

アオイはそう言う人と人混みの流れに逆らうように、大通りを宿の方へと歩み出した。

リヨウの制止の声にも足を緩めず、すぐにアオイの姿は大通りの人の流れの中に消えた。取り残された3人は顔を見合わせ、首を傾げる。アオイのただならぬ様子に、リヨウは心配そうにアオイの消えた大通りを見つめた。

「まさかこんな場所にアオイ様が来てくださるなんて……思ってたかったです」

うつとりとした溜息をつく少女。半分自分の世界に行っているような状態の彼女に、ハルがいつもの抑揚のない口調で尋ねた。

「……『アオイ様』と言うのは？」

「えっ、あ、はい」

また、笑顔に戻った少女は初対面の人間にも臆することなく、人差し指を立てて断言して見せた。

「アオイ様は、私達の『God's Seed』なんです」

第3章 南方神法協会

少女の発言に、リヨウとシヨウはおるか、ハルまでも首を傾げた。その様子を目にした少女は、またにつこりと微笑んで1つ1つ説明し始める。主人に置いて行かれたミエルは鼻を動かし、少女を見上げた。

「私、アキ・ファールと言って、南方神法協会でお手伝いさせてもらっている者です」

「南方神法協会……？」

リヨウがハルに助けを求めるように振り返った。ハルはその言葉に納得したように、理解していない2人に言う。

「北大陸で広まっている宗教協会の一種と聞いたが」

「そうなんです！その南方協会が私達で……でも全然妖しい者じゃないですよ。現在世界中で基盤となっている思想・宗教の素となった教えで、『世界は無限なる魂の集合なり、その統率者こそが創造主、すなわち神である』という考えに沿って活動しています」

その謳い文句には3人とも聞き覚えがあつた。無宗教にも近いテイスニー、ティスファール両国ではそういった教えに関係は無いが、その教えは有名で広く知れ渡っている。アキという少女は南方支部の教会で下働きをしている人間らしい。右手に抱えた買物袋がそれを物語っている。

ハルはアキの身なりを見、こう言った。

「……神法協会の人間は、魔力・法力に長けると聞いている」

これに対し、アキはこの無表情な青年に臆することなく、笑顔で応対する。

「はい。私達を統率する方々はみんな魔力がずば抜けている方々ばかりなんです。God's Seedであるアオイ様も……」

「ストップ！南方神法なんかかっていうのは分かったけど、その『God's Seed』って何？」

難しい話についていけなくなってきたリヨウが叫ぶ。アオイ様について語ろうとしていたらしいアキは話の腰を折られはしたものの、その表情に曇った様子は見受けられない。

「God's Seedというのは神様によって大地に芽吹いた希望の種……これは神話の話ですけど、アオイ様はいわば、信仰の対象となる方なんです」

「……えっと」

意味をよく捉えることの出来ないリヨウは、辺りに満ちた気まずい雰囲気にとりあえず苦笑してみる。God's Seedの詳しい意味は理解できないが、それでもアキにとっては雲の上の人間のように、偉い人物なのだろう。しかし、リヨウの頭の中ではそのイメージがアオイと結びつかない。

同じ事を思っているのか、シヨウが首を傾げながら言う。

「人違いだよな？」

「うん……」

リヨウが頷くと、アキは頬を膨らませて反抗した。小さい体ながらに懸命に主張する。

「そんなことありませんっ！青髪の方なんて滅多にいらっしやらないですし、なによりあの瞳も。噂に聞いたとおり、海の色のような空の色のような……兎に角とても素敵なお色でしたし！」

どうやらアキは、その『God's Seed』の『アオイ』に相当傾倒しているらしかった。彼女の中では完全にアオイのイメージと混同してしまっている。リヨウは助けを求めるようにハルに視線を移した。

いつもハルは考え事をするとき、腕を組む。じっと地面を見つめて思考するのが癖だ。リヨウが視線を向けた先には、その状態で何かを考えるハルの姿があった。

「ハル？」

ハルはふと顔を上げて、シヨウに視線を向ける。想像力が逞しくなっているアキを眺めていたシヨウが振り返る。足元にいたミエルが、つまらなそうに鳴いた。

「シヨウ。……アオイは何処に行った？」

「さつき確か、先に宿に行くとかなんとか言ってたな」

シヨウが指差した先には、相変わらず人混みが行き来している。未だに瞳をキラキラさせているアキを横目にリヨウはハルを見上げる。心なしか不安が胸を覆ってきた。もしアキの言っていることが真実であれば、どうなるわけでもないのに、と心の中で呟く。

「ハル、どう思う？……勘違い、だよな？」

願いにも似た思いを込めたりヨウの言葉に、ハルは応えてくれなかった。

「……どうだろうな。勘違いだったとしても、アオイの反応の説明がつかない」

「でも……」

リヨウの肩を手を置いて、シヨウが言う。

「とりあえず、宿に行った方がいいんじゃないか？本人に聞いてみれば済むことだろ」

シヨウがそう言うと、リヨウは無言で頷いた。そうする他に、今は何も出来ない。リヨウはふとアオイが走っていった道の先を見つめて、ざわついたような感覚を感じていた。

そのとき、やっと我に返ったアキが声を上げる。

「あっ……！私もお使いの途中だったんです！それじゃあ、私もこれで」

「えっ？あ……」

3人に頭を下げると、アキは風のように走り去っていく。人ごみの中に彼女の姿が見えなくなったのを確認すると、半ば呆れたようなシヨウの声が聞こえた。

「なんだったんだ？あれ……」

リヨウはアキの走っていった方向を見つめていたが、やがて歩き出したハル達の後を追った。

第4章 神を崇拜する者

「アオイ？……いる？」

アオイの一人部屋は、リヨウ達の部屋から少し離れた場所に位置していた。いつもアオイには宿の1人部屋を借りるようにしている。その理由は言うまでもない。

リヨウは扉を叩き、中からの反応が無いことに首を捻る。ドアを開けようとノブを捻るが、鍵が掛かっているらしく錠がガチャガチャと音を立てただけだった。

後ろからシヨウがもう一度ドアをノックする。

「おい、アオイ？」

「鍵、たしかアオイが持ってたはず……だよな」

「それじゃあまだ戻ってないのか……」

廊下からは確実に夜が近づいてくる気配が漂っていた。ゆっくりと街の外灯に火が灯ってゆく。大きな街にその風景は美しかったが、その逆に火の灯らない裏路地は治安が悪い。人氣がなくなっていく街路を見つめ、リヨウはため息を漏らした。

「……大丈夫、かな……」

2階の廊下からの景色は、遠くまで眺望できる。宿屋が高台に位置しているせいでもあるが、無数の外灯の光は海の方こうまで続いてゆくかのように見えた。

部屋に戻り、ハルにアオイの留守を伝えると、リヨウはまた窓際から外を見つめる。時折行き来する人の姿はあるけれど、その中に

見慣れたあの姿はない。刻々と時間が経過していく。

「……遅いな」

「うん……」

リヨウはこの重々しい空気に耐えきれず、ハルの方を振り向く。

「ハル、アオイを探しに行こう。…こんな時間まで帰ってこないの
っておかしいよ」

「……」

ハルは手元にある本に視線を落としたまま、反応を返さない。何枚かページを捲り、文字の羅列に指を重ね、1つの単語で手を止めた。

「……世界は無限なる魂の集合なり、その統率者こそが創造主、すなわち神であるという精神に沿う宗教、神法協会。世界を創る者・創造主の輪廻転生を信じ、破滅と闇の世界が訪れし時、創造主現るとする」

「神法協会……？」

椅子に座っていたシヨウが、その言葉に首を傾げた。リヨウはもはやその理解不能な言葉の解明より先にアオイの搜索を優先したいらしく、窓から外を見つめたり、部屋の中を歩き回ったり、落ち着きなく動き回っている。

「神法協会のことは詳しくは知らないが……この文章、妙だと思わないか」

「文章？」

シヨウはハルから手渡された本を見、先程読まれた一文を読み返して、ふと一力所に眉をひそめる。

「『創造主の輪廻転生』、『破滅と闇の世界が訪れし時』……？」
「普通宗教は信者がどうすることも出来ない状態に陥った時に自分達を救う者が現れると考えるのが通常だ。創造主が宗教上の救世主と同じ意味なのだとしたら、転生し続ける必要はない」

ハルの言葉にシヨウは何度も同じ文章に目を通し、そして頷いた。宗教のことは殆ど知らないが、この言葉の矛盾は確かに違和感がある。

シヨウは『輪廻転生』という文字を見つめ、呟く。

「だよな。これじゃまるで……」

「そんなことより！ やっぱアオイを探しに行こうよ！ この時間まで帰ってこないのはおかしいよ」

リヨウの言葉にハルとシヨウが外に目をやると、時間は真夜中に近くなっていた。夜の街が危険なことは誰でも知っている。ハルは溜息をつき、そして言った。

「……そうだな。探しに行った方がいいかもしれない」

「けど、一体何処に……」

そう言いかけたシヨウは、ふと言葉を止めた。3人には、思い当たる場所が一力所だけあった。アキの言葉が本当のものならば。考えたくはなかったが、それ以外に当てになりそうな場所はない。リヨウは不安げに窓に視線を向けた。

「夕食、お持ちしましたっ」

につこりと微笑むと、ドアの前にいた2人の神法協会員は顔を見合わせ、片方が渋々といった表情で扉に手を伸ばした。もう一人の協会員が頭を抑える。

「世話係はおまえか…… God's Seed様に不味い飯食わせるなよ」

「そんなことはありませんっ！作るのに5時間かけたんですから！」

5時間という時間をかけすぎた夕食を見つめ、2人がため息をつく。少女は濃い緑の髪を揺らしながら、扉の中へと入っていった。ドアの前にいた2人は苦い顔をする。

「なんだってあいつが世話係なんだ？下っ端の下っ端だろ？」

「仕方ない。ファーストの名前があるからだよ」

「ああ、いいよな、北の方ではあの名前だけで食っていけるらしいしな……」

ドアが開く音と共に、数時間前に耳にした少女の声が聞こえてきた。アオイは視線だけをそちらに向け、興味がないと言わんばかりに無視をする。部屋の中は幾つかの灯りによって明るくなっているが、窓から見える闇に今が真夜中だということを理解した。

「失礼します」

「……」

アオイはソファに座り、目の前に出された食事と着替えを力無く見つめた。真夜中にも関わらず、アオイに会えたことでご機嫌のアキはにつこりと笑う。

「あ、名前言ってませんでしたよね？私、アキ・ファールと言います。この南方協会でお手伝いさせて貰ってるんです。今日は大事なお客様の為に私、頑張ってお料理したんですよ」

「客……？」

アオイは視線を室内に彷徨わせ、もう一度口の中で「客」という言葉を繰り返した。アキはそれに気付かず、次々と話を進めていく。

「アオイ様はいつまで南方の方にいらっしゃるんですか？お帰りの際はちゃんと船をお借りして、北大陸までお見送りを……」

放っておくとサインまで求めかねない勢いのアキにアオイは呆れた表情で相手を見つめた。目を細めて料理と着替えを突き返す。それでなくとも、料理は殆ど炭と化しており、食べられたものではないさそうだ。

「本当に私がただの客人だとも思ってるの？」

「……え？」

急に放たれた冷たい言葉に困惑し、アキはふと顔をあげた。アオイは小さく溜息をつき、そしてアキを睨みつける。相手が何も知らないのだと心の中で分かつてはいたが、八つ当たりでもしなければ

怒りを抑えられそうになかった。

「ドアの向こう、窓の下、協会の周り！一体何人の協会関係者が私を監視してると思ってるの？もちろん、支部の協会にそんなに人数がいないことくらいは把握しているでしょう！？この協会の全員が、私の監視の為にここにるのが分らないの！？」

「え、あ……」

思い当たることもあつたのか、アキはふと口に手をあて、俯く。しかしアオイは言葉を止めることなく、窓から下を見つめ小さく拳を握りしめた。怒りに震える肩を抑えることもせず、搾り出した声には今にも流れ出しそうな怒気が含まれている。

「……結局ここは私を閉じ込める檻でしかないんじゃない……」

「あの、アオイ様……」

アオイは軽く窓を叩いた。割れることはなかったが、闇の世界をうつす窓は小さく揺れて、そしてまた元のように形を戻した。外の世界はゆっくりと灯りを消していき、眠りの時間が近づいてくる。

アキの様子は振り返らずとも悟ることが出来た。アオイは深く息を吐き、ゆっくりと1つ1つを口に始めた。多分、この少女は真実の何も知らない。正規の協会の制服を着ていないということは、下働きなのだろう。協会の謳う文句だけを頭から信じているのだ。

「……中央の神法協会は支部の活動の取り締まりと、信仰の的となるGod's Seedの育成を目的としていることはあなたでも知ってるでしょう？」

「あ……はい。アオイ様は数々のGod's Seedの方々の中でもずば抜けて優秀だと聞いていました」

小さくアオイは溜息をついた。握りしめていた拳を解き、振り返って言う。

「……なら、God's Seedを選ぶ方法は知ってる？」

「え……？それは魔力とか法力の素質で……」

アオイはふと微笑って視線を彷徨わせた。口元だけをつり上げ、目はまるでここにはないどこかを見つめていた。

「……あの監禁をそう思えるなら、幸せでしょうね」

外灯の下を歩いていたミエルの足が、急に速まった。主人の匂いに気付いたのか、後ろを振り向きもせず走り出す。その為、後ろを歩いていた3人も走らされる羽目になった。

宿を出てすぐに3人の後を追うように歩いていたミエルが、先頭を歩き始めた。ミエルの向かう場所を確信していた3人は、その先に南方神法協会があることを信じて走り続ける。

「……でもさ、なんであの時アオイは逃げたんだ？」

走りながら、シヨウはふと呟く。確かに、あの時のアオイの表情はいつもとは違った。蒼白になった顔で、すぐ街中に消えていった

のを覚えている。隣を走るリヨウは前を走るミエルを見失わないように見つめながら言う。

「本当にアオイがそのGod's Seed、なのかな……」

「あいつがそんな偉い奴には見えないけどな」

軽口を叩いても、言い返す人間がいない。シヨウは小さく舌を鳴らして、角を曲がったミエルを追った。少し遅れて、辺りを確認しつつ走っているハルが、後方から声をかけた。

「あれが南方神法協会らしいな」

闇の中に佇む巨大な建物は、空を覆い隠すかのようにそびえ立っていた。

第4章 追うもの追われるもの

「そん、な……そんなの嘘ですっ！だって、神法協会は……」

「なら何故God's Seedが信仰する人々の前に出てこないの？答えは簡単でしょう、信仰の対象が逃げ出さない為。あの暗い地下室に、私がどれだけの長い間閉じ込められてきたと思ってるの！？」

選ばれた者にならなければいけなかった。選ばれるだけの力がなければ、数多い候補達の中で残ることができない。残ることが出来ない者達には死という道が残っただけだった。

死を恐れてはいない。けれど、生きたままあの地下室にいるのも嫌だった。

「残ったGod's Seedは、地下室に閉じこめられて……私は、自分で外の世界に踏み出すまで、世界の姿さえも忘れていた。魔力が強いつてだけで、あの地下室に縛られて！それが嫌で抜け出して、何が悪いの……」

自由を求めて、地下室の暗闇から外の世界へ。自分を閉じこめる檻から外へ、剣だけを握りしめ、ただひたすらに駆けた。途中、何人が追っ手を斬ったことも覚えていない。アオイは自嘲気味に笑って、窓の外を見つめた。絶望的なアキの視線を受けながら。

「そんな……」

「何も知らなかったのかもしれないけど……」

「……だって、不思議に思うことなんて無かったんです」

アキがそう言った瞬間、外から何か声が聞こえてきた。協会を囲った者達の叫び声にも似ている気がする。

「……？」

「……ミエル？」

叫び声と共に聞こえてきたのは、ミエルの鳴き声だった。アオイが窓を開けると、鳴き声が増す。アオイはすぐにドアから外へ出た。アキの制止の声が後ろから聞こえる。それでも足を止めるわけにはいかなかった。

「アオイ様っ!？」

部屋に残されたアキは1人、立ちつくした。廊下ではアオイが逃げ出したことに、大騒ぎとなっている。何かを叫ぶ声が幾つも響き、追いかける足音が雑音となって混じってくる。

自分1人しかない静かな部屋から見つめた廊下の喧噪は、全く別世界のもののようにも思えた。信じていたものの否定。アキは服の裾を無意識に握っていた。

アオイのあの表情は、嘘をついている顔ではない。とはいえ、殺し合いの話も何もかもアキには信じがたいものである。

「いいか、逃がすな！」

「彼女は中央の協会から逃げ出したGod's Seedだ!早く捕らえて連れ戻せ!」

上層部の者達も騒ぎに気付いたのか、そんな声が聞こえてきた。アキは両手を合わせ、目を瞑った。どこにもいない、誰かに問いかける。

(……もしそうなら神って何なんですか?)

アキは俯き、しばらくそこに佇んでいた。騒ぎは収まらず、協会の喧噪はいつまでも続いている。

「アレを使つてでも捕らえろ! 逃がしたら南方の恥だ」

幾つもの叫び声の中に、そんな声が聞こえた。瞬時に、聞き慣れない高音が廊下に響き渡った。小さなものだったがアキには確かに聞こえていた。顔をあげ、ふと嫌な感覚に外へと視線を向ける。窓から闇に包まれた街を見つめた。周りの家からは騒ぎに気付いたらしい野次馬が集まりつつあった。

だが、その空気に紛れて、異様なものが蠢いている。

「……あれは」

アキは一步、後ずさった。

ミエルが神法協会の人間に襲いかかったのは、ハル達がアオイの消息について話を聞こうとしたときだった。アオイの名前を出したことに對して、奥の方にいた者達が不穏な動きを見せたことに警戒していたらしい。護身用の小さなナイフが月光に反射したのを、ミ

エルは見逃さなかった。

「だ、だからってなんでこう……っ！」

リョウが目の前に突き出された剣の刃先を数ミリの所で避けた。一応、鞘から剣を抜いてはいるが、どうしても反撃することは出来ない。訓練の域でしか人と剣を交えたことのないリョウやハルにとつてはやりにくいことこの上ない。

ショウは攻撃を弾き返し、痛手にならない程度に剣を振るう。

「ミエルをけしかけたのは俺達だと思ってるんじゃないか？」

騒ぎは大きくなりつつある。野次馬から見れば、自分たちは神法協会の前で騒ぎを起こす罰当たりに見えているだろう。とはいえ、こちらはこちらで急に剣を向けられ、意味も分からず対峙しているのだ。まさか本気で相手を斬るわけにもいかず、攻撃を受けない程度に対応するしかない。しかし戦闘になれていない協会員とは違い、実践で斬り合いをしたこともあるショウには他愛もないことだ。

ふと、集まってきた人々が散り散りにその場から離れた。その様子にハルがそちらへ視線を向ける。

「……？」

その時、ミエルが建物に向かって大きく吠えた。その瞬間、中から爆発が起こったように巨大な光と衝撃で協会の建物のドアが吹き飛ぶ。ドアから離れた場所にいた3人にも爆風が襲う。

目を細めたミエルは、ふとその向こうにいた人物に気付いて走り出した。爆風がおさまった頃にはその姿がはつきりと見て取れた。青い髪が月下に映る。

「……アオイ！」

側に寄ってきたミエルが擦り寄り、アオイはその頭を撫でた。先程まで協会員に向けていた威嚇の姿が全く無い。ミエルはしきりに尻尾を振り、それからシヨウ達の方を見る。ミエルの視線を追っていったアオイは、そこにいた3人を見て頭を押さえた。どうやら宿にいるものだと思っていたらしい。

アオイは裏返るような声をあげた。

「なんでいるの!？」

「え?アオイを探しにきたんだ、けど……」

そう言われると、探しに行こうと提案したりヨウも小さくなってしまふ。助けを求めてシヨウとハルに視線を向けるが、シヨウは見えて見ぬフリをし、ハルはこちらを向いてくれない。

「どうりでミエルが起こした騒ぎにしては煩いと思った……」

「いや、半分は同じようなもんなんだけどな」

疲れと呆れで頭を抑えたアオイに、シヨウは言う。

「そつえばさっきの爆発、あれ、アオイか？」

「……そつだけど」

だから何、と言いたげな視線は完全に不機嫌な時の目だ。本当に不機嫌な時は剣をも抜きかねないのだが。そう思い、シヨウはふとアオイの服装に目をとめる。

「剣は？」

「……あ」

アオイは振り返り、頭を抱えた。入り口でまた騒ぎが起こっている。それを見、そして小さく呟いた。

「……捕まった時取られたの忘れてた……」

「お前、時々物凄く鈍感だよな」

吹き出したシヨウに、アオイは顔を真っ赤にして叫んだ。

「あの時は逃げるのが精一杯で……」

アオイの話を聞きながら、ふとリヨウはハルの方に視線を向けた。協会の建物の裏の方を、じっと見つめている。剣は鞘におさめず、まだ手に持ったままだ。リヨウはハルの見ている方向へ視線を凝らす。目が暗闇に慣れるまで、さほど時間は掛からなかった。

「……ハル？」

リヨウの問いかけに、アオイもそちらへと視線を向けた。ハルは建物の向こうを見つめたまま、返事を返さない。アオイもそちらへと注意を向ける。何かに気づいたように視線を左右に向けた。

木々のざわめきに乗じて、動く何かの気配。ふと、寒気が走った。この感覚を、リヨウははつきりと覚えていた。

「あれは……」

瞬時に4人に向かって赤い光がぶつかってきた。炎の固まりのようなその物質はぶつかって弾け、小さく破裂した。向かってくる炎の固まり。直前でそれを避けながらも、その違和感にアオイは気付いた。

（魔法？……けど、普通のものと感覚が違う）

破裂した破片が燃え上がり、協会の建物がその炎によって大きく照らし出された。ハル達が気付いた、あの気配の正体はつきりと姿を現す。アオイは一瞬身動きを取れなかった。それによって、残りの魔法を避ける時間が無かった。

本能的にアオイは目を瞑る。耳元で、小さな破裂音が木霊した。

第4章 象徴になった少女

破裂音を聞いた。瞬間的に、頭の中が真っ白になる。体が衝撃に飛ばされたのは感覚的に分かった。誰かが名前を叫んだのも、頭の何処かで理解していた。地面に倒れる感覚がストレートに痛みへと変わる。頭か、背中を打ったのかもしれない。体が思うように動かない。

目を開けると、視界は空を映し出していた。星1つ無い闇の空。

「アオイ様っ」

すぐ近くで、自分の名前を呼ぶ声が聞こえる。無理矢理体を起こそうとすると、誰かが背中に手を回し、体を起こしてくれた。衝撃によって体は痛んだが、どうやら魔法事態を受けた傷は殆ど無いようだった。視界の中に、アキの姿が映った。ぼやける視界の中、深緑の髪が揺れる。その髪の色によってアキだと判断出来た。

「……っ、今の……」

体を更に起こして、魔法の向かってきた方向に視線を向ける。その瞳が炎によって浮かび上がった、黒く大きいその物体によって凍り付く。

灯りを得た夜の世界に、その闇色の生き物は咆吼した。口から牙がむきだしとなり、その鋭い眼差しが刺すようにこちらへと向けられた。3本しかない指の爪は鋭く、大きな音を立てて足音を鳴らす。アキが何かいうより早く、アオイは視線を協会員達へと向けた。

「やっぱり……今までのも全部、神法協会が……」

「アオイ様……」

アオイはアキの手を振りほどき、立ち上がった、覚束無い足取りでミエルを呼び、魔物を睨みつける。瞬間、閃光が体を包み、巻き上げるように風が吹き荒れる。その威圧感にアキは一步、足を引いた。魔力の差を瞬時に悟ってしまう。

「……っ！」

少し離れた所にいたリョウ達も、動けずにいた。アオイの姿を後方から見つつも、何も出来ない。それはこの圧力のせいだ。寒気を通り越し、痺れとなつて体に押し掛かってくる。近くにいればいるほど、その重圧は重い。アオイは痛めたらしい右肩を押さえつつ叫んだ。

「……何なの、神法協会は!？」

魔物など、簡単に操ることは出来ない。それを操つても取り戻したいGod's Seedとは何なのか。アオイは拳を握りしめ、よろよろと魔物に近づいていく。血走った目が、アオイの姿を映した。

アキはアオイの後ろ姿を見、気付いた。いくらアオイとはいえ、負傷している状態で、しかも剣も無い。この状態で魔力を使うのは体に負担が掛かりすぎる。

「魔物まで手なづけて……、そんなに象徴が必要なの!？」

傷付いた右腕を上げ、アオイは魔物に向かってそれを向ける。アキやシヨウ達からはその表情は見る事が出来ない。アキは瞬時に協会員達に向かって声を上げた。

「どうゆうことなんですか！魔物なんて……アオイ様を捕まえるだなんて、酷すぎますっ！それにこれじゃあアオイ様が……」

協会員達は気まずそうに顔を見合わせた。アキはその者達が自分と同じ下働きの者だと知っていた。そして上の位の者達の姿がない。戦闘が激しくなることを恐れて、協会内に逃げているのかもしれない。

埒があかないとアキはアオイに視線を戻した。魔力を使っても、魔物を倒そうとしている。アキは、アオイを思い切り後ろへと引く張った。アオイに触れた瞬間、痺れとなっていた圧力が痛みに変化した。しかし、バランスを失った瞬間、アオイの魔力が緩む。

「っ！？」

真後ろへ転び、アオイは立ったままのアキを見つめた。睨まれたアキは悲しそうに微笑む。

「なにも不思議に思ってたんです……」

God's Seedという存在に、ただ懂れて。本人の気持ちに気付いていなかった。不思議に思うことなく協会で働き、アオイと出逢ったときも懂れだけで相手を見ていた。

空中に光の残光がある形となって浮かび上がる。アキの指先から発せられた白い光の粒子が大きく円を描く。

「何も知らなかった。何も教えられなかった。……今じゃ言い訳にしかないけれど」

「アキ？」

アキは出来上がった陣に両手を添えた。目を閉じ、小さく呟く。

「御免なさい、アオイ様。……私にはこれくらいしか出来ないんです……」

出でよ、と心の中で叫んだ。強く、主人の声を意識内に響かせてそれが長年の眠りから目を覚ましてくれるように。そしてこの小さな魔力に応えてくれるように。

「逃げて下さい。アオイ様は、ここで捕まっちゃいけないと思うんです。だから……」

一瞬だけこちらに視線を向けたアキは、苦笑したようにそう言った。そして刹那、陣が光を放つ。爆発的に目の前をただ真っ白な空間へと変えていく。

「！」

アキの描いた陣を境にして、明らかに人ではないモノの腕が現れた。骨格と鋭い爪の異様な形。血で濡れたように赤く染まった手。陣から這い出そうとするかのようにそれは空を掻いた。

アオイは、アキの後ろで呆然とするしかなかった。そして頭の何処かで、ずっと昔に聞いた言葉を思い出していた。

（……神法協会は、法力・魔力に優れた者達が形成する組織……）

アオイの側にリョウ達が駆け寄ってきた。呼吸を切らしながら、アオイはハルに言う。

「……ハル。あれって……」

「召喚、だろう。可能性は高い」

相変わらずの冷静な声色を聞いて、アオイは肩を押さえつつアキに視線を向けた。本で得た知識ではあるが、召喚士というものは貴重で、かつ様々な信仰の中でも偉大なる者として見られているのが通常であった。精霊から果ては神までも呼び起こすことが可能だと言い伝えられる召喚士。神法協会の下働きとしては魔力の違いがありすぎる。

「……どうして……」

アオイの呟きはアキの耳には入らなかった。陣から抜け出そうとする手は、腕まできてふいに止まる。アキは目を瞑った。

（お願い……！）

陣へ向けた両手に力が入る。異形の手はそれに応えるように手の上に大きな翠の光を作りだした。魔力の固まりが徐々にその強さを増していき、ゆっくりと魔物へとそれが向けられる。

後ろにいたアオイが、息を呑む。そして次の瞬間、後ろにいる3人へと叫んだ。

「伏せて……！」

瞬間、その異形のモノが発した魔力の固まりが爆発した。先程、協会の魔物が発したものととは全く違う、巨大な圧力が体を襲う。

視界が覆われる。アオイは2回目の衝撃を体を感じながら、前方からの衝撃を和らげるために魔力を発動させる。それでも圧力は和らげる程度にしか防げない。

（いけない、視界が……）

先程までの怪我と精神的なものによって、体力は限界に陥っている。アオイは狭まってくる視界の中で、何かを見たような気がした。

世界が色を失い、全ては闇の中に消えた。いや、違う。その闇の中はアオイの檻だった。時間の変化にも姿を変えることのない地下の部屋。鍵の掛かった入り口が、自分にはまるで巨大な城の門のようにも思えてならなかった。

戸棚には幾つもの本……神や魔物、魔力と法力、聖と邪を長つたらしく綴った書物と、ある程度外の世界の知識を身につけるための本。

机と椅子、ベッド。読み散らかした書物の山。溶けてしまった蠟燭。火の無い部屋。空気孔から届けられる空気は、排気口から抜けてゆく。この地下室では、風の流れさえも感じられない。

「……中央の、協会……」

外側だけを取り繕った、協会の地下。外界から守るという意味で作られた檻。アオイはベッドから体を起こして、ふと見慣れた暗闇を見つめる。

一体この場所で、どれだけ外の世界を望んだだろう。何度この場

所へと導かれてしまった自分を責め、そして憎んだことだろう。それでもこの空間は変わりなく此処にあるのだ。慰めにもならない、冷たい空間。

「……嫌」

思い出したくない。この思い出にひたっていると、まるで今まで
のことが全て幻に思えてくる。夢か、幻想か……自分の望む理想を
ただ想像していただけなのかもしれないと、そう思ってしまう。

ふ、とアオイの視界に1つの本が入ってきた。読み散らかした書
物の頂点にそれは無造作に置かれていた。アオイは手にとり、そし
てパラパラとそれを眺める。

すると1つの文字が暗闇に関わりなく浮かび上がった。

『G o d ' s S e e d』

体に柔らかく触れる風。涼風が、頬を撫でていく。ふとアオイは
目を開けた。星空の無い天空と、それを覆い隠すような木々の葉。
ざわめくように揺れる枝に視線を向ける。

少しの間ばうつと空を見つめていると、隣から呆れたような溜息
が聞こえてきた。

「……お前な、起きたんなら何か言え」
「あ……いたんだ」

嫌味で言っただけではないが、アオイはそう言っただけをシヨウに向けた。痛みを堪えて体を起こし、ふと辺りを見るとそこは森。どうやら協会の建物から街の外へと逃げてきたらしい。アオイは安堵の息をつき、ふと思い出した。

「えっと、アキだっけ？……あの子は？」

アオイがそう言っているとシヨウはまた頭を押さえ、呆れたような顔をした。首を傾げるアオイに、シヨウは言う。

「お前、周りをよく見て見ろよ」
「？」

アオイは何度か辺りを見回し、そして気付いた。アキどころか、リヨウとハルの姿さえもそこに無い。一瞬にして血の気が引いた。状況は、聞かなくても把握出来る。その上よりによってシヨウと一緒。アオイは口元を引きつらせて言う。

「はぐれたわけ？」
「……ご名答」

シヨウの声にアオイはまた気が遠くなりかけた。

第5章 少女の友人

数多の星々が雲の中に隠れ、月さえも顔を出すことのない漆黒の闇が辺りを覆う。焚き火による僅かな炎の燦りだけがあたりを薄明るく照らしている。

溜息をついて横を見ると、さっきから寝ているのか気を失っているのか分らないアオイが横たわっている。大きな怪我は無いようだが、あれから数時間たっても目を覚まさないところを見ると、かなりの魔力を消耗したらしい。シヨウは溜息をついて木の根本に腰を下ろした。

事の次第は、アキが魔物を倒した後だ。あの時、どうやら召喚魔法の衝撃を和らげるためにアオイは魔力を使った。今考えると意外だが、あの時彼女はシヨウ達3人を守る為に魔力を消費したのだ。そして、倒れた。問題はその後だった。

アオイを庇ったアキは召喚に力を使い過ぎて、逃げられる状態ではなかった。とはいえ、置いていくわけにはいかないとリヨウが言い、連れて逃げることになった。確か、あの時『街の北西から外へ出る』と言われた気がするのだが……。後から来るはずのハル達は一向に来ない。それどころか追っ手の声が聞こえてきたので、道から少し奥へと移動したのだ。

「……確かに北西って言ってたような気がするんだけどな」

1人腕を組み思い出してみるが、記憶違いでは無い。シヨウは息を吐き、ふと隣のアオイに視線を向けた。

「……」

寝ているはずのアオイは何を言うこともなく、空をぼうつと眺め

ていた。いつの間にか起きていたことに気づき、シヨウは驚くよりも先に呆れた。

「……お前な、起きたんなら何か言え」

そう言うつとアオイは視線だけをそちらへ向けて、さも今気付いたかのように言った。その目は空を見つめていたときと同じ、心ここにあらずというような目だった。

「あ……いたんだ」

体を起こし、少し顔を歪めるアオイ。あの魔物から受けた攻撃の衝撃で体を打ったのかもしれない。けれども辺りを見回して、すぐにこちらを向いた。

「えーっと、アキだっけ？……あの子は？」

アオイがそう言うつとシヨウはまた頭を押さえ、呆れたような顔をした。首を傾げるアオイに、シヨウは言う。

「お前、周りをよく見て見ろよ」

「？」

アオイは何度か辺りを見回し、やっと気付いたようだった。ハルとリヨウの姿も無いことに。するとアオイはあからさまに嫌そうな顔をした。

「……………はぐれたわけ？」

俺がはぐれたわけじゃないと言い返そうとしたが、この状況から

するとどうみても自分がはぐれたようにしか見えない。シヨウは一瞬答えに詰まって、そして言った。

「……」名答

案の定、シヨウはアオイの皮肉を嫌になるほど受けることとなった。夜が白んでくるまでそれは続き、一睡もしていないシヨウはうんざりしてしまった。今度からコイツは倒れたとしても連れてこないようにしよう、と深く心に刻みつつ、シヨウは小さく溜息をつく。逆にアオイはというと体の状態はそんなに悪くないらしく、説教するくらいの力は有り余っているようだった。

ハル達とはぐれた2人は結局次の街へと向かうことにした。丁度街の名前も覚えており、ルートはアオイも覚えている。

「……で、そっちに向かっているのか？」

「多分。ハルなら効率の良い方を選ぶでしょ。それに……」

森から出て、大きな道へと出る。運の良いことに、街から出てくる人はいない。アオイは歩きながら、視線を街へと向け、そして言う。

「あの街の近くにいたくない」

ふと下を向いたアオイは昨夜の出来事を思い出し、首を振った。顔をあげて、隣を歩くシヨウを見る。

「……ところで、ミエルはリヨウ達と一緒に？」

「多分な。ミエルがいれば早めに合流出来るだろ」
「もちろん」

当然の如く頷き、アオイは少しだけ口元を緩めた。その様子を眺めていたシヨウは今まで思っていた疑問を口にする。

「そついえばミエルってペットなのか？」
「……ペット？」

アオイは少し首を傾げ、意味に気づいたように顔を顰め、1つ咳払いをした。

「……友達、みたいなものだけど」
「うっわ、根暗」
「殴るよ？」

拳に息を吹きかけてみせるアオイに、シヨウは降参の意味で両手を上げてみせる。喧嘩を止めてくれるリヨウやハルがいる時ならまだしも、今2人はいない。ここで口喧嘩を始めても仕方ないのだ。アオイもそれに気付いているのか、拳を下ろして道の先へと視線を移した。

「……いいじゃない、別に。人じゃないとしても」

視線の先には昨日の夜とは打って変わって、夏らしい空が広がっ

ている。皮肉な程快晴の空には入道雲が広がり、蝉の音が煩いほど耳につく。けれど、風は涼風。秋の気配がすぐそこまで来ている。

「ミエルにとって、私は特別な何かじゃなくて、ただの私なんだから」

「……え？」

アオイは大きく深呼吸すると、移り変わっていく雲の影を見つめた。広大な森とどこまで続くのか知れない道、そして果てしなく遠くまで覆うように広がっていく空。太陽の光、鳥の声、風の音。

小さな部屋ではない、夢でも幻でもない、本物の世界。あの扉の中ではなく。この大地から見れば、自分は小さなものでしかない。特別な存在だとしても、離れて見つめた自分は他人と同じ大きさ。

アオイはもう一度空を見上げた。燦々と輝く太陽は、初めて見上げた時と同じように遙か彼方で輝いている。

朝の爽やかな風が、頬を撫でる感覚がした。ふと目を開けて、そこが見慣れない場所だと気付く。自分が昨日まで何をしていたか、思い出すまで少々時間を要したがい思い出すと胸を締め付けるような痛みが生じた。不安が心の中を覆い尽くしてゆく。

「あ、起きた？」

「きゃあっ!？」

急に後ろからそう声を掛けられ、アキは声を出して驚いた。そんなに驚かれると思っていなかったリヨウは、目を丸くしてアキの悲鳴に驚く。

「ご、ごめん。そんなに驚くと思ってなくて」

「え……あ、わ、私こそすいませんっ。誰かいると思ってなくて……」

振り返るとこちらを覗き込んでいるリヨウと、少し離れた所で辺りを確認しているハルの姿が見えた。アキは何度も頭を下げ、昨夜のあの騒ぎの後のことを聞いた。

リヨウ達に助けてもらったこと、そして逃げる間にシヨウ達とはぐれてしまったこと。アキは、顔を上げた。

「あ、あのっ、アオイ様は、無事なんでしょうかつ!？」

アキの問いにリヨウは笑って頷いた。

「多分、今はシヨウが一緒だろうし、大丈夫だと思う」

リヨウの表情に安心したのか、アキは胸を撫で下ろした。辺りを確認したハルが戻ってくる。その側でミエルがこちらの様子を窺っていた。

「そろそろ移動するぞ。アオイ達は次のルートを知っている。そっちで合流できるだろう」

「うん。……あ。アキはどうする?」

「え……?」

首を傾げるアキにリヨウは立ち上がって言う。

「ほら、昨日のあの騒ぎじゃ協会にも帰れないんじゃないかな、と
思っ」

「あ……」

「一緒に行く？」

一緒に行こう、と言いたげな表情で、リヨウは笑った。向こうで
待つハルもアキの返事を待っている。アオイに言わせれば『断つて
も引つ張っていかれる』ような状況だろうが、アキは小さく頷いた。
じゃあ、行こっか、と背を向けたリヨウにアキがふと声を上げた。

「あ、これ」

「？……ああ、アキのだよな？とりあえず持ってきたんだ」

振り向いた2人に、アキはそう言えば、と布にくるまれた物体を
取り出した。それはリヨウやハルにも見覚えのある、剣。

「アオイ様に渡さないとと思って持ってきたんですけど、渡せない
ままだったんです」

布から顔を出したそれは、木々のざわめく様子を細かく繊細に映
し出した。反射した朝日が眩しく光る。

第5章 本の中の世界

「……剣、忘れた」

アオイがそれを思い出したのは、街から離れて数時間過ぎた頃だった。顔から血の気が引く感覚がする。それは剣無しでの旅は危険だという感覚と、隣を歩くシヨウに馬鹿にされるという2つの原因からだった。いや、それだけではない。もし魔物と出くわした場合、守ってもらった借りをずっと皮肉られ続けたらどうすればいいのか。別な意味で不安を抱くアオイにシヨウは頭を押さえた。

「お前な……」

「べ、別に剣無くても魔力があるし、その気になったらどっかの誰かを囿にして逃げることでだって出来るし……」

変な汗をかきつつ、弁解するアオイ。嫌味が飛んでくるだろうと身構えていたアオイだが、意外にもシヨウの皮肉は無い。

「……ま、仕方ないか」

「えっ？」

肩すかしをくらったような感覚に、アオイはシヨウを見上げる。だがそれと同時にシヨウはわざとらしく視線を逸らした。アオイは首を傾げる。けれどシヨウの様子にアオイは視線を向けたまま言った。

「……何か忘れたとか？」

「えっ、あ、まあ、ちよっとな……」

「何」

一体何を忘れてきたのか、と視線を向けるアオイにシヨウは頬をかいた。

「……頭痛薬」

「あ、薬」

声を上げたのはリヨウだった。アキを連れて広い道に出ようと歩いていた時、リヨウは宿に頭痛薬を忘れてきたことを思い出した。もともと旅に多く荷物を持つことはない。必要最低限のものは持ち歩くようにしているため、置き忘れてきたものの中に重要なものはさほど無いのだが……。

リヨウの声にアキが首を傾げた。アオイの剣をかかえて、リヨウを見つめる。

「薬、ですか？」

「うん、シヨウのなんだけど。……また頭痛起こしてたりして」

先を歩くハルにそう言うと、ハルは振り返らずこう言った。

「治まった状態が一時的なものでなければ、心配ない」

「一時的じゃなかったら……?」
「……どうだろうな」

アキは2人のやり取りを聞きながら、ふと首を傾げた。そういえば、と顔を上げ、ハルとリヨウを見上げる。

「そつえば皆さんって、アオイ様とどうゆう関係なんですか?」
「関係って……一緒に旅してる関係?」

リヨウは困ったように視線をハルに向ける。けれど前を歩くハルは気付かないのか、助けてくれる気がないのか、助け船を出してはくれない。ミエルが代わりにこちらを向き、首を傾げたただけだ。

「いや、行き先が一緒だったし……どうせなら人数多い方が良いかなと思つて、2人を誘ったんだけど」

「ええ!?じゃあ皆さんは、アオイ様がGod's Seedだということを知らずに旅に誘ったんですか!?!」

「……知つたのも実は昨日なんだけど……」

その言葉にアキは驚きの表情を浮かべた。がしつとリヨウの肩を掴み、前後に揺らしながら言う。

「それじゃ、今までずっとアオイ様と旅を?そんなの羨ましすぎますーっ!」

「う、羨ましい、とか、言われ、ても……」

「だって、アオイ様なんて私達にとっては高嶺の花も同然なんですよ!それなのにつ、それなのに……」

ぐらぐらと揺らされるリヨウを見上げて、ミエルが面白そうに尻尾を振った。いつまでも収まる様子がない後ろの様子にハルが溜息

をつく。

「God's Seedがそれ程までに崇められる理由は何だ？」

リヨウを揺らしていたアキがハルの声に手を離れた。手を離れた瞬間、横にあった木に顔をぶつける。けれどそれを気にする様子も無く、アキは視線をハルへと移した。どうやら気付いていないらしい。

「いえ、私がアオイ様を尊敬してるってこともあるんですけど。けどやっぱり神法協会の人なら名前は知ってますし……God's Seedは所謂、救世主のような意味もありますから」

「つまり神と同じような立場だということか？」

「そこまではいきませんけど……同じような感じです。地方によって多少考えの違いはあるんですけど、ある場所では神の使いのようなものだと考える人達もいるので」

顔を押さえるリヨウに、ミエルが寄ってきた。首を傾げて尻尾を振る様子を見ると、どうやら顔をぶつけるリヨウが面白かったらしい。時々主人に似て薄情な部分のある犬だと思う。

ハルの無表情な様子にアキは言う。

「アオイ様を選ばれし者と言う人達もいます。実際神法協会が集めてきた能力のある人間の中で、たった1人だけ選ばれる存在なんです。何千年かに一度、神官の言う神のお告げによって」

「北の宗教にそんなに歴史があるとは聞いたことがない」

「確かにそうです。けれど北大陸の方では結構その考えが広まっています……。私の一族もそうです、北大陸では王自身が神法協会の考えを推奨しているので」

何度か口にされた『北大陸』の言葉にハルは少し顔を顰めた。リヨウの方に視線を向けるが、話が耳に入っていないリヨウに変化はない。それを確認してハルは言う。

「……国にとって神法協会の考えは重要なもの、ということか」

「はい、私の一族も魔力があつてこそ神法協会や王室の手伝いをさせて頂けるわけです」

「そうか」

それ以上の詮索を避けるようにハルは会話を打ち切った。聞いていないらしい従兄弟の様子に安堵しつつも、まだ引つかかる事が残っている。殆ど話の伝わってこない北大陸のこと、そしてそれを支える神法協会。

どちらにせよ、神法協会の詳しい話はアオイに聞いた方がいい。

アキでは協会の全てを知っているとは言えないのだ。ハルは息を吐く。

「難儀だな……」

小さく呟いた言葉を、誰も知らない。

薬のことが気にならなかったわけではない。けれど、あの状況で

宿に戻るのとは不可能だった。それを知っているからか、アオイの皮肉はいつもほど酷いものではなかった。アオイ自身も人のことを言える状況ではない。

2人にとって幸いだったのは、道中にさほど危険が無かったことだ。北への道は舗装されているわけではなかったが、それでも歩くほどに人通りが多くなり、危険は薄れていく。道の両脇は相変わらず鬱蒼と茂った森で、急斜面の道もあったが、それでも時折眼下に先の海岸から吹き込む風に揺れる樹海を見ることができた。

「……そういえば」

足を止めて下の様子を見つめていたアオイが、歩き出しながら言う。

「西大陸には、人が住んでないって本当？」

「……は？」

唐突な質問に、先を歩いていたショウが振り返る。

「お前、それっていつの知識だよ。あの大陸は、貿易をするような国が無いだけで、小民族くらいは住んでる。それくらい常識……」

馬鹿にするような言葉を遮って、アオイは溜息をついた。見上げた空は少し曇り初めていて、肌に触れる風は少し肌寒い。一雨来るだろうか。

「はいはい、そうですか。……西大陸には木の無い地域があるって聞いたことがあるんだけど」

「ああ、砂漠だろ。それはあるけど……なんだよ、急に」

アオイは絶えず揺れ動く木々に向けていた視線を戻し、肩をすくめて見せた。

「……神法協会にいたときは本の中でしか、外のことを知らなかったし」

アオイの方から神法協会の名前が出てきたことに、シヨウは微かに反応したようだった。けれど、詳しいことまで探ることはアオイが嫌がるだろう。あえて核には触れず、当たり障りのないことから話かける。

「……外に出たことなかったのか？」

「生まれたときからそこにいたわけじゃないから、あるとは思っけど……物心ついた頃にはもう部屋の中だったし」

暗い部屋。灯りが無いわけではなかったけれど、灯りをつけてもその部屋は暗く感じられた。ひっそりとしていて、廊下を歩く協会の人間が発する声しか聞こえない。

「本は協会の古い本ばかりだったから……まあ、多少知識の時代差はあると思うけど」
「多少って……」

確かに、数十年前はそう考えられていた。西大陸には人がいない。けれど、各大陸の調査と研究により、そこにはいくつかの小民族が存在することが判明した。

人がいないと考えられていた大陸に調査の人間が足を踏み入れるきっかけとなったのは、とある事件の始まりからだ。

「まー……西大陸ってのは我の強い奴等が多いしな」

思い出したようにそう呟いたシヨウに今度はアオイの方が怪訝な顔をした。

「？」

「西大陸つてのは小さな民族の集まりだから、民族同士の意地の張り合いが多いんだよ。逆に民族からおちこぼれた奴等なんかも結構……」

「おちこぼれ？」

「民族つてのはそれぞれ宗教心に厚いからな。そうゆづのを信じない奴等は追い出される。そして不良の集まりみたいのが出来る」

すらすらと西大陸について説明するシヨウに、アオイは首を傾げた。

「妙に詳しいんじゃない、シヨウ」

「あー、職業病っていうかなんというか。よく遇うんだよ、そうゆう集まりと」

苦笑いを浮かべるシヨウ。アオイの知識からすると、その名前が出てこないのは予測出来た。この大陸の人間ならば、即答で答えることが出来るだろう。

「盗賊『風』」

西大陸の名前を全世界に轟かせたのは、彼等の存在だった。小民族の小競り合いからいち早く離脱し、組織と言えるほど大きな支部を持つ盗賊。各地に仲間がいるとされているが、それを見つけたことはどんな大国の軍であっても容易ではない。

「まあ、もう遇うこともないだろうけど」

「ふーん……。シヨウも一応兵士だったんだっけ？そういえば」

「一応ってなんだよ、一応って」

不服そうなシヨウを無視し、アオイは先を歩き出した。曇り空の一端が暗くなり始めている。それはこれから向かう道の先。雨が降る時の空気の湿った薫りがしていた。

「……雨が降りそう」

アオイがそう口に出すと空は応えるかのように雨粒を落とし始めた。無音の雨音が有音へと変化し、それまで静かに近づいてきていた暗雲が一斉に騒ぎ始める。アオイは小さく溜息をついて振り返った。

「雨をしのげる場所に行ったほうがよさそうじゃない？」

同意の声は大きくなった雨音に遮られた。

第5章 過去の思い出

降り出した雨に伴って、空は闇色に染まった。道から逸れ、木々の集まる森へ足を踏み入れると、雨粒を凌げそうな場所はいくつかある。比較的大きな樹を選び、その下に腰を下ろすと後ろを歩いてきたシヨウが言った。

「運が悪いな」

ため息混じりの言葉にアオイは肩をすくめた。

「私達はまだいいけど、ハル達は慣れていないんじゃない？」

よりにもよって旅に慣れていない二人が一緒なのだ。それを思い出し、アオイは顔をしかめる。雨音はゆっくりと大きくなり、枝の葉を叩く音が耳につく。空を見上げるアオイの様子に、樹に背をあずけたシヨウは笑った。

「……何？」

気を悪くしたように、こちらを見上げてくるアオイ。シヨウは口元を押さえながら言う。

「一応、アオイなりに心配してるようだから。依然はあんなに嫌ってたのにな？」

「なっ……私は別に……」

言い返そうとアオイは口を開くがそれを途中で止めた。これ以上

何を言っても、からかいの対象になると察したからだ。

「……もついい。私、寝るから」

勝手に笑ってれば、と突っ慥貪に答えてアオイは樹の根本に腰を下ろし、膝を抱えた。シヨウの笑い声から雨音に集中すれば眠気が襲ってくるのはごく簡単なことだった。

体にまとわりつく濡れた服に不快感を覚える。毛並みに付いた水滴を払い落とすミエルの仕草を見つめながら、アキが小さく息を吐いた。

「雨、ありませんね……」

くすぶる焚き火の煙が小さく揺れる。

「アオイ様達は、大丈夫なんでしょうか？」

「多分……シヨウも一緒だし、大丈夫だと思うよ」

元気づけようと苦笑いながらも笑ってみせるリヨウにアキは小さく頷いた。そしてふと、視線を焚き火に向け、呟く。

「……リヨウとハルは、王子なんですよ？それじゃあ、アオイ様と一緒にいるシヨウって人は、どんな方なんですか？」

「どんな、って言われると……」

「最近までティスニーの軍に所属していた」

リヨウの言葉を遮ったのはハルだった。アキはすり寄ってきたミエルを撫でながら言う。

「そうなんですか。それじゃあティスニーの出身なんですね」

「いや、記憶喪失で殆どのことを覚えていないらしいから……」

ハルの言葉にアキは小さく下を向いた。

「大変、ですね……思い出したいことも色々あるのに……」

アキの言葉にハルは何かを言おうと口を開くが、止めた。ミエルだけが三人の顔をのぞき込み、首を傾げて小さく鳴いた。

寝る、と言われて会話が中断してから、先に眠りについたのはどちらだっただろうか。少なくとも睡魔が神経を麻痺させている今、そんなことはどうでもよかった。

目の前に広がる闇を現実のものではないと自覚する。雨音がしな

いことから、それに気づいていた。真っ黒に染まった、いつもの夢。そう自分に言い聞かせて、シヨウは辺りを見回す。右も左も分らない。ただ確実に言えることは、この夢を見るのは頭痛の前触れだということだ。大袈裟に溜息をついて、シヨウは視線を上げる。闇に染まった天上に真っ白な月が煌々と光り輝いている。

(……月?)

そう思った瞬間、鈍い痛みが頭に響いた。そして、視界が一転しクリアに変わる。月明かりが静寂の森を包み、風さえも、音をたてない。

(?)

否。小さな足音が闇の向こうから聞こえた。急ぐように、焦るように、走る足音が近づいてくる。

(……っ、頭が……)

比例して頭痛が大きくなった。シヨウはとつさに額を押さえる。しかし、そこにバンダナは無く、指先が直に額に触れて……。

『外海を渡り 虚空を見上げ
陸路を仰ぎ 星々を見上げ』

重苦しい感覚が消え去る。鬱々とした闇と鈍い頭痛が引くのと同時かもしれない。暗闇のすぐ傍で、そんな歌声が響いた。外気は冷たさを感じるにも関わらず、汗が首を伝う。

『遠雷を遙か彼方に 南風はざわめきに消え
陽は弧を描き 我は千の夜に散る』

闇に一閃が輝く。視界がゆっくりと真上の木々を映し出した。まだ紺の空が青紫に変わりつつあるのは、きっとこれから日の出の時刻を迎えるからに違いない。

『首枷は愚物なる証

愚答を求めし我が道に その幻像を追う』

朝露が堕ちる。昨日の雨で濡れた地面は湿り気を帯びていた。少し離れたところに立ち、何かを見上げながらアオイが唄をうたっている。表情はここからは見る事が出来ない。

『願い叶え給え 空隙より生まれし神

一線の光なる者の元へ 我を運び給え

険路を漂う賢人よ、 譴責知らぬ者達を見よ
剣舞を踊り狂う人間の生きる術知らぬ、
刹那の願いを』

こうゆう瞬間、アオイはやはりSeedだと思ってしまふ。時折
見せる表情の中に普通の生活をしてきた人間には無い、別な表情がある。God's Seedのことを全て知っているわけではないが、シヨウはそう思った。

旋律に一区切りがつき、ふとアオイは振り返った。

「……シヨウ？」

名前を呼ばれ、シヨウはやっと我に返った。辺りを見回すと、朝

靄がたちこめている。どうやら朝になっていたらしい。

「え？……あ」

「何、まだ寝ぼけてるの？」

呆れたようにため息をつくアオイ。シヨウの顔を覗き込み、顔を曇らせる。

「汗かいてる。はい、これ」

瞬間、額になにか冷たいものを当てられる。湿らせたハンカチのようだった。心地よい冷たさを感じて、シヨウは大きく息を吐く。今になって自分が汗をかいていたことに気づいた。ふと、視線を横に向けると、そこにいつも額を覆うようにつけているバンダナがあった。

「……あ」

「何？」

不審そうに首を傾げるアオイに視線をうつした。

「ああ……バンダナ？汗かいてたから、外したけど」

アオイは樹の根本に腰を下ろすと、小さく欠伸をした。どうやらアオイも起きたばかりらしい。目を擦りながら溜息をつく様子に、もしかしたら起こしたのかもしれないとシヨウは思った。

太陽が昇りつつある空に、澄んだ風がすり抜けていった。座った状態のまま寝たせい、体の節々に軽い痛みがある。シヨウはゆっくり立ち上がると首を回した。

「まだ寝てたら？」

「背中が痛いんだよ、軍にいた頃は野宿でも平気だったんだけどな」
「年じゃない？」

軽口を叩きながら、アオイはふと顔を曇らせた。立ち上がり、シヨウを見上げると、軽く首を傾げる。

「ねえ、それ……」

額の左の生え際の方。前髪で殆ど見えないが、そこに何か痣のようなものが見える。首を傾げたシヨウだったがやがてアオイの言っていることに気付いたらしく、髪をかきあげた。

「それ、痣か何か？何かの怪我のアトにも見えるけど」

「……ああ、昔からあるんだよ。どうしてこうなったかは覚えてないけど」

「ふうん……あ、もしかして、そこ打って記憶喪失になったんだったりして」

背伸びをしてシヨウの顔を見上げていたアオイは、小さく笑う。
器用なぶつけ方だとひとしきり笑うと、顔をあげた。

上空に流れた雲は、駆け足のまま去っていく。

「さて、と……」

首筋を撫でる風は冷たく、アオイの息は少しだけ白く染まった。
北上するにつれ、気候はゆっくりと変わり、気温は下がりつつある。
もうティスファアのような暖かい陽の光は望めないだろう。
それでも先の空は高く、澄んでいた。北の空の、ずっと向こうまで。

第6章 13年前

雨が降り注いだ翌日は道の泥濘や水たまりに足を取られることが多い。毎日城から抜け出しては街を歩き回っていたリヨウにはちょっとした障害物程度のものであったが、アキにとってはそうはいかない。先ほどから何度も転倒しかけている様をみて、ハルはため息をついた。

「きゃっ！」

何度目かの悲鳴。転びかけては二人の背中に激突している。リヨウにいたっては一緒に転びそうになっている。

「……すみません」

「えっ？あ、大丈夫、大丈夫。アキの方こそ、疲れてない？」

リヨウの問いにアキはしばし間を空けて返事をした。

「……大丈夫です」

疲れが溜まっているのか、先ほどから口数が減ってしまったアキを見て、リヨウはハルに視線を向けた。言いたいことは聞かずとも理解できる。

「……休憩をとった方がいいだろうな」

ハルは息をついてそう言った。

「……皆さんは、体力があるんですね」
「え？」

倒れた古木が乾いているのを確認したアキはそこに座り、ぼつりとそう言った。どうやら自分が旅を遅らせていることを気にしているらしい。リヨウは首を左右に振った。

「俺とハルは特別だよ。剣の訓練受けてるし、シヨウなんかはやっぱり体力必要な仕事してたわけだし」

「……それじゃあ二人はどうして剣の訓練を受けたんですか？」

二人がティスニー・ティスファアの王子であることは軽く話してあった。その時もアキは同じように不思議そうな顔をしていた気がする。ハルは暫しの間考え、リヨウの返答が無いことを確認して言った。

「……ただの護身用だ」

「でも、普通、王家の方は従者の人が……」

アオイと同じような反応。これが通常の反応だと分かってはいた。ハルは小さく溜息をついて、歩き出したリヨウを視線で追った。アキがふと振り返り、呼び止める。

「え？……リヨウ？」

「あのさ、ちょっと俺、そこら辺歩いてくる」
「……？」

リヨウの姿が遠ざかるのを見送りながらアキは困惑したようにハルとリヨウを見比べた。ハルはいつもの無表情から代わりはない。ただリヨウが歩いていく様子を見つめると息を吐いた。

アキは何か悪いことをしてしまったかのような気になって不安げな表情を浮かべる。

「……何か、悪いことでも言っていましたか？」

「リヨウがああなのはいつものことだ」

「……でも」

ハルはアキの腰掛ける古木の反対側にある木に背をもたれる。そして何かを思い出すようにその漆黒の瞳を空へと向けた。澄んだ空は明らかにあの頃とは違う。雲の流れも、その色も。場所は違っても、空は繋がっている。けれど、あの時の気配はもう無い。

人も同じようなものだ。

「時が経てば昔のこと、か」

「……え？」

ハルはアキに視線を向けず、ただ空を見上げて話し始めた。

「13年前の戦争からだ、俺達が……剣を持つようになったのは」

その一夜の悲劇は、ティスニーとティスファアの両国を哀しみの奥底へと突き落とした。前触れも虫の知らせも無く、悪夢は日々の変わらぬ日常へと手を伸ばしつつあった午後。熱風の通り過ぎる中

庭に面した窓から、ハルは眼下の風景を見つめていた。13年前の夏、あの襲撃事件の起こる数時間前のこと。

夏の太陽の下、城を囲む木々が揺れる。ハルの視線の先には中庭で剣術の真似事をして遊ぶ2人の兄弟の姿があった。隣国ティスファアの第1王子と第2王子、クロスとレイ。末弟リヨウの姿は無かったが、ハルはそれを2階の書室から眺めていた。

ティスファアの王子は3人いた。国王と王妃の第1子クロスは当時18歳で、次男であるレイとは9歳、三男のリヨウとは14歳の年の差がある。あと数年で王位を継ぐに相応しい人間になるであろうと期待をされていた王子だった。ハルもこの年上の従兄弟に遊び相手をしてもらった覚えはある。周りの期待を受けつつも奢らない性格で、なにより弟たちの面倒見がよかった。

戯れる従兄弟達を見つめながら溜息をつくとき、ふと後ろから誰かが頭を撫でた。

「まざりたいの？ハル」

「……」

振り返り首を振るハルを見つめ、ティスニーの王女であるセリアは微笑んだ。読みかけていた本に栞をして、弟の隣から外を見つめる。色素の薄い茶の髪が熱風に揺れた。

「たしかに、あそこにいたらお母様に捕まってしまうわ」

苦笑したセリアは先程から下の階の廊下を歩き来している王妃の姿を見つめてそう言った。その手には幼少時セリアが来ていたドレスが見える。何かを言っているようだが、風の音や中庭から聞こえる王子達の声ではつきりとは聞き取ることが出来ない。それでもハルを探していることは容易に想像出来た。

「一昨日はたしか桃色のドレスだったわ。けれどハルの髪と目には淡色より落ち着いた色の方が似合うからってあの服を出してきたのね」

「……姉様の服は着たくない」

「そうね、男の子だものね。なのにどうしてお母様はハルに女の子の服を着せて遊ぶのが好きなのかしら？」

セリアは微笑みながら今度は中庭で剣術の真似事をする従兄弟達に視線を向けた。丁度良い長さの樹の枝を剣に見立て、それを交えるクロスとレイ。手加減をしている兄を打ち負かしては喜ぶレイの姿が見える。降参、と手を挙げているクロスにセリアが声を上げた。

「クロス王子！今日はリヨウはいないのかしら？」

声をかけられたクロスとレイの視線が2階の書室へと向けられる。身を乗り出したセリアと、窓枠に肘をついてこちらを見ているハルの姿にクロスが笑った。すぐ下まで歩み寄り、2人を見上げる。

レイは国王似であるが、リヨウとクロスは母親似であり、髪の色も似通っている。それでも14歳年の差のある長男と三男を見比べることは意味がないようにも思えた。

「リヨウなら風邪が長引いてて、部屋で休んでる」

「……あら、この間からずっとじゃないかしら？治りにくいよね、きつと」

「ああ。最近やっとレイも調子に戻ったところなんだ」

クロスが振り返ると、ハルに向かって手を振っているレイの姿。ハルはやはり無表情な顔で小さく手を振りかえした。

「あなたは健康そうね、クロス王子？」

「おかげさまで」

「そういえば、毎日剣術の練習をしてるのでしょうか？城の者達を相手に。お父様達はあまり良く思っていらっしゃらないようよ」

弟達の様子を見ていたセリアがクロスに視線を戻した。苦笑したような物言いにクロスは頭をかいた。遠くから聞こえてくる人の声や風の音が大きくなってくる。

「王族に剣術は必要ないって昨日も言われたよ。けれどいつ何があるか分からない。……自分のものくらいは守れるようになりたいだろう？」

「そうね。それにしても、王子は不思議だね。あなたに語らせるとどんなことでも正当化されてしまうのですもの」

姉の話聞いていたハルはクロスを見つめながら心の中で姉の言葉に賛成した。クロスは確かに時折剣術等といった王族らしからぬことに手を出す、彼に言わせてみると、どんなことも正当な気かしてしまう。それは言葉巧みなわけではなく、彼自身が自分の言葉を真だと信じているからだ。言葉にも、目にも曇りは一点も見受けられない。

「そう言われると照れるな……。ああ、そうだ、ハル」

クロスはハルの方を見上げて言う。

「リョウが暇をしているんだ。会いに行つてやつてくれないか？テイスファアの方が王妃に見つからずに済むだろう？」

ハルはクロスとセリアの2人の顔を見比べ、小さく頷いた。

ティスファールとティスニーの間にはつきりと定められた国境というものはない。人は自由に国と国を行き来し、街も大きな通りで繋がっている。ティスファールの街は大海側に面しており、南、東、北の各大陸への貿易港がある。ティスニーは逆に反対側の西大陸側の大海に面しているため、貿易には不向きだが、漁業には最適な西海が広がっている。

二国はこうして互いを補う要素を持つ。それ故に国の繋がりが強いのだ。両国の城は国の中心に置かず、背中合わせに建てられている。大陸の大使を迎える客室や広い中庭を挟んで、通路で繋がっている。

隣の城にいくのに通常10分もかからない。だが、生来の方向音痴であるハルには30分の距離である。この日も3度程迷い、近くにいた召使いに場所を聞いた。

見覚えのある通路まで来ると、ハルは向かい側に見えた女性に視線をとめた。召使いに何かを話している。背まである髪とスラリとした姿。赤に近い色をした髪が、こちらの視線に振り返って揺れる。

「あら、ハル」

微笑む姿にハルは頭を下げる。丁度敬語や礼儀について教えられ始めた頃だったこともあり、殆ど毎日顔を合わせる彼女は良い練習相手だった。

「……おはようございます」

「おはよう。リヨウに会いに来てくれたの？」

ハルが頷くと、彼女は部屋の奥へと促した。開け放された扉と窓の間を風が吹き抜け、夏でも涼しいと感ずることが出来る。

「少し話し相手をしていてもらえるかしら？」

部屋のベッドで体を起こしていたリヨウがこちらへ視線を向けた。途端に弾けたような笑顔で手招きをする。風邪で顔が赤いにもかかわらず、この喜びよう。どうやらクロスの言った通り、相当暇だったらしい。

ハルは先程の女性が苦笑している雰囲気を感じながら、呟く。

「風邪……」

「そうなの。でもいつまで経っても安静にしてくれなくて」

背中を押され、ハルはリヨウのベッドへと近づいていく。隣の窓は開け放され、カーテンが涼やかな風に揺れている。

「……おはよう」

「おはよう、ハル」

屈託のない笑顔のリヨウに、ハルは呆れたように溜息をついた。そんな従兄弟の様子を見ていた先程の女性は2人の頭を撫で、リヨウに言う。

「よかったわね、ハルが来てくれて」

「うん！」

「それじゃあハル、リヨウをお願いね」

テーブルにあった水をリヨウに飲ませ、扉に向かって歩き出す。それに気付いたリヨウは慌ててその服の裾を掴んだ。

「……どこに行くの？母さん」
「すぐ戻るわ」

リヨウは服を掴んだまま見上げる。

「……すぐ？」
「そう、すぐ戻るわ。……あんまり甘えてばかりだとハルに笑われるわよ？ねえ、ハル」

急にそう言われ、ハルは首を傾げた。しばらく考えて頷く。その答えにリヨウが顔を赤くした。頬を膨らませてそっぽを向く。母は笑って頭を撫でた。

「喧嘩しちや駄目よ？」

それじゃあ、とリヨウの母はハルに軽く頭を下げて、部屋を出ていった。リヨウは少しだけバツの悪そうな顔をして言った。

「……レイ達は？」
「あっちの城で剣の練習してる」

ここでのあっち、とはティスニーのことだ。リヨウは口を尖らせて、いいなあ、と呟いた。まだ小さいリヨウには剣など振れるわけもない。レイとリヨウでは力の差があるし、クロスは手加減できても、レイはまだ手加減の出来る年ではない。

こんな会話をしていると抜け出してまで遊びに行きそつだと悟ったハルは会話を変えた。

「……夏風邪？」

ハルがそう言うと、リヨウは首を左右に振った。

「ううん。違う」

「夏風邪は馬鹿がひくってレイが言ってた」

「だってレイだって前にひいてたし……けほっけほっ」

どうやらレイに馬鹿にされたらしい。もともとレイとリヨウは年が近いせいか兄弟喧嘩が絶えない。今回もきつとそうなのだろう。そして喧嘩の大体はクロスの説得によって解消される。

どうやら興奮し過ぎたらしく、咳を繰り返すリヨウ。ハルはいつも母や姉がそうするように背中をさすってやる。

「風邪治ってない？」

「ううん。でも……」

カーテンから入ってきた風が、窓際の花瓶にあつた花を揺らした。視線を向けたリヨウは目を細める。ハルは首を傾げた。

「……わかんない」

「……？」

すり抜けたはずの風はハルには感じ取ることが出来なかった。

第6章 記憶の傷跡

ハルとアキのいた場所から闇雲に森の中をすすんでいたリヨウは足を止めた。ぬかるんでいる地面に付けられた自分の足跡が今までの道のりを示してくれている分、心配はない。リヨウは長い溜息と共に座り込んだ。

あの時、ハルの返答は大体の見当がついていた。それでもはつきり言葉として聞きたくないと思ってしまった。リヨウは座り込んだまま、視線をぬかるみへと落とす。膝を抱え、座り込んだ場所の上から水滴がいくつか落ちてきた。払い落とす気にもなれず、ただじっと地面を見つめた。

「……」

自分はまだ子供なのだろうかと思う。あの時から何も変わっていないのだろうか。だとするならば、自分が剣を持つ意味は無い。風が通りすぎる度に、冷たい雫が服に落ちては染みこんだ。1人になるのは好きではない。それでもこうゆう時、無意識に孤独の中に浸っていたくなる。

『強く、なれば』

そう願ったのはいつのことだったか忘れてしまった。けれど、その想いは忘れてはいない。行き場のない自己嫌悪の感情をぶつけるように、拳を地面へ叩きつけた。痛みで顔を顰めたが、それが剣を扱う利き手だということに気付き自嘲の笑みをこぼした。

揺れる木々が騒ぎ続ける。やっと感じた水滴の冷たさに顔をあげると、空を見上げる。風が強い。それはあの時と一緒だった。

それは深夜、眠りにつく時間だった。それでもあの幼い頃にとつては、の話で、大人達にとってはまだ活動時間のうちだったのかもしれない。騒ぎ始まったのはハルが眠りにつく直前、中庭に上がった火の手が原因だった。

人の足音がいくつも行き来する音。ハルは目を擦り、ベットから起き上がった。騒がしさに首を傾げ、窓から外を見やる。そこでも何か緊張した面持ちで行き来する使いの者達の姿があった。

突然、扉を叩く音が響いた。確認もせず扉を開け、入ってきたのはセリアと召使いの1人だった。

「……姉様」

月明かりだけを頼りに見上げた姉の顔は真っ青で、いつもの柔らかい微笑みも無かった。よくハルの世話をしている若い召使いが、強ばった表情でハルに告げた。

「……王子、よく聞いて下さい。先程ティスファーに続く中庭から火の手が上がりました。原因は、おそらく北大陸、シェディーラスからの襲撃かと思われます」

召使いの言葉はしつかりとしているもののように思われたが、おそらくセリアに語ったものと同じなのだろう。セリアは聞きたくな

といった様子で目を背けていた。

両肩を掴まれ、そう言われたハルは意味も分からずその言葉を聞いていた。理解というには臆気なものであったが、緊迫した様子の表情に不安になったのは確かだった。

「……先に襲撃を受けたのも、おそらくティスファアの方かと」

それ以上、ティスファアの様子は語られなかった。お二人とも私と共に奥へ、と手を引かれる。はぐれないようにと繋いだ手は震えていた。セリアは何も言わず、ハルと召使いの後ろについて、廊下へと出た。

城使いの者達が走り回っている。召使い達は未だ自室にいる者達に危険を知らせる為に走り回り、警備の者達は中庭へと向かう。廊下は様々な言葉が行き交っていた。ハルは擦れ違う度に聞こえてくる言葉の1つ1つに耳を傾けた。

「……王の無事はまだ……」

「敵は中庭の方に……」

「……軍の動きは……」

「中庭に一番近いのは王妃とリョウ王子では……」

「……援軍は期待出来ないか」

「王子達の部屋に灯りが……」

ハルは突然足を止めた。そのせいで繋いでいた手が放れ、1人立ちつくす形となる。召使いとセリアの制止の声を聞くより先に、ハルは反対方向へと駆けだしていた。ティスファアへと繋がる、廊下の先へと。

リヨウは熱のせいではつきりしない意識の中、隣で自分を抱きしめている王妃の服を掴んでいた。回りの騒がしさとは打って変わって、城内は寒気を感じるほど静寂に満ちていた。人の移動する音に、剣の交わる音が下から聞こえていた。

わけの分からない不安にひととき強く王妃に抱きつく。最初は宥めるように頭を撫でていた王妃は廊下を歩く靴音に顔を上げた。非常事態かどうかという情報は伝わっていなかったが、王妃は窓の下を見つめ事態を理解したようだった。

「リヨウ。隠れて」

肩を掴み、リヨウを引き離すと王妃は言う。危険を伝えなくても空気で緊張と不安を感じ取ったらしいリヨウは涙を拭いつつ、首を横に振った。

靴音がまた鳴る。歩いている音だ。……この非常時に。

「リヨウ。心配することは無いわ。少しの間だけ……隠れんぼをされていて頂戴。あなたの知っている人が来るまでは出てきては駄目よ」

やはりリヨウは首を振った。王妃はもう一度頭を撫で、少し強引にベットの下へと潜り込ませる。

「……神様、どうかこの子達を無事に……」

ここにはいないクロスとレンの無事も願い、王妃は立ち上がった。部屋の前まで来た足音が、扉を叩いた。王妃は凜とした声で言い放つ。

「無駄な演技はよしなさい。私はここにいます」

願わくば、犠牲は自分だけで済むように。扉はゆっくりと開いた。

中庭に足を踏み入れたハルはあまりの異様な空気に顔を顰めた。人の叫び声、逃げまどう人々の姿。そしてそれ以上に感覚を支配するのは金臭さと焦げ臭さ。中庭を望む渡り廊下の2階を走りながら、ハルは眼下の様子を見つめた。

庭に立ち並んでいた木々は燃え、強風が火の勢いを更に強くしている。その灯りに照らされて城の兵士達がシェディーラウスの襲撃に対して剣を振るっていた。数も圧倒的に兵達の方が多い。形勢はティスニー側に傾いているように思われた。しかし、燃え上がる木々の元に倒れる兵達は自国の兵に間違いない。

ハルは足を止める。防御に怠りはない。それでも中庭にいた兵の数はみるみるうちに減っていった。

「……」

1人の兵に視線を向ける。剣撃は間違いなく的確であり、相手に牽制をかけるには十分な攻撃を繰り返している。切っ先は相手の利き腕を掠り、血煙が炎の灯りの中を舞った。それを皮切りに兵は積極的な攻撃へと転じる。

相手の顔はハルのいる場所からは分からなかった。それでも自国の兵達と違ったのはその装備の軽さだった。国に攻め込むにしては軽装で、攻撃を受けることなど殆ど考えていないようにも思える。

攻撃を繰り返す兵が、相手の隙を狙い剣を突きだした。ハルは思わず手すりから身を乗り出す。いつの間にか廊下を行き来していた人がいなくなっていたことにも気付かず。

血の色が鮮やか過ぎる程に飛び散った。しかし、それは敵のものではなく、明らかに城の兵のものだった。

「……！」

何が起こったのかはつきりと分からなかった。先程よりも派手に飛沫を上げた赤い液体が地面を染めていく。中庭を包んでいた金臭さが一層増した。

ハルは固まったように動けなくなった。手すりに体重を預けている両手が、石と化したかのように動かなくなっていた。心音が耳元で鳴っているように大きく響いてくる。震えも何も起きず、その代わり頭が真っ白になっていった。

剣の交わる音はゆつくりとではあるがティスファアの城の方へと向かっている。中庭から視線を離せなくなっていたハルは無防備な状態で取り残されていた。燃え上がる木々は未だ大袈裟に体を揺り動かし、次の枝へと炎を手渡していく。

「ハル……？ハル……っ！」

突如、後ろからそう声を掛けられ、肩を強く掴まれた。完全に思考が停止していたハルは瞬間的に相手の手をはね除けていた。

「ハル、俺だ」

炎の灯りに照らされて、相手の顔をやっとな確認することが出来た。それがクロス王子だと分かった瞬間、緊張の糸が一気に切れ、力が抜けるような感覚がした。クロスもハルの様子がいつものように戻ると、半分安心したかのように苦笑した。

クロスの片手には鞘から抜かれた剣があつた。右腕とその切っ先が赤く染まっているところを見ると、どうやらここに来るまで、何人かの敵と遭遇したようだった。それでも、対して大きな傷は負っていない。

「ハル、ティスニーの様子は？王達は無事なのか？」

多分、とハルは頷く。はつきりと無事を確認したわけではないが、ティスファアよりもティスニーの者達の方が逃げる時間はあつたはずだ。それは確かだった。

それでもクロスは少し苦い顔を浮かべた。中庭の様子からして国の不利を悟つたのだらう。笑みを消すと、クロスは真剣な表情でハルの両肩を掴んだ。

「ハル、お前は どうしてここに いるんだ」

「……心配で」

本当は、理由と呼べる理由は無かつた。何故か足が動き、こちらへと走っていたのだ。誤魔化しの為に口をついて出た言葉ではあつたが、衝動的な自分の行動に答えを付けるとするならば、その言葉がもつとも適当だったのかもしれない。

クロスは表情を変えず、言った。

「ハル。今が緊急事態だということは分かるだろ？いくらレイやリョウが心配でも、こんな危険な場所に来てはいけない。……少なくともお前は」

「でも」

「この襲撃は、はっきり言ってこちら側の方が不利だ。負けるかもしれない。それでもお前とセリア、レイやリョウが生き残ってくれば、国は無くならない」

クロス王子は、とハルは口にしようとした。しかしその声は1つの足音によって掻き消された。それはティスニー側からの足音だった。だがその音に焦りも、不安も感じられない。静かな、足音だった。

「ハル、こっちへ」

クロスがハルの手を引いた。ティスファアへと続く廊下を、ハルは後ろを何度も振り向きながら走った。

第6章 恐怖と憎しみ

静かに、扉は開いた。王妃は死に対する恐怖も、不安も、微塵も感じられない様子で相手を見つめた。灯りの無い部屋で頼るものは月明かりだけだったが、相手の顔ははつきりと見ることが出来なかった。黒い布で顔を隠し、ゆっくりと相手は部屋へと足を踏み入れた。

「何者です」

王妃の問いに相手は答えなかった。ただその手に握りしめた剣を王妃へと向ける。

「名も答えられぬと言つのですか」

カチャリ、と剣がなった。王妃の様子がよく理解出来ていないリヨウはベッドの下から少しだけ顔を出し、様子を窺おうとした。しかし、隣に配置されたもう一つのベッドのせいで母の姿しか確認出来ない。

不安と恐怖が最大に達していても、リヨウは声を上げて泣くことが出来なかった。声を出してはいけない緊張感が部屋の中を満たしている。

（……こわい……）

「望みは何です」

相手は剣の切っ先を標的へと向けたまま、抑揚の無い声で答えた。

「それは望みではない。これは『そうなるべき運命』」

意味の分からない言葉だったが、リヨウは背筋を氷が伝っていくような感覚に見まわれた。自分で自分を抱きしめても、寒気は収まらない。吐き気がする位の緊張感。圧力が体にのし掛かる。

王妃は相手を睨みつけ、一歩踏み出した。

「あなたが剣を向けるのも、望みではなく、運命のせいだ？」

「『運命が望むこと』即ち我々が望むこと。……陽は落ち、世界は闇に覆われる」

何かを謳うように、意味不明な言葉が語られてゆく。王妃は顔を顰め、遮るように叫んだ。

「あなたは何者ですか。何故この国を……」

「我々のことなど、理解出来まい」

その時、男ははっきりと言った。剣を突きだし、王妃の体へと切っ先をのめり込ませる。そして切り裂くように柄を振った。瞬間、盛大な血飛沫が相手の体を覆う布にかかった。染みこむことなく、床へと滴り落ちて音をたてる。血は部屋のあちこちに飛び、リヨウの隠れていたベットにも飛んだ。目の前の血溜まりにリヨウは呆然とし、息をするのも忘れていた。

「……そう、誰にも」

男はそう言つと、身を翻し去っていった。

戸が閉まる音が響いても、部屋の中は静まりかえっていた。リヨウはゆっくりとベットから抜け出す。しかし、それ以上前に行く事が出来ずに立ちすくんだ。駆け寄ろうとすることが出来なかった。思考が完全に固まり、体は動かない。ただ心の何処かが目の前の異常な事態に対応しようと叫び続ける。何を叫んでいるのかは分からない。ただの雑音と同じように通り過ぎていった。

血溜まりがゆっくりと足下に近づいてくる。ようやく視点が動き、足下を見やる。そしてやっと母の亡骸が視界に入った瞬間、叫び声が先程以上に大きく、強く響き渡るのを感じた。大きすぎて、それが何という声なのか分からなかった。言葉にはならない、それでも気持ちは蓄積されていく。いつの間にか自分の右手が自分の襟元を掴んでいた。

溢れ出しそうになる何かを無理矢理抑えつけるかのように。

「……」

足音が響いた。静寂に紛れ、廊下を駆けるいくつかの足音が聞こえてきた。リヨウはそれが聞こえていないかのようにただ胸元を押さえて立ちすくんでいるだけだった。

そして扉が再び開かれてもその視線は動かなかった。

「リヨウ！……っ！？」

先に部屋へ足を踏み入れたのはクロスだった。月光を頼りに先にリヨウの姿を見つけ、そしてその視線はすぐ血溜まりに横たわる母

へと向けられた。駆け寄ろうとしたが、その血溜まりの広さに足を止め、顔を逸らした。怒りか、哀しみか、どちらともつかない震えに揺れる剣を床に置き、母の首筋に手を伸ばす。

「……母上……」

クロスの後ろにいたハルはその言葉に俯いた。あまりの惨状を見てしまったショックに吐き気が込みあげてくる。それを抑え、ただ顔を顰めるしかなかった。

母が死に絶えたことを確認したクロスはその亡骸をベットへと乗せ、黙祷した。リヨウはその間も、血溜まりの中心を見つめ続けた。襟元をさらに強く握りしめ、なんの表情も浮かべることのないまま。

先にリヨウの異変に気付いたのはクロスだった。黙祷を終え、母の死を見届けてしまったのである。弟の顔を覗き込む。しかし、その瞳が兄に向けられることはなかった。

「……リヨウ？」

クロスの表情が曇る。反応を示さないリヨウの肩を軽く揺する。が、しかしリヨウは反応しない。リヨウの様子にゆっくりとハルも近づいてきた。

リヨウは服を掴んだ手を離さない。

「……リヨウ、リヨウ!？」

クロスは小さい手を包み込み、その手を離そうとした。リヨウは幼い力で精一杯握りしめていたらしく、すぐにはその手を離さなかったが、クロスがその手を離しもう一度名を呼ぶと、我に返ったように視線を兄へと向けた。

「…………あ…………」

掠れるような声が、口から漏れた。すると堰を切ったかのようにリヨウは声をあげて泣き始めた。城にはどれだけの敵がいるか分からなかったが、クロスは泣き続けるリヨウを止めようとはしなかった。抱き寄せ、背中を撫でる。リヨウは声にならない声で泣きわめいていた。

ふとハルは顔を上げた。同じようにクロスも何かに気付き、部屋の入口に視線を向ける。数人の足音が警戒しつつ近づいてくる。それがシェディーラウスの者達のものではないことは明らかだった。少し遠くから、名前を呼ぶ声が聞こえてくる。

クロスはリヨウをハルに任せ、剣を携え扉を開けた。

「王子！」

「…………ケイトスカ」

廊下の向こうから、数人の従者と剣を持った者達の姿が見えた。

「王子、よくご無事で…………」

ケイトスと呼ばれた男がそう言うと、クロスは苦笑いを浮かべて剣を示した。

「これの御陰だ。王の目玉をくらつても続けてきた甲斐があったらしいな」

「これ以上王子に剣を振るわれては私共の方が困ります。レイ王子から大体の話を聞きましたが……かなり無理をなされたようですね」
「レイの部屋は灯りがついたままの状態だったからな。先に狙われたのもレイだった。仕方ないことだった、と言ふべきかな」

ケイトスとクロスが話している間、ハルはその様子を見つめ続けていた。ケイトスという男の顔は一度見たことがある。たしかティスニーの軍に所属していたはずだ。毎月軍事の報告に城を出入りしていたため、何度か顔を見たことがあった。

するとハルの存在に気付いたケイトスは驚いたように声を上げた。

「ハル王子！何故ここに……？」

「ティスニーを抜け出してきたらしい。中庭にいたんだ」

代わりに答えたクロスに再度視線を向けると、ケイトスは顔を曇らせた。はつきりと言葉にされなかったが、ハルはその意味を感じ取ることが出来た。ティスニーの城はまだ襲撃を受けている。ハルはあの時手を離れたセリアの事が不安になった。

クロスは剣の血を拭うと、ケイトスに向かって言う。

「何故来るのが遅れた？」

「軍の本部も襲撃されたので……」

ケイトスは苦い表情でそう答えた。軍でも被害は大きかったのだろつ。ハルは彼の剣の柄を握りしめた右手が小さく震えているのに

気付いた。

「何故こんなに簡単に……」

「それは後ほど詳しく説明致します。ここはまだ危険ですから、王子達は城の外へ……」

その言葉を掻き消すように、鼓膜を切り裂くような爆発音が木霊した。城の壁は揺れ、闇の続く廊下の奥から硝子の割れる音が響く窓から見えていた暗闇の景色が、あざやかに照らし出される。

その様子を目にしたケイトスは自分の部下達に指示を出す。そしてクロスを振り返った。

「王子達は逃げてください。ここから先は私達が行きます」

そう言い残すとケイトスはティスニーの城の方へと走り出した。数人の部下が後に続き、城の従者達はハルやリヨウに外へ避難するよう促す。

クロスは剣を握ったまま、廊下の奥を見つめていた。リヨウは兄の様子に気付き、近づくとクロスはその頭を撫で、小声で言った。

「リヨウ。俺がいなくてもレイとハルと3人で大丈夫だな？」

「！」

唐突なその言葉にリヨウは声をあげる。が、それは先程まで泣いていたせいで上手く言葉にならなかった。クロスは話を続けた。

「俺は行く。……お前は皆で逃げるんだ。いいか？」

リヨウは首を左右に振った。しっかりと兄の左手を掴み、声にならない声で訴える。それでもクロスの表情は変わらなかった。その

表情は、母のものと似ていた。

クロスはリヨウと視線を合わせた。

「守りたいんだ。城を、皆を」

ハルが2人に気付き、振り返った。それでもそこからクロスの言葉は聞き取れない。それでも何か深刻な表情を浮かべるクロスに首を傾げた。

「強く、なればとずっと思っていた。身分とか地位とか、そういうものがあるだけで城に籠もっているのはおかしいと、ずっと思っていたんだ」

クロスはそう言うのと微笑み、リヨウの手を離す。

「大切なものは、自分で守りたい。まだ分からないかもしれないけれど、いつかお前も、分かるようになるよ」

最後にもう一度頭を撫でられて、兄は微笑んだ。そしてこちらに背を向け、ケイトス達が消えた廊下の向こうへと駆けだしていく。ゆっくりと滲み始めた視界が、兄を闇の中へと消していった。後ろから聞こえる従者達の制止の声も、雑音のように響いている。

従者の中の数名がクロスの後を追ひ、残った者達がハルとリヨウを外へと誘導した。最後にもう一度だけ振り返った時、空は燃え上がった炎と煙、そしてその真紅の光のせいで赤く染まって見えた。

どこまでも続いているような、紅の空。それは寂しい、冷たい色の空だった。

「それじゃあ、そのクロス王子は……」

空から視線をハルへと向け、アキはそう問い掛けた。ハルは頷くと、深く息を吐く。

「結局被害が大きかったのはティスファアの方だった。ティスニは王女を失ったが、王と王妃は無事だったからな」

ハルは葬儀の時のことを思い出す。土葬されていた、見覚えのあるいくつかの顔。実感が湧かず、いつまで経っても泣き出すことは出来なかった。やっと胸に刺すような痛みを感じ始めたのは、数日して、姉の姿が城の何処にもないことに気付いた時だった。

アキはハルの横顔を見つめながら言う。

「……ハルの、お姉さんですよね？」

「ああ」

アキは俯き、沈黙した。風の音が少しだけ大きく、木霊しているように感じる。ハルはアキが返答に困っていることに気付くと、空から視線を離し、言った。

「……昔のことだ」

アキは立ったままのハルを見上げる。無表情ではあったが、気を

使っているのかもしれない。

「……リヨウもハルも、優しいですね」

「リヨウはよくそう言われているな。アオイはお節介だと言っていたが」

その様子が容易に想像出来てしまい、アキは笑った。ひとしきり笑うと、立ち上がり服の汚れを払い落とす。顔を上げると、ハルに向かつて言った。

「リヨウを迎えに行きませんか？一人きりじゃ可哀想です」

ハルは大きく息を吐くと、返事を待つアキに頷いて見せた。

「ああ」

空は青い。澄んだ蒼の空は明るく、優しく。それはあの時とは違う、暖かい空だった。リヨウを呼ぶ声が響く。

第7章 出会いという名の再会

数日間の野宿はやはり体に応える。そして段々と気候が変わりつつあるせいか、寒さも身に染みてくるようになった。アオイはルクトの街を見上げ、腕をさする。天空の遙か彼方から降り注ぐ陽の光に暖かさは感じられない。港から吹き付ける潮風が髪を揺らして通り過ぎた。

アオイは顔を顰めると、そのまま後ろの建物を一瞥する。

「なんでこうゆう時に頭痛になるの、シヨウは」

寒さと疲れで街についたときは真つ先に宿を探したのだが、落ちてくより先に、アオイ達は他の3人を探さなければならなかった。この宿に泊まっていないことは確認したのだが、その後が問題だった。仮病なのか本当なのか、シヨウが頭が痛いと言いだしたため、アオイが1人でリヨウ達を探しにいく羽目になってしまったのだった。

1人納得のいかない顔をしながら歩くアオイは、とりあえずこの街にある他の宿をあたってみることにした。先にルクトに来ていれば、宿をとっているだろうし、そうでなければ自分達の宿を探しにくるだろう。

街は以前リヨウが言っていたとおり、ティスファアの次くらいに大きな街に見えた。港と運河が近く、貿易等から発達した技術がこの街を繁栄させているらしい。見たことのない品物売る店や、本で読んだ機械を売っている店が並んでいた。アオイはその中の1つに目を止めた。店のシヨウウィンドウには、神法協会にいた頃に本で見た小銃が並んでいる。

随分と昔に読んだ本なので詳しいことは覚えていないが、古ぼけ

て色褪せた文章の隣に描かれていた絵はこの小銃と同じ形をしている。銀の装飾を施したバレルとストックは精巧な造りをしていて、見た目は少し重そうに見えた。

(……これが小銃？もう少し大きいものかと思ってたけど)

あの頃読んだ本には小銃の仕組みが事細かに書かれていた。銃弾が発射されるまでの過程や、各部分の名前など。だが実際本物を見たことは無かった。アオイはウィンドウに歩み寄り、並べられた長銃や小銃を見つめる。高価な値が付けられているだけに店内に入る気にはならなかったが、アオイは暫くその銃器に見入っていた。ふと店のドアが開いた。上部に取り付けられた鐘が小気味よい音を響かせる。出てきた人間は店内の方に何かを言い、そのまま歩き出した為、アオイがすぐそこにいることに気付いていなかった。

「あつ」

真剣に見入っていたアオイは、軽い衝撃にやっと相手の存在に気付いた。茶髪を1つに纏めた、長身の男だった。アオイより幾つか年上に見えたが、シヨウやハル達からすればそんなに年は離れていないかもしれない。男は人の良い笑みを浮かべて尋ねてきた。

「ごめん、大丈夫かい？」

紳士的に尋ねる男は、アオイより頭半分身長が高い。アオイは相手を見上げたまま、しばらく言葉が出なかった。相手は首を傾げ、もう一度同じ事を聞く。

「大丈夫？頭ぶつけなかった？」

「……だ、大丈夫……」

良かった、と呟いた男はアオイが眺めていたシヨウウィンドウに視線をやり、優男的な笑みを浮かべる。その手には購入したらしい散弾銃の箱があった。手元を見つめるアオイに、男は微笑む。

「興味あるの？女の子が持つのは少し物騒だけどね」

「いや、ちよつと見てただけで……」

「そっか。……そうだね、旅でもしてない限り女の子は持たない方がいいよ。キミはこの街の子？」

そう聞くのが当然のことのように男は聞いてくる。アオイは首を横に振った。旅をしていると答え、そしてはた、と気付く。詮索されている。以前はそれを警戒していたのに、なぜ素直に答えたりしたのか。

そんなアオイの様子に気付いているのかいないのか、男はさらに尋ねてくる。

「1人で旅をしているのかい？今は何かと物騒だから、危険だよ」

「1人じゃ……ない、けど……」

「でも連れの人がないようだけど」

男は辺りを見回すと、もう一度アオイに視線を向けた。視線が合うとアオイはすぐ顔を逸らした。

「もしかすると……はぐれたのかい？」

「……多分この街に来てると思うんだけど、宿屋で聞いてみようかと思って」

そう言つとアオイは口を抑えた。

（なんで私そんなこと素直に答えてるの……？）

男は俯いたままのアオイの頭を撫でると、微笑んだ。

「じゃあ宿屋まで連れて行ってあげようか？道もよく分からないだろっし」

「……え？」

アオイは顔を上げると、差し出された手を見て戸惑った。しかし、相手の顔を見た瞬間、自然と右手が伸びていた。それが自分の手ではないかのように。

「おいで」

誰かの手を取ること。誰かに触れること。それはたった1人以外には許したことがない。アオイは握った右手を見つめながら、広がっていく違和感に顔を顰めた。しかしその感覚を打ち消していくほど、握った手は温かった。

「そっいえば、キミの名前は？」

「……アオイ」

繋いだままの手を振りほどくことのないまま、2人は人混みの中を歩き続ける。男は先を歩くわけでもなく、アオイの歩調に合わせて足を進めた。下を向いたまま歩くアオイが人とぶつからないようにさり気なく気を配っている。

「……そうなんだ、良い名前だね」

道の先に宿の建物が見えてくる。男は片方の手でその看板を指差

した。

「あそこだよ。この街で宿って言ったら港の宿とあの宿。あとは街の奥の方に一軒あるだけなんだ」

「……」

視線を上げると高い建物が視界に入った。入口の前まで歩いていくと男は手を離して言う。

「じゃあ僕はここで待つてるから、行っておいで」

アオイは頷き、扉までの階段を上がった。しっかりと手すりまで付けられているということは、かなり設備の良い宿らしい。扉を開ける前にもう一度建物を見上げ、アオイは中へと入った。

「……アオイ様、いませんね……」

丁度その頃、港の宿の前で辺りを見回していたアキがそう呟いた。隣にいたりヨウは頷き、背伸びをする。アオイが宿を出て数時間後、ハル達が町に着き、同じように宿をまわっていた。しかし人混みの多い大通りを歩いていたアオイと擦れ違いになってしまったらしい。シヨウのいる宿を見つけた頃には、アオイはシンと共に大通り沿い

の宿へと歩いていったのだ。

シヨウに事情を聞いたリヨウとアキは、ハルが宿をとる手続きをしている間にアオイを探しに行くことにした。

「でもアオイはすぐに見つかるって。髪の色とか珍しいし」

リヨウの言葉にアキは顔を顰めた。何かを考えるような表情をしながら歩き始める。ミエルは尻尾を振りながらアキの後ろをついて歩いた。

「あ、ちよつと、アキ！」

「……それなんですよね。アオイ様の髪って珍しい色じゃないですか。神法協会の人に会っていないければいいんですけど……」

青色の髪は珍しい。遠い祖先に人間以外の血が混じっている為に、突然の変異で起こるのだという仮説や、神が与える祝福や禁忌の象徴という仮説もある。それ故にどうしても人目を引く。

実際アキもリヨウも、青髪を見たのはアオイが初めてだ。染めている人間は見たことがあるが、あんなに澄んだ色をした青にはならない。

リヨウはふと不安が過ぎり、アキに聞く。

「……ここら辺にも協会が？」

「いえ、ここにはないんですけど、この港は時々協会の人達が利用するんです。ここから西の大陸に行く船が出てるんですけど、そこから北……えつと、様々な大陸に行く船が出ているんです」

アキは身振り手振りで説明しつつ、北大陸という言葉だけは省いた。リヨウは気付かなかったのか、ただただ頷き、言葉を返す。ミエルは2人の後ろを歩きながら、時折地面に鼻をつけてアオイの行

方を探していた。

「そっか……。それじゃ、早く探さないと」

「ですね、ここは人が多いですし。迷うと大変ですから。……？」

ふと足下にミエルが擦り寄ってきた。2人が足を止めるとミエルは道の向こうを見つめ、吠える。尻尾を振っている様子にアキとりヨウは顔を見合わせた。

数分後、扉を開けて出てきたアオイを、男は同じように笑顔で迎えた。アオイが首を横に振ってみせると、男はまた手を繋ぎ、歩き始める。

「それじゃあ奥の方の宿かな」

「……ねえ」

自然に繋がれた手を見つめ、今度は視線を男に向ける。茶に染まった瞳が、心に広がる違和感を増幅させていく。言葉が制限されているかのように、上手く出てこない。何故か唇が震える。

「……貴方の名前は？」

アオイの問いに、男は足を止めた。けれど表情は変わらない。

「僕はシン。シン・レシーフェ」

「シン……？」

一度だけそう口の中に繰り返すと、シンはアオイの手を引いて歩き始めた。

「どこにでもある名前だよ。それより、宿はこっちに……」

奥まった道の向こうに、もう一つの宿の看板が見えた。そちらに足を向けそうになった瞬間、アオイの耳に聞き慣れた鳴き声が聞こえた。大通りの向こうから聞こえたミエルの鳴き声にアオイは我に返った。心を覆っていた違和感が一気に消え去るような感覚。人混みの中から駆けてくるミエルを見たアオイは声を上げた。

「……ミエル！」

シンと繋いでいた手が離れ、駆け寄ってきたミエルを抱きしめた。尻尾を振って嬉しがるミエルの背を撫で、アオイは安堵した。頬を舐められる感触がくすぐったい。

ひとしきり再開を喜んだ後、ミエルは後ろを振り返った。先に走り出してしまったが為に2人の姿は遠い。けれどこちらに気付いたようで、リヨウの手を振っている姿が見て取れた。そして隣にはアキの姿がある。

（……そんなことだろうと思った）

アオイは息をつき、シンに向かって言う。

「……なんとか、会えたみたい」

2人のいる方向に指を差すとシンはよかった、と答え、アオイの頭を撫でる。ミエルは不思議そうにシンを見つめていた。

シンはもう一度アオイの仲間と思われる2人に視線を向けた。そしてふと、顔をしかめる。

「あれは……」

「……………」

呟いた言葉は、はつきりと聞き取ることが出来なかった。アオイが首を傾げるとシンはそれに気付き、首を振って、なんでもないと答える。そしてこちらを見上げるミエルの頭を撫でるとアオイに視線を向けた。

「それじゃあ、僕はそろそろ行くことにするよ。……………元気で」

「あ、……………ありがとう……………」

丁度2人とすれ違い様にシンは人混みの中へと消えていく。その姿を見失った瞬間、街の雑音が少し大きくざわめき、先程までさほど感じなかった秋風が少し冷たく感じた。ミエルが手をしきりに舐め、気を引こうとしている。それでもアオイの視線は人混みの中に消えたシンの方を見つめていた。

「……………アオイ？」

ふと隣からそう呼ばれ、アオイは我に返る。咄嗟に振り向くと、そこには首を傾げているリョウがいた。その隣にはアキが訝しげな表情で立っている。

「どうかした？」

「……………なんでもない」

リョウの言葉に首を振り、アオイはミエルへと視線を向けた。頭を撫でてやるとミエルは気持ちよさそうに目を細める。パタパタと尻尾を振るミエルにアオイは微笑んだ。普段見ないアオイの笑顔にリョウはアキと顔を見合わせる。

「……良かった、無事で」
「……え？」

リヨウがそんな声を漏らすと、アオイは顔を顰めて溜息をついた。

「ミエルが」

「……うん、そんな気はしてたんだけど、こっちは心配してたんだし……」

アオイはあからさまに嫌そうな顔を見ると、リヨウは肩を落として小さく溜息を吐いた。なぐさめるようにミエルが鼻先でつついてくる。リヨウは苦笑するとミエルの頭を軽く撫でた。

その隣に立つアキは先程アオイが見つめていた方向に視線を向けていた。

「……ところで」

横目でアキに視線を向けた後、アオイはリヨウを見下ろして言う。

「リヨウ。あんたはどうして誰も彼もを旅に誘うわけ？」

「えっ？……あ、いや、その……」

「『困ってたから』とでも言うつもり？……こんの馬鹿王子」

口ごもるリヨウにアオイは溜息をついた。あの後リヨウ達と分かれて、アキのことは気にはなったが、協会のこと、そして彼女が召喚士であることを考えると共に旅をしたい気分にはなれない。

リヨウは口ではアオイに勝てないと思ったのか、話を逸らす。

「あ、そ、そういうば、アオイさっき誰かといいたみたいけど……誰？」

「誰って……」

名前を言いかけて、アオイは顔を顰めた。さも当然のように答えようとした自分に違和感を覚え、首を振る。いつの間にかアキがこちらに視線を向けていた。

「……宿の場所を教えてくれるっていったから、ここまで連れてきてもらった。……それだけ」

アキと視線が合い、アオイは顔を背けた。その様子にリヨウは首を傾げたが、アオイは何かを振り切るように歩き出した。そして、その話をするにはもう無かった。

第7章 もう一つの芽

「……白昼堂々のナンパ、頭に言うぞ」

裏路地を曲がると、そんな声が横から聞こえた。曲がり角の死角に背を持たれていた少年が呆れたように見上げてくる。腰にダガーを2つ装備し、皮の手袋をして、見た目は立派な旅人に見えるが、いかんせん背が低い。

シンは足を止めると少年に笑いかけた。

「彼に言うのは別に構わないよ。ただ、ヴァーミリオンに言うのは止めて欲しいかな。多分自分が死ぬまで言いふらしまわると思うからね」

困るな、と言うシン。だがその表情は笑顔のままだ。少年は負けを認めるように溜息をついてみせた。

「けど、ナンパというより嫌がらせに近いな」

「そうだね、キミだったら真っ先に怒り出すところだけど」

「嫌味か？」

笑ってごまかそうとする相手を睨みつけ、少年は歩き出した。その様子にシンも隣を歩き始める。身長差のある2人は、裏路地を通る人間の目を引いた。

「ごめんごめん。それより、ちょっと頼みがあるんだ。いいかい？」

「頼みは頭を通すこと」

「いや、これは知られたくないんだ、誰にも」

訝しげな表情をしながら少年はシンに視線を向ける。

「……あの姉ちゃんにもか？」

「そう、だね……。根拠の無い期待をさせても仕方ないから」

「報酬は？」

真面目な顔をして尋ねる少年に、シンは声をあげて笑った。少年は小馬鹿にされ、むっとする。シンを殴ろうと手を伸ばすが、まだ身長が小さい為に届かない。悔しくなってこっぴどく叫ぶ。

「お前、子供扱いするなっ」

「あはは、ごめんシアン。キミがあまりにも頭にそっくりなことを言うから……」

シアン、と呼ばれた少年がそっぽを向くと、シンは笑いながら言っただ。

「ごめん。……報酬はちゃんとあげるよ。お金とお菓子と、どっちがいい？」

「金」

「それじゃあ、お金とヴァーミリオンの弱点と……どっちがいい？」
「……弱点」

少々悩みつつそう答えたシアンにシンは手を叩いてみせた。

「じゃあ、商談成立。……さっきの子、分かるかい？あの青髪の子」

「ああ、珍しいからな、青髪に青眼は」

「あの子がこの後どこに行くのか、調べて欲しいんだ」

シンの言葉にシアンは目を丸くした。この男がそんなに女に興味を示したことはない。顔をしかめてシンを見上げる。

「惚れたのか？」

「商談では理由を聞かない。『風』盗賊団の決まりだよな？」

「ふん、あの姉ちゃん泣くぞ」

「泣かせない為に秘密にするんだよ」

「最っ低だな。……分かったよ、行ってくる」

裏路地のさらに狭い道へと走り出したシアンをシンは手を振って見送る。身軽な体は袋小路の壁を飛び越え、更にその奥へと消えていった。

「やっぱり最近彼に似てきたんじゃないかな」

シンは手を下ろすと、そう呟いた。けれどまだ、シアンは読みが甘い。

「……ちなみに僕、惚れたなんて一言も言っていないんだけどね」

そんな小さな笑い声が路地に響いた。少しだけ意地悪な笑みを浮かべたシンは、シアンが走っていった方向とは別の狭い路地へと足を向ける。そしてゆっくりと光の射し込まない裏路地へ姿を消した。

何度も深呼吸を繰り返した後に開けた扉。しかしそこに人の姿は無く、アキはほっと息をついた。荷物と言えるほどのものは無かったが、とりあえず中へと足を踏み出し、人気のない方のベットに腰掛けた。

もう片方のベットにはアオイの上着が置かれている。隣の数少ない荷物も半分口を開いた形にはなっていたが、まだ休んだ後はなかった。いくつかの本がベットサイドに置かれていたが、これも開いた形跡はない。

アキは少しだけ苦笑する。いつの間にか、憧れていたアオイと同じ場所にいる。協会を裏切るという形で。一族のなかで誰よりも神法協会に仕えることを望んでいた。それは南方などという辺境の地ではなく中央の、彼女のいる中央神法協会に。

溜息をついて、アキはベットに倒れ込む。反発で体が揺れた。

「きつと……中央にいたら、アオイ様のことを何も知らないままだったのかもしれないですね……」

協会と同じように、自分はアオイを神格化して見ていたのだと気付いた。神格化させた原因は違えど、結局は協会の人間と同じ。魔物を使い、アオイを協会に閉じこめたかもしれない。いや、魔物ではなく、碧の悪魔を……。

そう考えると、背筋が凍り付いた。それでもそんな光景は想像出来なかった。想像出来ないからこそ、恐ろしかった。

協会から離れてしまっても、協会の真実は信じられなかった。そんなことを協会が暗黙の了解として行ったのなら、それはとてつもなく大きな問題となる。神法協会のは大陸全体、果ては国家まで浸透しているのだ。アキはきつく目を瞑る。それでもアオイの言葉を、表情を、疑うことは出来なかった。

「私は……」

その時、扉が開いた。アオイが何かを手に部屋へと入ってくる。起き上がったアキは、アオイと目が合い、慌てて始めた。

「あ、アオイ様！あ、あの……」

「……相部屋のこと、さっきハルから聞いた」

アオイは気にする様子もなく、それでも必要以上の干渉を求めずといった感じで自分のベットに座り、つまらなそうにベッドサイドの本に目を通し始めた。拍子抜けしたアキだが、会話が途切れてしまい、おそろおそろ声をかける。

「あ、あの……すいませんでしたっ」

「……何？」

突然立ち上がって頭を下げたアキにアオイは顔を顰めた。アキは申し訳なさそうに続ける。

「私、アオイ様に失礼を……」

その言葉に、アオイは溜息をついた。確かに協会のやり方に怒りを覚えた。いや、魔物までもを操ろうとしていることには怒り以上に驚きを覚えた。それでも、それをアキにぶつけて事実が変わるわけではない。

アオイは本を横に置き、目の前のアキに言った。

「その呼び方、止めてくれない？どこにいても協会にいる気がして良い気分はしないから」

アキは顔をあげ、困惑したようにアオイを見返す。

「そ、それじゃあ何て呼べば……」

「別に。あの3人と同じように呼べば」

アオイはそう言うのと灯りを消した。途端暗闇が部屋の中に入り込み、カーテンの隙間から月光だけが洩れる。アオイは闇の中、窓際までいくとカーテンを捲り、外の様子を見つめた。アキは首を傾げる。

「あ、アオイさ……え、とアオイ、何してるんですか？」

「……さっきから何か外にいる」

「え？」

アキはベットに座った状態のままアオイの方を見つめる。大きな声を出してはいけない気がして、小声で語りかけた。

「……協会の人間、ですか？」

アオイは首を横に振った。そしてカーテンを元に戻し、中が見えないようにすると自分のベットに戻る。

「協会なら魔物を仕掛けてくるでしょう。気配を消すのが上手いところを見ると違うようだけど」

「……誰なんでしょう」

「別にどうでもいいけど。邪魔するようなら、こっちもそれなりの対応をするし」

それなりの、と聞いてアキは声を上げた。大事な事を忘れていた

のだ。アキは暗がりの中、手探りで荷物をかき分ける。

「アオイさ……じゃなくて、アオイ、あの、これを……」

カチャ、という音でアオイは察した。鞘に入ったそれを手に取ると、懐かしい感触が伝わってくる。アキは言い訳することなく頭を下げた。

「渡そうと思ってたんですけど、タイミングを逃してて……本当にすいません」

「……1つ聞きたいんだけど」

アオイは剣を受け取り、寝ていてもすぐ手に取れる場所に置くと、さつさとベツトに潜り込んでいるアキに話しかけた。

「なんであの時、召喚を使ったの？」

アキは体をアオイの方に向けると、当然の如くこう返した。

「危険だったからです」

「そうゆうことじゃなくて……」

溜息が聞こえてきて、アキは少々怯んだようだった。灯りが無いため、表情ははっきりと見えないが。

「でも……そうゆうことじゃないですか」

アキの声が続く。何かを決心したように、先程よりも強い口調で言う。

「目の前で誰かが危ない目に遭ってたら、助けてあげたいです」
「協会を敵にまわしても？」

アオイはベッドに寝ころび、肩まで毛布を引つ張った。天井を見上げながらそう問うと、アキは少し間を空け、上手く説明できないですけど前置きして話し始める。静かな声が室内に響く。

「……私、本当は神法協会にいたかったわけじゃないんです。協会に仕えたかったわけではなくて……『アオイ様のいる』協会に仕えたかったんです」

「私？」

「はい。アオイ様がGod's Seedに決まってから、色々な噂を聞きました。人並み外れた魔力を持っているとか、凄く綺麗なお人だとか……」

アキは真剣な瞳でそう言った。闇の中でも、声色からそれを感じることが出来る。アオイは額を押さえた。協会で働く者達のどれくらいが、そんなものに傾倒しているのだろう。

「尊敬していました。ずっと前から。だから私、アオイ様の近くに仕えたかったんです」

「……じゃあ随分と失望したんじゃない？」

アオイは先程よりも弱い声音でそう言う。アキは首を振り、弁解するように答えた。

「そんなことはありません！アオイ様は……アオイ様は、私が思っていた以上に素晴らしい方だと思います」

向かい側にいる相手にそう力説する。アオイは話を聞いているの

か、いないのか、返答がなかった。アキは会話を黙殺されるような感覚に陥り、引くにひけなくなつて続けた。

「それに私、今ここにいることを後悔していません。『私自身が望んだこと』なんです」

「やめて」

アオイは微かにそう呟いた。アキの言葉の一つ一つが、真つ直ぐに伝わつてきて苦しい。記憶の中に消し去つた、言葉の欠片が甦つてくるかのように。

耳を覆つても浮かび上がる思い出が、胸を締め付ける。

「あの時召喚を使つたのは、本当にアオイ様を助けたい一心で……」

叫びたい衝動にかられた。アキと共にいると思ひ出したくもない記憶が甦ってくる。左手が無意識にシーツを掴んでいた。震えているのは怒りのせいだけではない。

アキはアオイの様子に気付いたのか、やっと主張するのを止めた。

「……あの、…アオイ様？」

アオイは返事をしなかった。

静まりかえつた室内で、アオイはただ耳を覆つた。小さく、そして微かに体が震えている。寒気ではなく、怒りでもなく、もっと別な理由で。

アオイの様子がはつきりと見えないためアキは困惑したように上半身を起こし、隣のベットを見つめた。アオイはこちらに背を向け、頭まで毛布を被る。大きく息を吸い込んだ。

「……私が旅をしている理由、分かる？」

絞り出すようにそう言う。息が吐き出されるたびに気が緩んで、今まで堰き止めていたものが溢れ出しそうになる。それを押さえ込んで、アオイは続けた。アキは口を挟まない。

「……ずっと前、まだ私が中央にいた頃、私を逃がそうとしてくれた協会員がいた」

夜の帳は静かで、外からは人の歩く足音すらしない。廊下は時折誰かの部屋の扉が閉まったりする音が響くけれど、それを除けばそこは静寂の空間。

アオイの声がやけにはっきりと響く。

「そいつは大して魔力が強いわけじゃなかった。それでも、色々と教えてくれた。剣の使い方とか、外の世界の事とか」

後になって考えると、あれは協会が教えようとしていたことではなかった。実際、協会側はGod's Seedにそういった知識を付けさせないようにしていたからだ。協会に牙をむくような、危険な思想は避け、ただ利用価値の高いGod's Seedとしての思想を教えようとしていた。

忌まわしい思い出。胸が苦しく感じるのは、それが嫌な思い出だけではないせいだと、心の何処かでそう思う。

「そいつが結果としてどうなったかは、分かるでしょう？」
「……はい」

暗闇に視線を向けながら、そこにその瞬間を思い描いた。あの時、目の前に闇が現れた。夜でも無ければ、薄暗い場所でもなかったというのに。

自分のすぐ傍で、人の命が消えるということ。そこまで思い出してアオイの言葉は途切れた。アキはその心情を悟り、ベッドに体を預けると呟いた。

「……アオイ様が誰にも触れようとしないのは、怖いからなんです
ね」

アキは目を閉じてみる。そこにも暗闇はあるけれど。

「誰にも触れたくないから、ずっと1人でいたいから、旅をしてた
んですね……」

2人は黙ったままだった。静寂が並んだベッドの間に割り込んできて、会話はそこで途切れた。アキはこちらに背を向けたままのアオイの姿を見ながら、呟く。

「……おやすみなさい」

第7章 闇を駈ける

秋の風は包み込むように体にまとわりつき、徐々に体温を奪っていく。少年は夜の街を駆けながら、そんなことを思っていた。吐き出す息が白く染まる。それでもここはまだマシな方だ。北の大陸はもう雪が降り始めている。

自分の靴音が静寂の中に微かに響いていた。表通りから裏路地に曲がると少年は更に速度を早める。真夜中に裏路地を歩くのは危険だと誰もが知っている。それにゴタゴタを起こすと後で何かと面倒になる。少年は細い道に入り、立ち塞がるかのような古い宿の扉を開いた。

建て付けの悪い音と共に、煙を顔にかけられる。

「ほー、ウチのシアンは夜遊びする歳になったかねー」
「げっ」

長髪の男が煙草を吸いながらシアンを見下す。そしてもう一度煙をシアンの方に吐き出す。

「げほっ、ちょ、おい、ヴァーミリオン！」
「そんなことしてると母さん悲しむぞ」

そんな事を言いながら、ヴァーミリオンと呼ばれた男は向こうにいた少女に声を投げる。シアンが視線を向けると、どうやら帰りを待っていたらしいシンの姿が見えた。苦笑しながらこっちに手を振っている。

「ルビー、『風』ん中で母さんつつつたら誰だ？」

「ガーネット」

「おーおー、じゃあガーネットに夜遊びの説教でも……」
「ヴァーミリオンっ！」

こちらを睨みつけるシアンに、ヴァーミリオンは余裕の笑みを浮かべながら両手を挙げた。シアンはさすがと依頼主の元へ歩み寄ると、手に持っていた袋を渡した。シンは不思議そうに中を覗く。袋の中には幾つかの果物の上に紙が入っていた。

ヴァーミリオンは言う。

「なんだ、シンが頼んだのか」

「ただのお遣いですよ」

ほら、とシンは果物だけを出してみせる。どうやら果物まで買ってきたのは仕入れてきた情報を隠すためらしい。やり方は子供らしいが、そこまで用心しておくようになったのはシアン成長かもしれない。

シンは微笑みながら言う。それにヴァーミリオンは笑い返した。

「ほー、坊ちゃんも人をパシリにするような人間になったか」

「いえいえ、タダで僕の言うこと聞いてくれるのはシアンくらいですから」

「……なんか馬鹿にされてる気がする」

そんな会話をしていると、上から誰かが降りてくる音が聞こえた。手すりに左手を預け、1人の女が微笑む。

「お帰りなさい、シアン」

髪は金髪に蒼い瞳をしている。背中まで伸びた髪を一つに纏めて、

彼女はそう言った。シアンは大人しく頷き、此方に歩いてくる姿を見上げて、ふと思う。

(……似てる気がする)

「夕食、食べてないでしょう？シアンの分も取っておいたから、部屋に持っていくわ」

「あ、どうも……」

何処が、と聞かれれば言葉に詰まる。雰囲気という言葉では片付けない。こちらはどちらかというと柔らかな空気が漂っている。

(……違う)

シアンは見上げたまま、そう思った。微笑みだ。今自分の目の前にいる彼女の方は笑っている顔が印象的なのだ。こちらをじっと見つめているシアンに彼女は首を傾げた。シアンの後ろからシンが声をかける。

「ミナ、君も早く眠った方がいい。明日は早いから」

「……そうね。それじゃあシアンの夕食を部屋に運んだら、私も休むことにする」

部屋に案内するよ、とシンが背中を押した。シアンは首を傾げながら、先程ミナが降りてきた階段を登っていく。

真夜中ということもあって2階は灯りが殆ど無く、部屋から洩れる灯りが足下を照らしている。足を進めるたびに、木の板の軋む音が響いた。シアンは隣を歩くシンを見上げる。

「おい」

「なんだい？」

部屋はどうやら2階の奥らしい。一步步つ転む足音を聞きながら、シアンは言った。

「あの青髪のヤツ、なんなんだ？」

「何って？」

シンは迷うことなくそう聞き返してきた。ドアの鍵を開けながら、余裕の笑みを見せる。これ以上のことを聞いても、話してはくれないと悟ったシアンは大袈裟に溜息をついた。

建て付けの悪いドアを開くと、暖かい灯りが廊下に向かって射し込んできた。部屋の真ん中に設置された椅子に腰掛けると、シンは反対側の椅子に落ち着いたシアンに向かって微笑んだ。

「それにしてもこんなに早く情報をくれるとは思ってなかったよ」

手に持っていた袋を開け、折り畳まれた紙を広げるとシアンは唇を尖らせ、頬杖をついた。

「それで？……思い当たる何かがあるのかよ」

シンは息をついて紙を元に戻した。そして先程のシアンの様に頬杖をついて窓の方を見つめる。珍しく、その表情に笑みは無かった。

「その『何か』が無いことを祈ってたんだけどね……」

「悪いことか？」

「いや、僕にはなんとも言えない」

シンは目を細めて、遠くに視線を向けた。

「……多分、彼女は覚えていないだろうしね……」
「？」

シアンがその言葉の意味を問いつめようとしたとき、丁度ドアが開いた。そこには、先程下で何やらヴァーミリオンと戯れていたルビーとミナが夕食を持って立っていた。

ミナは室内を覗き込み、シンに問い掛ける。

「お取り込み中？」

「いや、世間話をしてただけだよ。……それじゃあ、僕はそろそろ」

「あつ、おい、ちよっ……」

シンはミナ達と入れ違いに廊下へと出ていく。引き留めるタイミングを失ったシアンにミナがくすりと微笑む。ルビーは首を傾げ、とりあえず手に持っていた夕食の皿をテーブルの上に置いた。

「シアン。食べないの？」

「………食べる」

仕方なさそうに遅い夕食を取り始めたシアンを見ながら、ルビーが反対側の椅子に座った。ミナはその様子を見つめ、優しく微笑んでいる。

窓の外はもう月が傾き始めている。ゆっくりと、朝が近づいてきていた。

第8章 忘却の中で

2階の廊下に射し込む光が眩しい。アオイは足早に廊下を歩きながら、自分の部屋の一つ前で足を止めた。朝食で両手が塞がっているために、ノックが出来ない。アオイは扉を足で軽く蹴った。

中からの反応は無い。昨夜の夕食時には返答があつたのだが、眠っているのだろうか。アオイはもう一度扉を蹴る。隣にいたミエルがアオイを見上げた。

「ちよつと、シヨウ。起きてる？」

しかし扉の向こうからは静寂しか返ってこない。アオイは顔を顰めた。もともと軍として生活してきたシヨウが、この物音に反応しないというのはおかしい。

一つしか原因は思い当たらない。アオイは片手で皿を押さえ、ドアを開けた。

部屋の中は朝だというのにカーテンが閉められていて、薄暗くなっていた。アオイはテーブルの上に朝食を置き、カーテンを開けた。朝の光が部屋の四方に広がってゆく。

「……シヨウ？」

ベッドに寝ていたシヨウは頭まで毛布を被っていた。毛布は呼吸が繰り返される度に上下に揺れている。ミエルはベッドに鼻を付け、困ったような鳴き声を挙げている。

「ちよつと、シヨウ？」

呼吸が荒い。それに気付いたアオイは、急いで毛布を剥がした。

昨夜夕食の有無を確認した後、誰もシヨウの様子を見に来てはいない。その時は頭痛もそれ程酷くはなかったのだ。

シヨウはどうやらうなされているらしく、頭を押さえたまま息を荒くしていた。汗が服やバンダナに染みている。今日は気温が低い。汗が冷えてきたために頭まで毛布を被っていたのだろう。

呼びかけても気が付く気配の無いシヨウに、アオイはとりあえず朝食と共に持ってきたタオルに手を伸ばす。どうやら頭痛には波があるらしく、シヨウは何度か顔を顰めて時折唸り声をあげた。

アオイは顔の汗を拭こうと手を伸ばす。瞬間、手を掴まれた。

「……………!？」

「……………アオイ……………？」

虚ろな瞳がこちらに向けられる。急に腕を掴まれたことに驚いたアオイは慌てて手を引いた。そんなに強く掴まれたわけではなかったため、手はすぐに離れる。

「吃驚した……………せめて起きるんなら普通に起きてよ」

「……………頭痛い……………」

「頭痛でしょ。そんなに辛いなら薬飲めばいいのに……………ちょっと、バンダナ外して」

シヨウにバンダナを外させ、タオルを額の上に置いた。どうやら長い時間うなされていたらしく、声が掠れている。アオイは朝食と共に持ってきた水を飲ませる。

「……………薬は嫌なんだって」

「本当に、その好き嫌いやめたら？旅出来なくなったらどうするつもり？」

幾度となく繰り返してきた会話ではあったが、アオイは溜息をついた。病人相手に喧嘩を売っているわけではないが、本当にこのままでは旅に支障が出ると思う。

シヨウは顔を顰めると息を吐いた。どうしても嫌だという顔をしている。アオイはタオルを取り、シヨウを見下ろして言った。

「……分かった。ちょっと目瞑って」

シヨウは小さく首を傾げた。言われたとおりに目を瞑る。アオイは額の上に右手を当てた。右手からほんの僅かな蒼い光が輝き始めた。アオイの手が震えていることに気付いたシヨウは顔を顰める。

「アオイ……？」

「五月蠅い。雑念入ったら頭吹っ飛ばすからね」

ぶつきらばうにアオイはそう言った。昨夜アキと話していたことが気になっているわけではない。ただ自分の旅の為に、旅に遅れが出ないためにこうしているのだと心の中で何度も繰り返した。

あのアキとの会話も、認めたわけじゃない。自分はそんなに弱くはない。そしてそんなに綺麗な人間ではない。アオイの様子に気付いたのか、ミエルが足に擦り寄ってきた。

『時を刻む蝶が舞う 深淵の光なき森

言の葉知らぬ者達の 涙なき声の悲しき想い』

ゆつくりと、その旋律を紡ぎ出す。歌声に意識を傾ければ、雑念は消えていく。アオイが唄と魔法を組み合わせて使うのは、それが一番集中出来るからだ。いつからそうし始めたかは全く覚えていない。それでもこうしていると無心になれる。

『足枷の如く 闇は絡みつき 光は真とは 言えずとも
それ以外に縋るものはなく』

自分は人並み以上の魔力を持っているといつか誰かに言われた。
覚えている、ということは協会にいた頃だろう。強大な魔力を持っ
ているからこそ、その力を制限させられている。必要以上に魔力を
使えば翼が現れるのだ。何故そうされているのか、何故そうされた
のか、自分でも分からない。危険だからという為だけなのだろうか。

『墓標の刻んだ 記憶の坩堝
満ちた月光の 忘れ去られた命』

なら何故翼なのだろうか。昔幾人もの協会の人間に尋ねたことが
あったが、納得のいく返答が返ってきた試しはなかった。彼の人も、
分からないと首を振った。
考えてみれば分からないことばかりだ。

『足枷の如く 光は貫き 闇は偽とは 言えずとも
それ以外に求めるものはなく』

ミエルが足下に擦り寄り、アオイを見上げている。時折硝子窓が
秋風に揺れ、外からは木々のざわめきが聞こえる。街の朝市の喧噪、
そして遠くから聞こえてくる波の音。

アオイの歌声を初めて聞いた時と同じだと、シヨウは思った。

『たとえその姿が 忘却の彼方に 消え去ろうとも 一時の錯覚
だけが』

軀に残り 蝕み 廃れて それでもまだ 求め続けて』

右手が離される。燐光がふわりと舞い上がり、空気中に消えた。

先程まで意識を乗っ取っていた痛みが和らぐ。アオイの旋律は続く。

『声が姿がその思い出が 夢現と消えたとしても
幻想だけが 殻を叩いて 手を差しのべて
それでもまだ 求め続ける……』

透き通る歌声が耳に残る。それは快く響き続け、そしてふと風に流されるように消えた。アオイは一通り歌い終わると、こちらを見上げているミエルの頭を撫でた。

「……どう？」

シヨウの方を見ず問い掛ける。頭を撫でられているミエルは気持ちよさそうに目を細め、尻尾を振っていた。シヨウは我に返っていつの間にか頭痛が無くなっていることに驚く。上体を起こしても痛みは来ない。

「……治った」

「別に完治させたわけじゃないけど」

アオイは呆れたように即答する。水が欲しいというシヨウにもう一度コップを手渡すと小さく溜息をついた。近くにあった椅子を持つてくると説明する。

「私がしたのは一時的に痛みを抑えただけ。もちろん完治させるほどの治癒の能力は無いから」

「……麻酔みたいなもの、ってことか？」

「そんな感じ。で、一つ言わせてもらいたいんだけど……」

自分で拭け、とタオルを渡し、アオイはシヨウを見つめる。バン

ダナを外すと、額の端にあの奇妙な形をした跡が見えた。傷跡のようにも思えるが、アオイにはもっと別なもののような気がした。

「……その頭痛、頭の中からするんじゃない？ なくて額の跡からするんじゃない？」

「え……？」

「それにやつぱり……記憶喪失が絡んできると思うんだけど……」

詳しいことまでは判断出来ない。ただ一つだけ言えるのは、痛みが頭の中からきているものではないということだ。

アオイはシヨウの様子を見、コップに水が無くなったのを確認すると話題を変えた。

「……水、持ってくる」

シヨウは頷いてコップを渡す。アオイの発言については何も言い返さなかった。アオイ自身もそれ以上言うのを止めた。立ち上がり、扉を開ける。

「……あ、着替えしといった方がいいんじゃない？ 汗冷えたら風邪ひくだろうし」

「ああ、分かった」

部屋に残ったミエルは尻尾を振りながらシヨウを見ている。とりあえず魔力の効果は数日続くだろうが、その後は様子を見ながら生活させなければ。こうゆう時、ミエルの存在は助かる。

アオイは扉を閉め、廊下を歩き始めた。

コップの中で揺れる水面。昇り始めた太陽の光が廊下に射し込む。秋空の彼方を見つめると、その先には同じ蒼い色の水平線が見えた。窓を開ければ、潮風が吹き込んでくるだろう。アオイはふと足を止め、窓に手を付き外を見つめた。

まだシヨウも着替えている最中だろう。そう思いながらアオイは水平線を横切る船を眺めていた。そしてこんな風景を平和に見つめている自分に苦笑する。ここ数日色々な事がありすぎたのかもしれない。

まだ、考えることはある。不安や危険はつきないのだ。協会は何処からかアオイの後を追ってくるし、協会以外にも何かが近くを彷徨っている。

（それに……）

街で会ったあの人は誰なのだろうか。アオイは窓から手を離し、また廊下を歩き始める。ゆったりとした足音が響く。そして同時に奥の扉の一つが開いた。

「あ、ハル」

相手は部屋の中に一声かけ、扉を閉めた。そしてアオイの方に向き直り、こちらの方に歩み寄る。アオイがコップを手にしているのを見て言う。

「シヨウは？」

「ああ、一応痛みはひいたみたい」
「そうか」

ハルは一度シヨウの部屋の方へと視線を向けた。いつも通りの無表情のままに見えたが、アオイは首を傾げる。一瞬表情が曇ったように見えたのは気のせいだろうか。

「どうかした？」

ここ数ヶ月旅を共にして、何度かこの表情を見たことがある。それこそ他人には見分けられないような小さな感情の波ではあったが、ハルはこちらに視線を戻すと曖昧な返事を返した。

「……。いや、何でもない」

アオイの視線を振り切るように、ハルは言う。

「少し外に出てくる。必要なら薬を買ってこようか」
「え？……あ、薬……」

アオイは先程のことを思い出す。あの無意識の中での抵抗。はつきりとした確証があるわけではなかったが、あれはシヨウの記憶喪失が関係しているのではないかと思った。医者ではないからよくは理解出来ないけれど、あれは記憶の欠落からくる後遺症のようなものなのかもしれない。

口ごもるアオイにハルは訝しげな目を向けた。

「……ねえ、一つ聞きたいんだけど……記憶喪失からくる頭痛なら薬飲ませても意味無い？」

説明することは難しかったがアオイは先程のことを一つ一つ説明した。ハルが一番明確な答えを持っているだろうと思ったし、今までも彼は一番賢明な答えを返してきたと思う。しかし、この時のハルの答えは曖昧なものだった。

「…………どうだろうな…………」

切って捨てた発言ではなかった。ハルなりに考えた答えだということは伝わってはきたが、アオイは妙な違和感に顔を顰める。そしてまたあの表情が浮かんでいる。

「ハル、もう一つ聞くけど…………」

アオイははつきり視線をハルに向け、言った。カマを掛けるつもりでは無かったが、それでも後から考えればその言葉が合っているかもしれない。

「何を隠してるの？」

先程から視線を逸らしていることには気付いていた。無表情で分かりにくいのが、それでも数ヶ月一緒に旅をすれば、分かってくる。

睨むようなアオイの視線にハルは大きく溜息をついた。それでもアオイは怯まない。もとより、ハルが簡単に話してくれるとは思っていない。

「…………アオイには関係の無いことだ」

「！」

「それでも知りたいのか？」

責める口調ではなかったが、今度はアオイが視線を逸らす番だった。分が悪かったと唇を噛む。暫くアオイの様子を見つめていたハルは息を吐いてこう言った。

「……言い方が悪かった。謝ろう」

「……」

「ただ……そうだな、これは知らない方がいい」

誰も、と付け足し、ハルはアオイの隣を横切っていった。1人残されたアオイは何かを言おうと振り向いたが、結局言葉は出てこなかった。

服を着替え、ショウはベットを降りた。足下で尻尾を振るミエルの背中を撫でると、テーブルの上に置いてある朝食に口をつける。少々冷えてはいたが、とりあえず口にする位の食欲はあるようだった。頭痛はまるで嘘のようにひいていた。体が軽く感じる。ただ汗をかいたせいかな、無性に喉が渴いていた。外に視線を向けると、明るくなり始めた空が遙か高点で輝いていた。けれど外の風は冷たいのだろう。

『やっぱり……記憶喪失が絡んでるんだと思うんだけど……』

ふと先程のアオイの言葉を思い出して、シヨウは手を止めた。喉が渴いているせいか、上手く飲み込めなかった。視線を彷徨わせていると、ミエルがこちらに何かを求めるように目を輝かせている。シヨウは苦笑し、残っているパンをミエルに分け与えた。

「……記憶、か……」

幸せそうにパンを食べるミエルはこちらの様子に気付かない。左右に振っている尻尾が感情を表している。

その様子を暫く眺めていると、ドアの向こうからノック音が聞こえた。向こうからアオイの声がする。

「シヨウ、開けてもいい？」

「ああ」

コップを持ったアオイは扉を開けるとパンを夢中で頬張っているミエルの姿に呆れたような表情をした。シヨウにコップを押しつけ、ミエルの耳を軽く引つ張った。

「……少し見なかった間に餌付けされたんじゃない？ミエル」

ちなみに耳を引つ張られるのはミエルが一番嫌がる行為だ。アオイは口元を引きつらせた。

「昔は私の手からでも食べなかったクセに」

頭を振ってアオイの手から逃れようとするミエル。その様子を見ながら、シヨウは笑った。

「乱暴な主人だな、ミエル」

「誰が。だいたい、私は主人じゃないし」

アオイに苛められたためにすっかり怯えきったミエルはシヨウの足下に逃げた。アオイは溜息をついて開いている椅子に腰掛ける。先程持ってきた食事に目をやると半分は食べたあとがあった。とりあえず、食欲があれば大丈夫だろう。アオイは水に口をつけるシヨウの様子を見ながらテーブルに頬杖をついた。

「それでも昔は少しは凶暴で、躰るの大変だったんだから。小さいクセに餌は食べないし」

「へえ……。それじゃあ主人は誰だったんだ？」

何気ない返答だったが、アオイはふと顔を背けた。そして呟く。

「……中央の協会員。とりあえず他の協会員よりまともで……あの頃は本当に、誰とも喋らなかったから、ミエルとそいつが話相手だったかな」

部屋の窓からは外の通りの喧噪が聞こえてくる。街並みを見つめながら、アオイの目は遠くを見ていた。そして視線をミエルに戻す。

「あの頃のミエルは全然言うこと聞かなかった。吠えるし、噛むし、人のベットで寝るし」

足下で怯えているミエルの背を撫でながら、シヨウはふと首を傾げた。アオイとミエルは仲が良い。それこそ、自分達と会うまではずっと共に旅をしてきたのだ。

「なあ、アオイは一体どれくらい前から協会にいたんだ？」

突然の質問にアオイは面食らったようだった。何か考えるような表情をしながら答える。あまりはつきりとは分からないらしく、右手で何かを数えていた。

「たしか中央に入ったのが8歳で、その前が北東支部だったから……多分4、5歳くらい」

「その前は？」

「その前……ああ、たしか東大陸で生活してたって聞いたけど。はつきりとは覚えてない。家族がいたような気はするけど、顔も覚えてないし」

そう答えながらも、アオイはまだ何かを数えていた。淡々と答えるアオイに、シヨウは溜息をついた。

「……普通、女の子ってそうゆうの寂しがるもんだろ？」

「そうゆうシヨウは寂しいわけ？家族のこと覚えて無くて？」

にっこりと表面上だけの笑顔を浮かべてアオイはそう言い返した。シヨウは引きつった笑みを浮かべつつ、それを受け流す。

「……誰が、俺って言った？」

「そう聞こえたんだけどね、ミエル。まあ、そこは聞かなかったことにしてあげるとして」

反論の声をあげるシヨウを無視して、アオイはミエルを呼んだ。背中を撫でてやると安心したようで、尻尾を振っている。

「シヨウはいつから記憶が無いの？ああ、頭痛くなるならいいけど」

もう一度魔力を使うのは面倒だし、とアオイは言う。シヨウは大

袈裟に溜息をついた。朝食を食べ終わると、皿を重ねながら一つ一つを思い出すように話し始めた。

「いつからって言われるとな……ああ、覚えているのは雨の日だったと思う。一番最初の記憶っていうとやっぱりそれなんだろうな……」

始まりは雨音。それも煩わしいほどに降り注ぐ夏の雨。遠雷が轟くのを聞きながら、ふと自分がずぶぬれだったことに気付いた。手を引く大人を見上げ、辺りを見回すが、そのどちらにも見覚えはない。困惑というほど頭の中は混乱していなかった。

水を吸って重くなったバンドナが下がってくる。それをもう片方の手で何度も直しながら、少年は連れて行かれるままに何処かの建物に足を踏み入れた。

扉の閉まる音がやけに大きく響く。少年は鍵をかけている男を見つめていた。

「大丈夫だ、ここは殆ど人の出入りはない」

鍵がかかったことを確認すると男はその奥への扉を開いた。向こうには廊下が続き、奥に階段が見える。廊下の扉の一つに表札がかかっていた。よくは読めなかったが、とりあえずそれがこの男の名

前なのだと悟った。

その更に中へと入る。そこは質素な部屋で、どうやら男の私室のようだった。男はクローゼットを開けるとその中からタオルを取りだし、少年の方へと投げた。少年はそれを受け取ると、とりあえず頭を拭く。

男は適当に取り出した服を目の前に置いた。そして改めて少年を見つめる。

「どうしてここに来た」

前後を確認していた少年は首を傾げた。服を被りながら言う。少年の金色の髪から雨水が滴り落ちた。

「……知らない」

「知らない？ 此処に來いと言われたわけじゃないのか？」

「……知らない」

自分のことは自分で出来るらしく、少年は着替えをすると服をたたみ始めた。男は先程の少年の返答に顔を顰める。この時点で、彼の嫌な予感は的中していた。

「……お前、俺を覚えているか？」

「……………」

少年はせつせと畳んでいた手を止め、男を見上げる。下がってきたバンドナを直しながら、首を左右に振った。

「……知らない」

そう答えると少年はまた作業を続ける。予測出来た答えだと知り

ながらも、男は溜息をつくしか無かった。少年はそんな様子に気付かず、体に合わない大きめの服と悪戦苦闘している。

「……自分の名前を覚えているか？」

やっと袖を通し終え、無理矢理捲ると少年はもう一度顔を上げた。

「……シヨウ」

「下の名前は？」

少年は言葉に詰まったような素振りを見せた。足下を見つめて、そしてやっと口にする。

「レイン」

その答えに男はもう一度溜息をついた。少年に後ろを向かせ、バングナを結び直してやる。少年は暴れることもなく、部屋の隅々を見つめていた。結び終わったのを確認すると、少年は窓へと近づいていった。背伸びをして外へと視線を向ける。

男は椅子に腰かけ、少年を見つめた。

「もう一度聞く。お前は自分の故郷を、覚えているか？」

振り返らず、少年は首を横に振った。

「知らない」

「……」

男は立ち上がると、窓へと歩み寄った。少年は外へと視線を向けたまま、動こうとしない。流れる雨音は単調で、そして冷たく、耳

の奥を擦る。鉛色の空は時折閃光を放った。

少年に恐がる様子はなかった。男は続ける。

「此処は軍の基地だ。何を思って此処に来たのかは知らないが、此処にはいない方がいいだろう」

少年は男を見上げ、首を横に振った。その目は子供とは思えないほど、力の無い瞳をしていた。

「此処にいたいのか？」

「……うん」

その瞳を鉛色の空に向ける。

「ここに、いなきやいけないんだ」

雷鳴が轟く。男はもう一度少年を見つめ、頭を抑えて溜息をついた。その両肩を掴むと、視線の高さを同じにして、強い視線を向ける。

「なら、一つだけ約束しろ。そのバンダナを、人前で外すな」

「……？」

「いいか。もし約束を違えたりしたときは、ここから追い出す」

少年は右手を額に当てて暫く考えこんでいた。意味が分からない、ということなのだろう。男自身も、この約束が他者から見れば奇妙なものであることを自覚していた。それでも、この少年がこの場所にいたいと言うのなら守らなくてはならない約束なのだ。

少年は暫くして頷いた。男はそれを確認すると立ち上がり、部屋のドアを開ける。

「話をしてくる。ただし、軍に入れるとは考えないことだ。入隊審査は厳しいからな」

廊下へ出ようとする、少年が駆け寄ってきて裾を掴んだ。見上げて、首を傾げる。

「……名前」

「ケイトス・リストバート。好きなように呼ぶといい」

裾を離し、少年が頷くのを確認すると、男はドアを閉めた。雨音が壁を貫いて響いてくる。少年はもう一度視線を窓へと向けると、床に座り込んだ。ベッドの足に背を持たれると、急に睡魔が襲ってきた。

そのときやっと、少年は自分が疲れていたことを知った。

「ケイトス、ケイトス、これ見ろよ！」

ノックも無く無遠慮に扉が開いた。ケイトスは頭を抑えて溜息をつく。眠気覚ましにとコーヒーを飲んでいたが、必要無かったかもしれない。ケイトスは相手を見やった。

あれから数年、調理場の手伝いとして軍に置いてもらうことを許

されたシヨウは宿舍は違えどケイトスとの約束を守っていたようだった。時折仕事が無い日に部屋へと遊びにくる。

意外だったのは、環境に慣れるのが早かったことだ。何人かの友人も出来、初めて彼と出逢った頃よりも感情の起伏がある。あの時の目がまるで嘘のようだ、ケイトスは思った。

「……なんだ」

シヨウは不敵な笑みを浮かべると、後ろ手に隠していた紙をケイトスの目前に差し出した。ケイトスは溜息をつき、その紙を受け取ると書かれた文字の羅列に目を通し始めた。これは、何処かで見ただことがある。

シヨウは笑った。

「どうしても、って頭下げたらくれたんだ」

それは入隊の志願書だった。名前を書く欄にはもう『シヨウ・レイン』の文字が入っている。その下の保証人の欄は空欄になっていた。ケイトスは顔を顰める。

「……入隊出来るのは訓練を受けた人間だけだ。分かってるのか？」
「訓練受けた人間か、偉い人から推薦があればいいんだろ？」

ケイトスは軍でも上の方の位にある。前線に立つことは無いが、城に軍の様子を報告したりしているのをシヨウは知っていた。

「それに、お前は剣の扱い方を知らない。入隊審査は厳しいといつか言ったはずだが？」

「そこは教えて……くれない、かな」

睨まれ、シヨウは頬をかいた。そして頭を下げる。

「本当に悪いと思ってる。けど今回だけ、落ちたら諦めるから……」

今のシヨウの歳では入隊は難しい。13、14くらいで軍に入れた人間は殆どいないのだ。ケイトスは大きく息を吐き、仕方ないと呟いた。手元にあつた古い剣の一つを手にとると、シヨウの方へと投げる。

シヨウは慌てたようにそれを受け取ると、ケイトスを見上げた。

「外に出ろ。扱い方を教えてやる」

「本当に!？」

「特別に厳しく指導してやろう」

「もしかして休みを潰したこと怒ってない、よな？」

無言のまま廊下へ出るケイトスの後をシヨウは青い顔をして追いかけていった。

「で、受かったの？」

話を区切り水を飲むシヨウにアオイは問い掛けた。いつの間にかミエルはアオイの足下で眠っている。昼間が近づくにつれて外の喧

噪は

更に増していたが、秋風の吹き付ける音が喧噪を吹き消すように強く響いている。

アオイの問い掛けにシヨウは自慢気に笑った。

「もちろん」

「どうせギリギリだったんじゃないの？」

白けた目で見つめるアオイにシヨウは軽く両手をあげた。

「……その通り」

「そんな事だろうと思った」

呆れたような顔をしてアオイは言った。それでも、軍の中の話と
いうのはあまり聞いたことがないので、会話を続けることにした。

「それじゃあ、もし落ちてたら？どうなってたと思う？」

「皿洗いからもう少しマシな作業に昇格してた」

「まあ、そんなところかもしれないけど。想像つかない」

シヨウは苦笑した。どうやら何人か同じ事を言われたことがあるらしい。アオイはシヨウの話を思い返ししながら、何度か疑問に思ったことを口に出してみた。

「そういえば、さっき話を聞いてて思ったんだけど、そのケイトス
って人は城に出入りしてたんでしょ？」

「ああ、定期的に報告とか色々してたけど」

「城って言ったらティスニーの方でしょ？ハルも知ってる？」

アオイは先程のハルの会話を思い返した。ハルは何かを隠してい

る。それは多分シヨウの事なのではないだろうか。そう考えると嫌な予感がした。ハルの隠している何かが、シヨウの記憶に関することだったとしたら。

一方急にハルの話題を出されたシヨウは困惑しつつも頷いた。

「多分そうじゃないか？」

「……やっぱり……」

呟くと、アオイは何か違和感を感じた。ハルは確かにシヨウのことを以前から知っていた。多分、視察か何かで知ったのだろう。けれど、それ以上のことをどうやって知ることが出来たのか。

アオイは先程のことをシヨウに言おうかと口を開いた。しかし先程のハルの言葉を思い出し、大きく息をつく。アオイは話題を元に戻した。

「……それで？その審査、ある程度努力したんでしょ？」

「ああ、一応。たしかあの時は……」

シヨウの話に適当に相槌をうちながら、アオイはふと視線を外へと向けた。木枯らしに窓硝子が小さく揺れる。きっと自分がこんなことを考えるのは、今が平和なせいなのだろうとアオイは思った。考えてみると、こんなに平和な日々は今まで殆ど無かったかもしれない。

『アオイには関係の無いことだ』

ふともう一度ハルの言葉を思い出す。シヨウに気付かれないよう小さく息を吐くと、アオイは軽く頭を抑えた。いつの間にか外の太陽は上へ上へと昇っていた。外の喧噪は段々と大きくなりつつある。

第8章 赤い月の下

山道を抜けると、凹凸のないまっさらな大地が姿を現した。街から平野を貫く形で伸びている道がその彼方まで続いていく。夏ならば緑の草原がその身を揺すり、清風を起こすのだろうが、秋から冬への変わり目である今の季節では、吹きさらしの風が辛い場所でもある。

「うわ、寒い……」

どちらかというと南の生まれのリヨウにとっては、この寒さは応える。寒気を覚えるような服装はしていないつもりだが、それでも冷気は袖口や足下から上ってくる。

リヨウは腕をさすった。

「大丈夫ですか？」

丁度後方を歩いていたアキがリヨウの呟きに答えた。アキはさほど寒さが気にならないらしく、先程からハルの持つている地図を覗き込んだり、病み上がりのショウに気を配ったりしている。

リヨウは曖昧に笑う。

「うーん……多分、大丈夫だと思う……」

ここで風邪をひいたとしても、この平原は長い。熱を出したまま、外で野宿ということだけはどうしても避けたい。そんな思いも込めて、リヨウは言った。

アキは無理しないで下さいと言い、ふと思い出したように後ろの方を振り返った。リヨウもアキの視線を追って後方に目をやる。4人から少し間を空けて歩くアオイの姿が見えた。

「アオイ、疲れたのかな」

アオイの歩く速さに合わせて、ミエルが横を歩いている。疲れている様子は無いけれど、4人との距離がどんどん離れていくような気がする。

そんなアオイを見つめながら、アキは呟いた。

「なんだか、変ですよ」

「変？」

アキはリヨウの方に視線を向け、首を傾げた。

「アオイ様のことを全部分かってるわけじゃないんですけど、なんか色々考えてるような感じがします」

「色々？」

「それに、この間も……知らない人について行ってしまったじゃないですか」

まるで誘拐されそうになったというような言い方だったが、外れているわけではない。あの時のアオイの様子は確かに変だった。アオイが簡単に人についていくような性格ではないとアキも分かっている。

青い髪が風になびくのを片手で押さえ、アオイはゆっくりと歩みを進める。それでも距離はどんどん開いていつて、いつか見えなくなってしまうような気がする。

たとえば、あちら側から自分達の姿が見えなくなったとしても、追

にかけてこないのかもしれない。

「私ってお節介なんでしょうか……？」

ふとアキは溜息と共にそう呟いた。あの夜、アオイと話したことは二度と話題には昇らなかった。

アキの言葉に、リヨウは地面へと視線を落とす。

「俺も『お節介』だから、分かんない」

アオイとの距離が離れていることに気付いたハルが休憩を提案した。草原の中に点在する小さな林の前で足を止めると、アキはもう一度アオイの方を振り返った。ミエルがリヨウの方へと駆け寄ってくる。

アオイはその様子を見つめながら、ゆっくりと4人のもとへと歩んできた。

「アオイ、疲れた？」

ミエルの頭を撫で、リヨウがそう聞くとアオイは首を左右に振った。

「そんなに疲れてはいないけど」

「……そっか。あ、水もあるから、喉乾いたら言ってくれば渡すよ」

「ああ、うん」

アオイは曖昧な返事を返すと、機嫌の良いミエルの頭を撫でた。そしてハルの方に歩み寄り、何かを話している。どうやら自分が前を歩くとやっているようだった。

アキはアオイの様子に、悲しそうに目を伏せる。

「……やっぱりアオイ様は、1人でいたいんでしょうか……」
「え……？」

アキの言葉はリヨウにしか聞こえなかったようだった。なんでもないです、と首を振り、アキは先を歩き始めたアオイの背中を見つめていた。

冬が近づくにつれ、夜の訪れは早くなってきた。平坦な道はまだ先まで続いているが、点在する林や森も多くなってきた。丘陵を足で感じながら、アオイは足を止めた。

完全に日が落ち、辺りも暗くなった。先を歩いていたアオイは、後方からリヨウ達の声聞いて足を止めた。どうやら、昼の休憩と同じように林の近くで休むらしい。

「この平野、いつになったら抜けられるの？」

アオイはハルの地図を眺めながら、そんなことを呟いた。一日中歩き通したせいで、疲労が溜まっている。アキも同じようで、座り込んですぐに眠いと言って寝てしまった。

「明日には抜けられるだろう。その後は船だ」

ハルの言葉に、リヨウが振り向いた。青い顔で、アオイの持っている地図を覗き込む。たしかに、この平野の先には大陸同士を繋ぐ大海が描かれている。

「……また船？」

「そうなるな」

抗議の声を上げているリヨウを無視してハルはアオイの方に視線を向けた。

「それで、アオイはどうする？」

「……私？」

話を振られるとは思っていなかった。アオイはそう言いかけ、その言葉を無理矢理呑み込んだ。

「ああ、船に乗る話……」

アオイはそう口の中で繰り返しながら、こちらの焦りがリヨウやシヨウ達に分からないように平然を装った。大して気にしている様子は無いが、心の何処かで冷や汗をかいている自分がいた。

「……そうだ、シヨウは？どうするわけ？」

アオイは振り向き、ミエルにちよっかいを出しているシヨウに声を掛けた。顔を上げたシヨウは考えるまでもなく言い返す。

「戻るつもりもないし、西の方は一度行ってみたいと思ってたから

な」

「計画性の無い旅……」

「それ、お前が言えることか？」

「それは……」

言ってからしまった、とアオイは思った。その後が続く言葉は、いくら考えを巡らせても浮かんでこない。真っ白になった頭の中は答えを出してくれなかった。

「……それは……」

旅に出たのは、協会から逃れたかった為。そして追われる今、協会の支部の無い西大陸へと行くことに抵抗は無い。

眠ってしまったアキを覗いて、3人の目がこちらを見ている。アオイは俯いた。自分は一体、どこまで彼等と共に旅をするのだろうか。そんな理由の分からない思いにかられ、頭の中に昨日のアキの言葉が浮かんだ。

『誰にも触れたくないから、ずっと1人で旅をしてきたんですね』

「……ハル、もう少しだけ考えさせてくれる？」

答えを待っていたリヨウがアオイの言葉に反応した。何かを言うおうとするが、ハルがそれを遮る。

「……ああ、分かった」

「なるべく、早く決めるから」

アオイはそう言うと、ミエルを傍へと呼んだ。こちらの状態に気付いたのか、近寄ってきたミエルはアオイの顔を窺って小さく鳴

いた。そしてアオイの隣に寄り添うように眠りにつく。
膝を抱えて黙り込んだアオイはミエルの温もりを感じながらも、
眠りにつくことは出来なかった。

月が傾き始めた真夜中。障害物の無い平野に風が踊る。草原を撫でるように駆け回り、強く、弱く、時に音を立てて、静寂の夜に異様な夜想曲が鳴り響いている。

草をかき分けて、アオイは林から出た。空にはやや朱の入った月が浮かんでいる。それは赤にも似ている色だった。初めて見た赤い月にアオイは言葉を発することもなく見入る。

「……赤い」

完全とは言えない色ではあったが、アオイはそう呟いた。呟いた言葉は白く変わり闇の中に溶けていく。澄んだ夜空から降り注ぐ光はやはり白に近かった。

風の音が耳元を撫ってゆく。アオイは髪をかきあげると、小さく溜息をついた。後ろの方から足音がしてくる。苦々しい気分を吐き出すように長く息をつくとき、アオイはそちらを振り向いた。

「あ……」

林から出てきたアキが驚いたような表情を浮かべていた。振り返ったアオイに話しかけるタイミングを失ってしまったようで、視線を逸らして話題を探しているようだった。

「あ、あの……赤い月、初めてですか？」

沈黙の中に身を置くことは避けたいらしく、アキはそう言った。アオイは少々顔を顰めたがまた夜空に視線を戻し、赤い月を見上げた。

「初めて見た」

「この時期にはよく月が赤く染まったように見えるんです」

アキはアオイの隣まで歩み寄ると、ほっとしたようにそう答えた。そしてアオイと同じように視線を天空へと向け、月を眺める。

「……あの、さっきの話のことなんですけど……」

「……起きてたの？」

ハル達との会話の時、アキは殆ど眠っているようだった。アオイがそれを言っと、アキは頬をかきながら答える。

「いえ、まだ完全に寝てしまう前だったので……」

とりあえずハルやアオイの会話は大体聞こえていたらしい。アオイは溜息をつく、アキの方に視線を向けた。それで？と呟き、次に来るであろう言葉を予想する。それは容易に想像出来るものだった。

アキもアオイが何を考えているかは予想していた。そして、自分の言葉も彼女には読めているだろうということも。それでも、アキ

は言った。

「……一緒に行きませんか？」

風が耳元を撫り、肌寒さを感じさせる。アオイは髪を耳にかけ、少々の間を置いて答えた。

「私としては次の街で別れようかと思っていたんだけど」

「……でも、危険だと思います。1人じゃ……」

「私は今までそうしてきた。これからだって……」

1人で、と呟くと体の奥まで葉擦れの音が響いた。アキはアオイの表情を見つめ、月に照らされた大地に視線を動かした。

「1人は……駄目です」

アキの小さな呟きはアオイにははつきりと聞き取れなかった。聞き返す仕草をしたアオイにアキは語調を強めた。

「1人に慣れている人なんていません。誰だって、誰かに頼って生きていかなきゃいけない時だってあります」

「それは……」

「アオイ様は頼る人達がいるじゃないですか」

珍しく声を荒げたアキにアオイは驚く。見るとアキは顔を隠すように逸らして、言葉を続けた。いつの間にか、風は止み、しんとした静けさだけが辺りを包んでいる。

赤い月だけが変わらず大地を照らしていた。

「拒否されたことなんて無いじゃないですか……」

息が白く染まって消えていった。アキは目を強く擦るとアオイの方を振り向いた。

「それなのに、どうして1人になりたいんですか……？」

「それは……」

それは、と呟きながら自分の中に答えがないことにアオイは気付いていた。否、答えは何処かにあるのかもしれないが、それは言葉に出来ないものなのだ知っている。沈黙の視線にアオイは苦しさを感じた。

「……」

アオイの様子を見つめていたアキが口を開いた。

「……1人は、寂しいです。そんな気持ち、誰にもなって欲しくないとと思うんです」

アキはそう言うつと林の方へと足を向けた。戻っていく姿を見送ることもなく、アオイは空の向こうを見つめていた。ふと、風が駆け抜けていく。

『誰かを信じることは難しいことだけれど……』

風の奥に、いつかの言葉を思い出す。目を覚ましたらしいミエルがアキと入れ違いにこちらへ向かって駆け寄ってきた。こちらを見上げるミエルの頭を撫でると、アオイは座り込んでその背に手を回す。

『1人になれるほど強くないんだ、僕も君も』

多くの言葉。記憶の渦の中に消えてしまった言葉もある。それでもミエルを抱きしめっているとあの頃の思い出が鮮明に思い出された。

第8章 差し伸べる手

昔の記憶は殆ど覚えていない。それ程協会の地下は暗く、そして協会の人間はアオイにとって意味の無いものだ。食事運び、本運び、限られた言葉と知識を教え、そして自分の居場所を制限する者達。必要最低限の会話しか交わさない、そんな日々が数年続いていた。

「君に必要なものをあげようか」

先日新しい世話係として紹介を受けた男はそんなことを言った。まだ幼いアオイは一度男の方に視線を向けただけで返事もせず、読んでいた本に視線を戻す。肩まで伸びた髪を耳にかけ、今よりも幾らか幼い顔つきをしている。

一方、新顔の協会員は眼鏡に、中途半端な長さの髪をしていた。歳はアオイの2倍くらいだろう。だが彼は今までアオイの世話をしてきた生真面目な協会員達とは違い、だらしないような印象があった。つい先刻も、この部屋の前でお偉い方に服そうや身だしなみについて注意を受けていたらしい。中で本を読んでいたアオイには筒抜けだった。

男はアオイの様子に苦笑し、手に持っていた箱を目の前に置いた。

「とりあえずちゃんとしつけられているから、気付かれないと思うけど」

テーブルの上に置かれた箱が一瞬揺れた。アオイは視線を上げ、箱を見つめる。するともう一度箱が大きく揺れ、その振動で中に入っていた何かが目の前に姿を現した。

思わず腰を浮かせたことで椅子が後ろに倒れ、その音にもう一度箱が反応を示した。アオイは男の方を睨みつける。

「何、これは」

「危ないものじゃないよ。そしてこれは君が今まで繰り返してきた実験や試験でもない」

男は眼鏡の奥で微笑み、箱を開ける。すると途端に箱は大きな音を立てて倒れた。一瞬身構えたアオイは中から出てきたものを見て脱力した。それはアオイにとっては見たことのない、見たことがあっても覚えていない、生き物だった。

「……何、これは」

先程よりも幾分か気の抜けたような声でアオイは呟いた。男は当然のことのように答える。

「犬だよ。覚えていないとしても当然だけど……本か何かで見ていないかな？」

「見ているは見えているけど」

真っ黒な毛皮の塊、とアオイは心の中で呟いた。

「もう少し大きなものじゃないの？」

手足は短く、真っ黒な瞳が見知らぬ空間にキョロキョロと動いている。男はテーブルの上から落ちそうになっている子犬を抱き上げ、箱を元に戻した。

「犬といっても純血ではないんだけどね。ちょっとした研究に使わ

れてた犬の子供」

男の言葉にアオイは納得した。紹介を受けたときに研究所にいたことがあると言っていたような気がする。興味が無いため殆ど話を聞いていなかったアオイだが、その部分だけはうつすらと記憶があった。

箱の中に子犬を戻すと、今度は箱が倒れないようにしっかりと押さえた。

「多分大人になれば今の君くらいの大きさになる。……どう？」

「……何？」

「さっき言っただろう、君に必要なものをあげるって」

アオイはもう一度子犬に視線を向けた。何が楽しいのか尻尾らしきものを振っている犬は、しきりに男の方を見つめている。アオイは必要な物、と心の中で繰り返し、そして溜息をついた。

「いらない」

「どうして？」

「私が望んでいないから」

アオイは距離を置くようにベットに腰を下ろした。そしてもう一度、男を睨みつけた。しかし相手は怯むこともなく、手にじゃれついてくる子犬の頭を撫でた。

「じゃあ君の望むことって何かな。神法協会の発展？信仰と国の結びつきの強化？それとも……君がここを抜け出すこと、かな？」

悪意も全く感じられないような声で、男はそう言った。アオイの反応は予測出来ているのか、男は子犬の遊び相手をしながら、世間

話でもするような声で語りかける。

「数日間、君のしてることを眺めてきたけど、君の望んでることは大体把握してと思う。例を挙げるとすれば……君は殆ど毎日、本を読んでいるよね」

「……それが？」

アオイは引きつった笑みを浮かべた。男は子犬に視線を向けたまま、話し続ける。

「君にとって本を読む理由は知識の会得だけじゃない。欲しいのは『外の世界の情報』」

「！」

「君って話せば話すほど、顔に出やすい性格なんだね」

男は苦笑し、箱ごと子犬を持ち上げるとベツトに座ったアオイの膝の上に乗せた。子犬の視線は男からアオイへと移り、それと同時に興味もアオイの方に向いたようで、こちらに向かってしきりに前足をつき出している。

「……何が言いたいわけ？」

アオイは冷たい目で男を見上げた。しかし男はいつも通りの笑みを浮かべて言う。

「これ以上何か言うと、君は怒るから言わないでおくよ。それにここで僕が言わなくても、いつかは分かるようになる。この子犬はその鍵みたいなものだよ。……いつかの君に、必要なもの」

協会員に無理矢理押しつけられた子犬を見つめて、アオイは途方に暮れた。彼が部屋を出た後、改めて箱を傍に引き寄せ、初めて見た生き物を観察してみる。

彼の言っていた通り、あまり吠えないように躑まられているようで、真っ黒な瞳をこちらに向け無邪気に尻尾を振っている。

「……何？」

言葉が通じないことは分かっていたが、アオイは改めてそう言わざるを得なかった。じつとこちらを見つめ、構って欲しそうに箱を揺らしている。アオイは溜息をつき、人差し指で子犬をつついてみる。

頭をつつかれた子犬は悪気もなくその指を口にくわえた。

「！」

驚いたアオイはすぐ指を引き抜いた。痛みは無かったが、噛まれるとは思っていなかった。アオイの行動に子犬も驚いたようだったが、またすぐ箱から前足を出して尻尾を振り出した。怒ろうと口を開いたアオイだったが、悪気の無い無垢な目を見ているうちに心苦しくなってきた。何故こんなにこの犬は自分に興味を示してくるのか、分らない。

きつとこの部屋に自分しかないせいだ、と自分に言い聞かせ、

アオイは箱のフタを手を取った。この目がいけないのだ。見ているからそうゆう気持ちになる。フタを完全に締めるまで、子犬はアオイを見つめていた。

箱が時々揺れる音も、しばらくすると気にならなくなった。扉から直接見えない場所にそれを隠し、アオイはベットに潜り込む。先程まで読んでいた本を枕元に置くと、アオイは灯りを消した。何も見えないほど暗闇と化した部屋はまるで、そこが何も無い世界のよう感じられた。何年も前からこの部屋で生活してきたが、それでもこの暗闇は未だ慣れない。

時折目がさえて眠れなくなることもあった。この暗闇はアオイにとって自分を拘束する鎖のようなものだった。これがある限り、ここから出ることは出来ないのだ。これがある限り、自分はこの孤立した空間に縛られ続けるのだ。

そして、この空間の中で自分は一人きりなのだと、シーツを握りしめ実感した。静寂が体に染みこむように、アオイは顔をベットに押しつけ、息を吐いた。口から出てこない嗚咽が、喉元に詰まっているようで苦しい。アオイは少しでも体を楽にしようと寝返りを打った。途端、手に何かが触る。

「!？」

跳ね起きたアオイは暗闇の中で目を凝らした。しかし相手の姿をとらえる前に、それは飛びかかってきた。さほど衝撃は無かったが、触れた瞬間、それが何なのか理解出来た。

子犬だ。

「……さっきあつちに置いたはず……」

そう考えても、今ここにいるのは紛れもなくあの子犬だ。もしかしたら気付かないうちに箱から出てきたのかもしれない。ベットの

隣は本が山積みになっていたし、駆け上ろうとすれば出来ないことはなかった。しきりに顔やら首やらを舐める子犬を引きはがすとアオイは溜息をついた。

どうやら離れる気はないらしく、しきりにアオイの傍へ寄ろうとしている。

「なんでそんなにくっついてくるの」

アオイは子犬に向かってそう言った。当然答えは返ってこなかったが、子犬はアオイの傍らにくと体を丸めた。どうやらここで寝る気らしい子犬にアオイは溜息をつく。

「……寝てるうちに潰しちゃっても知らないから」

そう毒づくアオイはベッドに横になった。子犬はアオイの傍で顔を舐め、同じように目を閉じる。余計なものが入り込んだせいで暖かくなったベッドの中は、先程より少しだけ、楽に寝付くことが出来た。

「随分と懐いてるんだね」

ベッドの上を占領している子犬を見た男は、苦笑しながらそう呟

いた。またいつもの通り本を読んでいたアオイは子犬の様子に大きな溜息をつき、ベットから引きずり下ろすのだが構ってもらえるものと勘違いした子犬は盛んにアオイや男にちょっかいを出し始める。男は子犬を抱き上げ、横に倒れていた箱の中に下ろした。

「ところで、名前は？」

「……名前？」

「そうだよ。君がアオイ・リィーヌと呼ばれてるように、この子にも名前をあげないと」

箱に視線を向けたアオイは丁度子犬と視線があった。子犬もしきりに黒い尻尾を振ってこちらを見ている。その様子を見つめていた男はテーブルの上に山積みになされた本の一つ一つを片付けながら言う。

「それじゃあ昨日から何て呼んでた？」

「犬」

「それは種類であつて、名前じゃないよ。言ってみれば君を人、と呼ぶようなものだから」

アオイはしばらく子犬と見つめ合い、諦めたように溜息をついた。

「ミエル」

「名前の由来、聞いてもいいかな？」

また本に手を伸ばしかけたアオイは、相手を見上げて言う。愛想の無い声色で、空中に名前を書き綴ってみせた。

「持ってきた人の名前を一字変えただけ。……悪い？」

「そんなことないよ。僕の名前覚えてくれてたことに少し驚いただ

け。もしかして、全部覚えてる？」

「『シエル・ラズファイル・アースメルティ』」

初めて顔を合わせたとき、アオイはこの名前をすぐ覚えた。下の名前はこの男の容貌に似合わず、有名な旧家だったからだ。

アオイはシエルが片付けていた本の一冊を手にとると、パラパラと捲り始める。

「よく覚えてたね」

「別に。アースメルティの名前は本でもよく見てたし」

アースメルティについての記述は実に簡単なものだった。ファアラと並ぶ、召喚士の一族。その記述を示すアオイに、シエルは苦笑してみせた。

「それは昔の話だよ。今はもう、殆どこの名前を知る人はいないし、僕もほんの少し力があるだけだから」

「じゃあなんで神法協会にいるの」

シエルを見上げて、アオイは呟いた。相手は視線を逸らすことのないまま、いつもと同じように笑ってみせる。今までアオイの部屋を出入りしていた人たちとは違う、畏怖の感情も何も感じ取れない表情だった。

「なんの為にあの犬を持ってきたの？」

いつのまにか箱から抜け出したミエルが足下に駆け寄ってきた。けれどアオイの視線は動かない。暫く沈黙が続いた。笑顔を向けるだけのシエルにアオイは深い溜息をつく。

呆れの表情を顔に出すアオイにシエルは言う。

「きつと分かるよ。それよりほら、遊びたがってる」
「遊んでる暇は……」

足下で尻尾を振っているミエルを抱き上げ、目の前に差し出される。

こちらをじっと見つめるミエルにアオイは頭を押さえて、それを受け取った。

吐いた息は白く染まり、闇の中に吸い込まれるように消えていった。赤い月は相変わらず鮮やかな色で夜空から顔を出している。風が先程より強くなったことと、時折雲が月の前を横切ることを除けば、先程と変わりのない風景。アオイはミエルの頭を撫で、浮かび上がってくる想い出の一つ一つに溜息をつく。戻らない時間を考えれば考えるほど、体の奥底に後悔が溜まっていく気がした。

「一人は寂しい、か……」

先程のアキの言葉を思い出してアオイはミエルと視線を合わせた。ミエルの瞳はあの頃となにも変わらない。自分は一体どれくらい変わったのだろう。

「ミエル。これからどうする？」

返事が返ってこないことを知りながら、アオイは呟いた。

朝がやってくるのは早かった。アキは眠い目を擦りながら、何度も欠伸をした。昨晚、感情的になりすぎたことを謝ろうと想ったが、声をかけるタイミングを逃し、結局不安で眠れないまま夜が明けてしまった。

アオイがもしこの旅から抜けると言ったら、そう思う度に何度も泣きそうになった。それでも自分にはアオイを止める資格はない。

「アオイ様、どうするんでしょうか……」

準備を整え歩き出すと、アオイはハルと何かを話し始めた。先を歩くアキは何度も後ろを振り返り、同じ言葉を何度も繰り返している。

横を歩いていたショウはアキの呟きを聞いて後ろを振り返った。

「本人次第だろうな……」

「でも」

アキがそう呟いたとき、前の方を歩いていたリョウが振り返った。

「アキ、そこ滑りやすくなつて…」

「え？……ひゃっ！」

泥濘に足を取られたアキは派手にバランスを崩した。傾斜していたために後ろに体が傾き、腰を打ってしまう。舗装されていない、雑草の生えた地面だったため、さほど痛みは無かったが、アキは自分の鈍さに溜息をついた。

前を歩いていたリヨウが戻ってくる。

「ごめん、言うの遅かった」

「いや、リヨウのせいじゃないです。私も考え事してて」

派手に転んだことに赤面していると、後ろを歩いていたアオイ達に気が付いたように歩み寄ってきた。

「何したの？」

「あ、いえ、ちょっと足を滑らせたみたいで……」

「そりゃ後ろ向いて歩いてればね」

アオイは呆れたようにそう言うと、右手を差し出した。アキは驚いたようにアオイと右手を見比べる。

「えっ？あ、あの……」

「何、いらなないならいいけど」

手を引こうとするアオイにアキは首を振って、右手を掴んだ。アオイはアキを立たせると足下の土を払ってやった。その様子を見つめていたアキは我に返り、慌てて言う。

「アオイ様、だ、大丈夫ですから本当にっ」

「……そのアオイ『様』っていうの、止めてくれない？ いい加減」

自分で土を払い始めたアキにアオイは言った。

「これからもそれを聞くとと思うとうんざりするんだけど」

「えっ……？」

顔を上げるアキにアオイは背を向けて先を歩き出した。ミエルが追いかけるように走り寄っていく。その様子を呆然と見つめていたアキの横で、シヨウが吹き出した。そしてリヨウも、その言葉の意味に気付いて笑い始める。ハルは呆れたように息をついて歩き始めた。

「え？」

一人取り残されたアキだけが、首を傾げる。晴れ渡った朝の光が、天空の遙か彼方から降り注いできた。

第9章 西へ

平原を抜けると、疎らだった森も徐々に増え始め、山も深くなっていた。地図によるとこの一帯には小さな山々が存在し、小さな山脈のようになっているらしい。そして、ここを抜ければ向こうには海が広がっている。大海を隔てた先には北大陸があるが、荒れやすい気候のせいで北へ行く船は出ていない。港の船はその殆どが西行きである。まだ山深い道の上からはその様子は見ることが出来ないが、時折吹く海側からの強い風が大海に近づいていることを知らせてくれる。

アキは道の向こうを見つめ、地図を持っているハルに問い掛けた。

「西大陸って遠いんですか？」

「航路で二日半。……近くはないだろうな」

航路、と聞いたりヨウが嫌そうな顔をする。船酔いしやすいために、船が大の苦手なのだ。上へ下へと繰り返される揺れは思い出すだけでも気持ち悪くなってくる。

その様子を見ていたシヨウは、口元を抑えて笑った。

「そんなに……？」

「ま、二日半の辛抱だな」

人の不幸を楽しんでいるシヨウにアオイは呆れかえったように言った。

「その前に、シヨウにはちゃんと頭痛薬を買ってきてもらってからね」

リヨウ以上に嫌な顔をしたシヨウにアオイは人差し指を突きつけた。シヨウは顔を顰めたが、すぐに聞こえないフリをしているようにアオイの話を聞き流し始める。

「この間は仕方がなかったから一時的に痛みを抑えるようにしたけど、もうそろそろ効果がきれてくる頃なんだし」

「あー、はいはい」

「だいたい、頭痛なんかで使い物にならなくなるといざというときに困るんだから……って、ちよつと、聞いてる？」

どうやら言ったことが右から左に抜けていつているらしいシヨウにアオイは拳を突き出しつつ、につこりと聞き返した。またいつものように喧嘩を始めそうな2人の様子に、リヨウが仲裁に入る。

「あ、アオイ、暴力はいけなと思うんだけど」

「なんか言った、リヨウ？」

「……なんでもない」

そんな様子を横目で眺めながら、アキはふと後ろを歩くハルに視線を移した。最初は地図を見ているように思っていたが、地図で隠すようにしてなにか別な紙を見つめている。

アキは首を傾げ、問い掛けた。

「何を見ているんですか？」

「……ああ、なんでもない」

アキが近づくとハルはすぐ紙を懷に仕舞い込んだ。内容は見るこ
とが出来なかったが、いくつかの文字が綴られていたのは辛うじて
理解できた。詳しく尋ねてみようかとアキは思ったが、なんとなく
はぐらかされてしまいそうなので止めた。頭の回転では、ハルには

敵わない。

先の方では三人がまた言い争いをしている。ミエルがアオイの後ろを歩き、時折こちらを振り返ったりしている。

「だいたい、シヨウが戦闘以外で役に立った覚えがある？リヨウ」

「えっ、それを俺に言われても」

「大いにある。なあ、リヨウ」

「えっ、た、多分」

間に挟まれたリヨウが返答に四苦八苦している。アキはそんな様子を見つめながら、声を抑えて笑った。

「なんだか、平和ですね」

魔物も現れず、誰にも干渉されることのない旅路。毎日が平和で、それでいて楽しい。

「このままずっと…このままだといいですね」

同意を求めようとハルの方を振り返る。当の本人は話を振られると思っていなかったのか、少々返答に戸惑ったようだった。アオイ達に視線を向け、喧嘩が始まりそんな気配を察して肩をすくめる。

しかしふと何かを思い出したように、ハルの視線が足下へと向けられた。

「……そうだな」

「……？」

影のある言い方にアキは首を傾げた。どうかしたのだろうか、尋ねようとした時、先を歩いていたアオイ達から声があがった。

「海」

アオイは足を止め、木々の間から覗いた眼下の大海を示した。追いついたアキが隣に立ち、潮風の匂いに深呼吸をする。

「アオイは海を見るのは初めてですか？」

「3回か4回くらいかな。船に乗ったときとか」

「じゃあ入ってみたことは無いんですね」

頷くアオイを確認して、アキは微笑んだ。二人の前を歩いていたリョウが振り返る。

「アキは？」

「私はありますよ。泳げますし」

「……泳げなさそうだけど」

アオイは顰め面をしながらそう呟く。リョウを見ると、困ったように頬をかいていた。アキは子供がよくそうするように頬を膨らませる。シヨウは隣を歩くミエルの頭を撫でながら、笑った。

「溺れてる図がぴったりくるしな」

「ちゃんと泳げます！だいたい泳げない人なんてそうそう……」

シヨウを見上げて一生懸命に主張するアキ。泳げない人間はそうそつけない、と言おうとして、何かに気付き口をつぐむ。

「……私泳げないんだけど」

アキが顔色を確認する前に、アオイが恨めしそうな顔をして呟い

た。アキがあわてて弁解の言葉を探す中、シヨウは面白いことを聞いたという表情を浮かべた。どうせからかわれるだろうと大きく息をついたアオイは、先手を打つ。

「泳げないというより泳いだことがないって意味だけど、分かっている？特にシヨウ」

「どっちにしても泳げないことに変わりはないってことだろ？」

「……街にいたらすぐに海に沈めてやるから覚悟しといて」

シヨウの襟首を掴んだアオイは、につこりと笑ってそう言った。シヨウは聞いているのかいないのか、巫山戯たように両手をあげている。ふとそんな2人の様子を見ていたアキは木々の間から海岸の風景を見つけ、アオイの肩を叩いた。

「あ、あちらの方がよく見えますよ！」

そちらの方へと駆けていくアキに後ろから制止の声があがる。

「ちょっとアキ、そっちにいくと……」

リヨウの言葉に振り向いた瞬間、アキの体が斜めに傾いた。アキが声を上げるより先にその姿が木々の奥へと消え、その向こうから何かが落ちる音が木霊した。それに気付いたアオイがアキの消えた場所へと駆け寄る。リヨウが頭を抑えて言った。

「……やと思った」

アキの姿が見えなくなった場所は、急な傾斜になっていてよく見ると下にはもう一つの道が存在していた。木の葉と土を払いながら起き上がったアキは自分の落ちた高さを再確認して声を上げる。

「あはは……… やっちゃんいました………」

「怪我は」

顔を出したアオイにアキが慌てたように言った。

「だ、大丈夫です。アオイ、あんまり乗り出すと落ちちゃいますよ
！！」

「大丈夫。これじゃ登ってはこれない、よね」

木々の少ない傾斜だったこともあり、登るには掴むものが少なすぎる。木の葉の多い、滑りやすい場所だったせいもあり、アキの体力で登るのは無理に等しかった。

あたりを見回していたアキは自分のいる道の先が開けていることに気付く。小波の音が響いている。

「あ、でもこの道も続いてるみたいですよ。もしかしたらどこかで繋がっているかもしれません」

「でも独りじゃ危ないよ」

木に手をかけ、下を覗いていたリョウがアキの方へと叫んだ。アオイはハルと共に地図の確認をする。下の道は街の近くまで繋がっているらしい。だが人の使わない道には魔物が多いのが普通だ。

アオイは立ち上がりスカートの土を払うと、振り返って言った。

「それじゃあ誰か一緒に………」

アキも召喚士ではあるが、誰かのサポート無しで出来ることは少ない。魔物に対しての恐怖感も一番強いのが彼女なのだ。

アオイは3人を見回して、少々考えた。そして言う。

「……私が行く」

二手に分かれるならば、シヨウか自分がアキについていったほうがいい。アオイは傾斜の緩い部分を見極め、飛び降りた。上の方から脳天気なシヨウの声がする。

「迷うなよー」

「迷いませんっ」

「……絶対沈めてやる」

第9章 協会員

日が傾き始めたのは、そんなやりとりをした後だった。木々の間から差し込む光がゆつくりと橙色へと変わり、2人の影以外はすべて夕陽に染まった。アオイは自分の影の歩みを見つめながら、ひたすら喋り続けるアキに相槌をうった。

ふと道の先を見つめていたアキがそちらを指差した。

「あ、砂浜ですよ、アオイ」

つられるように顔を上げると、道に沿うように寄せては返すオレンジ色の砂浜が見えた。少し先には小さな船着き場がある。漁船にしては少々大きめの船が波に揺れている。浅瀬に駆けだしていくアキとは対称的にアオイはその船の方を眺めていた。

船は数ヶ月前ティスニーで乗った船より一回り小さかった。それでも大型の類には入るのだろう、小さな船着き場に窮屈そうな揺れ方をしている。アオイはアキをおいて船着き場がよく見える場所まで近づいていった。浅瀬と船着き場までは少々距離があり、岩場を挟んで底が深くなっているようだった。

「古い形……」

船の底は長年海を漂っていたようにコケで汚れ、帆にも汚れが見られた。もう少し近づいて見てみるとアオイが近づいたとき、岩場で影が動いた。反射的にアオイは鞘から剣を抜く。

しかし相手は魔物ではなかった。

「……！」

驚いたように、あるいは怯えたように少女は足を止めた。10歳位だろうか、耳下から麦の穂のような茶髪を三つ編みにした女の子。アオイは緊張の糸が切れたように短く息を吐いた。そして少女の視線が剣に釘付けになっていることを知り、すぐにそれを鞘へと戻す。

「…………驚いた…………」

銀色の刃が見えなくなった途端に少女は我に返ったようにアオイの顔を見上げた。そしてアオイの青の髪に視線を向ける。

「お姉ちゃん、髪青いの？」

「？…………ああ、これ…………」

少女は茶よりも黒に近い瞳でアオイを見つめた。そしてにっこりと微笑むと岩場からアオイの方に飛び降りる。近くで見ると身長差がよく分かった。少女は砂浜にいるアキを指差し、言う。

「お姉ちゃん達、旅人？」

アオイは横目で波と戯れているアキを見、頷いた。

「そう。貴女はここに住んでるの？」

船着き場の奥には屋根がいくつか確認できた。小さな村なのかもしれない。少女はアオイの顔をじっと見つめ、首を横に振った。可愛らしい仕草で、片方の三つ編みをいじりながら話し続ける。

「えっとね、ルビーお留守番なの」

「留守番…………？誰か待ってるの？」

「うん。お兄ちゃんとお姉ちゃんとローズとシアンと……あ、シアンとローズはね、ご飯の買い出しなの。みんなの晩ご飯買ってくるの」

頷きながら、アオイは内心疑問に思った。ルビーにローズにシアン。色の種類を名前として付けるということは聞いたことがない。それとも自分が知らないだけか。ルビーはアオイを見上げ、また可愛らしく笑って見せた。

「港に行ってくるって言ってたの。あっちから来るはずなの」

ルビーの指差した先は、先程の道の向こうだった。やはりこの道は港まで繋がっているのだと確信する。アオイはアキを呼ぶ。日が陰り始め、夕陽の色は一層深く、美しく照らし出された。白波さえも染まってしまうような風景。

「お姉ちゃん達、行っちゃうの？」

「うん。留守番、気をつけて」

子供の扱いを知らないアオイだったが、無意識にルビーの頭を撫でていた。ルビーは嬉しそうに笑って、岩場へと走り出す。向こうから元気よく手を振るルビーにアオイも手を振り返した。追いついてきたアキが首をかしげる。

歩き出そうとした瞬間、ルビーがすましたような顔で言った。

「協会には、気をつけてね」

「……え……？」

強い潮風が視界を阻んだ。思わず目を瞑り、ルビーの姿を確認しようとして目を開いた時には、ルビーの姿を確認することは出来なかった。

た。

「え……？」

どこか遠くで鳥の鳴き声がしている。小波の音が耳の最奥で揺れているような気がした。

潮騒の音から離れ、道はゆるやかな登りへ入った。時折路肩に案内板が現れ、街の方向を指し示している。アオイはその一つ一つを確認しながら、道の向こうに見えてきた街に視線を向けた。暮れかけた空は紺色に染まり、西の彼方に夕日の名残を感じる。アキは安心したようにアオイに笑いかけた。

「よかったですね、夜までに着くことができて」

「まあ、ね」

アオイは曖昧に言葉を返すと、何かを探すようにあたりを見回した。数時間前のあのルビーと名乗った少女の言葉が、何処かに引っかかっているような気がしてならない。アオイの様子にアキは首をかしげたが、すぐに街の方を指差した。

「宿、探しに行きませんか？アオイも少し疲れたんですよ」

「ああ……そうなのかもね……」

アキに手を引かれるままにアオイは街の中心部へと足を進める。港町というだけあって、所狭しと並んだレンガ造りの店や住まいが目に入る。ティスニーの港とは違って庶民的ではあるが、潮風に痛んだ外壁を見ていると少々古めかしい街の様に思ってしまう。

街道の所々で寄り道したがるアキを諭しながら、アオイは宿を指した。

「ねえ、アキ」

「なんですか？」

アキは肩までの髪を揺らしながら、アオイの後ろを追いかけてくる。スピードを緩めて歩くと、隣に並んだ。

「……ずっと思ってたんだけど、アキは私たちと一緒にいいの？」

ファアラという一族にとって神法協会の考え方は、絶対的なものであることに間違いない。アオイにとっては巻き込んだようなものでもある。行き場所も、帰る場所も無くなってしまった。

アキはアオイの顔を見つめ、微笑んだ。

「はい」

当然のこのように答えられ、アオイは足元に視線を向けながら言った。

「……なら、いいんだけど」

街道の向こう、丘の上に時計塔が見える。丘への階段を行き来す

る人の姿は少く、アオイとアキの足音だけが辺りに響いていた。振り返ると、東の海の向こうに月が輝いている。ふと足を止めたアオイに気づき、アキも立ち止まった。

「綺麗ですね、海に月が映って……」

「……」

闇に溶け入った小波に月が反射して白い筋が出来る。揺れ動く様がとても神秘的で、それでいて美しい。見入っているアキを横目にアオイが丘の上の方に視線を向けると、誰かが階段を下ってくる様子が見えた。月明かりの下、顔も表情もはっきりとは確認できないが、女だということは分かった。

隣をすれ違う一瞬、視線が絡まった。肌の白い、ほっそりとした体軀。顔つきは自分より幾分か年上に見える。白を基調とした服に、髪の色がよく映える。そしてその奥からのぞく色素の薄い茶の瞳。相手はアオイと目が合うと戸惑うでもなく微笑んだ。大人らしい、上品な微笑み。アオイは慌てて顔を隠すように頭を下げた。やっと彼女の存在に気づいたアキが人なつっこい笑顔を向ける。

「あ、こんばんは」

躊躇う様子も無く、金髪の女は挨拶を返した。

「こんばんは」

「綺麗な月ですね」

「ええ」

アオイは2人の会話を聞きながら、ゆっくりと階段を上り始めた。女は一瞬アオイの方に視線を向けたが、すぐ話し相手のアキに向きなあった。

「風が強すぎて、もあんな風景にはならないから……」

「そうなんですか？」

「ここは様々な風が吹く街なの。季節と気候の具合によって風の吹く方向が変わるから」

だからあの風景は今の時期だけね、と女は楽しそうに語る。アオイは盛り上がっている2人を尻目に階段を上っていく。女はアオイの足音を聞きながら、呟いた。

「そういえば……こんな歌もあつたかな？」

風が丘から海へと滑り降りるように通り過ぎていった。海に反射した白い光が炎のように揺らめく。風の強さに足を止めたアオイの元に、女の声が聞こえてきた。

『砂塵の向こうに見えしもの 逆さの塔か 逆さの城か

陽炎に隔てられた水源は砂地に消え 枯れた木々が砂煙に揺れ』

それは歌というよりただ歌詞を言葉にしているようだった。アオイは我に返ったように後ろを振り向いた。女はアオイと目が合うとまた品よく微笑んだ。

『誰が知ろうか、風の終わりを。砂にまみれた、千の物語を。』

一夜に消えた幻の、語られることなき表紙絵を』

女はゆつくりと歌詞を語る。どうやら一字一句欠けることなく覚えていたようで、危なげなく歌を詠み続けた。アオイは驚愕する。

(……!?)

『記憶を持つもの、皆死に逝き 存在さえも砂塵の中に
誰も知りえぬ物語、それを語るは 果てしなき風』

月夜の下、風に揺れる金色の髪。薄い茶の瞳がアオイの方を見つめている。アオイが問いかけようとした瞬間、アキの声が割って入った。

「綺麗な歌ですね」

「昔の、古い歌だけど……私の小さいころから好きな歌なの。よく母にせがんで歌ってもらったわ」

「……懐かしいね、楽譜が無い歌だから、君がバイオリンで一つ音をとりながら、手探りで楽譜を作ってた」

「!？」

急に背後から声が聞こえて、アオイが振り返った。階段の一段上に立っている男は、すぐにその存在を確認することができる。茶色の髪をひとつに纏めている。優男的な笑みは以前から何も変わっていない。

「シン！」

アオイが声を上げると、アキの表情が曇った。訝しげにこちらを見上げてくるアキにシンは微笑む。そして視線を女に移した。

「遅くなったね、ミナ」

「あんまり遅いから、置いていこうかと思ってたのに」

ミナと呼ばれた女は楽しそうに笑った。苦笑したシンはアオイの方に向き直る。アオイは心なし、後ろへと後ずさりをした。アキが

アオイのほうに駆け寄ってくる。

「久しぶり」

「……久しぶり。まさかここで会うとは思ってなかったけど」

アオイは後ろからしきりに服を引っ張るアキにうなづきながら、そう答えた。シンは微笑み、目を細めて呟いた。

「そうかな？僕は……この辺りの街にすれば会えると思ってた」

ふと雲が陰り、あたりが薄暗くなった。アオイは一步、片足を後ろへと移動させた。以前ほど、シンに対してあの曖昧な感覚は感じない。今は逆に、はつきりと分かることがある。彼らは、完全に安全と言える人間ではない。アオイはミナとシンを見返した。

「……何者？」

剣はいつでも抜ける。そして切り込める体勢にはいることもできる。シンは困ったような顔をしながら、ミナに目配せをした。

「僕は一般人だよ。幼馴染に協力してるだけ」

アオイは剣の塚に手をかけた。牽制の意味を込めて剣を引き抜き、眼前を掠める。しかしそれは途中で剣の金属音と共に止められた。

「！？」

光の膜が、シンをかばうように透明の結界を作った。見ると、シンの前に立ちはだかったミナが透明な石を片手に悲しそうな微笑を浮かべていた。石には複雑な形が掘り込まれている。

「神法協会の……っ!？」

アオイにも見覚えがある。いつか見た、協会の理念を司ったシンボル。寒気が体を駆け抜けけると同時に、剣を離した。

「ごめんなさい、傷つけるつもりはないの」

「私だって、簡単に捕まるつもりは……っ!！」

アオイはもう一度剣を振り下ろした。先程と違って、一瞬結界の現れる速度が遅くなる。アキは後ろからアオイに叫んだ。

「あれは協会の中でも最高クラスの人間しか持てない魔石……でも、あれを持つのは魔力の無い人間だけです!」

何度も剣が弾かれ、甲高い金属音が響き渡る。アオイは何度も剣を振り下ろしながら、アキの言葉に疑問を感じた。

(……協会の人間で、魔力が無い? そんなことあるの……?)

協会の上位の人間のほとんどは魔力に長けている。だからアキの一族のほとんどは中央の協会に集められるし、Seedとして選ばれた者も潜在的魔力のある人間だからこそ、中央の協会の中での暮らしを強いられた。

アオイは強固な結界の守りに一度剣を引いた。階段という特殊な場所のせいで積極的に切り込むこともできない。そう考えた瞬間、後ろからアキの声があがった。

「痛っ」

後ろに下がらせたアキをシンが捕らえている。どうにかして逃げようと暴れるアキにシンは苦笑した。

「あんまり乱暴なことはしたくないんだけどね」

「アキっ！」

ホルスターに収められていた小銃をアキに向ける。言葉通り引き金を引く気は無いようだが、暴れれば何をするか分からない。シンは言う。

「この子を傷つけるつもりはないよ。僕等と一緒に来てくれれば」
「……」

アオイは目を瞑り、大きく息を吐いた。この状況から逆転する方法を頭の中に巡らせるが、アキを人質に取られた以上、確実な方法は何も無い。

「……どこに連れて行くつもり？」

アオイは剣を収めると、シンを睨み付ける。しかし答えたのはシンではなかった。

「この街の教会よ。神法協会と協定を結んでいる所……」

ミナ言葉は、ざわめく風と共に耳に響いた。

第9章 忘れたまま

「……」

アキは黙り込んだまま、ゆっくりと地下への階段を下りた。辺りを見回し、協会の支部とは違い、はっきりとした懲罰室が無いことに息を吐いた。薄暗くはあるけれど、廊下に並んだ扉は1つ1つが部屋へと繋がっている。廊下には2人、協会の姿があつた。白長衣は彼らが中央協会の人間だということを教えてくれる。

隣を歩くのは、ミナと名乗った女。シンは教会の敷地に入る前に姿を消した。ミナ一人なら逃げられるかと思っていたアキだったが、彼女の片手にあの魔石が握られている。

重荷を乗せられた感覚が、体全体に押し掛かっている。どうやら召喚の魔力さえも押さえつけられているらしい。

「……アオイはどこですか」

少し腹立たしげにアキが呟いた。ミナは視線だけをアキに向ける。

「大丈夫。危険なことはいつもりだから」

「そんなのっ……信じられません!!」

アキの叫びに、数人の協会員が振り向く。ミナは彼らに笑いかけ、なんでもないと首を振った。今度はアキに顔を向け、苦笑しながら語りかける。

「アオイは協会にとってとても大切なの。だから、むやみに傷つけたりなんてことはしないわ。それは同じ協会員として分かるでしょ

う？」

「なら、ならどうして南方支部はあの時魔物なんか使ったんですか！？それに、魔物を操ることが出来るなんて、私は知らな……」

アキの言葉を遮るように、ミナは1つの扉の鍵を取り出した。扉を開き、中へ足を踏み入れる。

「ミナ様！」

気付いた協会の一人がミナを呼び止める。ミナはその意味に気づいて、そして微笑んだ。その微笑には、邪気というものが感じられない。澄んだ空気のような、自然な微笑み。

「大丈夫。何かあったら呼びますから」

アキの背中を押し、扉を閉める。薄暗い部屋はどうやら物置のようで、明かりが少ないために奥の方は闇が支配している。アキが辺りを見回していると、奥の方から聞きなれた声が聞こえてきた。

「アキ！」

「え……？」

向こうから駆けてきたのは、リョウだった。よく見ると、奥の方にハルとシヨウの姿もある。アキは驚いて3人を見つめた。

「どうしてここに……？」

「えっ、あ、えーっと……アキ達と別れた後に捕まっちゃって……」

壁に背中を預けていたミナが小さくクスリと笑った。アキはそれを振り返り、彼女を睨み付けた。ミナは苦笑しながら、4人に語り

かける。

「ごめんなさいね。どうしても、あなた達全員が揃ってくれないといけなかったの」

「私達……？なんのことですか」

ミナはゆっくり深呼吸すると、魔石を無造作に置かれていた荷箱の上に置いた。途端、アキの体から先ほどの圧力が消え去る。ミナは4人の方を見つめ、悲しげな表情で笑った。

「7日後、中央協会からアオイ・リイー又の身柄を引き取りに使者がここへ来るわ」

「！」

その言葉に誰よりも早く反応したのはリョウだった。何かを言いかけるが、それをアキの言葉がかき消す。

「何故協会はアオイを追い回すんですか、いくら魔力の強い人間だからといって、そこまでして協会になんの利益があるんですか！！」

ミナはアキの声に怯むことなく話し続ける。

「アオイ・リイー又は協会の象徴。そしてそれ以上に国の統制を図る、丁度良い道具なの」

「国の統制……？」

ショウの呟きにミナはため息を吐き、答える。

「北大陸の宗教思想はとても濃いものなの。国民を支えるのが協会、その協会を有するのが、国よ。アオイ・リイー又は国民と国を繋ぐ

パイプライン的な役割があるの。彼女がいないと国は派手なことが出来ない」

「……」

何も喋らないハルに、ミナは視線を向けた。

「それに、彼女の強大な魔力は、国にとってこれ以上ない『力』」

ミナは荷箱の上に腰を下ろし、4人の表情を一人一人見つめていく。薄暗い部屋のせいかな、ここが地下室であるせいかな、空気が淀み、部屋の中は陰鬱としているようにみえる。

「……7日後、彼女は協会に連れ戻されるわ。あなた達の処分は、多分神官クラスの間人間によって決められる」

荷物の間から顔を出したミエルが、ミナの足元によってきた。その頭を撫でながら、ミナは微笑む。

「でも私は……いいえ、私達は彼女に国に戻られては困るわ」
「え？」

顔を上げたアキに、ミナは言う。その微笑みは、どこかで見たことがあるように感じた。魅力的で、美しい微笑み。

「そこであなた達にお願いがあるの」

その声は凜としていて、暗闇に響きわたった。

牢屋とまではいかなかったが、アオイの通された部屋は無機質な感じのする場所だった。部屋の中には何も無く、とってつけたように椅子と、テーブルと寝台が置かれている。窓はあるが、外の景色から抜け出すことが不可能だと分かった。地上までかなりの高さがあり、飛び降りるのは無理だ。

アオイは寝台に寝転ぶと腹立たしげに拳を振り上げた。寝台に八つ当たりをしても、布特有の情けない音がするだけだ。ミナに捕まっ
てから、何故か苛立ちが収まらない。

「……」

顔を押し付けて目を瞑る。そうすることで少しでも苛立ちを収めようと思ったが、その試みはノック音によって阻まれた。五月蠅い扉を睨みつけ、アオイは体を起こす。

「誰」

短くそう言うと、扉が開いた。そこには、自分を捕まえた時とさほど変わらない表情で中を覗き込むシンの姿。服装がいつのまにか協会のものに変わっている。アオイと目が合つと、後ろ手に扉を閉めた。

「寝てたのかな？」

「……別に」

アオイは顔も合わせずそっぱを向く。シンは苦笑すると椅子に腰を下ろし、辺りを見回した。アオイは苛立ちを抑えながら、シンに言う。

「一般人なんて言ってたわりに、協会の制服を着てるじゃない」

「一般人ていうのは本当だよ。僕は部外者だから」

「ならここで私が声をあげたら追い出されるんじゃないの？」

アオイの言葉にシンは困ったように笑う。

「そうされると困るなあ」

だがアオイは声を上げるようなことはしなかった。協会の気配が少ないことはアオイ自身、よく分かっている。ここで自分が声をあげても、簡単に逃げられてしまうはずだ。アオイは大きく息を吐いて怒りをやり過ごそうとした。

シンはアオイを見つめたまま、微笑む。

「珍しいね。随分と怒ってるようだけど」

「……誰が怒らせてると思ってるの」

「僕？それともミナ？」

アオイは呆れたように窓の下を見つめる。

「……それ以上に、簡単に捕まったあの3人に対して」

「知ってたんだね」

「食事を運んできた協会員が言ってた」

苛立ちを隠すこともなくブツブツ文句を言うアオイ。シンは立ち

上がり、立付けの悪い窓を開けた。空気の淀む部屋の中に肌寒い風が入ってくる。

「……もうすぐ雪が降る季節かな？」

シンは振り返ると、アオイを真っ直ぐに見つめる。アオイはすぐに視線を逸らした。この視線は、どうも苦手なのだ。シンはベッドに座ると、隣にいるアオイに微笑む。

「君は雪が好きだった。覚えてるかな？」

訳の分からない言葉に、アオイは顔をあげた。そしてそれを後悔する。

「……何……？」

視線が交わる。今度は逸らすことが出来ず、動けなかった。シンの顔にはあの優男的な微笑みはなく、その表情は真剣だった。

「君は、事実の何処までを理解してる？」

「……な、何のことが分からない……」

アオイは辛うじてそう搾り出すことが出来た。曖昧な感覚が広がって、胸を覆っていく。

「君は……」

シンが重ねて問いかけようとしたとき、ドアをノックする音が響いた。向こうから聞いたことのない声が聞こえる。声色が不機嫌なことを語っていた。

「……そろそろ行くぞ」

「ああ、ちょっと待って」

シンは困ったように笑うと、アオイの頭を撫でる。

「仲間がいるの？」

「まあ、そんなものかな」

そう言うときシンはアオイを見つめ、その肩を抱きしめた。アオイは一瞬、何が起こったのか分からなかったが、それでも突き放す気は湧いてこない。ただその温もりを感じたまま、目を閉じた。

「……………」

外から吹き込む風の音が、耳元を撫でる。どこか遠くで、子供たちの声が響いている。潮風と、協会の鐘の音。森のざわめきに、陽光がゆったりと差し込む風景。頭の中をそんな情景がよぎって、消えた。

「………… もう会えないかもしれないね」

シンはそう呟くと、アオイから離れた。アオイは驚いたようにシンを見上げる。その頬には涙が伝っていた。

「何…………？ え？」

その涙に誰よりも驚いていたのはアオイだった。慌てて目を擦り、涙に濡れた手を見つめてまた動揺する。シンも最初は驚いたような顔をしていたが、すぐに困ったように笑った。

「忘れたままでいいんだ。今の君には守ってくれる仲間が沢山いる

から」

見上げてくるアオイの頭を撫でると、優しく微笑む。

「明日、ミナがここに来る。君の意思を聞きに」

「……え……？」

「何を求めて、何を捨てるのかは君次第だから。忘れないで」

シンの声は穏やかに、部屋の中に響いた。

第9章 反旗を翻す

「……お前があんなに積極的な性格だとは知らなかったが」

部屋を出た瞬間、シンは苦笑せざるを得なかった。顔を抑えて、隣の壁に背をもたれている青年に答える。

「僕より女性に免疫がある君に言われちゃお終いかな」
「……いくぞ」

壁から離れ、階段を下り始めた青年にシンは言う。その背中から何を考えているかは理解できた。それでも、知っていながらそれを問うのは彼の性格上のことだ。

「なんだか機嫌がよくないようだけど？」
「God's Seedがとんでもない人間と関わってくれたおかげでな」

シンは頬をかきながら苦笑する。

「……ああ、苦手なんだっけ？」
「……」

階段を下っても、青年は答えを返さなかった。シンは相手に気づかれないようにため息をつく。階段の下にいる女性に声をかける。神法協会の制服を着てはいるが、その耳にはピアスがあり、聖職者にしては派手な装飾を身に着けている。

「……すいません、攻撃班の貴女にまで残ってもらって」
「ああ、別にいいさ。協会には用心した方がいいからね。……それより、ミナの所には行かなくていいのかい？」

赤い髪をした彼女は、すらりとした体をしている。はきはきとした喋り方で、シンに問いかける。シンは苦笑して言った。

「はい。今行くと決心が揺らぐでしょうから」

はぐらかしてそう答えるシンに、女は口元を引きつらせて笑う。

「いつも思うけど、あんたは本当に食えないね」

「簡単に食われるようじゃ、貴女達は計画に協力してはくれないでしょう？」

無言で話を聞いていた青年が口元を緩ませた。女もそれに気付いたように破顔した。青年は漆黒の瞳を2人に向ける。

「……行くぞ」

「そうだね。それでは、行ってきます」

赤い髪の女は、軽く手を振りながらその背を見送った。

朝の光が差し込んでくる。ミナは階段を一つ一つ上りながら、アオイのいる部屋を目指していた。後ろには、赤い髪をした女性がいる。緊張した面持ちのミナに彼女は背中を撫でてやる。

「緊張してるのかい？」

ミナは振り向き、苦笑してみせた。

「……ええ、少し。でもガーネットがいる分だけ、楽な気がします」
「なんならヴァーミリオンでも連れてくればよかったね。楽になるどころか気が抜けるよ」

ガーネットと呼ばれた女性は笑いながらそう言った。ミナは深呼吸すると、足を止めてガーネットに語りかける。真剣な眼差しに、彼女は頷いた。

「人を騙すのは慣れません……」
「ああ。それでいいのさ。慣れるようになったら人間オシマイだからね」

少し前までは子供だったのに、とガーネットは心の中で呟いた。いつの間にか子供は成長してしまう。ミナは少しだけ微笑み、そしてガーネットに背を向けた。

「……行きましょう。すべてはこの件を片付けてからです」

第10章 象徴と国の関係

協会に捕まってから、3日目の朝。窓辺から差し込む光に、ミナは目を細めた。開いたカーテンの向こう側に朝の晴れ空がのぞいている。視線をベッドに移すと、窓の外を見つめたまま物思いにふけるアオイの姿があった。空と同じ青い髪と瞳。ミナはその姿を見て微笑んだ。

「……何を見てるの？」

アオイは視線を外へ向けたまま答えた。

「空」

ミナは窓辺に近寄り、建てつけの悪い窓を開く。近くにとまっていた鳥たちがそこから飛び立っていった。その自由に、どこまでも飛んでゆける翼を見つめ、アオイは呟く。

「……ねえ、あなたは誰？」

ミナはアオイの言葉にふと振り向くと、やわらかく微笑む。

「ミナ・クレセント。神法協会の幹部で、五人いる神官のうちの一人」

「……そうじゃなくて」

アオイは少し苛立ったように言い返す。ミナは彼女が何を聞こうとしているのか知っているが、あえてそれを言わない。ただ、微笑んで、そしてアオイの前に膝を折った。頭を下げ、敬意を示すかの

ように。

「私たち協会の理念は、様々な民族を持つ、国の統治にとって必要不可欠なもの。貴女の存在は、国と民とを繋ぐ役割があります」

「それは……」

どこかで聞いたことがある。中央の協会にいた頃。アオイを見る人の目はどこか、神を見るものに似ていた。God's Seed、それは神の蒔いた種。選ばれし強大な力を持つ者。

ミナは頭を下げたまま続ける。

「協会……そして国は貴女を探しています。貴女がいないと、出来ないことがあるのです」

「……」

アオイは嫌な予感を感じた。前々から、心のどこかにあつた予感を、今また目の前で広げられたような感覚だった。逃れたい現実とそれを隠してきた自分自身と。

「13年前、国はティスニー・ティスファ―両国を襲撃しました。その理由は、南大陸進行への足がかりとするためです。しかしそれは失敗に終わり……国民の不信感が高まったのです。それを抑える手段として計画されたのが、信仰による治安の安定」

ミナは淡々と語りながら、アオイの顔を見上げた。

「そして計画はすぐに実行に移されました。……貴女が協会に連れて来られた歳と一致しますね？当時3、4歳のはずです」

アオイはただ頷いた。覚えていないが、たしかにそう聞いている。

あまりに小さな頃で、親の顔も何も覚えていない。ミナは悲しく微笑んだ。

「……協会の象徴としてGod's Seedの名は使われました。国では貴女を敬愛する人はあまりに多いのです。あの……ファールの彼女もそうでしょう?」

アキのことを思い出し、アオイは顔をしかめた。たしかに、出会った当初の傾倒ぶりはアオイ自身も驚いた。国民の全てがあのような反応をしているわけではないだろうが、国の反応はだいたい予想できる。

「13年というときの流れを利用して、国はまた力を蓄えました。そしてまた同じことを繰り返そうとしている……」

「……南大陸への侵攻?」

「いえ……」

ミナはその瞳でアオイを捕らえ、真剣な眼差しで答えた。

「世界を敵にまわす戦争です」

「!」

アオイの反応にミナは頷く。それが絶対に不利なことはアオイにも分かった。しかし、北大陸の持つ国力は大きい。ミナは話を続けた。

「確かに不利なのは分かります。しかし、国は大きな切り札を三つ持っているのです」

「三つの切り札……?」

首を傾げるアオイに、ミナは頷く。

「一つは、ティスニーを襲った襲撃事件の中心的役割を果たしたシエディーラウスの一族オートブラッド。人殺しの一族とも呼ばれません。戦闘能力に長けた一族です」

名前は聞いたことがあった。いつかアオイがハルに旅をする理由を聞いたときだ。事件時、ティスニー・ティスファール両国ともその一族に圧倒され、同盟国に助けを求めることで危機を脱したと聞いている。

「もう一つはファール一族の召喚士達です。アキ・ファールの魔力はご覧になりましたか」

「……アキの、召喚？」

以前、協会に捕まったとき、アオイを助けようとしてアキは召喚を使った。あの魔力の圧力に、アオイは防護壁を張ったが、完全に押し潰されたのだ。

ミナはアオイの表情から悟り、続けて言う。

「彼女は特殊な例なのですが、他にも彼女以上の魔力を持つ召喚士は数多くいます。そして、最後のひとは……」

アオイは、ミナを真っ直ぐに見つめた。彼女の言葉は、聞かずとも分かる。

「神法協会の選ばれし者、神の時いた種…… God's Seed
である貴女です」

「……私……」

ミナは立ち上がり、アオイの右手をとった。魔力のないミナには彼女の持つ魔力の大きさが分からない。ミナは不安を取り除くようにその右手を包み込んだ。でも、とアオイが言う。

「私はアキの召喚の圧力に一度負けたことがある……」

「貴女には、開放してない力があるの。まだ半分の力も出せていないから、フアーラの力に負けたのね」

ミナの悲しげな微笑にアオイは俯いた。

「……アオイ・リーヌ。もうすぐ、私と同じ位の神官が貴女を迎えに来るの。でも、このままでは貴女は戦争の道具になる」

ミナはアオイの頬に触れると、その視線を自分の元に戻した。

「私は、貴女を傷つけない。……最初に、言っただしょう？」

「……協会の人間なの？」

アオイはそれを振り払いもせず、ミナを見つめた。シンと同じく、彼女も不思議な雰囲気を持っている。無視も出来なければ、怒る気力も湧かない。それ以前に、彼らは優しすぎるのだ。

「……私は、貴女を助ける唯一の方法を知っているわ。でも、それには大きな苦しみに耐えなければならない……。だから、選ぶのは貴女」

「それは……何？」

ミナの表情は真剣だった。

「……魔力の全てを、無に返すこと」

ドアのノック音にアキは眠りを妨げられた。寝ていなかったわけではなかったが、疲れでもう少し寝ていたい気分だったのだ。それはリヨウも同じだったらしく、寝ぼけ眼で扉の方を見つめた。

誰よりも先に目を覚ましたのはシヨウだった。扉から顔をのぞかせた男が、全員を確認するように辺りを見回す。そしてシヨウを見つけると、軽く片手を挙げた。

「おつ、見覚えのある顔」

言われたシヨウは思いつきり嫌な表情をしてみせた。その反応にハルが気づく。男は歳でいえば40を少し過ぎた頃で、無精髭に長髪という、お世辞にもすっかりした外見とは言いがたい。しかし、その服装はとりあえず協会のそれだった。

「おーおー、嫌そうな顔するなつて。頭も同じ顔してたけどな。どうもこの間から機嫌が悪いと思っていたら、お前がいたせいだったんだなあ？レイン」

「……なんでここにお前等がいるんだよ……」

シヨウは大きなため息を吐いて相手を見返した。男は豪快に笑うと、丁度ドアの横にいたアキに食事を押し付けた。

「食事当番とこだ。ほら、朝飯」

アキは寝ぼけながらもそれを受け取り、隣にいるリョウに渡した。シヨウは何かを言おうと口を開くが、その前に男が割り込む。

「別に変なもんは入れてないって。昨日お嬢の話も聞いたんだろ？」

「……ミナ・クレセントのことか？」

ハルの疑問に男はしっかりと頷く。すると今度はシヨウが男に問いかけた。

「お前等、ここで何してるんだ？」

「何って、食事当番」

すんなり答える男に、シヨウは睨みつける。

「……ヴァーミリオン、答えろ」

すると男は降参とばかりに両手を挙げて見せた。けれどその表情は真剣ではない。

「分かった分かった。……俺たちは今、昔からの知人の依頼でお嬢と若旦那の手伝いをしているわけだ。今回は色々あってな」

「お前等が損得抜きで仕事するのは珍しいな」

皮肉たっぷりにそう言い返すが、男は首を横に振る。

「これが、その知人ってのがかなりの金持ちでなあ。俺が勝手に受けてきた」

「……よくアイツに殺されなかったな」

呆れた表情のシヨウに、男はまた大きく笑って見せた。両手を腰にあて、ふんぞり返って破顔する。

「まだまだ俺は現役だからな。若い奴等には負けないぞ?」

「あー、はいはい」

随分と機嫌の悪いシヨウを目にして、ハルは事情に気づいたようだった。荷箱に座ったまま男を見上げ、昨日ミナ・クレセントが言っていたことを思い出す。

「昨日の話にあった仲間、というのは……」

ハルの視線に気づいた男が振り返る。

「ああ、俺のことだ。んで、予定通り鍵は開けておく。ここの警備は俺たちの仲間がやってるから、あとは勝手に抜け出すんだな」

「……でも、アオイは?」

リヨウの不安そうな声にミエルが擦り寄ってきた。男はそれを見つめ、4人全員に語りかけるように、視線を一周させる。

「あの嬢ちゃんにその気があれば、合流は出来るだろうさ。それまでは自分の心配をすることだ。協会の神官の一人が来るのは、明日の昼だぞ」

「アオイを連れて行くのは4日後だろ?なんでそんなに早く来るんだ?」

シヨウの声に男は腕を組んで話す。考えるフリをしている割には、

その顔に真剣さは感じられない。

「北に行く船は7日に1本しか出てないんだ。仕方ねえな」

「あの、いいですか？」

何かに気づいたアキが手を上げる。男は指をさして言った。

「はい、その嬢ちゃん」

「えっ、あ、あの……その神官の名前とか、分かりますか？」

戸惑いながらもそう聞くアキに、男は首を傾げつつ眉間に皺を寄せた。考え込んでいる様子に見えるが、これで頭はさほど回っていないことをシヨウは知っている。

「あー、あれだ、えっとな……ああ、そうだ。たしか、コウとかなんとか」

「……アキ、知っているのか？」

ハルの言葉にアキは曖昧に頷く。元々下働きをしていたアキには上層部の話は入ってこなかった。神官の名前も、全員は覚えていない。それでも、コウという人物は名前だけは知っていた。

「たしか、高等神官と繋がりのある人だったと思います。アースメルティ……今では殆ど血を引く人がいない、召喚士の家柄で……」
「フアーラとは別なもの？」

リヨウの声にアキは頷く。

「私たちの一族は一人で一つの召喚しか出来ないんです。契約は一對一に限りますから。けれどあちらは、契約をせずに召喚が出来た

みたいです。その代わり、そんなに力のある召喚獣を呼びだすことが出来ないんですね」

「逃げられる可能性は……」

シヨウの言葉にアキは顔をしかめる。暫らく考え、そして顔を上げた。はつきりとは断言出来ませんが、と前置きしてから言う。

「可能性はあります。あの一族は魔力より知能の方が勝る方々ですから。でも、アオイは……」

言葉を詰まらせたアキ。それによって沈黙が辺りを包んだ。

第10章 高等神官

アオイは俯き、そして呟いた。自分を苦しめてきた原因を、取り除く方法がある。今まで自分はそれを望んできた。この力がなければ、自分はどれだけ違った人生を歩んできたのだろう。

「……私は」

今まで考えたことがなかった。考えることを、否定してきた。失くしたものは、あまりにも多すぎたから。

じつとこちらを見つめ、答えを待つミナ。アオイは大きく息を吐いた。それと同時に、未だ迷い続ける心が出て行ってくれればいいのに、と思う。

「……」

もしこの魔力がなければ、自分はどこにいたのだろうか？何をし、誰と暮らしていたらろう？そんな想像さえも、この境遇は奪っていた。

アオイはゆっくりと顔をあげた。ミナの表情は数日前に分かれたシンのそれに似ていた。

「……1つだけ、聞いてもいい？」

ミナが頷くのを確認して、アオイは言った。

「何で私を助けるの？」

アオイの問いに、ミナは表情を崩さなかった。アオイの手を握り、優しく、柔らかく微笑んでみせる。触れた手は暖かった。

「13年前の約束……いつか貴女を、助け出すこと」

「約束？私との？」

ミナは首を振り、それ以上は何も語らなかった。アオイは握られた手を見つめ、目を閉じる。シンと同じで、彼女の温もりは心地よい。自分を捕らえた相手だということも忘れて、安らいだ気分になつてしまう。

アオイはもう一度深く呼吸をすると、ミナの瞳を見つめた。

「……分かった」

答えを出してから、すぐに2人は部屋を出た。後ろから協会の制服を着た女がついてきたが、ミナ曰く、彼女達の仲間らしい。先日シンを読んだあの声は男のようだった。ということは、もしかしたら仲間は数人いるのかもしれない。

そこまで考えて、アオイはアキ達のことを考えた。階段を下りながら、前を歩くミナに問いかける。

「……アキ達は？」

「貴女の仲間は皆一緒にいるわ。逃げるルートも教えてある。貴女の居場所も、ね」

ふと、そこまで言っただけでミナは顔を上げた。階段の踊り場に面する窓から、外に視線を向ける。しかし、その表情はすぐに凍りついた。ミナの様子を察した赤髪の女が窓に駆け寄る。

「！」

「神官かい？」

「何故こんなに早く……？到着は明日の昼のはず……っ！」

ミナは口元を押さえ、向こう側から数人の協会員を携え歩いてくる一人の男を見つめた。茶色の短い髪をした男は、歳で言えばミナと同じか、少し上だろう。協会の制服の中でも、位の高い……ミナと同じ神官用のものを着用している。

「……計画が、伝わって……？」

「ミナ、落ち着きな！！あつちからそんな連絡は来てないんだよっ！？」

肩を揺す振られ、ミナははっとしたように女を見上げた。そして苦い顔をして下を向く。始めて見たミナの表情と、緊迫した雰囲気。アオイはただミナと女の顔を交互に見ることしか出来なかった。

男の顔は遠目には見ることが出来なかった。しかし、やけにその姿が目立つのは、後ろで部下達に運ばせている大きな荷箱だ。アオイはすぐにそちらに視線を奪われる。

「……あれは……」

アオイの言葉に、ミナと女が振り返った。

「ヴァーミリオン」

部屋の外から、そんな声が聞こえた。4人の会話を見守っていたヴァーミリオンが顔を上げる。すぐに扉を開け、顔を出した青年に応答した。青年はヴァーミリオンに何かを耳打ちし、ちら、と壁際にいるシヨウに視線を向けた。

シヨウはまた苦虫を噛み潰したような顔をする。しかし、ヴァーミリオンの素っ頓狂な叫びに、誰もが視線を奪われる。

「何い！？神官の一人がもう到着した！？」

「……」

頷く青年にヴァーミリオンは顔をしかめた。そして先ほどの一言で状況を理解したであろう4人に視線を向ける。そしてもう一度青年に問いかけた。

「ミナから指示は？」

青年は首を横に振った。ヴァーミリオンはまた苦い顔をして、腕を組む。

「……シンは今、海の上だ。頭もな。ミナだけでこの状況を乗り越えられるか……。ああクソッ、なんだってこんな早くに!!」

「船は1週間に一度しか無いはずなんですよね?じゃあどうして……」

アキの声に、ハルが呟く。

「別な場所から船に乗った、という可能性もある。もしくは別なルートを通ったんだろう」

「……東大陸……」

シヨウの呟きに、ヴァーミリオンが顔を上げた。どうやら同じことを思いついたらしい。ハルも意味に気づいたようだ。

「東大陸の、蒸気船だ。いくら他国との摩擦が多い北大陸でも、宗教がらみで東大陸へ渡るのは簡単かもしれない」

「……それじゃあ、どうすればいいの?」

根本的な問題を口にしたリヨウに、視線が集まる。ヴァーミリオンは何かを決意したように、青年に言った。

「情報班で残ってるやつはいるか?」

「……スカーレットと、セピアが」

青年の言葉にヴァーミリオンは頷く。そしてすぐに指示を出す。

「スカーレットは現在の状況の報告を。セピアは至急、あっちとシン達に連絡するように。攻撃班は俺とガーネットと……シアンが残ってるか?俺はミナの方に回る。お前はここを、シアンは船の準備だ。いいか?」

「了解」

慌ただしい様子の2人にアキは緊張した面持ちで3人を見つめた。シヨウはヴァーミリオンを見上げ、問いかける。

「お前等は一体何をするつもりなんだよ？」

「食事当番……って答えたところだが、そうもいかねえな」

ヴァーミリオンは頭をかき、4人を一人一人見つめて言った。

「……北大陸のレジスタンスによる反乱だ」

赤髪の女に付き添われて外へ出たミナは真っ直ぐに神官を見つめた。相手は教会の敷地の中央に立っている。ミナはゆっくりと前へ出ると彼に問いかけた。

「随分と早い到着ですね、コウ・アースメルティ」

神官の青年は左右違う色をした瞳でミナを見つめ返した。その顔に表情は無い。ハルの無表情とはまた違った、心の無い目をしている。しかし、アオイはその顔付きとアースメルティの名前に驚愕した。

コウは口だけを動かした。

「……高等神官様のご命令で」

「それはどういった命令ですか？私のほうには明日の到着と伝えられていました」

ミナは平静を装いつつそう答えた。後ろについている赤い髪の女がその背中を見守っている。コウはミナの後ろにいる2人を見、アオイに視線を向けた。

「……『Godus Seed』の保護計画を早めること」
「！」

心のない瞳は、まるで自分のことを見ていないようだった。アオイは一步後ずさる。ミナは感情のない相手に対してもう一度同じ質問を繰り返した。

「何故私のところに変更の連絡がこなかったのですか？」

コウはやっとミナに視線を向け、呟いた。

「……『ミナ・クレセントはGodus Seedの危険因子とみなし、この件から手を引くことを命令する』」

「高等神官様のご命令ですか」

ミナは大きくため息をついた。コウは何も見えていないその瞳の先を、またアオイに向ける。何も言わず、こちらを見つめている相手にアオイは顔を背けた。

アースメルティは、シエル一族だ。ということは、彼は血縁の者なのかもしれない。

「……ミナ様？」

後ろにいた女がわざとらしくそう聞いた。俯いていたミナは決心したように大きく息を吐く。そして顔をあげた。

「……わかりました、と言っても言わなくても私の運命は変わりそうにないですね」

危険因子。それはシエルと同じ処分。アオイはミナの背中を見つめ、何かを言おうと口を開けた。しかし、ミナの声がそれを遮る。

「アオイ・リーー又はお渡しできません」

コウは表情を変えず、ミナに視線を向けた。人形のような目で、ミナを見つめ、右手をかざす。瞬間、大きな衝撃が目の前で炸裂した。

「！」

赤髪の女はミナをかばう。反射的に目を瞑ったミナは襲ってくるであろう痛みにも備えたが、いつまで経っても痛みはこなかった。痺れが、体を駆け抜けただけ。

顔をあげた女が、気づいたように叫んだ。

「アンタ……！」

2人をかばうように、さらに前に立ちはだかったのはアオイだった。至近距離の攻撃に障壁をつくって耐えている。それに気づいたコウはすぐに後ろにいた協会員達に言う。

「例のものを」

「アオイ……」

ミナの声と同時にアオイは障壁を解き、叫んだ。コウではなく、後ろにいた協会員に向けて。

「それが何だか分かってるの！？下手に触れたら死ぬことになる！
！」

普段見ること出来ない『God's Seed』の言葉に、協会の数人が顔を見合わせ、オロオロし始めた。ミナの言うとおり、アオイの北大陸での信用度は高いらしい。しかしコウは冷たく言い放った。

「……早く」

「は、はい……」

荷箱に協会員が手を伸ばす。アオイは苦い顔をするすぐミナの腕を引いた。

「教会の中に！早く！！」

ミナと、ついでに仲間の女も教会の中へと押し込む。そして後ろを振り返らず、教会の中へ入ると、壁から下がり、窓から離れた。瞬間、閃光が窓から入り込む。強い衝撃に押されたように窓が割れ、窓枠が吹き飛んだ。近くにあったものは跡形もなく焦げつき、壁から離れていたアオイ達の体をも痛みが襲う。

どこか遠くで叫び声が聞こえた。先ほどの協会員達ではない。彼らは叫び声を上げる間もなく屍と成り果てたからだ。

外で唯一生き残っていたのは、コウとその隣にいる大きな狼のよ
うな姿をした魔物だった。漆黒の獣は、尻尾が2つに別れ、鋭いツ
メを持っている。

コウは表情も浮かべず、足を踏み出した。

第10章 反逆者

衝撃は建物全てを揺らした。予定通り部屋を抜け出したリヨウ達は激しい振動に顔を見合わせる。

見張りの協会員達が何事かと走っていく姿が見えた。

「この魔力は……」

アキは振り返り、ハルに視線で訴える。何かに気づいたように、隣にいたミエルが顔を上げた。そしてすぐに階段を駆け上がっていく。4人もそれに続いた。

階段を上がった先には長い廊下が続いている。数人の協会員達が慌ただしく走り回っているが、どうやらパニック状態にあるらしく、リヨウ達の姿が目に入っていないらしい。逃げるのにこれほど都合なことはないが、それ以上に教会の中を取り巻く緊迫した雰囲気自体を感じた。先頭に立っていたミエルが足を止め、左右を見回している。しかしどうやら左の通路が気になるらしい。その意味に気づいたアキは、ミエルの頭を撫でた。

「……左に、アオイとはまったく別の魔力の気配を感じます。この気配は、おそらく」

「前の……アレ？」

リヨウの言葉にアキは頷き、ミエルを撫でたまま言う。

「多分、そうだと思います。けれど全く別種のもののようにも……」

やがて何かに気づいたミエルがアキの手を離れた。そして右に足

を向ける。同じことを感じたのか、アキは3人の方を振り向いて告げた。

「こっちです」

アオイは廊下をさらに奥へと走っていた。その先にあるものは予想がついているが、とりあえず敵から離れなければいけない。

ミナを連れて後ろを走っていた赤髪の女が、アオイの背中に向けて叫んだ。

「どこに行く気だい!？」

「ずっと奥!狭いところじゃ身動きが出来ないから!!」

アオイは前を見たまま叫び返した。最奥に扉が見えてくる。神聖な装飾を施した大きな扉は手前に引くと大きな音を立てて開いた。その先は聖堂だ。いくつもの支柱が高い天井を支え、奥にはステンドグラスが七色の光を溢れさせている。聖堂に足を踏み入れた瞬間、人の気配を感じたアオイは身構えた。

「!」

相手の顔を確認した瞬間、後ろにいた女が気の抜けたような声を

出した。

「……いったいどこで時間食ってたんだい、ヴァーミリオン」

「悪い、悪い。ちよつくらコレをな……っと、ほら、その美人のお嬢ちゃん」

急に投げられた包みに、アオイは戸惑いながらも手に取った。それに触れた瞬間、なじんだ感触が両手に伝わる。包みを解き、鞘に収められたそれを抜いた。

ミナは息を切らしながらヴァーミリオンを見上げた。

「……今のところの状況は？」

「まだ完全にバレたわけじゃなさそうだな、ミナの素性に上層部が不審に思った、そんなところだ。ただ、それ以上探りを入れられるとレジスタンスの存在が露呈しかねないな。……おっと、そこのお嬢ちゃんが知リたそうな顔をしてるぞ。ミナ」

会話の内容についていけなくなったアオイが3人を見つめる。ミナは息を整えると、アオイに言った。その表情は真剣で、笑顔を浮かべることは無い。

アオイを見つめるミナの瞳は、真っ直ぐで、偽りは無い。アオイにはそう思えた。

「私達はレジスタンス。反政府組織と言えば雰囲気で分かるでしょう？教会から貴女を奪い、国内の混乱を呼ぼうとしていたの」

アオイはどう反応して良いのか分からず、ただ曖昧に頷いた。ミナはそんな心情を悟ってか少しだけ微笑み、アオイの左手をとる。

「けれど、どうやら上層部の人たちが気づいたみたい」

「……これから、どうするの?」

アオイの呟きに、ミナは首を振った。そして告げる。それはアオイに向けてのものだけではなく、後ろの2人にも向けられたものだった。

「……計画の変更はしないわ。下手に変更すれば、組織全体の存在が見つかってしまうもの。だから……」

振り返ったミナに、後ろにいた赤髪の女と無精髭の男は頷いた。

「まっ、あれだけの金を貰うんだからコレくらいの危険は承知の上、つてな」

「構わないよ。こっちは攻撃班の中枢メンバーが残ってるんだからね」

「そうそう。……っと、こっちのお嬢ちゃんは初対面だったな。いやあ、こんな美人のお嬢ちゃんと旅が出来るとはレインが羨ましいこと限りない」

無精髭の男はアオイよりも随分と年上だった。中年、とまではいかないが、若い盛りは過ぎた年頃だろう。背は高く、体つきは剣士のそれだ。手にしている長剣がそれを強調している。

「俺はヴァーミリオン。コードネームで悪いが許してくれな。美人に本名も言えねえなんて、盗賊業つてのは辛いもんだ」

ヴァーミリオンと名乗った男の隣で、赤髪の女がため息を吐いた。こちらはヴァーミリオンほどではないが、やはりアオイやミナよりも年上だ。若さの変わりに、人を惑わす魅力がある。

「誰が一番最初に『凧』を作ったんだい。……まあ、この馬鹿は放っておこう。アタシはガーネット。盗賊『凧』の攻撃班班長だよ」

アオイは『凧』という言葉に反応した。たしか以前シヨウと会話をしていた『凧』の話が出てきたことがあった。アオイは2人を見上げる。

「……アオイ・リィヌ」

他に何か言おうと思ったが、思いつくものは何もなかった。しかし、言わずとも自分のことは知っているのだろうと思い、アオイはミナを振り返る。ミナは優しく微笑むと、扉の向こうに視線を向けた。

「……始めましょう」

第11章 運命の齒車

「アオイっ!!」

聖堂に足を踏み入れたリヨウ達に、アオイは振り向いた。足元には簡易的な魔方阵が組まれ、ミナが何かを準備している。それが魔力を無に帰すものなのだとアキは直感的に悟った。

扉の隣にいたガーネットが全員を中へ入れると鍵をかけた。そして一番話の通じそうなシヨウを捕まえ、外の状況を尋ねる。その間、アキとリヨウはアオイのもとに駆け寄った。

「アオイ、無事だったんですね……」

「なんとか、ね」

先ほどの衝撃を受けていたら重傷を負っていたに違いない。アオイは安堵して泣きそうなアキに苦笑する。そしてすぐ、隣にいたりヨウに視線をうつした。その目はとても冷たく、リヨウはつい一歩後ずさった。

「……ところで。なんで私たちより先に捕まったのか聞いてもいい？」

「えっ、あつ、えーと、その……この人達の仲間が襲ってきて……そしたら、シヨウが戦わないほうがいいって……」

「……一段落ついたら絶対海にしずめてやる」

後ろで話を聞いていたヴァーミリオンが豪快に笑った。

「そりゃそうだ。お前らの捕獲には『風』の幹部メンバーを充てた

「からな、レインの判断は間違っちゃいない」

アオイは向こうでガーネットと何か会話をしているショウを睨みつけると、大きく息を吐いた。陣が完成したミナは、アオイに語りかける。

「あとは詠唱だけね。……アオイ、一つだけお願いがあるの。魔力が完全に抜け切るまでそれを使おうとしないで」

「……分かった」

「それじゃあ、他の人は離れていて」

アキがリヨウの服を引き、後ろへと下がらせた。ヴァーミリオンも同じように下がり、扉の向こうに警戒するように剣に手をかける。ガーネットも視線をそちらへと向け、警戒するように辺りを見回した。気配は近い。ガーネットはヴァーミリオンが持ってきたそれぞれの剣をショウ、リヨウ、ハルの三人に渡し、身構える。ふと、アキが呟いた。

「何故あの人は……あの方法を知っているんでしょう？」

その呟きは丁度隣にいたショウにしか聞こえなかった。

「受け継がれた魔力を捨てる方法は、……しか、知らないはずなのに……」

アオイの足元を囲うようにして作られた円が光を放ち、立体的な筒状に変わった。アオイはゆっくりと目を瞑る。今までアオイが見てきた強力な魔力を考えていたアキ達はその静けさに目を奪われる。音もなく、アオイの足元から光が溢れた。いつも感じる重圧感はない。

詠唱を終えたミナが、アオイを見つめた。そしてゆっくりと傍を離れると、ヴァーミリオン達に言う。

「多分、時間がかかると思いますが。本当は、もう少しゆっくりと行いたかったんですけど……っ!？」

激しい振動が、建物を揺らした。アオイが気づいたように目を開けたが、遠くでミナが首を振る。気にするなということらしい。

剣に手をかけたハルがアキの前に立ち、ショウとリョウもまた剣を抜いた。ガーネットの隣にいたミエルが低く唸り声をあげている。ふとアキが叫んだ。

「扉から離れて下さいっ!!」

アキの叫び声から一拍置いて扉が弾け飛ぶ。粉々に破壊された扉の向こう側に人の気配がある。ミエルが大きく吼えた。

「!」

現れたコウは、先ほどと同じように右手をかざし、表情のない顔で奥のアオイを見つめた。その隣には漆黒の獣の姿がある。その体はミエルより一周りも二周りも大きかった。

コウが後ろに視線を向けると、獣はアオイを包む筒状の魔方陣に向かつて駆けた。瞬間的に立ち上がったヴァーミリオンが手にしていた長剣を一閃させるが、獣は大きく跳躍する。その足が地についた瞬間、小さな衝撃がその足を止めた。獣はその黒く、研ぎ澄まされた剣のように鋭い瞳を相手に向ける。目の前にいるのは、ミナだ。ガーネットが叫ぶ。

「ミナっ!!」

魔石を片手にした、ミナの障壁が行く手を阻む。勢いを失った獣に、銀の刃が振り下ろされた。ハルの剣に血煙が飛ぶ。しかし、獣は動じた様子もなく、視線をミナに向けたままだ。そして、獣はすつと頭を下げると、地面に押し付ける。

顔を顰めたハルに、後ろからアキが叫んだ。

「危ない!!」

瞬間、爆発的な魔力の作用によって、ミナとハルの体が吹き飛ばされる。ミナの障壁はいとも簡単に破壊され、獣が大きく咆哮した。

「ハル!ミナ!」

アオイの言葉は、魔方陣の力によって当人達には届かない。邪魔者を追い払った獣は、アオイに向かつて一歩、一歩と足を進める。アオイは獣を睨み付けた。しかし、瞬時にその視線が別なものへと移る。

獣の前に立ちはだかったのは、ミエルだった。

「!!」

獣はミエルの咆哮を聞き、完全に足を止める。異変に気づいたコウがミエルを見て呟いた。

「……試作品……」

人形のような彼が始めて首をかしげた。そこに在るはずのないものを見つめて、一步踏み出す。ガーネットの一閃を魔力で弾き返し、今気づいたかのようにアオイを見つめる。

アオイとミエルとを見比べたコウは、ふと呟いた。

「……シエルか……」

魔方阵の結界は外の音も通さない。しかしアオイはコウの口の動きで気づいた。何かを叫ぼうとするが、相手には何も聞こえない。コウはミエルを見つめたまま、ゆっくりと右手をかざした。アオイが叫ぶ。

「ミエルっ!!」

閃光があたりに満ち、激しい衝撃に周りのものが吹き飛ぶ。粉々になった聖堂の椅子がアオイの魔方阵の前を通り過ぎてゆく。アオイは結界に両手をつき、外の様子を見るために顔を近づける。しかし、視界が開ける前に、緑の光が爆発した。

地面を抉られた衝撃で砂埃が舞い上がり、皆の姿を確認するのに時間がかかった。砂埃の中に、やっと人の姿が見えてくる。

「……アキ？」

ミエルの前にアキが立っている。アキの前には魔方阵が存在し、空中に描かれた魔方阵の中央から這い出した腕が、空気を切る。そ

して次の瞬間、片手だけだった陣の中央から、もう片方の腕が這い出てくる。

アキは顔を顰めた。緑色の腕が何かに苦しむように動き、そして相手を見つけたように手をとめた。両手がまるで目を持っているかのように的確に漆黒の獣に襲い掛かる。鋭い爪が獣の太腿を抉ると、更にもう片方の腕が前足を掴み、そのまま握りつぶそうとする。

身動きのとれなくなった獣に更に腕を伸ばそうとする緑の腕。アキが叫ぶ。

「……敵はそちらだけじゃありませんっ!!」

苦しそうな声で叫ぶアキに、腕は応じたようだった。その爪の先をコウに向けると、ゆっくりと両手を動かす。何もない空中に何かを包み込むように。

瞬間、何かが咆哮する声が聞こえた。ミエルでもあの獣でもない。アキの表情がいつそう苦しくなる。途端に緑の腕が両手をコウに向けた。その仕草は人間の手のように鮮やかだった。

緑の一閃がコウに向かって伸びる。しかしその一瞬に黒い獣が割って入った。光が獣の体を貫く。奇怪な鳴き声とともに獣が崩れ落ちた。そして同時に、アキの魔方陣も消え去った。アキの体が前に傾く。アオイの叫び声は、本人には届かなかった。

コウは獣に目もくれず、一步一步と歩みだした。アオイとの距離が近くなる。コウを睨みつけていたアキの前に、見慣れた背中が現れる。

「シヨウ……!?!」

シヨウは剣を手にしたまま、一瞬だけアオイの方を振り向いた。そして呟く。

「少しくらい派手にやっても大丈夫だよな？」

「何……？聞こえない」

しかしシヨウはアオイの答えも聞かないまま剣を構える。シヨウの先にいるコウの両隣には彼を挟むようにしてリヨウとヴァーミリオンの姿がある。

アオイは結界に触れていた手を、握り締めた。

「……」

真っ先に切り込んでいったのはシヨウだった。無駄な動きは1つもない、慣れた手つきで剣を一閃させる。しかし振り下ろされた銀の光を、コウはすれすれの所で避ける。同じように、横から切りかかったリヨウの剣も避けた。しかし、リヨウの方に体を向けてしまったために、後ろからのヴァーミリオンの剣戟を受けることになる。鮮血が、聖堂を赤く染めた。しかし、コウの顔色は変わらない。剣に挟まれた右手から血が滴っている。彼は代わりに左手を持ち上げると、何かを呟く。足元の彼の影から黒い球体が浮かび上がり、四方に爆発した。

「！」

反動に天井が軋んでいるのがアオイにも伝わってきた。砂埃が落ちてくる。アオイは地面に膝をついた。力を込めて、拳を地面へ打ち付ける。そしてふと人の気配に顔をあげた。

砂埃の先に、2人の人間の姿がある。コウと……シヨウだ。コウは表情のない瞳で、また首を傾げる。シヨウは辛うじて爆発の衝撃をかわしたらしい。コウはそれが信じられないのか、もう一度同じ魔法を使う。今度は、シヨウの四方に闇色の球体が現れた。

ゆっくりと中心のシヨウへと近づいてくる球体に、シヨウは舌打

ちをする。それぞれの距離を見極めると、近くにあった瓦礫の破片のひとつを一番遠くにある球体へと投げつけた。球体は、真っ先にその衝撃を辺りに響かせる。すると隣り合わせた球体が誘発する。しかし、最後の球体が爆発した時にはもうシヨウの姿はそこにはなかった。

「……最初の爆発と、次の爆発の間のあの瞬間に、球体の外へ……？」

アオイは膝立ちのまま呟いた。アオイの視線の先には、シヨウの姿がある。酷い外傷はなく、剣もまだ、その手に握られている。コウはしばらくシヨウの様子を見ていたが、すぐに同じ攻撃を仕掛けてきた。しかしそれも一つ一つかわされてゆく。しかし、最後の球体を避けようとした瞬間、シヨウは一瞬うろたえた。後ろに、気を失ったアキと先ほど弾き飛ばされたりヨウが倒れている。避ければ、二人に直撃しかねない。

「シヨウ!!」

アオイは叫んだが、その声が響いたのは結界の中だけだった。

第11章 奇跡の人

障壁の向こうに、倒れた仲間達の姿がある。崩れかけた天井から砂埃が舞い落ち、時折視界を邪魔して消えていった。アオイは目の前に広がる惨状を見つめながら、聞こえないはずの音を聞いた。

『……アオイ……』

誰かの声が耳元に響く。それはここにいる誰の声にも似ていなかった。誰かがいるのかと後ろに視線を向けるが、そこには何の影も存在しない。ヒビの入ったステンドグラスが七色に光り輝いているだけだ。外の木々の影が硝子の前で揺れている。

『……』

何かを耳元で囁かれた様な気がした。はつきりとした言葉ではなかったが、アオイは確かに「声」を聞いた。それでもまだ、誰の声かは分らない。

瞬間、目の前を煙が覆った。割れた硝子の隙間から入り込んだ風に、砂埃が舞う。しかしアオイにはそれが煙に見えた。

『アオイ』

呼び声に答えるように、アオイは手を握り締めたまま、ゆっくりと立ち上がった。こちらへ近づいてくるコウの気配に、抵抗することも出来ない。運悪く、結界はゆっくりと薄れつつあった。もう少しで、魔力の全てが消え去る。

コウからアオイの表情は見えない。青髪が顔を隠していた。しか

し、足元にはポツリ、ポツリと湿った水滴の跡が落ちている。コウが傍に寄ってきたとき、アオイは俯いたまま呟いた。

「……どうして協会はいつも、……何もかも奪っていくの……？」

コウは無表情のままアオイを見下ろした。アオイは顔を上げ、相手を睨みつける。

「こうやってみんなを、シエルをつ……あの時だって!!」

そう叫んだのはアオイの無意識で、そう叫んだ自覚はなかった。憤りの中で、自分の叫んだ言葉を理解するのには多少の時間がかかった。しかし、理解するより先に体が動く。

もう殆ど魔力は残っていない。障壁の薄さがそれを物語っている。コウはアオイの様子に一步、距離を置いた。アオイが障壁に触れると、それはいとも簡単に割れ、その破片が音もなく地中に解けていく。

頭の中にミナの言葉が蘇る。足元から、まるで押さえつけられるように重圧がかかる。体の奥底を、引き千切られるような痛みが走った。発動しようとする魔力をも、陣が吸収しようとしている。アオイは自分で自分を抱え込み、それでも相手を睨み付けた。

「……これ以上好き勝手はさせない……」

アオイは呟いた。瞬間、小さな破裂音と共に、聖堂の支柱が倒れてくる。それはアキ達の倒れている所とアオイのいる所を分断するように横たわった。体を起こしたミナが叫ぶ。

「……アオイ!!」

かろうじて起き上がったヴァーミリオンが立ち上がろうとするミナを支え、ガーネットを呼んだ。アオイの意図を汲んだガーネットがミナを引きずって扉へと向かう。

「ミナ、こっちへ！」

「待ってっ……アオイっ！！」

コウは横目でミナ達が消えるのを見つめている。アオイはミナの声が遠くなったのを確認すると、まだ意識のありそうなハル達に叫ぶ。

「ハル、シヨウ。……アキとリヨウをつれて逃げて」

「アオイ！？」

突然の言葉に駆け寄ろうとしたリヨウの腕をシヨウが掴んだ。ハルはアキを起こすと、その体を抱き上げ、アオイの方を見る。アオイは深い海の色をした瞳で、しっかりと頷いた。

「ハル！！シヨウ！！」

リヨウは2人に叫びかけるが、応じてはくれない。リヨウはシヨウの腕を振り切ろうとするが、逆に扉へと引かれ、ただアオイの名前を叫ぶ。シヨウも決心がつかないのか、リヨウの腕を掴んだまま、アオイに視線を向けた。アオイは苦笑しながら頷いた。

「……シヨウ、お願い」

「アオイ！！」

リヨウの叫び声が響く。アオイは深く深呼吸し、感情を抑えつけて普段通りに笑ってみせた。

「後から行くから、大丈夫……私の心配より、自分の心配したほうが……」

アオイの言葉をかき消すように、もう一つの支柱が倒れる。砂埃の奥で、アオイは手を振った。4人の姿を見て、悲しそうに微笑む。痛みが酷くなっている。体の全てに、無理な圧力がかかり、微笑うことは難しい。それでも、アオイは仲間を見送る。頬に涙が伝っていたが、気にしなかった。

多分、これが最期なのだ。それを知っていて、アオイは微笑む。

「……ありがとう」

アオイは手を振った。そして聖堂の天井に視線を向ける。視界にうつった支柱が、音を立てて入り口を塞いだ。その瞬間、廊下にいる4人の姿が視界から消える。

自分の名前を呼ぶ叫び声が、消え去っていった。

体の痛みは、絶頂に達している。アオイは相手を睨みつけ、そして小さく呟いた。コウは何も言わず、こちらを見ている。

「……協会に何かを奪う権利なんてない……」

逃げ道を塞ぐように支柱が一本、また一本と崩れ落ちる。もうすぐ崩れ落ちるだろうという教会の中で、コウは顔色一つ変えずに呟いた。

「……死ぬ気ですか」

アオイは薄く笑って見せた。

「私がいなくなったら、協会は不利になるんでしょう?」

コウは何も答えなかった。建物の崩れる音と共に沈黙が辺りを包む。アオイはゆっくりと魔方陣を見つめ、指でなぞった。コウは逃げ出す様子もない。アオイは陣をなぞりながら言った。

「……さっきシエルの名前を言ったけど、シエルを知ってる?」

コウは辺りの様子を眺めながら呟いた。殆どが崩れかけ、瓦礫と化した聖堂。

「……兄」

アオイは顔を上げた。思ってもみない言葉に表情が顔に出る。

「シエルの……弟?」

性格は違うが、顔は似ている。アオイは痛みの残る体で立ち上がり、その顔を見つめた。コウは割れ始めたステンドグラスを見つめている。ふと何かに気づいたようにコウは振り返った。アオイもつられてそちらに視線を向ける。

瓦礫の奥から、ミエルが走ってくる。

「ミエル……」

駆け寄ってきたミエルをアオイは抱きしめた。もう力の入らなくなった腕で、懸命に抱きしめる。ミエルは尻尾を振ったまま、コウを見上げる。ミエルの様子に、アオイは顔を上げた。

「……」

コウは何も言わずにミエルを見ているが、ミエルは警戒もせず尻尾を振っていた。アオイは首をかしげ、そして相手を見上げる。何かを言いかけたアオイ達の真上に、瓦礫が降り注いだ。

アオイの言葉はまた、届かなかった。

「リヨウー!!」

崩れ落ちた聖堂に、リヨウは駆け出した。瓦礫の上を走っていくリヨウに、シヨウが制止の声を上げる。しかし、それだけで彼を止めることは出来ない。シヨウはリヨウの後を追う。それに気づいたハルもまた、アキを安全な場所に下ろすと、2人の後を追った。

「アオイっ!!」

リヨウの叫びに、返事はない。それでもリヨウは懸命に叫び続ける。瓦礫の一つ一つに足をとられながら、辺りを見回す。聖堂があった場所には、ステンドグラスの破片が散乱していた。後ろから追いついてきたシヨウがリヨウの腕を掴む。

「リヨウ」

「なんで……どうして!! どうしてアオイを見捨てなきゃならなかったんだ!! まだ、まだ助けられたかもしれないのに!!」

がむしゃらにシヨウの手を振り払ったリヨウは、また瓦礫の中に足を踏み出していく。シヨウは何も言えずに下を向いた。先ほどのアオイの表情を思い出し、手を握り締める。

追いかけてきたハルが、2人の様子に足を止めた。何があっただかを察し、シヨウへ近づく。そして、知ったうえで問いかけた。

「どうした?」

シヨウは自分の手を見たまま、呟いた。

「……いや。なんでもない……」

「一度宿へ戻ったほうがいい」

ハルの言葉にシヨウは何かを言い返そうかと思ったが、止めた。辛いのは、多分皆同じだと、そう言い聞かせてリヨウへと歩み寄る。ハルがリヨウを呼んだ。

「リヨウ。宿へ戻るぞ」

ハルの声にリヨウは顔を上げる。

「どうして！？もしかしたらまだ……っ」

「アキの状態も良くない。それに、ここにこうしていれば、周辺の協会員が集まってくる」

「そんなの……」

シヨウはリヨウに歩み寄ると、その背中を押した。リヨウは俯いたまま、小さく頷く。2人の気持ちは理解しているが、それでも行き場のない感情が胸の中に溜まっていく。

幼い頃感じた、もう2度と思い出さなくなった感情。目の前で、誰かの命が奪われ、大切な人たちが消えていく。

リヨウが一步、一步と歩き始めたとき、遠くから何かが聞こえた。最初に気づいたシヨウが振り返る。風にまぎれて聞こえた幻聴だったのかもしれない。それでも、シヨウは音のもとに向かって歩き始めた。

「……シヨウ？」

目尻の涙を擦り、振り返ったリヨウが呟く。シヨウは声のした方向に黒い何かを見つけ、駆け出す。黒く、細長いものがまるで瓦礫の間から生えたように動いている。左右に動く物体が鳴いている。

パタパタと動く物体が、ミエルの尻尾だと気づいたシヨウはハル達に叫ぶ。

「リヨウ！ハル！」

鼻で鳴いているミエルはどうやら細かい瓦礫の破片に埋もれていたようだ。怪我をさせないように大小の瓦礫をどかすと、ミエルは体をよじり、自分で這い出てきた。

「ミエル!!」

リヨウが叫ぶと、ミエルは嬉しそうに尻尾を振った。体には傷が出来ていたが、致命的な外傷はないらしい。シヨウは再会を喜ぶミエルとリヨウの姿に安堵したが、すぐその視線が足元に釘付けになる。

「……!」

青い髪が、大きな瓦礫の下から流れている。シヨウはゆつくりと下を覗き込み、瓦礫に手をかける。大きなものだったが、さほど重くはなかった。

ゆつくりと持ち上げ、その下を確認する。リヨウも、追いついてきたハルも気づいたようにシヨウの方を見つめた。シヨウの、掠れた声が漏れる。

「……アオイ……」

瓦礫の破片の下に埋まった青が、日の光に照らされた。

+ Extra chapter +

+ Extra chapter +

(第2編予告)

少年は成長し、自分の辿った道を振り返る。暗闇に浮かび上がる足跡は徐々に消え失せ、同時に彼の記憶も曖昧になっていた。

自分がどこで生まれ、どんな生活をしていたのか。どんな環境で、どんな夢を描いていたのか。

「よく出来た筋書きだよねえ。君たちは何も気付いていない。本当に完璧過ぎて、拍手をする気も起きないや」

独りぼっちの雨の中。今も昔も変わらない冷たさにため息が漏れる。

悲劇のきっかけは突然訪れる。

「……へえ、身に覚えが無いってわけか。じゃあアオイは知ってるのかな」

Story on "S" side

? 第2編 murder blood

歡迎するよ、シヨウ・レイン。

序章 終わらない眠り

果てなく広がる澄んだ青の海原。耳を攪る波音と、時折響いてくる乗船客の喧騒がこの世界の全てのように思える。辺りに島の影すらなく、船の四方は同じ色の海に覆われている。時が流れていることを感じさせてくれるのは、空を流れる雲と、そこから除く太陽だけ。潮風が髪を遊んで通り過ぎる。

金髪の髪の下から覗いた瞳が、空の彼方から追いかけてくる雨雲を見つめていた。一雨きそうな雰囲気、小さくため息を漏らした。腰には軍にいた頃から扱いなれた剣が収まっている。帆を降ろす作業をしている船員達を見ながら、甲板に体を預け、空を見上げた。

一騒動あったあの日から5日。まださほど時間は経っていないが、時間が経てば経つほどに不安が募ってくる。それは旅の仲間達も同じようだった。

変わり映えの無い景色を一望し、彼は船室への扉を開けた。そろそろ仲間の誰かが自分を呼びに来る頃だ。並んだ客室の一番向こうから、少女が手を振っている様子が見える。アキ・ファールという、召喚士一族の少女だ。シヨウに歩み寄ると微笑みかける。それでも、その笑顔に疲れがでていることはすぐに分かった。

「そろそろ交代の時間なんですけど、いいですか？」

「了解。ああ、昼食後で頼む」

「はい」

濃い緑の髪を揺らしながら去っていく少女。開け放されたままの扉に手をかけると、部屋の中の様子が視界に入ってきた。日の光がレースのカーテンの隙間からベッドに差し込んでいる。ベッドの上には、外の世界を見ているように青く澄んだ髪が流れていた。しかし、彼女の持つ青い瞳まで見ることは出来ない。

アオイ・リーヌ。北大陸で信仰されている神法協会の象徴的存在であり、その為に協会に閉じ込められて生きてきた。莫大な魔力を持っていたが、数日前、仲間を助けるために魔力のすべてを解放してしまい、そのために今も眠り続けている。

シヨウはため息をついてその寝顔を見つめた。なんの表情も浮かべていない、その寝顔は人形のようにも見える。肌は白く、それでも触れてみると微かに暖かい。

『……ありがとう』

瓦礫が降り注ぐ中で、そう弱く微笑んだ姿を、今でもはつきりと覚えている。多分、皆あの言葉と表情を、忘れられずにいるのだ。

アオイの傍に伏せていた犬が、青年の足元に歩み寄ってきた。椅子に座り、その頭を撫でてやると甘えたように鳴く。

「……お前の主人は一体いつまで寝てるつもりなんだろうな、ミエル」

ミエルと呼ばれた大型の犬は、椅子の横に座ると相手の顔を見上げた。黒い毛色を撫でながら、青年は潮風に揺れるカーテンに視線を移した。

ふ、と背後から扉をノックする音が聞こえた。応じて扉を開けると、そこには赤い髪をした青年が立っていた。手には、彼が運んできた昼食がある。青年は少し幼さの残る輪郭で、部屋の中を覗き込んだ。相変わらず、死んだように眠り続けるアオイの姿を確認して、視線を落とす。

「これ、アキに頼まれた昼食。あと、こっちはミエルの分」

足元から顔を出したミエルに、青年は少しだけ微笑みかけた。

リヨウ・ティスファア。南大陸の島国を2つに分ける兄弟国の片割れ、ティスファア国の第2王子。13年前に起きた襲撃事件の調査の為に、従兄弟のハル・ティスニーと旅をしていた。

リヨウは部屋の中にあつたもうひとつの椅子に腰掛けると、ミエルに昼食を差し出した。

「……アオイの状態は？やっぱり変わらない？」

「ああ。寝言ひとつ言わないいな」

青年の冗談にリヨウは弱く笑った。その疲れたような表情に、ミエルが顔を上げる。

「リヨウ、お前仮眠とったか？昨日、一昨日つきつきりだったろ？」

アオイの看病は交代で行っているのだが、昨日と一昨日の夜はリヨウ自身が希望して看病していた。それでも、昼に仮眠を取っていた様子が無い。朝にそれをアキに言われ、仮眠を取るように言っていて欲しいと頼まれていた。

リヨウは苦笑しながら言う。ミエルが心配そうに鳴いた。

「……なんだか、眠れなくて」

「ただでさえ船酔いしやすいのに、人の心配してるからだ。とりあえず休まないと後で倒れるぞ？それに、アオイが起きたとき暴言を吐かれかねないし、な？」

想像してみて、リヨウは頷く。

「本当になりそうでやだなあ」

苦笑しながら、リヨウは席を立つ。それじゃあ、休んでくると言

つて、扉を開けた。廊下に出ようとしたところで、その足が止まる。

「あ、ハル」

その声にミエルが振り向いた。しばらくして、黒髪の青年が顔を出す。彼もまた、アオイの様子に変わりが無いことを確認すると、呟いた。

「容態は」

「全然変わりなし。呼吸してる以外に動かないしな」

黒髪の青年、ハル・ティスニーはリヨウの従兄弟であり、兄弟国のもうひとつ、ティスニー国の第1王子。リヨウと違って冷静な性格で、アオイの状態を重く見たが、それでも協会の追っ手から逃れるために船に乗ることを決めたのは彼だ。

その判断は間違っていないかった。あの街に残っていれば、協会の人間が調査の為に訪れたかもしれない。少なくとも、この船に協会関係の人間はおらず、西大陸への航海は長い。アオイにとっても、自分たちにとっても安全であることは確かだ。

「……ひとつ聞いてもいいか？」

先ほどまでリヨウが座っていた椅子に腰を下ろし、ハルは言う。
青年は顔を上げ、ハルのほうを見た。

「あの時、手引きをしたミナ・クレセントとシン・レシーフェの2人以外の人間の顔を知っていたのか？」

ハルの問いかけに、青年は明らかに苦い顔をした。あの時、協会員に混じっていた数人の顔を、よく思い出せる。大きなため息を吐

いて彼は答えた。

「ああ。コードネーム『ヴァーミリオン』、『ガーネット』、『シルバーブルー』。よりによってあんなところで盗賊と顔を合わせるとは思ってなかった」

「ティスニーでの『凧』の対策本部を指揮していたのはケイトスだったと思うが」

「あー……、確かに。名目上はあいつ」

以前、ティスニーは何度か『凧』の被害にあったことがあった。国の命令で対策本部が設置され、軍の人間の数名がその指揮に当てられたことを、ハルは覚えている。

『凧』は本来盗賊であるが、彼らの盗みは正当な理由があつてのものが多い。そのために野次馬根性のある国民には人気が高く、子供達の中には正義の味方と混同して考えている者も少なくない。被害にあつたどの国も、そういった点では対策をしにくい相手であり、しかも彼らは巧妙な手を使うので、捕らえることは出来なかった。酷いところでは、盗まれたことすら気づかないということもあつたという。

髪をかきあげ、青年はまた息を吐いた。ハルは続けて問いかける。

「……名目上はケイトスが行つたと聞いているが、実際に指揮をとつたのは部下だったようだな」

「ああ。あれはやりずらかつたな……あの頃は17になったばかりで、ケイトスの指示だつっても上手く動いてくれなかつたし」

「の、割には随分好き勝手していたと聞いているが」

笑って誤魔化そうとしている青年をハルは呆れたように見返す。

ティスニーでの対策本部の指揮を代行したのは、ケイトスが任命した部下だった。それが彼であることをハルが知つたのは少し後の

ことだったが、この代行者は好き勝手をしていたわりに、期待以上の働きをしてくれた。

「確か、『凧』の数名を捕らえたらしいな」

今まで、捕まえるどころか、姿さえも見たものはいないという『凧』を捕らえたのは、世界中でもティスニーのみだ。それでも、裁判にかける前に逃げられた。しかしそれは司法側に身柄が渡った後のことだったので、軍の名声に傷がつくことはなかった。

「すぐに逃げられたけどな」

「……頭を見た、という話もあったが」

ハルが言うと、青年は笑うのを止めた。

「あの協会員の中にいたか？」

青年は首を振り、そしてすぐにハルの方に視線を向けた。

「あの中にはいなかった。多分、近くにいたんだろうと思う」

そうか、と呟いたハルに、青年は呟いた。窓の外には広がってきた雨雲が不穏な空気を醸し出している。もうそろそろ雨が来るだろう。

「そっぴやミナ、だっけ？結局最後まで見つからなかったな……」

ミナを連れたまま、ヴァーミリオン達は姿を消した。アオイを船にさせるまで、顔も見えていない。しかしヴァーミリオンが船、と言っていたことを考えると、もう何処から船に乗ったのかもしれない

い。

立ち上がり、窓を閉めようと腕を伸ばす。風に暴れるカーテンを窓の端で括り、窓の閉まる音が響いた。ハルは青年から視線を移し、眠ったままのアオイを見つめる。

整った輪郭はなんの音にも声にも反応しない。瞑ったままの瞳は開かれることなく、ただ、眠り続けている。

「……似ていないか？」

ハルの声に青年が振り向く。

「ん？」

「……いや、なんでもない。それより、食事が終わったのなら、持つていこう」

テーブルの上の食器に視線を向け、青年は頷く。ハルは食器を重ね、扉を開けた。どこかの窓が開いているのか、風がハルとすれ違うように入り込む。後ろから青年が悪戯っぽく笑いかけた。

「雨振る前にリヨウに薬飲ませておかないと、多分この様子じゃ酔うぞ。睡眠もとってないようだし」

「病人がこれ以上増えるのは避けたいな」

ため息をつくハルを見送って、彼はまた椅子に座りなおした。アオイは寝返りを打つこともなく、先ほどと変わらない表情で眠り続けている。上下する胸が、呼吸をしていることを教えてくれる。

青年は額を覆っていたバンダナを解き、隣にあつた鏡を覗き込んだ。そして自分自身の姿を見ながら苦笑する。額の右上には相変わらず、何かの痕が残っている。

「……病人がこれ以上増えるのは避けたい、な。俺としても」

自覚すると痛みは大きくなる。額を押さえて息を整えると、もう一度バンダナで隠すように覆った。そして、いつかアオイに言われた一言を思い出す。

『記憶が関係してるんじゃないかと思うんだけど……』

無くした記憶。そして思い出させまいとするかのような頭痛。無理やり痛みを忘れようと青年は窓の外に視線を向ける。ゆつたりとした波の上に、いつの間にか多くの波紋が出来上がり、視界を遮るように雨が落ちていた。

「そつえばアオイと会ったのもこんな船の上だったな」

答えないアオイの代わりにミエルが鼻を鳴らして鳴く。頭を撫でた青年??? ショウ・レインは、ミエルに弱く微笑ってみせた。

第1章 小鳥の見る夢

ゆらゆらと、体を包み込まれる感覚。何か暖かいものに覆われるような、そんな感触。

風に呼ばれて瞳を開き、足が地についた感触はしないけれど、それでも彼女は疑問すら持たなかった。ここに彼女の体は無い。ただ空気となって浮遊する。まるで自身が風になったかのように。視界に広がった光景は小さな村。点在する家々が増えてゆき、その先で集落をつくっている。

ゆっくりと、小鳥が舞い降りるように光景が森の中へと降りてゆく。すると、獣道の向こうから誰かが駆けてくる様子が見えた。

「ねえ、待っててば!!」

「駄目だよ、早くしないとお菓子もらえないんだから」

幼い少年と少女が森の中を駆けてくる。栗色の髪をした少年は多分歳で言えば6、7歳だろう。後から追いかけるように走ってくる少女も大体同じ年に見える。息を切らせて苦しそうな少女の様子に、少年は足を止めた。

「……大丈夫？」

「う、うん。大、丈夫……」

はい、と少年は手を差し出し、少女の手を握った。少女は驚いて顔を赤くしたが、顔を下に向けて、顔色を見られないように俯いた。肩までかかった金の髪が丁度良く顔を隠してくれる。

「じゃあ、いこう」

少年は少女の手を握って走り始める。少女の状態を労わりながら、少年は教会へと急いだ。教会は森の向こうに見えている。集落の丁度真ん中に位置していて、さほど大きくはないけれど、美しい教会だった。

獣道から走り出ると、その前に群がっている子供たちが一斉に2人を振り向く。早く来いと叫ぶ者やら、2人が手を繋いでいることを冷やかす者やら、様々な声がかかる。少年はその中心にいた一人のシスターに話しかけた。

「シスター。まだ、お菓子残ってる？」

若いとはお世辞にも言えないシスターだが、優しく頷くと、彼らにクッキーの入った袋を渡してくれた。少年は最初に手に取ったひとつを少女に渡すと、次に自分の分を手にとる。その様子を微笑ましく見ていたシスターが、何かに気づいたように少女を呼び止めた。

「そういえば、お家にお客様がきていたようね。もうひとつあげるから、差し上げなさい」

「？」

少女は首をかしげながら、クッキーを受け取る。自分の家に客が来ているとは知らなかった。朝から共に遊んでいた少年もまた、同じように首を傾げる。シスターは微笑んで2人の頭を撫でた。

「……行ってみれば分かるわ」

少女の家は、他の家とは比べ物にならないほど大きい家だった。資産家として成功した祖先はやがて音楽の道を歩み、その子供達も音楽に親しんだ。少女の母親もピアニストをしており、その名前は大陸でも有名である。

2人は家の門の前まで来ると、建物の中を覗き込み、そしてまた顔を見合わせた。

「誰も来てないよね？」

少年は見慣れた庭に足を踏み入れ、辺りを見渡す。少女は真つ直ぐに中央の玄関へと足を進める。扉を開けるが、人の気配はない。

「上かな……？」

少女は少年に手招きをし、中へ入る。客室へ行こうと右手側の階段に足をかけると、上から聞きなれない声が聞こえてきた。客室の反対側にあるバルコニーからだ。

『荒野に希望を求めるならば 明日の雨を望みましょう
戦いに終わりを求めるならば 英雄の影を祈りましょう』

足を止めた2人は、バルコニーから流れる旋律に耳を澄ました。聞いたことのない歌だったが、その余韻は優しく、まるで春の陽の暖かさのように柔らかい。

『愛しい人の帰りを待つ、幾多の想いが星となり 私は貴方を望みましょう』

少女はゆっくりと階段をあがり、バルコニーから下を見つめている人影を見つけた。纏められたブロンドの髪。すらりとした後姿に少女は見覚えがなかった。少女の後ろに立っている少年も首を傾げる。

『小鳥の囀りを聞きながら、私は空に謳いましょう』

女性はバルコニーの下から視線を離し、ふと振り向く。

「！」

気付かれたと思ったが、少女はすぐに彼女の視線がこちらを見ていないことに気づいた。女性はバルコニーにいるもう一人に手を伸ばす。小さな手が、窓の端に映った。

手を引かれて姿を現したのは2人よりも年下の、子供だった。年と言えば3、4歳だろう。肩で綺麗に切りそろえられた髪は、2人の見たことのない青い色をしていた。甘えるように腕を伸ばして、女性に抱きつく。

「……？」

彼女が母親なのだと気づいた少女は、首を傾げた。青髪の子供は、母親に抱きかかえられ、嬉しそうにバルコニーの下を覗いている。

「どうかした？」

何かを思い出そうとしている少女の顔を覗き込んで、少年が尋ねる。しかし、少女から答えが返ってくるより先に、バルコニーにいた母親が2人に気づいた。

「あ……」

少年がそう声を上げた時、客室から誰かが出てきた。少女は振り返り、そして嬉しそうに叫ぶ。

「伯父様！」

やっぱり、という呟きが少女の口から漏れた。隣にいた少年は客室から出てきた男性の顔を見上げ、その言葉の意味を知る。客室から出てきたその人物は、先ほどの子供と同じ青い髪をしていた。

この人が父親なのだと、少年は理解できた。

「ああ、久しぶりだね。また大きくなった？」

少女は頭を撫でられて、嬉しそうに微笑む。そしてバルコニーから出てきた人物に視線を向けた。やわらかく微笑む女性の後ろから、覗き込むように子供がこちらを見ている。

父親はその様子を見ながら苦笑した。

「生まれたときに一度連れてきたんだけど、覚えてないだろうな。

……ほら、おいで」

子供は父親を見上げると、その足元に駆け寄って、すぐに後ろに隠れた。先ほどは見られなかった青い瞳をこちらに覗かせて、それでも父親の服を離さない。見知らぬ顔の2人に人見知りをしているらしい。

少女は伯父の顔を見上げて、笑った。

「今日は、いつまでいるの？」

「『今日は』、じゃないんだ。しばらく、こっちに住むことになったから」

「じゃあ、ずっと？」

嬉しそうに尋ねる少女に、伯父は頷いて答える。飛び跳ねる勢いで喜ぶ少女に、少年は後ろから肩を叩いた。手に持っているクッキ―のひとつを渡すと、少女は思い出したように声をあげる。

シスターは、この親子のことを知っていて、子供用のお菓子を渡したのだろう。少女は未だに足元にしがみついている子供に歩み寄る。

「はい。シスターがくれたの。渡してあげなさいって」
「……」

子供は髪を揺らしながら、父と母を見上げ、また少女の方に視線を向ける。

「はい」

子供は差し出された袋を手にとると、また両親の後ろへと隠れた。苦笑した母親が、子供を引きずり出す。慌てたように子供はまた後ろへ下がろうとしたが、すぐ2人の前に引っ張り出される。

「『ありがとう』は？」

「……………ありがとう……………」

どうやら恥ずかしいらしく、視線も合わせないままそう言つと、すぐに母親に抱きついた。その様子を苦笑しながら見つめていた父親が、少女達に言う。

「まだこっちに慣れてないから、友達もいないんだ。仲良くしてやつて欲しい」
「うん！」

母親に甘えている子供に、少女は微笑みかけた。子供の青い瞳が少女と少年の方に向けられる。

「私、ミナ・クレセント。こっちは、お友達のシン・レシーフェ。あなたの、名前は？」

作り物のように澄んだ青い瞳が、少しだけ笑顔になった。

「アオイ、……リーヌ」

海上の波が高くなり、雲行きがいよいよ怪しくなってくる。外では雨音が酷く耳障りな音を立てている。波の揺れがゆっくりと大きくなり始め、先ほどから船員たちの足音が部屋の前を歩き来している。

押し寄せる波の動きは、リアルに船室へと響いてくる。多分隣室のリョウはそろそろ寝込んでいるはずだ。先ほどアオイの様子を見に来たアキも、少し青い顔をしていて、部屋に戻って休むと言っていた。アオイの看病での寝不足や疲れもあり、酔いやすくなっているのかもしれない。

もともと船酔いをしないショウは、窓のカーテンを閉めた。それでも雨音は船室の中にまで響いてくる。ため息をつき、隣のミエルの頭を撫でた。

「ミエルは酔わないんだな」

動物の本能的なものなのか、ミエルの様子は全く変わらない。時折、大きな揺れがくると反応したように顔をあげるが、それ以外に揺れを嫌がる様子はない。シヨウは椅子に座ると、またアオイの方を見つめた。こちら、揺れには全く反応を示さない。

そんなことを考えていたとき、一瞬だけ、アオイの口から声が漏れた。

「……ん……」

少しだけ、瞼が動く。けれど、それが開かれることは無い。シヨウは立ち上がり、軽くアオイの肩を揺すった。

「アオイ？」

先ほどの声は気のせいだろうか。雨音のせいがかき消されそうになっっていた小さな声。しかし、名前を呼んでも未だに反応はない。一瞬だけきつく瞑られた瞼も、今では元に戻っている。

シヨウは諦めたように椅子に座りなおした。心配そうに見つめるミエルが、小さく鳴く。

しかしそれも雨音の中に消えていく。シヨウはため息が出てくるのを抑えられなかった。

伯父の家は海の近くに作られた。最初は同じ家に住めるのかと期待したミナだったが、あっさりと期待を裏切られた。どうやら大人同士で何かを話し合った末に決まったことらしく、ミナは自分の母親に抗議したが、宥められて終わってしまった。

それでもあの青い髪の少女の家は近くにあり、シンの家からも近い。毎日遊びに行つては、母親に甘える少女を連れ出して遊びに行くのが日課になった。アオイと名乗った少女も、日を追うごとにミナやシンに打ち解けるようになり、1ヶ月も経った頃には自分から家の前で2人を待つようになった。

「おはよう」

玄関の前の階段に腰を下ろしていたアオイは、シンの声に顔をあげた。嬉しそうに笑顔を浮かべ、アオイはシンのもとに駆け寄ってくる。シンがいつもの通りにアオイの頭を撫でると、更に笑顔がはじける。しかしいつも隣にいるはずのミナの姿がない。

「お姉ちゃんは？」

アオイはミナのことを『お姉ちゃん』と呼んでいた。従姉妹だから、という理由もあるが、ただ単に年上だからという理由もある。その理屈から、シンはいつのまにか『お兄ちゃん』にされていた。シンは笑ってミナの家の方に指を向けた。アオイは首をかしげ、シンに手を引かれるまま歩き出す。森を抜けた2人はミナの家の前で足を止めた。問いかけようとするアオイにシンはその口を押さえる。

「しいー」

ミナの家の奥に視線を向けると、どこからかヴァイオリンの音が

聞こえてきた。アオイはその音に気づいたように何かを言おうとしたが、シンに口を押さえられているために声が出ない。

「あつ、ごめん」

シンが手を離れた瞬間、アオイが家の門の方へ駆け出す。門は閉められていて、中に入れないようになっていたが、アオイは門の格子の間からすりりと中へ入った。シンは慌ててアオイを追おうとするが、格子の間から入るにはシンでは少々無理がある。

シンはアオイに動き回らないように、と釘を刺し、門と垣根の間から庭へと潜り込む。木の葉を体中につけながら這い出てきたシンにアオイは笑った。

「葉っぱいっぱいいてる」

土と木の葉を払い落としながら、シンも同じように笑った。そしてアオイの手をとると、敷地の裏に回りこむ。裏手に面した窓の1つが開いていることに気づいたアオイは窓に駆け寄ろうとしたが、シンに手を引かれ、すぐに振り返った。

「まだ駄目だよ、練習中だから」

「……？」

座って待つてよう、と言われたアオイは大人しくその場に座り込んだ。シンも同じように壁に背をもたれて座ると、森の向こうに視線を向けた。ゆらゆらと葉擦れの音を立てながら揺れる木々を太陽の光が照らし出している。

土いじりをしていたアオイは窓から流れるヴァイオリンの音に耳をすました。どこかで聞いた音楽だと首を傾げているらしい。

「……あつ」

とうとうアオイが立ち上がって窓に手を伸ばす。シンは慌ててアオイを押さえようとするが、丁度その瞬間にヴァイオリンの音が止んだ。シンが振り返ったアオイの頭を押さえて伏せると、中からミナの笑い声が聞こえた。

「もう練習終わったのに」

「えっ？あ、本当？」

押さえつけられていたアオイが頬を膨らませながらシンを見上げる。慌てて離すとアオイは拗ねたような顔をしてみせる。

「あつ、ごめん」

機嫌の直らないアオイを見たミナは窓越しにその頭を撫でた。

「入ってきていいよ、アオイ」

「本当？」

頷くと、アオイは嬉しそうな顔で玄関の方へと駆け出していった。シンは困ったようにミナに笑いかけ、そしてその後を追う。ミナは窓を閉めると、テーブルの上に置いていたヴァイオリンに視線を向ける。机の上にあるケースに手を伸ばし、ヴァイオリンを仕舞い込んだ。

走ってきたらしいアオイの足音が響いてくる。もうミナの部屋も覚えてしまったらしく、その足音に迷いはなかった。足音が止むと、今度は扉が開く。

「おはよう、アオイ」

ミナの言葉にアオイもまた笑顔で答えた。そしてミナの手の中にある黒革のケースに視線を向ける。近寄ってきて、ぽん、とケースに手をおいた。

「これ、なあに？」

「さっきのヴァイオリン。伯父様……えっと、お父さんの見たことない？」

「お家にはピアノしかないの」

アオイはきつぱりとそういった。ミナは納得したように頷く。ミナの家の血筋は音楽家として有名だ。伯父はたしか様々な楽器を演奏出来る。ミナも小さい頃、遊びも兼ねて伯父の演奏を聞いたことがあった。

ミナはとりあえずヴァイオリンに興味を示しているアオイを椅子に座らせ、古いヴァイオリンを持ってきた。アオイに追いついてきたシンが言う。

「それ、何？」

「アオイのお父さんから貰ったヴァイオリン。……弾いてみる？アオイ」

「うん！」

アオイは新しいおもちゃを手に入れたかのように嬉しそうに笑った。ミナはアオイにヴァイオリンの持ち方を教えると、一歩離れて耳を覆った。シンが首を傾げる。

「ええっと……こうかなあ？」

適当な弦に触れて、アオイは手を動かした。するとミナの予想通

り、耳障りな音が鳴り響く。思わずシンも両手で耳を覆った。アオイ自身も強烈な音に目を丸くする。

「な、なんか凄い音……」

シンの様子にミナは微笑む。

「最初は私もこんな感じだったから……」

一通り不快音をかき鳴らしたアオイは大きなため息をついてミナにヴァイオリンを渡した。ミナはそれを受け取ると、音を鳴らしてみせる。先ほどとは全く違う、ヴァイオリン独自の音色が響いた。

「アオイはお歌の方がいい」

口を尖らせるアオイにミナは苦笑する。じゃあ、とミナは楽器を持ち直し、ゆっくりと弦の上に指を滑らせ始めた。アオイは兎の様に椅子から飛び降りると、楽しそうに笑った。

「知ってる？この曲」

「うん！おかあさんに唄ってもらった」

アオイは音色の一つ一つを聞き分け、大きく息を吸った。シンは楽しそうに2人の様子を見つめる。アオイの幼い歌声が部屋の中を満たしていく。

『砂塵の向こうに見えしもの 逆さの塔か 逆さの城か

陽炎に隔てられた水源は砂地に消え 枯れた木々が砂煙に揺れ』

言葉の意味は全く理解していないらしいが、歌詞も音程もしっかり

りと把握できているようだった。ミナのヴァイオリンの音色がアオイの歌声を飾る。

『誰が知ろうか、風の終わりを 砂にまみれた千の物語を
一夜に消えた幻の、語られることなき表紙絵を』

アオイの歌声は幼さこそあるものの、その旋律は優しく響き渡る。強弱あるミナの演奏とよく交じり合っている。

『記憶を持つもの、皆死に逝き 存在さえも砂塵の中に
誰も知りえぬ物語 それを語るは果てしなき風……』

ミナのヴァイオリンの音色が、歌声の余韻と共にふわりと消えた。一呼吸おいてからシンは手を叩く。嬉しそうに、そして少し恥ずかしそうにアオイがミナを見上げた。

「上手、上手」

ミナの言葉にアオイは嬉しそうに笑った。

しばらくそうやって遊んでいると、外はゆつくりと橙色に染まり始めた。帰りたくないといつものように駄々をこねるアオイを宥め

て、ミナは庭の外に出た。シンとミナの間で手を繋いだアオイは口を尖らせながら、空の彼方に浮かぶ夕日を見つめる。

「そういえば、最初にうたった歌……僕知らなかったよ」

シンが思い出したようにそう言う。ミナは頷いた。

「うん。アオイのお父さんがつくった歌だもの」
「？」

アオイがミナを見上げる。しかしミナはシンの方を見ていて、こちらに答えてはくれない。シンは関心したように呟いた。

「へー。音楽家じゃないんだ？」

「そう。作曲とか作詞の方がいいって」

「だから一緒に住んでないんだね」

父親の仕事をはっきりと知らなかったアオイは、更に首をかしげた。確かに、仕事と言って何時間も机と向き合っている父親の姿を見たことはある。紙束を持ってどこかへ行くこともあったし、ピアノをいじっていることもあった。

ミナはアオイに視線を向けると、微笑んだ。

「アオイは大きくなったら何になる？」

「お歌うたう人！」

アオイは満面の笑みでミナを見上げた。そして嬉しそうにミナとシンと繋いだ両手を振り回す。青い瞳で道の先を見つめながら、笑った。

「それでね、お姉ちゃんとお兄ちゃんのけっこんしきでお歌をうたうの」

「!？」

アオイに全く悪気がないことは分かっていたが、突然そんなことを言われた2人は顔を赤くする。慌てたミナが話題を逸らそうとアオイに話しかける。シンはアオイに気づかれないようにあさつての方向を向いていた。

「あ、そ、そういえば、アオイのお母さんは何をしてる人なの？」

ミナの声が裏返る。しかしアオイは気づいていないようで、ミナの言葉に素直に答えた。

「お歌うたう人。アオイ、お母さんみたいになりたいの」

「きつとなれるよ」

シンの声にアオイは笑顔を浮かべた。

「うん！いっぱい練習して、ちゃんとけっこんしきでも歌ってあげるね！」

「ええっ、あ、えっと……」

葉擦れの音が3人の頭上を通り過ぎていく。夕焼けの下、伸びた影を踏みしめながら、他愛もないお喋りは、森の向こうに抜けていった。

第1章 果てなき海に向こう

夜の風は肌寒く、辺りを照らす仄かな明かりだけが水面を映し出した。静かな波が鼓膜に響いて、眠気を感じる。単調な音はこれ程までに眠気を誘うものなのだと、改めて思い知った。

シヨウは甲板から下を見つめて、息を吐いた。吐いた息が白く染まり、ゆっくりと消えていく。闇の色に染まって、溶けていく。

船室の人の気配も無くなり、乗船客は皆眠っているようだった。シヨウ自身も、仮眠の為につい先ほどアオイの看病をハルと交代した。けれど、自分の部屋に行く気はおきなかった。

シヨウは海に視線を彷徨わせ、ふと、顔をあげた。

「こんばんは」

急に背後からそんな声が響き、シヨウは振り向いた。

「！」

シヨウから5歩ほど離れた位置に、子供が立っている。12、3歳くらいで、姿は男にも女にも見える。中性的な顔に笑顔を浮かべて、子供はシヨウに一步近づいた。

「お兄さんがシヨウ・レインだね？」

男か女か判別しにくい声が響く。にっこりとしか形容できない表情で、もう一步踏み出す。暗くてよく分からないが、銀髪に、碧眼をしているように見えた。

「……」

シヨウは一瞬剣の柄に手をかけた。子供はそれに気付いていながら、表情を崩さない。貼り付けたような笑みで、笑いかける。

「やだなあ、警戒しないでよ。少なくとも僕は何もしない主義だから」

一歩。しかし足音はしない。シヨウはそこまできて口を開いた。

「……誰だ？」

「僕？僕は……そうだね、カイって呼んで。名前長いから、そのほうがいいし。」

でも、お兄さんが聞きたいのはそうゆうことじゃなくて……」

こうゆうこと？と首を傾げると、子供は左手の甲をシヨウの方に向けた。そこに彫ってあったのは、アオイを引き取りに来たあの協会達と同じ、神法協会の印。

剣を抜いたシヨウに、子供は頬をかいいた。

「だから、警戒しないでってば。僕は今別件の担当だし、ここでGod's Seedと出会っちゃったのは偶然だし。それでも安心出来ない？」

「……お前、神官だろ」

「そうだよ。やだなあ、だから安心できないの？お兄さん軍にいた割に悪意のある人となない人を見分けるの下手だね」

ケラケラと笑って、子供はシヨウを見上げる。カイと名乗った子供は、ふと空を仰いだ。星の無い空は冷たい空気を纏い、静寂のみが浮かんでいる。

「本当に、よく出来た筋書きだよねえ。君たちは何も気付いていない。気付きかけたGod's Seedは今、夢の中。本当に完璧過ぎて、拍手をする気も起きないや」
「何が……」

カイはふと無表情になり、神法協会の紋の彫られた左手で空を切る。何かを口の中で唱えると、その姿が揺らぐ。手足の先端からゆっくりと消えていく。

「!」

「Seedはもうすぐ目覚めるよ。でも協会は彼女を諦めたりなんかはしない」

碧眼を真直ぐショウに向け、カイは続ける。

「西大陸に着けば暫くは安全だよ。でも、その後は彼女次第。……いや」

体全体が透明な膜に覆われたように、カイの姿が消える。最後に声だけが、甲板の中に響いてきた。

「キミたち次第、かな……」

翌日、船は長い航海を経て、西大陸の地を捉えた。アキはそれを甲板で眺めながら、慌ただしく動き回る船員たちの足音を聞いている。ふと船室へと続く扉が開き、ハルが姿を現す。

「おはようございます」

精一杯の笑顔でそう言うと、ハルは表情を変えず挨拶を返した。そして海の向こうに見える大陸を見つめる。

「レイリアに着いたら宿を探した方がいいですよ」

「そうだな……」

レイリアとは西大陸唯一の港町でもある。船が出ているところには他にもあるようだが、貿易目的で開かれている町はレイリアのみだ。だが、しっかりとした統制をはかる機関が無いために、治安は悪い。海の先を見つめているハルの背中を見つめながら、アキはふと口を開いた。

「……ハル、聞きたいことがあるんですけど、いいですか？」

視線をこちらに向けたハルにアキは言いくそうに俯いた。

「私が気を失っていた間に、何かあったんですか？」

アキは視線を船室の方に向ける。ハルは首を傾げたが、すぐにその言葉の意味に気づいた。

「シヨウか？」

「はい。なんとなく……その、いつもと違うような感じがして」

大きな異変ではない。ただ、普段通りの接し方を意識的に行っているような、そんな違和感。リヨウのように、ただ心配で心がいっぱいになっているなら分かる。けれど、シヨウは何となく、『違う』ような気がしてならない。

ハルは視線をもう一度海原の先へ向けた。

「アオイに逃げろと言われて、シヨウには抵抗があったようだった」
アキが顔を上げる。その話は目を覚ました時に、ハルに聞かされていた。

「リヨウのように素直に嫌だって言えなかったから、ですか？」
「……それだけじゃないだろうな」

ハルの呟きにアキが首を傾げた。ハルの瞳は大陸の方を向いたまま、こちらを振り向かない。それに不安を覚えて、アキは問いかける。

「ハルは、その理由を知っているんですか？」

甲板の風がアキの髪を弄んで、去っていく。西大陸の方向へ、導くように、誘うように。

「……ああ」
「その理由、聞いちゃいけませんか？」

アキの声に、ハルはふと振り向いた。表情は相変わらず、無表情に近い。それでも、恐いとか、近寄りがたい雰囲気は無い。ハルは口を開いた。

「……以前アオイに同じようなことを言われた」

「アオイに？」

「ああ」

そこで会話は途切れた。沈黙が降りて、ただ波の音と船員の足音だけが辺りに響いている。それでもアキはハルの言葉を待った。その沈黙は、会話を断ち切るためのものじゃない。それを理解していたから。

「……最初から言っていれば良かったのかもしれないな」

ハルはふと視線を落とした。

「ハル。こうゆうことは私が言うべきことじゃないかもしれないんですけど……」

アキはハルを見上げる。しっかりと相手の目を見つめて、アキは笑った。

「選択を間違えるのは、誰にでもあることです。大切なのはその後どうするかじゃないでしょうか」

ハルが何かを言おうとしたとき、船室へ続く扉からリョウウが顔を出した。先日までの船酔いは楽になったらしい。ハルとアキの姿を見つけると、もうすぐ到着することを教えてくれた。

「アキ、アオイの荷物頼みたいんだけど」

「あ、はい。今行きます」

それじゃあ、とハルに言うと、アキは船室へと駆けていった。ハルはもう一度大陸に視線を向ける。迫ってきた陸地の向こうに、風が流れていく。

夜の帳が降りて静寂が部屋の中を包み込む。表通りでは未だに喧騒が絶えないが、少し離れた場所にある宿の一室にはささやかな月光と静けさが満ちている。雲間から光が差し込み、部屋を浮かび上がらせる。

神官の予言した3日目の夜。ベッドの上で眠るアオイの表情は変わらない。深い眠りの中に沈んだその横顔を、月の光が照らしている。

ベッドの隣には、椅子に座ったままうたた寝しているシヨウの姿。足元のミエルがうとうとと、半開きの目で辺りを見つめている。

風が時折音を立てて窓を揺らす以外に、変化のない真夜中の風景。その時、人形のように動かなかったアオイの体が、少しだけ変化を見せた。僅かだが、何かを求めるように指が動き、次いで寝返りを打つ。クッション脇のシーツを掴むと、顔を顰めた。額には汗が浮かんでいる。

最初に異変に気づいたのはミエルだった。ベッドに片足をつけ、アオイの様子を見つめる。しかし呼吸が荒いことに気づくと、椅子の上で眠っているシヨウに擦り寄っていった。

「……？」

目を開けたシヨウは欠伸をしつつミエルの様子を眺める。ミエルはベッドにもう一度片足を乗せると、アオイの背中を鼻でつついた。

「！……アオイ！？」

異変に気づいたシヨウはアオイの肩を揺らす。アオイの指先はしっかりとシーツを掴んだまま、離さなかった。顔を歪ませ、何かを呟いている。

「アオイ！！」

シヨウは肩を強く揺すった。力が入っていたせいか、握っていた左手が離れる。すると先ほどまでの呼吸が和らぎ、微かに瞼が開いた。シヨウが手を離すと、視線がシヨウの方へと向けられた。

「……アオイ？」

視線はこちらを見ているが、アオイに反応は無い。シヨウはその顔を覗き込み、もう一度問いかける。

「……分かるか？」

「……」

アオイはシヨウの顔を見つめ、微かに口元を動かした。やっと反応が返ってきたことにシヨウは安堵する。しかしアオイに表情はなく、硝子のような青い瞳は空中に彷徨っていた。

「今、水持ってくる」

シヨウはそう言つてアオイに背を向けると、扉を開けて出て行つた。アオイはゆっくりと窓の方を見やる。寝ている状態ではここが何処かは分からなかったが、それでも夜空に浮かぶ月を見つけることが出来た。

窓から差し込む月光を見つめ、アオイは口を動かす。水分を取っていないせいで喉は上手く声を出してくれない。掠れる声でアオイはゆっくりと目を閉じた。

「……」

自分は今何処にいるのだろうと、考える。長い間夢を見ていたせいで、夢と現実の区別がつかないような感覚に陥る。アオイはどちらが現実かを判断するためにもう一度視線を部屋の中に戻した。

丁度ドアが開かれる。ドアの向こうは暗闇で、シヨウの姿はベッドの隣まで来てやっと確認することが出来た。

「起きれるか？」

シヨウはテーブルの上にコップを置き、アオイの体を起こした。

コップを手渡すと、両手で慎重に受け取った。それでもまだ手つきが危な気で、口元まで運ぶのに時間がかかった。喉が潤うと同時に、水分が器官に入り込む。

「っ……」

「……大丈夫か？」

シヨウの言葉に、アオイは水を飲んだ後、少し間をおいて頷いた。

「………うん」

シヨウは椅子を引っ張つてくると、アオイのベッドの隣に置き、腰を下ろした。そして安堵のため息をつき、苦笑した。

「もう7日間も寝てた。……このままずっと寝てるんじゃないかって心配してたぞ、皆」

「……………7日？」

アオイは困惑したように視線を彷徨わせた。途端にコップが落ち、ベッドの上に転がる。しかし、殆ど中身の残っていなかったコップから出てきたのは水滴だけだった。

シヨウはそれを拾うと、テーブルの上に置く。

「……………どうした？」

「ちょっと……………頭の中が、ぐちゃぐちゃしてて……………」

アオイは頭を押さえると、俯いてしまう。シヨウはしきりに尻尾を振って構ってもらいたがっているミエルの頭を撫で、言った。

「……………なにかあったのか？」

シヨウ達がアオイを置いて外に出てから、教会が崩壊するまでは少々時間があつた。あの時、あの聖堂にはアオイと神官がいたはずなのだ。

アオイは首を振り、そして掠れた声で呟いた。

「……………ミナ、は？」

「あの後、見てない」

「そう……………」

沈黙が2人の間を包んだ。アオイは視線を窓の外に向け、何も見えない闇の向こうで月が照っている様子を見つめる。ふ、とその横顔に涙が流れた。アオイはそれを拭おうともせず、暗闇の彼方を視線で追った。

「アオイ……？」

ショウの言葉に、アオイは静かに口を開いた。涙で掠れる声で語りだす。

「……ずっと、夢を見てた……」

「夢？」

戸惑いながらもそう聞き返すショウに、アオイは頷く。頬を伝った涙が雫になって腕へと落ちた。それでもアオイは視線を窓の向こうへと向けている。

「……開拓地の小さな村で……女の子が幸せに暮らしてる夢……。両親がいて、友達がいて、賑やかで、夢があつて……」

ミエルがアオイの左手をしきりに舐めている。アオイを心配するときにするいつもの癖だ。アオイはミエルに微笑みかけるが、上手く笑顔にならない。

俯いたアオイは、涙で消えそうになる声で語り続ける。

「……でも」

アオイの耳元に、叫び声が聞こえた。先ほどまで見ていた夢が、脳裏にまざまざと蘇ってくる。燃え移り、火の粉を散らす森の小道を、踏み分けながら走る足音達。泣きながら、少年に手を引かれる

子供の姿。真つ赤な炎に青い髪が照らされる。

アオイは手を握り締めた。目を閉じればその様子が浮かび上がってくる。

涙で歪んだ視界の中で、子供は大人達を見ていた。アオイはそのイメージを頭から振り払うように首を振った。耳には、未だに子供の泣き声がまわりついている。

アオイは頭を押さえた。

「……でも……っ!!」

ふと腕を強く掴まれる。顔をあげると、シヨウが言った。

「無理に思い出さなくていい」

「……っ!!」

一気に涙が溢れてきた。アオイは顔を押さえ、声をあげて泣いた。それは夢の中の自分の泣き声と同じだった。伝ってくる涙を拭っても拭っても、とめどなく流れてくる。泣き止むことは簡単には出来なかった。

今まで、こんなに涙を流したことはなかった。しばらく感情に任せて泣き続けていたが、シヨウの視線に気づいて、呟いた。

「……ごめん」

「変に気を使われてもこっちが調子狂うって。……ただ、な」

シヨウの言葉にアオイは顔をあげた。

「もう2度と、ああゆうことはするなよ」

「ああゆう……?」

「あの聖堂で。……ああゆう判断は、したくないんだよ」

あの時、はつきりと決心がつかなかった。気持ちはリヨウと一緒に
だった。

それでもあの時、アオイに頼むと言われて、リヨウを引きずって
外へ出た。外へ出た後も、気持ちはリヨウと同じだった。

アオイがもしこのまま眠っていて、永遠に目を覚まさなかったと
したら、と何度も考えた。だからこそ、今こうしてここにいるアオ
イを見て、救われたような気分になっている自分がいる。

アオイはシヨウの表情を見つめ、頷いた。

「……うん」

「少し……落ち着いたか？」

「多分……」

アオイはそう答えると、椅子の脇から顔を出しているミエルの頭
を撫でた。しきりに手を舐めるミエルにアオイはやっと笑顔をつく
った。安堵するシヨウに、アオイはミエルを見つめながら呟いた。

「さっきの、夢の話で……聞いてもらいたいことがあるんだけど、
いい？」

気持ちよさそうにアオイの手を撫でられているミエルを見つめ、
シヨウは頷く。

「……夢の中で、女の子には両親がいたんだけど。父親は音楽家の
家系で、母親は歌い手の仕事をしてたみたいだった。その2人が、
子供のことを……」

アオイはミエルを撫でる手を休め、ゆっくりと呟いた。

「……アオイ、って……」
「！」

シヨウを見上げ、アオイは頷く。その予感に夢を見ている間、ずっと心の中にあつた。それでも、夢から覚めてしまった今、両親の顔ははつきりと思い出せない。

「私もそう思った。でも……」

ミエルがこちらを見上げている。アオイは手元に視線を向け、言った。その声は、動揺によって掠れていた。

「その『アオイ』は、ミナ・クレセントの従姉妹だった」

「！？」

「……夢の中に、ミナとシンが出てきた。『アオイ』の、唯一の友達で……顔も幼かったけど、確かに似てた」

これを自分の記憶として考えるには抵抗があつた。アオイが協会に連れてこられる時期と、確かに一致している。

けれど、信じられない。信じられる証拠が欲しいわけではない。ただ、あまりにも幸せな思い出が今とは対称的過ぎて、実感が湧かなかった。

「全部を信じようとしているわけじゃないけど……」

アオイはそう呟いて、そこで言葉を止めた。信じられない。けれどもこんなに歯切れが悪く思ふのは何故なのだろうか。自分で自分に問いかけても、答えは見つからない。

アオイは息を吐き、顔をあげてシヨウに視線を向けた。

「……あれが本当のことなのか、知りたい」

シヨウは頷くと、自分の所に寄ってきたミエルの頭を撫でた。

「旅の理由はそれぞれだし、いいんじゃないか？」

「まあ、ね。……でも結局、シヨウは何か分かったの？」

ここまで共に過ぎしてきたけれど、シヨウが積極的に自分の記憶を探している様子は見たことが無い。時折頭痛を起こして寝込んではいるけれど。

アオイの言葉に、シヨウは表情を緩ませた。

「何も。でもこうやってるうちに思い出せるんじゃないかと思ってる」

しかし、言葉とは裏腹に、その瞳には自分自身への疑念が浮かんでいる。アオイはそれで大体を理解した。その上で、あえてそこには触れないでおく。

「こうやってっていうのは旅をしている中でってこと？それとも、頭痛堪えて人の看病してる中でってこと？」

アオイは大げさにため息をついてみせる。シヨウの眉間に人差し指を押し付けると、皮肉めいた口調で言った。

「頭痛堪える前に薬飲んだら？船の中なんだから行商の人くらいいいでしょ」

「本っ当に、可愛げのない奴」

アオイの指を避けたシヨウが顔を顰めた。

「それはどうも」

につこりと満面の笑みでそう言つてやると、シヨウは肩を落として負けを認めた。椅子を立つと、背伸びをする。

「じゃあ病人も回復してきたようだし、俺も寝るかな」
「はいはい」

アオイは追い出すように手を振つてシヨウを見送る。名残惜しうにシヨウの後姿を見ていたミエルが気遣うようにこちらを振り返った。アオイは扉を開けたシヨウに声をかける。

「シヨウ」

振り返ったシヨウに、アオイは言う。その眼差しは真剣だったけれど、多分シヨウにはこちらの表情が見えていない。呟いた言葉は、掠れて相手の耳には届かなかった。

「……」
「え？」

聞き返したシヨウにアオイは首を振つてみせた。

「なんでもない。……おやすみ」

第1章 かつて交わした問い

夜が明けた後は大変だった。まずリヨウが部屋に転がり込んできて、その物音に気付いたアキもまた駆け込んできた。ハルが来た時には、大騒ぎしているアキやリヨウを宥めるアオイの姿があった。入り口前に立ってため息をつくハルにアオイは苦笑する。アキに抱きつかれたまま、頬をかいだ。そして言う。

「……おはよう」

「ああ」

ハルはとりあえず近くの椅子に座る。アオイはアキを宥めると、とりあえず彼女を放した。そしてゆつくりと3人の顔を見る。言葉に迷ったが、自分の思ったままに口にした。自然と頭が下がる。

「心配かけて、ごめん」

泣き止まないアキがまた目を擦る。先程まで一緒になって泣きそうだったリヨウは、堪えるように大きく深呼吸した。ハルはアオイの方に視線を向ける。

「いつ起きたんだ？」

「昨日の夜。……そういえばシヨウは？」

首を傾げると、アキとリヨウもまた、顔を見合わせた。ハルだけが静かに扉の向こうを指差す。シヨウの部屋は、アオイの向かい側に位置しているのだ。

「寝ているようだったが」

「起こしてきましようか？」

アキの声に、アオイが首を振る。

「いい。寝かせておいて。頭が痛いとか言ってたから」

じゃあ、後で何か食べ物持っていきますね、とアキが言う。アオイは頷くと、椅子に座っているハルに視線を向けた。足元のミエルが体を伏せたまま欠伸をしている。

「……ねえ、ハル。東大陸のハーネルスっていう街、知ってる？あ、街じゃなくて村かもしれないけど」

突然の問いかけにハルが顔を顰める。しばらく考えるように視線を落としていたが、諦めたように視線を上げた。

「開拓地域か？」

「分からないんだけど……でも……多分、そんな感じだと思う」

アオイはあの夢を思い出すように空中に視線を漂わせた。森の木陰と葉擦れの音が脳裏に蘇ってくる。シンとミナと走り回った、心地よい夢の思い出。幸せと平和から生み出される安息。

話を聞いていたアキは、ミエルの頭を撫でながら言う。

「そこがどうかしたんですか？」

「……ちよつと、ね」

アオイは曖昧に笑って言葉を濁した。アキは首を傾げたが、それ以上追求してこなかった。奥のほうにいたリヨウは何か言いたそうにその様子を眺めている。ハルだけが表情も変えずに地図を広げる。

「開拓地域は小さな街や村全てに地名が付けられている。それを全部把握するのは無理だろうな」

「……分かった」

アオイはアキに遊ばれているミエルを見つめながら、そう答えた。アキ達に夢の話をしなかったのは、アオイ自身もあの夢に確信が持てなかったからだ。

「東大陸に着けば分かるかもしれないが……」

ハルはそう呟いたが、アオイはまた曖昧に笑顔を返したただけだった。

足音がする。少し後方から、追いかけるように走る靴音。乾いた土は足音を響かせ、闇夜の森は、侵入者の気配に敏感にざわめいている。怒鳴り声や、何かを言い合っている声が聞こえる。

足音がする。枝を掻き分ける音に混じって、荒い息使いが聞こえてくる。追ってくる気配は消えてくれない。祈っても、願っても、この状況は変わらない。

そういえば昨日もこんなことがあった、と思い出す。そのせいか酷く眠い。背後から迫ってくるのはどうやら人の気配だけではなく、

睡魔も一緒らしい。苛立ちより先に泣きたくなった。

ふと足を止める。少し距離が出来たのか、後ろを走る靴音に迷いが出てきた。何人かの男たちが『どこへ行った』『逃げられたか』と話している。木陰に潜り込み、身を縮めていると気配はその横を通って消えていった。

安堵のため息と共に、疲れがピークに達した。フラフラした足取りで、追いかけてきた彼らから離れる。道なんてとうの昔に見失ってしまっている。迂回していなければ、いつかは何処かへたどり着けると信じて、枝を掻き分け、更に奥へと足を進めた。

いつの間にか、雨が降り出している。ため息が漏れた。何度目かは覚えていないが、それでも数えきれないほどだ、ということだけは覚えている。

体に当たった雨粒が体温と、心を冷やしていく。

冷たさと、空しさと、理由の分からない恐怖と、孤独。泣き出す気力はとづくに失っていたが、頬を流れる雨の雫がその代わりを果たしている。

『どこ行くの?』

いつか交わした言葉が脳裏を過ぎった。しかしそれも、今は森のざわめきと同じ雑音でしかない。幾度か耳にした声が、何処からか答えてくる。

ふと、腰の小さなナイフを取り出して見つめてみた。銀色の刃さえも闇の色に溶け込んでしまっている。果物用のナイフよりも鋭利で、けれどそれ以上の使い道がなさそうな刃物。何より、それを手にしている右手は、小さ過ぎる。

『……何するの?』

これにくれた人が、その時初めて笑ったのを覚えている。その笑

顔は、どんなに美しい少女のそれよりもずっと綺麗だった。触れれば、こちらが血を見てしまいそうなほどに美しく、鋭利で、危険な、人。

どこかが壊れていると知るとはまだ幼い彼には出来ず。

一人ぼっちになってしまった彼の上に、冷たい雨が降り注いでいる。

扉のノックする音に気付いてシヨウは体を起こした。視線を向けると、中を確認するように顔を出したアキと目が合った。

「あ、起こしてしまいましたか？」

シヨウは夕食を持ったアキを見て、もう日が暮れていることに気付く。

「……ボーっとしてた」

頭痛は治まったが、まだ頭の中に靄がかかっているように感じる。寝ていたわけではないが、時間を忘れるほど物思いにふけていたのは確かだ。何を考えていたのかは、覚えていない。

珍しい返答にアキはクスと笑った。

「お年寄りみたいですネ」

「……アキ、最近アオイに似てきてないか？」

悪気はないと分かっていたが、シヨウは項垂れてそう呟いた。アキはテーブルに夕食を置き、アオイを含めた他の3人はもう食事を取ったことを伝えた。もちろん、今まで何も口にしていなかったアオイに普通の夕食は食べれるはずがないので、最初はスープ等を食べさせるつもりだ。

そういえば、とシヨウが顔を上げる。

「アオイは？」

「部屋にいます。動きたがるんで、リヨウが見張ってるんですけど」

苦笑を漏らすアキにシヨウは大きく息を吐いてみせた。

「じっとしてられないってのは、子供だな」

「シヨウだって、アオイが起きるまであんまり寝てなかったじゃないですか」

アキは意地悪に笑いながらそう答えた。シヨウはベッドから降りると椅子に座り、アキにも椅子を勧める。

「……なんか棘がある言い方だな」

腰掛け、アキは頬を膨らませた。食事を口にするシヨウをじっとした目で見つめている。

「羨ましいんです」

「誰が？」

急に何を言い出すのかとシヨウはスプーンを口にしながらまと言返した。アキは軽いため息をつく、テーブルに頬杖をつく。

「シヨウが、です」

「はあ？」

「アオイが起きたら、なんて言えばいいのか、どう接すればいいのか……すごく悩んでたんです」

アキはカーテンの閉まっていない窓の向こうに視線を向けた。まだ街の明かりは賑やかだが、一つ壁を隔てたこの部屋には2人の人間の会話しか響いていない。

シヨウはスープを口にしながら、アキの顔を見ていた。

「魔力を無くすということは……多分、それを持たない人には分かりにくいことかもしれないですけど、凄く辛いことなんです」

アキの瞳には硝子の更に向こうにある、紺色の空が浮かんでいる。シヨウは確認をとるように、アキに問いかけた。カイに会ってからずっと考えていたことを。

「……でも、魔力がなければ協会に追われることもないだろう？」

「そうかもしれませんが、でも……」

アキは一呼吸置いて首を振った。その話は、してもキリがないと思ったのだろう。視線をシヨウに戻すと、また頬を膨らませた。

「……とにかく、私なりに色々考えてたのに、シヨウが全部取っちゃったってことです」

ふい、と顔を逸らしたアキ。どうやら本音が出たらしい。やっと

その意味に気づいたシヨウは心当たりがないわけでもないの、あえて話題を逸らした。

「……随分傾倒してるんだな」

スプーンを置いたシヨウはそう呟いた。アキは頬杖をついたまま、またため息をつく。

「協会の下の人間は、みんなそうですよ。アオイ様の素晴しさばかりを聞いてますから。でも……もしかしたら、私はまた別なのかもしれない」

あの路地で、アオイとぶつかったのが始まりだった。もしあの時、使いに行っていたのが自分以外の誰かだったとしたら、今の自分のように協会を捨ててここまでついて来ただろうか。アキはそう考えながら、目を閉じる。

「協会に入る前……私は、ファアラという一族の村にいました。一族はもつとも協会に肩入れをしていた召喚士一族で、大人になつたら協会に入るのが当然のこととされていました」

「それでアキも？」

シヨウの言葉に、アキは頷く。緑がかつた髪が揺れた。

「はい。もともと私は三大召喚の一つを操ることの出来る血筋で、私が生まれる時には大婆様が色々と言ったそうです。ちょうど先代の、三大召喚士の一人が亡くなった年だったので、次に生まれる子供に『緑の悪魔』が宿るだろうと、言われていました」

「アキの召喚する、あれか？」

アキは頷き、そして首を左右に振った。微かに自虐的な笑みを浮かべて、違います、と断言する。

「確かに、あれが『緑の悪魔』です。でも、私の力はバランスが悪くて、片腕しか出てきてくれない。……それを知ったときから、周りの人々は急に私から離れていきました」

シヨウは無言で、話の続きを促した。アキはゆっくりと一つ一つのことを思い出すように、言葉を紡いでいく。

「私は、いわば宝の持ち腐れのような存在でした。期待していたのは、一族だけじゃなく協会も一緒に……もし完全な力を持っていたなら、中央の協会に入れるか、それとも……」

アキは息をついて、シヨウを見つめた。

「God's Seedの候補として、数に入れていた、と」
「！」

アキは気を持ち直して微笑んだ。

「でも、羨ましいとか、そうゆう気持ちはありませんでした。他の三大召喚を受け継いだ人たちも早々に候補から落とされたので。今思えば、候補にならなくてよかったと思っています」

アオイの経験や過去を知る度に、背筋が冷やりとする感覚を覚えた。もしそれが自分だったら、と思い、同時にアオイを『成功していたかもしれない未来の自分』として見ていた。

「……アオイは、私たちの三大召喚とは比べ物にならないほどの魔

力を持っていました。だからこそ、逆に惹かれていたのかもしれない
せん」

「……」

アキは話し終わると、シヨウの食器が空になっていることに気付いた。どうやらかなりの間話し込んでしまったらしい。

「あ、食べ終わったなら持っていけますね」

「ん？ああ」

食器を重ね、アキは思い出したように顔を上げた。また寝ようとベッドに寝転がろうとしているシヨウに問いかける。

「そういえば、ハルと話しましたか？」

「ハル？……そういえば、さっき廊下ですれ違った時に声かけられたな」

朝、ハルとすれ違った時に声を掛けられ、頭が痛いことを伝えた。それ以外は部屋に籠もりつきりだったため、誰とも顔をあわせていない。

アキは首を傾げる。

「何か言ってませんでしたか？」

「いや、別に」

シヨウの答えに、アキは少し表情を曇らせたが、すぐに笑顔に戻り、食器を持って部屋を出て行った。残されたシヨウは寝転んだ体勢で天井を見上げる。

目を閉じると、睡魔が襲ってきた。今回は頭痛無しでゆっくり眠れそうだと安心する。そして意識はゆっくりと、堕ちていくように

睡魔の海に沈んでいった。

第2章 知る覚悟

眼下に見える街は、降りてみたことは無いけれどあまり安心できる街というわけではないらしいと、ここ数日ベッドから眺めていたアオイは知った。そんなつまらないことを考えなくてはならないほど、退屈していることも知っている。

安静をアキやリヨウだけではなくハルにまで言い渡されたアオイはつまらなそうにミエルの頭を撫でた。

「少し歩いてくるくらい、駄目なの？」

街で買ってきたらしい見たことのない果物と格闘していたアキが隣でのほほんと微笑む。

「外は危ないみたいですから。剣が使えないと」

「もう使えると思うんだけど」

「駄目です、もう少ししてからじゃないと……っ」と

アキの危なっかしい動作にアオイが頭を抱えた。先ほどから、手を切ったりはしないものの、危うい手つきで果物を捌いている。どうみても切り方がおかしいのだが、アオイ自身も正しい果物の切り方などは知らず、我流の為に私的は出来ない。

アキは数十分果物と格闘していたが、ドアをノックする音に気づいて振り向いた。

「はい…っ」と

危うく親指の付け根に刃を滑らせそうになり、慌てて手を引く。扉を開けたハルが顔を顰めてアオイを見た。後ろにいたシヨウも顔

を出す。

「何してるんだ？」

アキではなくアオイに尋ねたのは、正解だった。アオイはアキを指差し、明らかに呆れた表情で答える。

「ナントカフルーツのおろし中。誰に食べさせる気かは聞かないで」「だって切りにくいんですよ、これ」

三枚おろしとしか形容しようのない物体をつまんで、アキが言う。ハルは無言で椅子に座り、後ろにいたシヨウが残りの果物を手に取った。黄色の皮に中身は薄い桃色をしている。

シヨウは果物と、アキが三枚におろした輪切りを見つめてため息をつく。

「これは普通こうゆう風に……」

ナイフを手にとったシヨウは、慣れた手つきで皮をむいていく。アキが数十分かかったところを数分もせずに切り終えた。目の前に出してやると、アオイが感嘆の声を漏らす。

「へえ、調理場見習いしてただけのことはあるんだ」

「まあ、下っ端だとこんなのはつかやられるからな」

シヨウがアキに視線を向けると、またジトつとした目で見つめられた。シヨウは慌てて言う。

「いや、こうゆうのって個人差があるだろうし」

「じゃあ、教えてくれませんか？」

「えっ」

はい、とナイフと果物を手渡すと、アキはシヨウを引っ張って部屋を出て行くとする。アオイは笑うのを堪えながら、引っ張っていかれるシヨウの後ろ姿を見ていた。ハルが呆れたような顔をする。

「……それで、具合は？」

ドアが閉まる音を確認してハルはアオイに尋ねた。アオイはアキの残していった三枚おろしの一つをつまみながら言う。

「一応これくらいのものは食べれる感じ」
「そうか」

ハルの足元に座り込んだミエルが、眠たそうな顔をしている。アオイは窓の外に視線を向けると、ふと身を乗り出した。茶や灰色の建物の中に、一つ、二つと白いものが舞っている。アオイは窓の上から降りてくるそれを見つめて、呟いた。

「何、これ……」

気付いたハルが同じように視線を窓へ向ける。

「雪、だろうな」

「ゆき？」

首を傾げるアオイにハルは意外そうな顔をした。

「知らないのか？」

「多分」

本で読んだことはあるかもしれないけど、とアオイは窓の上を見上げるようにしながら呟いた。ハルはすぐにその意味を理解する。そして立ち上がると、窓を開けた。

冷たい空気が流れ込んでくる。

「空気中の塵が水分と共に固まって出来る。たしか、東大陸の文献にそうゆう仮説があった」

部屋の中に舞い込んできた雪が、床につくとすぐに消えた。後には水滴が残るだけだ。アオイは更に身を乗り出し、空を見上げる。太陽の翳った空から、いくつもの雪が降りてくる。

「……雪」

アオイは何度もその言葉を口の中で呟いた。覚えるように、というよりも思い出すようにと言ったほうが近いかもしれない。

ハルは窓を閉めると、アオイの方を振り返った。

「どうした？」

「見たことがあるような……気がして」

アオイはベッドに体を預けると、何かを思い出すように手元を見つめた。

「南大陸以外では、季節になれば何処でも降る。何処かで見たとしても、おかしくはないだろう」

アオイは頷いて、ハルの顔を見つめた。膝の上で両手を組み、軽く息を吐き出す。外の空気に当たったせいかな、少し部屋の空気が肌

寒く感じた。

「……協会に、連れてこられる前に見たのかと思って」

「ありえるかもしれないな」

「ハルは見たことあるの？」

アオイは傍らに置いていた上着を着ると、足元で寝ているミエルに視線を向けた。どうやらこの寒さを感じていないのはミエルだけらしい。

ハルは粉雪を見つめながら呟いた。

「以前、東大陸に行ったことがある。その時に見た。たしか、リョウも一緒だったな」

「アキは多分見たことがあるでしょ、あとは……」

シヨウの名前を口にしようとして、アオイは思いとどまった。シヨウはこれを見たことがあるのだろうか。

言い留まったアオイの代わりに、ハルが口を開く。

「……シヨウも、見たことがあるはずだ」

「え……？」

アオイはハルを見返した。ハルは漆黒の瞳を窓の向こうへと彷徨わせている。何も言わないハルに、アオイは言う。

「ねえ、ハルは何か知ってるの？……シヨウのこと」

ハルは視線をアオイへと戻し、頷いた。そして答える。アオイははつきりと、肯定の言葉を聞き取った。

「……ああ」

廊下を引きずられながら、シヨウはふと窓の外に視線を止めた。腕を引つ張っていたアキが首を傾げて立ち止まる。そしてそれに気付いたように指をさした。

「あ……！雪が降ってますよ、シヨウ」
「あー、どうりで寒いはずだ」

西大陸は土地によって気温差が激しい。この街から北に行けば寒さの厳しい丘陵地帯があり、西の山を越えれば砂漠地帯の広がる地域に出る。

そんな当たり前の知識を思い返しなが、シヨウは空の上を見上げた。曇り空から、いくつもの雪の結晶が舞い落ちてくる。綿毛のように、羽のように柔らかく、空中を純白に彩っている。

「雪、積もるといいですね」

旅の途中だということも忘れて、アキがポツリとそう呟いた。シヨウは視線を雪から離すと、廊下の向こうを見る。どうやら買い物から帰ってきたらしいリヨウが、こちらに歩いてくる。

「リヨウ、何処行つてたんだ」
「アキに頼まれて色々……」

リヨウは紙袋を抱いたまま、ニコリともせずに呟いた。服の袖で両手を隠し、白い息を吐いている。廊下の中まで、冷たい空気が入り込んできていた。

アキはリヨウから紙袋を受け取ると、にっこりと笑って外を指差す。

「リヨウ、雪ですよ、ほら！」

「……う。綺麗だとは思うんだけど……」

今にも歯をカチカチ鳴らしだしそうなリヨウは、曖昧にそう言った。もともと暖かい地方生まれのリヨウにとって、この地方の冬は耐え難いものらしい。シヨウは苦笑して、リヨウの肩を叩いた。

「それじゃとりあえず、部屋の中に入ってゆっくりするか」

「うん……」

頷いたリヨウは、ふとアキの手元にある小型ナイフと三枚におろされたフルーツに視線を止め、首を傾げる。

「……アキ、それ何？」

「珍しい果物なんですよ、あ、リヨウも食べますか？」

微笑んで皿ごと差し出されたリヨウに、シヨウが隣で腹を押さえて笑い始める。リヨウは見事輪切りになった得体の知れない果物をつまみ、じつと観察し始めた。こんな切り方をされると、もとが一体どんな果物だったのか想像がつかない。

「あ、ありがとう……」

とりあえず礼を言いながら、リョウはシヨウの部屋の中に足を踏み入れた。ニコニコしているアキと、今にも吹き出してしまいそうな様子のシヨウが後に続く。

扉が閉まる音が響いた。

「……シヨウが、ティス二―国軍の軍基地の前で拾われたことは知っているか？」

ハルはため息にも似た呼吸を置いて、アオイの顔を見つめた。アオイは頷く。

「前に、シヨウが言ってた」

「そうか」

しばらく、思い沈黙が2人の間を包んだ。アオイは両手を組んだまま、何も言わないハルの顔を見ている。次の言葉を促すように。ハルは首を振った。

「先に言うべきはそうゆうことではないな」

アオイの視線をはつきりと受け止め、ハルは口を開く。

「……アオイ。一つ聞いておきたい」

「何……？」

「シヨウの、過去を聞く覚悟があるのか？」

ハルの言葉に、アオイは反応する。

「覚悟って……？」

「言葉通りの意味だ。……これはシヨウの問題であって、アオイが口を出すことではない。」

この件に干渉してしまえば、後には引けないということだ

ハルの眼差しにアオイは俯き、そして逃げ場を求めるように小さく息を吐いた。胸の苦しさも吐き出してしまおうと、何度か息を吸い、そして吐く。それでも、それが自分自身の中に原因があるのだと、心の何処かで分かっている。

『アオイ様が誰にも触れようとしらないのは怖いからなんですな』

アキの言葉が脳裏をよぎる。そうだ、いつだって私は誰かに触れるのが、干渉するのが怖かった。私の触れたものは、全ていなくなってしまうから。協会に奪われてしまうから。

『誰かを信じることは難しく、信じすぎることは愚かだ。でも……』

シエルが、私に教えてくれたことを、ずっと忘れていた。きっと誰も、独りになれるほど強くはない。

そしてゆっくりと、アオイは口を開いた。

「覚悟は……ある。あの時、分かったから」

この人達は仲間なのだ、と。

ハルはその言葉の意味を理解し、頷き、そして語り始めた。窓の外からは雪の舞う静寂が響き、ガラス一つ隔てた空間を羨むようにして純白の結晶が降りていく。

ハルの声が静かに聞こえてきた。

「あれは13年前……シヨウが軍に拾われる、数ヶ月前の話だ」

第2章 滅びへと導く糸

何処行くの、と子供は言った。その手を引く女は、人を殺すために遠い所へ行くの、と呟いた。どうして殺すの、と子供は尋ねた。女は子供を見下げ、知っているはずよ、と誤魔化した。いや、それは案外子供の問いの核をついていたかもしれない。

雨の降りそうな、暗雲漂う雲の下。少年は初めて乗る船の甲板で、辺りの海を眺めていた。代わり映えのしない、真っ青な景色だったが、それでも時折魚の影が見えたような気がして、少年は満足していた。

空は今にも振り出しそうな雲行きだった。何処までも続く分厚い雲を目で追っていくと、甲板の先の手すりに腰を下ろした女の姿が見えた。銀の髪をした、美しい女だ。顔立ちはすつきりとしていて、醜いところは何処にも見当たらなかった。しなやかな体に、すらりと伸びた背。細すぎず、太すぎず、適当な筋力を備えていそうな腕。長い髪が潮風に揺れている。

少年が駆け寄ると、女はその手で弄んでいた人差し指ほどの銀細工の棒を懐に仕舞いこんだ。美しい装飾をされた鍵だった。それは何。

少年の下心のない問いかけに女は微笑みもせず答えた。鍵、と。そう言つて少年の小さな手に握らせる。

少年は鍵を握ったり、目を細くして装飾を眺めていたが、すぐに飽きてそれを女に返した。女はそれを受け取り、空中に放り投げる。一定の高さに達した鍵が、また落下してきた。女はそれを受け止め、呟く。

船が大きな島に向かって大きく船体を揺すった。少年は遠くに見えてきた船着場と、その先に見える城下町に視線を奪われる。

「そろそろ着く。準備を」

少年の背中を押し、女はそう言った。少年は無邪気に微笑むと、船室に向かって走り出した。女はそれを見送り、風に揺れる銀の髪を押さえた。頬を抜ける潮風を追って、島へと視線を向ける。そしてその形の良い唇で、空中に囁いた。誰にも向けられない、ただの独り言。

「神よ。我々の戦いに勝利を」

言いなれた謳い文句に、彼女は皮肉な笑いを浮かべた。

「オートブラッド？……それが、13年前の襲撃を起こしたの？」

アオイはハルに視線を向けた。そんな言葉は本でも読んだことがない。それでもハルの会話から、それが何処かの一族の名前だということに気付いた。

ハルは頷くと、膝の上で組んだ両手を見つめる。

「北のシェディーラウス国の辺境に住む、身体能力が異常に高い一族だ。一族という固定概念が強く、他の地域の者が自分たちの領域に入ってくると有無を言わず殺した。……元々人を殺すことについて依存しやすい血だという噂があるが」

ハルはそこまで言うと、口をつぐんだ。アオイは首を傾げる。

「？」

「……彼らは別名『殺し』の種族とも呼ばれた。そのせいで語り草にもなっている」

「北大陸の話なのに、ティスニーにも伝わってるの？」

アオイの問いにハルは頷いた。足元のミエルが尻尾を振りながらアオイのベッドに擦り寄ってくる。アオイはそれを撫でながらハルの答えを待った。

「……オートブラッドは世界に忌み嫌われた種族と言われている。名前を聞くのすら嫌がる人間も多い」

ハルの表情が険しいことに気づいたアオイは、顔を顰めた。

「……そんなに……？」

「ああ。だからティスニーの軍基地はたった一人に殲滅されかけた。そう考えれば、オートブラッドの脅威は理解できるだろう」

「……うん」

アオイは頷きながら、シェデーラウスの持つ勢力の大きさを考えていた。神法協会、召喚士一族ファアラ、そして殺しの一族オートブラッド。彼らはそんなものを寄せ集めて何をする気なのか。

ハルはアオイのベッドに擦り寄っているミエルの頭を撫でながら、言う。

「13年前、城が襲われるより先に軍の機能が失われた。軍に進入したのは、城を攻める際の時間稼ぎの役割もあると考えられている」

アオイは相槌を打ちながら、ふと顔を上げた。状況を整理していくうち、不安が心を覆い始める。ハルは手元に視線を向けながら、話続けた。

「オートブラッドの女は基地を襲い、被害を大きくしたが、深手を負わせることに成功した。……だが、捕らえることまでは出来なかった」

「……どうして？」

「自分が捕まる前に海に飛び込み、自害したからだ」

少年は林の中で辺りをうかがっていた。空間を隔てるように閉められた門の先で、幾人もの人間が鮮血の水溜りの中に倒れている。叫び声が木霊し、それに呼応するように港からもそれに似た雑音が聞こえてきた。

いつの間にか、基地の裏手側からゆらゆらと明かりが揺れた。風を含み、その光の尾が天上へと浮かび上がる。周りの木々を巻き込み、炎が舞い上がった。屋根へと燃え移り、ゆっくりとその火の手が広がっていく。そこに、人影が見えた。

少年は一步、足を踏み出し、閉じられた門からそれを見上げた。そこには、もう生きている人間はいない。折り重なるように倒れるいくつかの死体を乗り越えて、少年は門に近づいた。

火の手の前で、基地の中央を見下げる女の姿。重症を負ったのか、わき腹を抑え、少し顔を曇らせている。下では数人の兵士達が長銃を持ち、構えている。女は視線を上げ、街の向こう、丘の上に立つ城を見つめた。城にも、小さな火の手が上がっている。

女はふと口の端を上げ、ずっと身につけていた鍵を手にした。手に馴染んだ鍵の形を、忘れることのないように握り締め、そして目を閉じる。女の銀の髪が、風に揺れる。

炎の光を反射した鍵が、闇の彼方へ投げ捨てられる。そして、女の体がひととき高く跳んだ。

「……！」

少年は門の格子を掴んだ。基地の中から、兵士達の声が響いてくる。

「逃げられたか!？」

「いや、後ろは海だ、あの傷で生き残れるはずがない」

少年は呆然と、先ほどまで女がいた場所を見つめていた。そして、女が投げた鍵のことを思い出す。何の変哲もない、どこにでもある鍵。それを捨て、女は海に身を投げた。

幼心にもその意味が理解出来たのか、少年は格子を握り締め、そして呟いた。

「……ルティ……」

彼女は自分のことを名前でしか呼ばせなかった。周りの人間も、彼女をそう呼んでいた。少年はそれを真似して、彼女を名前で呼ぶようになった。

けれど生まれた日から、彼女を本当はこう呼ぶのだと知っている。

「……かあ、さ……っ」

とめどなく涙が溢れ、視界を覆い隠していく。最期の最期まで、彼女はそう呼ばせてはくれない。

「！……待つて！」

淡々と語られてゆく過去に、アオイは声をあげた。ハルはそうなることが分かっていたかのように息を吐き、視線をアオイへと向けた。

「それじゃ……それじゃまるで……」

言い返す言葉が喉元で詰まり、アオイはそう呟いた。言い出せない言葉が重みを増して、奥底へと沈んでいこうとする。けれど、その重みだけは消えることはない。

沈黙が二人の間に降りてくる。アオイはそれを振り払うように、口を開いた。けれど、思うように声が出てきてくれない。掠れた言葉が漏れる。

「……シヨウは……」

ハルはアオイの言葉を継いで、言った。

「シヨウは13年前ティスニーとティスファーを襲った、シエディ
ーラウスの人間……」

刻々と伝えられる事実にあオイは俯いた。シートを握った手を見
つめながら、いつかハルが言っていた言葉を思い出す。

北方の、体に特殊な刺青をした種族。人並み外れた戦闘能力、
『人の形をした魔物』。

「……オートブラッドだ」

以前、リヨウ達とはぐれた時、シヨウの看病をしたことがあった。
あの時は額にあったのはアザか何かだろうと思っていた。刺青なら
本の中だけではなく、何度か見たこともある。けれどそれと気付か
なかったのは、時の流れのせいだ。子供の頃に入れた刺青が、未だ
にしっかりと形を保っているわけがない。

アオイは首を振り、ハルを見上げる。

「でも、それだけで判断するのは……！」

ハルはアオイの肩に手を置いた。冷静なハルの表情を見て、自分
が動揺していることに気付く。ハルは目を細めて言う。

「……ルティ・アルハが自害した後、シヨウの行方は分からなくな
った。そして東大陸からの援軍が到着し、終息に向かいつつあった
頃、市民の間でオートブラッドの大規模な残党狩りが行われ始めた」

それくらい国中が荒んでいた状況だった、とハルは呟いた。アオ

イは無言でハルを見上げ、話の続きを促す。ハルは頷いた。

「シヨウの行方が分かったのは、それから数カ月後のことだ」

足音がする。少し後方から、追いかけるように走る靴音。乾いた土は足音を響かせ、闇夜の森は、侵入者の気配に敏感にざわめいている。怒鳴り声や、何かを言い合っている声が聞こえる。

いつか渡された短剣を片手に、少年は走っていた。息が切れ、鼓動が煩い。吐き出した息が白く染まるが、雨がすぐにそれをかき消してしまう。両足が、ただ前に踏み出すためだけの棒になったかのように感じられる。泥に足をとられそうになり、なんとか踏みとどまるものの、後ろから追ってくる人々の足音が自分を休ませてはくれない。

隠れる場所を探す、それと同時に隠れきれるかという不安が湧く。逃げ切るしか道はないと心の中の誰かがそう叫び、隠れてやりすごしたほうがいと別の誰かが叫んでいる。

そんな自分自身に耳を塞ぎ、少年は闇雲に駆け抜けた。

「……どこへいった!？」

「まだ近くにいるぞ、用心して探せ!！」

どうして自分は追いかけられるのか。どうして自分は殺されなく

てはならないのか。そんな死の恐怖に身震いする度に、海に飛び込んだ母の姿を思い出す。

鍵はもうない。……帰る場所も、ない。

少年ははっと足を止めた。崩れた足場が、からからと音を立てて眼下へ落ちていく。この雨と闇の中では、下がどうなっているのかさえ分からない。

足音はどんどん近づいてくる。追っ手の数が増えてきている気がするのには気のせいだろうか。少年は後ずさりし、森の向こうに人々の足を見た。あそこだ、と誰かが叫んでいる。

少年は気圧され、更に大きく後ずさった。そして、すぐにそれを後悔する。

体が、後ろへ大きく傾いた。咄嗟に何かを掴もうと右手を伸ばしたが、それに触れるものはない。体が完全に空中に投げ出される瞬間、少年は自分の真下……崖下に広がる森を見た。

「あ……」

声は出なかった。ただ、頭の何処かで冷静に掴まるものなどないのだと判断し、あとは重力にそって体が落ちていくのを自覚した。崖の上から何かが叫んでいるのを聞いたが、なんと言っているのかはつきりと聞き取れなかった。

上も下も、どす黒い闇。助けを求めることさえも、滑稽なほどの漆黒の闇。一瞬、母の姿を思い出した。

そして意識が途切れた。痛みは、感じなかった。

第2章 静寂の月夜

痛みをはつきりと自覚したのは、目を開けてからだだった。突如現れた天井に驚き、少年は起き上がる。瞬間、体のそこかしこで思い出したように痛みがはしった。わけもわからず悶えていると、立て付けの悪いドアの開く音がした。

少年が咄嗟に身構える。短剣は寝かされていたベッドの隣にあった。使い方は、覚えなくても知っている。痛みを堪え、動くほうの足で床を蹴った。大きく飛躍し、入ってきた相手に短剣を向ける。しかし、途端に先ほどの痛みとは違う激痛が走った。そして同時に煙草の匂いがした。

「……軍の訓練つーもんはあながち役に立たないわけでもねえな」

呆れたような声が上がから降ってくる。軍、という言葉に反応して少年は起き上がった。しかし、今度は頭に重みを感じる。靴で抑えつけられていると理解するのに数秒もかからなかった。

「真正面から斬りつけてくるなんざ馬鹿のすることった。聞いてっか？ガキ」

「！」

少年は靴から逃れ、相手を睨んだ。入ってきた男は長身で、黒に近い灰色の髪をしている。人を馬鹿にするような目つきでせせら笑うと、男は少年の顔に煙草の煙を吹きかける。

「止めっ……！！」

嫌がる少年に、男は言った。

「お前、オートブラッドだろ？」

男は恐れることもなく、口の端を上げて言った。少年は馬鹿にされているような気がして、相手を睨みつける。今まで、自分がオートブラッドだということを恥じたことはない。そこが自分の居場所であり、母と共にいた場所なのだから。

「……それが？」

少年の言葉に、額にある刺青を眺めながら男は笑った。それはあまり人の良い笑みとは言えない。少年が再度身構えた時、男は言った。

「オートブラッドのガキは捕まえればかなりの報奨金が手に入る」

男は少年の髪を掴み、その目を覗き込んだ。少年は痛みに顔を顰めたが、すぐに相手を睨んだ。男は鼻を鳴らす。

「金を出してるのは国じゃねえ。どっかのお偉いさんが自分の子息を殺された恨みでお前の首に莫大な金をかけてるんだよ」

「……」

少年はティスファアの中心街から逃げる途中、シェディーラウスの人間に会わなかったことを思い出した。男は、少年の考えていることを悟ったように続ける。

「今、この国にいるオートブラッドはお前だけだから」

少年は黙ったまま男を見た。つまりは自分を引き渡そうということ

となのдарう。金のために。そうなれば自分の行く末は大体想像が出来た。

小さいながらに鋭い視線で睨みつけてくる少年に対して、男はあの人の悪そうな笑みを浮かべた。しかし、そこから出てきた言葉は、少年の考えていたものとは真逆のものだった。

「……だがな、俺は国もお偉いさんも反吐が出るほど嫌いなんだ」

思わぬ言葉に、少年はただぽかんとした顔で相手を見た。男は笑う。悪知恵を働かせる大人の笑みだ。

「それにオートブラッドを飼うのも悪くねえ。働かせようによっては飯のタネになるしな」

成り行きについていけず、少年はただ突っ立っているしかなかった。ただ漠然と思ったのは、この男は、ある意味自分より遥かに邪悪な存在ではないかということだ。オートブラッドを飼うなんてことを普通の人間は考えない。

鳩が豆鉄砲を食らったような顔で自分を見ている少年に、男は鼻で笑う。

「お前、名前は？」

「……シヨウ・アルハ・クライスト」

男はニヤリと口元を上げ、少年を見下ろした。

「バイス・エディルスターだ、覚えとけ」

少年は頷きもせず、ただ呆然とするより他なかった。

バイスという男は、何処か普通の人間とは違っていた。オートブラッドを飼うことを抜いても、様々な所が他の人間とは異なっている。

バイスの家はティスニー領の端にある小さな村の、少し外れた場所にあった。獣道一本以外に、村と家を繋ぐ道はない。家は小さいが2階建てで、部屋も一人暮らしにしては少し多いように思えた。だが、部屋によっては天井から雨漏りがしたり、2階などは歩いていると床が音を立てた。

バイスはどうやら仕事をしていないようだった。しかし、貧乏な生活をしているわけでもなく、買い物のために村に下り、食料を買い漁ってくることもあった。金が一体どこから湧いてくるのかと疑問に思ったが、シヨウはあえて聞かなかった。さらにバイスには養うべき親も兄弟も子供もいなかった。恋人もいないようだった。時々女を家に連れ込んでくるときはあったが、いつも別な女だった。

シヨウはいつも2階の一室で、外を眺めながら過ごしていた。とりあえず食料はバイスがくれるし、外に出なければ何をしていても構わない。逃げ出そうとはしなかった。とりあえず体を治してから考えようと思っていた。怪我をしたままではいくらオートブラッドとはいえども逃げ回することは出来ない。オートブラッドだからといって怪我が早く治るなどということはない。

シヨウは開け放した窓に頬杖をついて外を見ていた。向こうに見えるのは森だけだ。鬱蒼とした森の向こうで時折鳥たちが鳴いてい

る。何も考えず、ただその泣き声を聞いていると、一匹の鳥が窓の端に止まった。

「……」

手の怪我は両手ともに治っている。多分、捕まえる気になれば捕まえられるだろうなと思いつつ、シヨウはそれを見つめていた。無用心に近づいてくる鳥をじっと見つめながら、ただ時間が過ぎていくのを感じる。

ふと、部屋の扉の奥から足音が聞こえた。小鳥が飛び去っていく。シヨウは視線だけをそちらに向けた。バイスがいつもと同じように扉を開け、短く告げた。

「おい、飯」

投げられた紙袋を受け止め、シヨウは中を覗いた。小さなパンが2つ入っている。

「……昨日と同じ……」

顔を顰めるシヨウに、バイスが言う。

「文句言つな。食わないならよこせ」
「嫌だ」

空腹だったシヨウはバイスを無視し、パンを食べ始めた。バイスはクソガキ、と呟くと扉を閉めて降りていった。

シヨウはふと袋の中のパンのカスを手に取り、枝にとまっている小鳥に手を差し出した。小鳥は時折そちらに視線を向けたが、シヨウの手に飛び移ってくることはなかった。それでもシヨウはずっと

手を伸ばし続けた。窓から伸びた小さな手に、日の光が当たっている。

日が暮れるとシヨウは窓を閉め、ベッドに寝転がった。簡単な家具しか置かれていない部屋は、子供にとっては退屈な場所だった。

シヨウは夕暮れが近くなるとベッドに潜り込み、夕食の時間まで眠りにつく。怪我が治るまで、そんな日常が続いた。

動き回れるようになると、シヨウはよく下の階に下りていくようになった。

「……あ」

2階と1階では、そこから見える景色も、吹き込んでくる風の心地よさも違っていた。シヨウは奥の窓から顔を出し、木の葉の間で踊る太陽の光を眺めた。外に出てみたいと思ったが、あの夜の思い出が彼の足を止めさせた。だから、こうして窓から顔を出す程度にしか、周りのことが分からない。

そんなある日、いつものように村から帰ってきたバイスが、不機嫌な顔で帰ってきた。シヨウは窓の近くに持ってきていた椅子を戻しながら、自分を見下している男を見上げた。

「……何？」

バイスはその椅子に腰掛けると、大袈裟に息をついた。そして買
い物袋の中から煙草と夕食のパンを取り出し、もう一つ、布のよう
なものを取り出した。そして、シヨウの顔に投げつける。

急に目の前を覆われ、シヨウはそれを手にとって見た。黄を基調
としたバンダナだった。シヨウは首をかしげてバイスを見返す。バ
イスは鼻を鳴らして言った。

「どっかのガキが窓から顔を出してるって下じや噂になってんだ、
今んとこ隠し子だって話になってるけどな」

迷惑そうに睨みつけられ、シヨウははっと顔を上げた。誰かに見
られたのだ。噂の広がりが早い田舎では、いつオートブラッドだと
気付かれるか分からない。

バイスは続ける。

「俺はお前みたいな隠し子は欲しくないからな。てきとくに親戚の
ガキだっつーことにしてやった」

「？」

俺を敬え、とでも言い出しそうな笑みで、バイスは言う。シヨウ
は意味が分からない、と顔を顰めた。

「いいか、名前を聞かれたら……そうだな、シヨウ・レインとでも
名乗っとけ」

バイスはシヨウの手からバンダナを奪い取ると、額を隠すように
きつく縛った。

「……痛い」

「あとは自分でやれ」

どん、と背中を押し、バイスは洗い物でこつた返しているキッチンへと歩いていった。残されたシヨウは鏡の前で立ち止まり、バンダナを緩める。以前とは違う、少しだけ大人びたような自分の姿に、シヨウはじつと見入った。

バンダナに隠されて、あのオートブラッドの刺青は見えなかった。

それからシヨウは、時折外に出るようになった。それでも、村へと降りていったりはしない。時折下から自分の姿を見つけて微笑む大人達の姿があると、すぐに家の中に隠れてしまった。村で流れていた噂話も、月日を重ねることに消えてゆき、季節が変わる頃にはすっかり忘れ去られていた。

そんなある日、シヨウがいつものように庭先で森を眺めていると、村に続く坂道を踏みしめる音が聞こえてきた。散り始めた木の葉をかき分ける音に、シヨウは顔を上げる。

そこにいたのは、見たことのない男だった。シヨウは一瞬硬直した。男の持っている剣には見覚えがあった。数ヶ月前、あの夏の蒸し暑い夜、いくつもの折り重なった死体達が持っていた剣だ。柄の部分に装飾されたティスニーの紋が彫りこまれている。

シヨウは息をするのを忘れていた。すぐさま扉を開き、家の中に転がり込む。中で煙草を吸っていたバイスの横を通り過ぎ、2階へ

と駆け上った。

バイスは煩そうにその様子を見やると、顔を顰めて扉の方に視線を向けた。そこに立っている男を見つけ、煙草をくわえたまま右手で頭をかく。

「……んだよ、お前か」

男は軍服を着ていた。半分崩れかかったような家の中を見回しながら、男は息をつく。漆黒の瞳が、バイスを捉えた。

「いい加減に建替えたらどうだ、バイス」

シヨウが駆け上がったせいでパラパラと天井から砂埃が落ちてきた。バイスは迷惑そうに顔を顰めると、煙草の火を消し、また新しい煙草に手を伸ばした。

「一人で住んでる分には必要ないけどな」

「……子供がいるのか」

男は天井を見上げ、渋い顔をした。その表情を笑いながらバイスはテーブルに足を乗せる。ガタン、と大きな音が響いた。下品な笑い声があがる。

「流石、お前は村の人間よりマシだな」

男はバイスを睨みつけた。剣を拵む様子はないが、殺気だった瞳で相手を見据えていた。バイスは知っていながら、挑発するように言う。

「……そっぴやこの間の襲撃でお偉いさんが何人か死んだらしいな、

「ケイトス？」

ケイトスは右手を握り締め、そして自分自身を抑えるように一呼吸置いて言った。

「……ああ。お前がまだ軍に残っていれば、少しは役に立ったかもしれないな」

少しは、と強調され、バイスは顔を顰めた。そして煙草の煙を吐き出す。ケイトスはもう一度天井に視線を向け、そのまま呟いた。

「何故、オートブラッドの子供がここにいる」
「拾ったんだよ、その森で」

その表現は間違っではないなかった。崖下に倒れていた子供の姿を思い出し、バイスは煙草をくわえた。ケイトスは椅子の一つに腰をかけ、相手を睨みつけた。

「……別に害はねえよ、ガキだからな」

バイスはふとそう言った。部屋の中に視線を向けながら、その目はどこか遠いところを見つめていた。ケイトスは反論しようとしたが、ショウが階段から顔を出してこちらの様子を見つめていることに気付く。

視線が会つと、ショウはまた2階に消えていった。バイスは続ける。

「オートブラッドっつーから、もう少し血気盛んなもんかと思ってたが、毎日毎日ぼーっと外を見てるだけだ。害どころか面白味もねえ」

舌打ちするバイスに、ケイトスはため息をついた。バイスは口の端を上げると立ち上がり、上を見上げて言う。

「おい。降りて来い、シヨウ」

まるで飼い犬でも呼ぶように、バイスはシヨウを呼ぶ。シヨウは先ほどと同じように、階段の近くまで来ると、ケイトスの姿を見つけて足を止めた。

「来い」

バイスの声にシヨウは渋々階段を下りていった。そしてケイトス avoid するようにしてバイスに近づいていく。大またに、少し緊張した足取りで。それを見てケイトスは、自分も心のどこかで緊張していることに気付いた。頭の中では、剣をどのタイミングで抜くか、という軍人の習慣が働いている。

シヨウは近くでケイトスを見上げ、自分を捕らえようとしないうちに少しだけ驚いた。しかし、その瞳の奥の、自分を見つめる何処かが、オートブラッドとしての自分を映していることに気付いていた。彼の目は、ルティを見るそれと同じだった。

シヨウはそう考えると、今はもう無き母のことが頭をかすめた。

「名前を言ってみろ」

バイスの問いに、シヨウは口を開く。

「……シヨウ・レイン……」

ケイトスはその言葉に顔を顰め、バイスに視線を移した。しかし、

当の本人は意地悪く笑ったままで何も語ろうとはしない。

「……バイス。お前はオートブラッドを拾ってどうする気なんだ」
「さあな。もう少しデカくなりゃ食い扶持稼げるくらいにはなるだろ」

ケイトスはショウを見つめ、ショウはケイトスを見つめていた。
ケイトスにとって、この小さな子供があオートブラッドの女と同じ能力を持っているのならば、国内に置いておくのは危険な気がした。

しかし、その気持ちをまるで、知っていたかのようにバイスが言った。

「俺は俺のしたいようにさせてもらうからな、ケイトス。王族やお偉い方に従うつもりはねえよ」

男二人に挟まれて、ショウは困惑したように二人を見上げていた。不安に満ちた表情が、この時のケイトスにはとても印象的に映った。

第3章 恩人

それから何度か、ケイトスがバイスの家を訪れることがあった。シヨウとケイトスの距離は一向に埋まる気配が無く、いつもケイトスが来るたびにシヨウは2階へと逃げ込んでいた。

だが、一度だけ、シヨウはケイトスと話をしたことがあった。それは、バイスが買い物に出ている時の話だった。

シヨウは庭先で、朝食のパンを齧りながらその屑を庭先に撒いていた。最初は寄ってこなかった鳥たちも、最近はすぐそばに寄ってきて、シヨウの手からパンを食べるようになった。

この日もそうして庭先に座っていたシヨウは、なんとなくケイトスが来るような予感を覚えて道の向こうを注視していた。そして、思ったとおりあの軍服が見えてくるのを見つけ、すばやく家の中に隠れようとした。

しかしこの日は、バイスがいなかった。シヨウはそれを思い出し、一瞬足を止めた。果たして相手は、バイスがいなかったらといって素直に帰ってくれるだろうか？シヨウは思い直し、いつものように家の中に駆け込もうとする心を抑えて、そこに立っていた。

「……バイスはいないよ」

シヨウはケイトスが近づいてきたのを見計らって言った。ケイトスは、シヨウが口を開いたことに少しだけ驚いたような様子を見せた。集まってきた鳥達が、長身の大人が近づいてきたのに驚き、飛び立っていく。

「買い物」

シヨウはそう言って下を指差した。鳥の羽ばたきと、木々の葉擦

れの音が響いている。舞い降りてくる木の葉が、2人の間をゆらゆらと行き来した。

ケイトスはショウが片手にパンを持ったままなのに気付き、言った。

「……何をしていたんだ？」

半分齧った跡のあるパンをみせ、ショウは呟く。

「鳥に……」

差し出された小さな手を見て、ケイトスは首を傾げた。子供の金色の髪が風に揺れる。オートブラッドの印があるはずの部分には、少し大きめのバンダナが結ばれていた。

「パン、あげてた」

ショウはしっかりと相手を見上げた。相手が剣を握らないか、それもしっかりと見つめていた。

ケイトスは家の窓の下に積み上げられていた木箱の一つに腰掛け、口を開いた。

「毎日、……そうしてるのか？」

ショウは頷き、そして木の枝に留まっている鳥に視線を向けた。ケイトスは同じようにそれを見上げ、今まで感じてきた緊張感が一気に崩れていくのを感じた。目の前にいるのは、種族も何も関係のない子供なのだと、やっとそう思えるようになった。

仲間を、クロス王子を、奪っていったのはこの子供ではない。

「……バイスは何が言ってたか？」

ふと、ケイトスはそんなことを口にしてしまっていた。子供に話していいことなのか、分からなかったが、一度口にしてしまうと、止められなかった。

シヨウはなんのことが分からず首を振る。ケイトスは続けた。

「……バイスは元々、資産家の子供だった。だが、正妻の子供ではなかったからな、相応の金だけを与えられて別な場所で暮らしてきた」

シヨウは更になんとことだか分からず、首をかしげていたが、ケイトスの言葉の一つ一つから、何かを感じているようだった。子供というものは、そうゆうものだ。大人の言葉の持つ雰囲気や、繊細に感じ取っていく。

「軍も金で入ったようなものだった」

軍、という言葉に一度は硬直したが、シヨウはすぐケイトスの顔を見上げた。しかし、ケイトスはずっと遠い、森の奥深くを見つめていた。

「母親も病気で亡くしたからな……あいつも一人だったんだろう」

シヨウはケイトスの顔を真面目に見ていた。そしてそこから紡ぎ出される言葉に、何かを感じようとしていた。どの子供も同じだとケイトスと思う。

ふと、襲撃事件の中で生き残った自国の王子達を思い出した。葬儀は数ヶ月前に終わったが、あの痛ましい表情を、未だ誰も忘れることが出来ないでいる。

気付くと、シヨウはいつのまにかケイトスの隣の壁に背中をたれて座っていた。

「……」

何もいわずに視線を落とすシヨウの頭を、ケイトスは撫でてやった。一瞬怯えたような表情で顔をあげたが、その表情がふと和らぐ。ケイトスもシヨウもしばらくそうやって座っていた。いつのまにか、枝にとまっていた鳥達がその足元に舞い降りてきた。

アオイはふと息を吐いた。それは安堵のため息ではなく、ただ機械的に吐き出した息。言葉にならない複雑さを抑えながら、その青い瞳をハルに向けた。

ハルがシヨウのことを知っていたのは、13年前の襲撃事件に関わったケイトス・リストバートを通じてのことなのだ。軍人であり、13年前のことを知る者であり、シヨウの上司でもある。2度目に、彼を拾った人物でもある。

ハルは言う。

「……ケイトスはその事実を、数ヶ月間隠していた」
「国には言わなかったの？」

ハルは頷き、アオイの顔を見る。アオイは呟くように言った。

「そのままの方が、幸せかもしれない……から、かな」

このとき、オートブラッドはショウを除いて皆、撤退していた。

残されたものは残党狩りに殺されてしまった。アオイはふと胸の締め付けられる想いがした。周りが全て、敵。それが苦しいものだということは痛いほどに分かっている。どんな者の手であろうと、差し伸べられた暖かい手には、すがりたくなる。閉ざされた冷たい世界に、自分の居場所を求めてしまうから。

アオイは手を組み、ハルに言う。

「……でも、それじゃあショウの記憶喪失の原因って何？」

ハルはアオイの手を見つめながら口を開いた。

「ショウはそれから数ヶ月、バイスの家で過ごした。だが、残党狩りが残っていた隣街の人間にまで噂が広がり、オートブラッドであることを疑われ……その後、バイスの行方が分からなくなった」

「え？」

ケイトスの話によると、バイスが行方不明になった頃、ショウがティス二一の軍基地の前で見つかったらしい。何があったか、正確には分からない、と前置きしてハルは語り始めた。

アオイはハルの顔を見つめ、頷く。

足音に追われるのは久しぶりだった。しかし追われていて良い気分にはならない。空気を求めて喘ぐ肺を抑え、ひたすらに足を動かすのは苦しいことなのだ。それでも、シヨウは走った。

「なんで、ついて、くるんだよ！」

息を切らしながら、シヨウは後ろを見て叫んだ。後方にはバイスがいる。こちらは疲れた様子も見せず、余裕の表情で言い返してきた。

「仕方ねえだろ。ちょっとした冗談に逆上するほうが悪い」

数時間前に、バイスの家を訪れた残党狩り。それをわざわざ挑発したのはバイスの方だった。否、もともと相手と相性が合わなかったのかもしれない。こんな性格だから、とシヨウは心の中で思った。しかし、胸が重くなるのを、シヨウははつきりと感じていた。

バイスまでオートブラッドを匿った罪で追われている。もし捕まったらどうなってしまうのだろう。自分は殺されるとしても、バイスは。

バイスは。

「あやまれば、いいんだっ」

「はあ？」

謝ってどうにかなるとは思っていない。それでも命は見逃してく

れるかもしれない。森の中を駆けながら、シヨウは思った。するとふと、後ろからの無駄口が聞こえなくなる。

シヨウはそのまま獣道を闇雲に走った。風に揺れる木々の音が木霊している。そんな雑音の中から、突然、体が抜け出た。

足が砂利を踏む。はっと空を見上げると、そこには木々がなく、煌々と真つ白な月が照っていた。川のせせらぎが、少し離れたところから聞こえる。

シヨウが月明かりを頼りに砂利の向こうへ歩いていくと、そこは小さな谷のようになっていた。

バイスに呼びかけようと、振り向く。その瞬間、衝撃がわき腹を襲った。痛みより、熱さを感じたのが先だった。弾き飛ばされ、地面で顔を擦る。顔を上げると、すぐ目の前に立っているバイスの姿があった。

バイスはシヨウに蹴りを入れた。そこでやっとシヨウは先ほどの衝撃がバイスによるものだということに気付く。

一瞬、ケイトスの言葉が頭をよぎった。しかし、頭の中がクラクラしていて、言葉が音声となって蘇ることはなかった。

「……ふざけんじゃねーぞ」

バイスはシヨウの首を掴み、持ち上げた。気管が締め付けられ、息が出来ない。先ほどまで走ってきたせいで、体は空気を必要としていたが、この状態では息をすることさえままならない。

足が浮く。シヨウは意識が遠のいていきそうな感覚を覚えた。

「誰が、誰に頭を下げろって？……初めに言っただけで、俺は王族だの、お偉い人間は反吐が出るほど嫌いだよ！！」

シヨウはうつろな目でバイスを見た。何かを罵倒されている気がするが、何を言っているのかはつきりと分らない。ただ、そのむ

き出しの感情と、目に映る表情が、彼の本心なのだと、心のどこかで思った。

バイスはそのままシヨウの首を掴み、崖まで歩み寄っていく。後ろから聞こえてくる足音が大きくなってきた。シヨウはふと、バイスに会う前のことを思い出していた。

月と、風と、足音と。

「……」

シヨウは掠れた声で何かを言おうとした。けれど、それより早く、バイスの肩越しに、人の姿が見えてくる。バイスは舌打ちをし、口を開いた。

「……それ以上に、ガキになめられんのも嫌いだ」

ふ、と体が軽くなった。シヨウは自分を掴んでいた手が、いつの間にか離れたことを知る。地面の感触は無い。風が、耳元を走っていく。

最期に見たのは、満足そうな、そして性格の悪そうな、あの笑顔。そしてシヨウの体は、冷たい川の中に沈んだ。誰かの声が響いた。ああ、また失くしたんだ。失くしたくなかったもの……。

それが自分のものだど気付く頃には、彼にはもう、彼という記憶はなかった。失くしたことも、失くした物も、全てを忘れていた。そう、全てを。

第3章 粉雪の静寂

アオイは無言のまま、手元に視線を落としていた。ハルも今は口をつぐみ、2人の間に重い沈黙が下りる。状況を理解していないミエルだけが、2人の顔を見つめ、不安そうに鳴いた。

いつのまにか、外は薄暗く、夕暮れが迫ってきていた。ゆっくりと、時間が流れていく。アオイは何度目かも分からないため息をつき、口を開いた。

「……リヨウは知ってるの？そのこと……」

アオイの言葉に、ハルは首を振った。

「シヨウについては、ティスニー、ティスファアの両国王と第1王子しか知らない。……リヨウには、旅に出てから話そうと思っていた」

しかし、それは間違いだった。リヨウがシヨウとアオイを旅に誘うことなど、ハルには予想出来なかったのだ。アオイはどうしようもなく歯がゆい思いで、俯いた。ハルは続ける。いつもより、低い声で。

「リヨウは元々争い事が嫌いだった。剣術も、最初は乗り気ではなかった」

アオイは自分の両手を見つめながら、その言葉を聴いていた。聞きたくないと、心のどこかで思っていた。

「……だが、あの日以来、リヨウは自分から進んで練習をし始めた」

あの日。13年前の、あの暑い一日。全てが、狂ってしまった一日。ハルの言葉に、アオイは何かを言い返そうとしたが、言葉が見つからなかった。

争いごとが嫌いなリヨウが、剣術に手を伸ばした理由。考えたくない、とアオイは呟いた。ハルは無言のまま、足元に寄ってきたミエルの頭を撫でる。

アオイは下を向いたまま言った。

「……ハルは、どうして旅に出たの？」

ハルの視線を感じながら、アオイは続ける。立場なら、ハルもリヨウと似たようなものだ。アオイは答えを聞きながら、その言葉がリヨウと同じものではないことを祈っていた。

ハルは少しの間、言葉を搜すようにしていたが、しばらくして口を開いた。

「……実感が湧かなかった」

「……え？」

顔をあげたアオイに、ハルは言う。その瞳は、どこか遠くを見つめているようだった。きっと、13年前のあの日を、見ていたのかもしれない。

「恨みや憎しみの前に、実感が湧かなかった。……あの夜も、葬儀の日も、泣きもしなかった」

葬儀の日は、レイとハルの2人が出席をした。リヨウは、ずっと泣きっぱなしで、葬儀には出られなかった。ハルはただ、埋葬されていく肉親だった者たちの亡骸を見つめているしかなかった。

「恨みが無かったと言えば嘘になるかもしれないが……少なくとも、シヨウはあの目をしていない」

誰にも分からない、と言ったあの男の瞳。思い出す度に、寒気を感じる、殺気立った瞳。シヨウに出会ったとき、ハルはあの感覚を思い出さなかった。

「ただ……」

アオイはハルの言葉を悟ったように、小さく頷いた。もし、記憶が戻ってしまったら、どうなるか分からない。アオイは胸の奥から不安が湧き上がってくるのを感じながら、俯いていた。

ハルはアオイの表情を確認し、そして口を開いた。旅に出てすぐ、リヨウにその話をしておけば、事態はもっと上手く運んでいたのかもしれない。両方が納得できる、そんな形に。

「……この街を出たら、北へ行こうと思っている」

アオイがはつと顔をあげた。ハルは言う。

「シヨウの動向だけが調査対象じゃない。北大陸についての情報を集めることも、対象の一つだからな。だが、シヨウを連れて行くわけにはいかない」

「それは……」

何処で、何が記憶の鍵に繋がるか分からないのだ。何かを言おうとしたアオイに、ハルは皆まで言わせずに続ける。はっきりと、アオイの目を見つめて言った。

「俺は、もう一度二手に分かれて旅をしたほうが良いと思っている」
「……え？」

アオイは思わぬ言葉に目を見開いた。

「シヨウの状態を見る限り、旅をするうちに記憶が戻ってくるかもしれない。そのうちにリヨウも気付き始めるだろう」

ハルの言葉を聴きながら、アオイは放心状態になっていた。曖昧な返事を返しながら、視界が曇っていくのを感じる。

「東大陸に着いたら、俺達の旅は終わる。それまで……この大陸を出るまで、リヨウとシヨウを離しておきたい」

旅の終わり。いつか自分が口にした言葉を、ハルに言われてみてアオイは胸が苦しくなった。そうになったら自分はどうすればいいのだろう。今までどうやって一人旅をしてきたのか、アオイには思い出せなかった。

「……アオイに頼みがある」

ハルのその言葉で、アオイははっと我に返った。ハルは真剣な眼差しで言う。

「俺はリヨウを連れて北の地方に向かう。アオイはシヨウを連れて、別なルートを行ってほしい」

「シヨウと……？」

アオイは首を傾げた。ハルは頷く。

「ああ。別なルートから、セレンティという港町に向かってほしい」

そこが合流地点だ、とハルは言う。アオイは戸惑いながらも頷いた。そしてふと、顔をあげてハルを見る。アキの存在を思い出したのだ。

「ハル。アキはどうするの？」

「アキはこちら側についてきてもらう。アキは元々北大陸の人間だからな。……オートブラッドにあまり良い印象は持っていないだろう」

「うん……」

アオイは頷いた。そして自分の無知を恥じた。自分には知らないことが多すぎるのだと思う。だからこそハルは自分にシヨウを任せたのかもしれないが。

外はしんと雪が積もっていた。アオイは部屋の中にいながらも、息が白くなるかのような寒さと不安を感じていた。

夕食の時間、いつもより機嫌の良いアキが顔を出したとき、アオイは曖昧に微笑んでそれを迎えた。シヨウやリヨウではなくて良かった、と密かに安堵のため息をつく。

「アキの食事は？」

アオイが言うと、アキは少し悲しそうに微笑んだ。

「さつき皆さんと食べました。そういえば、ここからのルート、ハルに聞きましたか？」

「うん、夕方に」

平静を装ってアオイは答えた。3人の反応が気になったが、アキの顔を見ていると大体の予想はついた。アキは少しだけ拗ねた表情で言う。

「私も、アオイと一緒に良かったです。なんでよりによってショウとなんですか」

「私に言われても……」

何故か最近アキはショウをライバル視しているように見える。料理下手にとって料理上手な人間が羨ましいのだろうか、とアオイは思った。

「じゃありョウかハルと2人だったら良かった？」

「それも駄目です」

「あ、そう……」

よく分からないが、複雑な事情があるらしい、とアオイはてきとうにその話題を片付けた。そしてふと夕食を見つめながら、昼間に引っ張られていったショウのことを思い出す。

アオイは、椅子に座ろうとしていたアキに尋ねた。

「そっいえば昼間のアレはどうなったの？」

「ああ、シヨウと果物の皮むきの練習をしてたらリヨウが帰ってきて……三人で練習してたんですけど、リヨウもシヨウも体調が悪いって言い出して自分の部屋に帰っていきました」

「いったいアキが何をしでかしたのか、とアオイは不安になったが、あえて聞かないことにした。アキはにっこり微笑むと、ぽんっと手を叩いて言う。

「あ、そういえば私が切ったのが残ってるんですけど、アオイも食べますか？」

「遠慮しとく」

「そうですか？じゃあまた今度に……」

アキがそう言いかけたとき、後ろからノック音が聞こえた。アキは振り返り、声をかける。アオイも夕食を口にしながら視線をそちらへ向けた。

顔を出した相手は、リヨウだった。アキの姿を発見し、慌ててドアを閉めようとする。

「あ、リヨウじゃないですか。具合、大丈夫ですか？」

いつもよりにつこりとアキが微笑む。アオイはリヨウが哀れになり、助け舟を出してやる。

「どうかした？」

「え、あ……アオイの具合、見に来ただけど……」

リヨウはアキにがっしりと腕を掴まれ、アオイのベッドの隣に座らせられた。逃げるわけにもいかなかったリヨウは困ったような表情をアオイに向ける。アオイは胸が痛むのを感じながら、微笑み

返した。

リヨウは言う。

「具合、どう？」

「悪くはないよ。もう歩けるんだけど、アキが駄目って言うから……」

アオイの言葉に、アキが声をあげる。

「廊下を歩くならまだしも、外を歩くのは危険ですよ」

「……歩きたいなら、一緒にいこっか？」

ふと、リヨウが言う。アオイは驚いたように顔を上げ、アキが首を横に振った。

「駄目ですよ、寒いんですから。それに危険ですし……」

心配性なアキを笑って、アオイは言う。アキに手を合わせて、軽く頭を下げた。

「ちょっとだけ。街まで行かないし、ちょっと歩くだけだから……」
「……もう。本当に少しだけです。風邪ひいたりしないでくださいね」

拗ねたようにそっぽを向くアキにアオイは微笑んでありがとう、と言った。ベッドの横に置いてあった上着を着ると、地面に足をつける。

体が重いことが少しだけ煩わしかったが、アオイはゆっくりとドアに向かって歩く。すると、その右手をリヨウが掴んだ。照れたように微笑むリヨウに、アオイは体重を預け、共に部屋を出た。

ぽつん、と残されたアキはため息をつく。同じように、残されたミエルが尻尾を振ってアキのほうを見つめていた。

外に出ると、真っ白な雪が道の端を染めていた。いくつもの足跡が道に沿って出来ていて、その上にまた粉雪が落ちている。宿の前に立ったアオイは、その不思議な情景に目を細めた。肩が震えたが、心地よい寒さではある。

アオイはリヨウの手を離し、地面に積もった雪に手を伸ばした。ふわりとした冷たい感触が、手の中で消えていく。どこか懐かしいような感覚に、アオイは飽きもせず、雪を眺めていた。

「この間の、ことなんだけど……」

ふと、後ろからリヨウの声が聞こえて、アオイは振り返った。リヨウはなんともいえない微妙な表情を浮かべ、曖昧に笑う。

「……あの神官と戦ったとき、俺、なんの役にも立ってなくて……」
「？」

アオイは首をかしげ、リヨウの顔を覗き込む。リヨウはアオイの顔を見つめながら、続けた。

「悔しかったんだ。……結局俺だけ、弱いままだった。だから……」

アオイが言った『ありがとう』の一言が、辛かった。だから外に出て、アオイの姿がみえなくなった後、シヨウやハルに八つ当たりした。まだ、助けられたかもしれないのに、と叫びながら、自分が一番非力だったことに、心のどこかで気付いていた。

リヨウは無意識に、右手を握り締めていた。寒さのせいかな、その拳が震えている。いつも自分だけ、守りたいものを守りきれない。そして守ってくれた人は、いつの間にかいなくなってしまう。

泣いたって、何も変わらないと気付いたあの日。あの蒸し暑い一日。

ふと、アオイが握り締めた拳に触れていた。顔をあげてアオイを見つめるリヨウに、笑いかける。

「……ありがとう」

何を言うよりも先に、アオイはそう呟いた。あの時、リヨウが自分の名前を呼んでくれたとき、自分は一人ではないのだと思えた。たとえあの場所で、命を失っていたとしても、自分は消して不幸ではなかった。

あの時の涙は、嘘じゃない。あの時、自分は孤独ではなかった。仲間がいて、身を案じてくれていた。

「あの時、……嬉しかったから」

言葉では言えないほどに。自分は幸せだった。そしてきっと、今も幸せなのだ。暖かな、居場所があるから。

リヨウは拳を開くと、アオイの腕を引いた。アオイはそのまま倒れこむようにリヨウに抱きすくめられる。突然のことに驚き、何も出来ないまま相手の体温を感じていた。

しんしんと雪が舞い降りている。息が白く染まり、そして消えていった。

「……もっと強くなるから。だから……」

リヨウの声が、静かに響く。アオイは強く、という2文字に少しだけ息苦しさを覚えた。

誰のために、何のために。そんな疑問が浮かんだけれど、口に出すことが出来ない。復讐、そんな言葉をリヨウの口から聞きたくはない。

きつく目を瞑ったアオイは、体を強張らせていた。それに雰囲気
で気付いたリヨウは慌てて腕を離す。驚かれたと思ったのだろう、
アオイの顔を覗き込み、ごめん、と呟いた。アオイは大丈夫、と首
を振る。リヨウは安心したように笑った。

「次の街まで、気をつけて」

「ありがと」

アオイはそう答えると、宿のほうへと歩き出した。遅れて、リヨウもそちらに向かって歩みだす。雪を踏んだ足跡が、入り口に向けて出来ていく。

扉が閉まると、そこに向けてまた雪が降り注いできた。音もなく、静かな、静寂の夜だった。

第3章 忘却の闇の中へ

アオイの体の回復を待つて、5人は旅に出た。ハルたちは北方の地域へ。アオイ達は南方へ。しかし、アオイとショウには目的も何もない為、どこへ行くか考えるのに少々時間を潰してしまった。

アオイは雪を踏みしめて歩きながら、何度も地図を確認する。先を歩くミエルが時折振り返ってこちらを見つめた。白い息を吐きながら、アオイは隣を歩くショウを見つめた。

「……これじゃ観光みたい」

先にセレンティの港町に行つてしまふ計画もあったが、それでは暇だとアオイとショウは思った。それで適当に周辺の街に寄ることにしたのだが、それを並べみると、なんだか、ただの観光のような気もしないでもない。

ふに落ちない様子のアオイに、ショウは言う。

「ま、あっちに行つて暇してるよりマシだろ」

「そうかもしれないけど……」

アオイは雪道を眺め、小さくため息をついた。ミエルはアオイを見上げながらも、時折道から逸れて雪の中に突入していく。

「でも、バラックって一体何処にあるわけ？」

地図にはこの道の向こうに、『バラック』と書かれた広大な砂漠が描かれている。しかし、この雪の状態を見ている限り、そんな砂漠は見えてきそうにない。するとふと、ショウが道の向こうを見つめて言った。その、少し引きつった表情にアオイもそちらに視線を

向ける。

「……多分、あれの向こうじゃないか？」

「……うわ」

シヨウの指差した向こうには、雪に白く染まった、高い峠が見えた。アオイは開いた口が塞がらず、ただボケっとその峠を見上げる。そしてそのまま、隣のシヨウの袖を引いた。

「……ねえ、ルート替えない？」

「賛成」

即座に、答えが返ってきた。しかし、ここまで丸一日かけて歩いてきた2人には、ここで引き返すのも考えものだ。アオイは地図を広げると、一番近い街に印をつけた。

「とりあえず、ここまで行って宿を取ったほうがいいかも……」

アオイは地図を見つめながら、人知れずため息をついた。今までハルがこういったことをこなしてきたために、こうゆうことはどうも自分には合わない。

いつまでも地図と睨み合いをしているアオイの頭を、シヨウが軽く叩いた。

「とりあえず、ここで立ち止まっててもしかたないだろ？ほら」

シヨウはアオイの荷物を取り上げると、さつさと歩き出す。どうして疲れていたのが分かったのだろっ、と思いながら、アオイはシヨウの背中を追って歩き始めた。

「ちょっと、待ってってば」

足跡が続いていく先に、小さな街が見えてくる。アオイ達はそちらに向かつて歩みを進めていった。

街はいくつかの家々が寄せ集まって出来た、小さなものだった。

しかし、どうやら砂漠へ続く道の為に、旅人が行き来するらしく、小規模ではあるが栄えていた。アオイは宿を取り、互いに自分の部屋に荷物を置いた。

荷物の整理をしたらショウの部屋に行き、今後のルートについて話をする予定だったが、アオイが部屋を出ようとしたとき、廊下を歩いてきた女に声をかけられた。

「ああ、貴女、ここの部屋の人？」

につこりと、上品な笑顔で女は言った。赤茶けた髪を一つに束ね、眼鏡をかけている。茶色の瞳が人のよさそうな笑みを浮かべていた。突然のことにアオイは戸惑いながら、答える。

「えっと、そう、だけど……」

「綺麗な髪の色ね」

「はあ」

噛み合わない会話に戸惑いながら、アオイはただ礼を言った。女は茶の服を身に纏い、分厚い本を抱えている。女は不信な目を向けるアオイに、困ったように微笑んで自己紹介をした。

「私はフェアリア。貴女、旅人でしょう？」

「い、一応……」

するとふと、隣の部屋の扉が開いた。どうやらアオイの様子を見に行こうとしていたらしい。廊下で知らない女につかまっている図を見て、足を止めた。女はショウにも微笑みかけ、両手を組んで言う。

「貴方達にお願いがあるの、少しお話させていただいてもいいかしら？」

「はあ……？」

ショウは意味が分からない、とアオイに視線を向ける。しかし、アオイもどうしたらいいか分からず、首を傾げた。

「……あの、えっと……」

アオイが困っていると、フェアリアはにっこりと笑ってアオイの腕を掴んだ。

「それじゃあ貴女の部屋で話しましょ。ほら、そこのお兄さんも早く」

「えっ？」

無理やり部屋に連れ戻されたアオイは訳が分からず、とりあえず

シヨウに視線を向けた。しかし、シヨウ自身も状況が掴めないらしく、同じような視線を向けてくるだけだ。アオイはとりあえずフェリアを椅子に座らせ、シヨウも、もう片方の椅子に座らせた。自分はベッドの端に座る。見知らぬ人間を目にしたミエルは、ベッドの端から顔を上げ、フェリアを見つめた。

フェリアは形の良い唇で微笑んで、2人を見る。

「私は、東大陸の学者なの。考古学者って言えばわかりやすいかしら。西大陸の遺跡に興味があつてここまで来たんだけど、案内役兼護衛役の人がね、これなくなっちゃったのよ」

ペラペラと喋るフェリアに、アオイもシヨウもただ頷くしかない。

「それって大変でしょう？私は歴史には詳しいつもりなんですけど、魔物に関しては明るくないし。そこで提案があるの。代わりに護衛役、やってくれないかしら」

につこり、と微笑まれ、つい頷きそうになったが、アオイはそこではた、と気付く。自分たちはこの周辺の地理に明るくない。先ほども、地図に四苦八苦しながらここまで来たのだ。アオイは首を振る。

「私たちも、地理には詳しくないし……」

そう言うと、フェリアは大丈夫、と胸を張った。

「実は私、1回来たことがあるのよ。案内は私がやるから、貴方達には魔物を倒してもらえればいいの。ちゃんと報酬も払うわ。バラツクまで」

「……バラツクまで？」

ショウは少し嫌そうに繰り返した。アオイもあの雪山を越えるのは気が引ける。もし彼女が少しでも道を間違えて遭難したりしては、死ぬに死にきれない。アオイは断ろうと口を開くが、フェリアが先を制した。

「でも、どっちにしてもこの先にいくには山を越えなきゃ駄目なのよ。他のルートだって同じことよ」
「げー」

ショウがげんなりとした顔でアオイを見る。でも、とフェリアは言う。立ち上がり、どん、と胸を叩いた。

「このお姉さんに任せれば、バラックまでの近道教えちゃうわ。どう？この話」

アオイはフェリアに見つめられ、顔を顰めた。

「……一日、考えさせてもらいたいんだけど……。でも、その前にちょっといい？」

「あら、賢明ね。いい返事待ってるわ。……で？」

マイペースなフェリアにアオイは頭を抱える。

「なんで私達がバラックに向かって歩いていて、あの雪山見て引き返そうとしたことが分かったの……？」

「あらあ」

につこりと微笑んで、フェリアは言う。ウィンクをしつつ、唇に人差し指を寄せる。大人の色気があるが、このマイペースさには近

寄りがたいものがある。

「だって初めてここに来た人は、絶対そう思うんですもの。で、皆もつとひどい山越えをしなくちゃいけなくなる、ってわけ」

「……はあ……」

「それじゃ、考えておいてね、青髪ちゃん」

手を振って、フェリアは部屋を出て行った。まるで嵐が去ったかのように、部屋の中が静かになる。残されたアオイとシヨウは顔を見合わせた。

「……どうする？」

「どうするってたって……山越えか、もつとひどい山越えか、だろ？」

どっちも嫌だ、という顔で2人は頭を抱える。もちろん、どちらが良いかと聞かれれば、普通の山越えを選ぶのだが、あまりにもドンドンと丸め込まれすぎて、釈然としない。アオイは頭を押さえながら地図を広げた。

「でも、あの人……信用できると思う？」

「信用、な……」

言い方は悪いが、そうとしか言えない。アオイもシヨウもため息をついた。シヨウは言う。

「どうにかなったら、なったときに考えればいい。少なくとも、協会の人間には見えないしな」

「……そう、なんだけど」

あまり乗り気ではないアオイにシヨウは首を傾げた。アオイは自

分の両手を見つめ、すぐに首を振る。

「なんでもない」

アオイはそう良い、今後のルートは峠越えに決定した。翌日、フエリアにそのことを伝えると、嬉しそうに『じゃあ出発は明後日ね』と微笑まれた。アオイは道行に不安を覚えながらも、その日が来るのを待つしかなかった。

朝食の後、アオイは自分の部屋へと戻り、シヨウは暇つぶしに街へと出た。同じように暇をしていたミエルが隣を歩く。先ほどまで降り続いていた雪は止んだが、外を歩いている人間は少ない。

どの家も煙突から煙を吐き出し、曇った窓の奥には暖かな暖炉の光が見える。シヨウは白い息を吐きながら、隣を歩くミエルに視線を落とす。

「……寒いな、ミエル」

ミエルはシヨウを見上げ、そしてまた道の向こうに視線を向けた。シヨウは雪を踏みしめながら、ぽつりと呟く。

「アオイは一体どうしたんだろうな……」

アオイの様子がおかしいのは、今日に始まったことではない。ハル達と分かれる少し前から、本調子ではないように見えた。まだ体力が戻らないせいかと思っていたが、そうゆうわけでもないらしい。シヨウは息を吐いた。白く染まった空気が、透明に染まって消えていく。シヨウの後ろから賑やかな声がして、数人の子供たちが駆けていった。

シヨウは目を細めてそれを見る。小さな足跡がいくつも連なって雪を踏み固めている。雪球を投げる姿や、時折足を滑らせる者もいた。

「分からないってのは気楽だね、シヨウ・レイン？」
「！」

背後から幼い声が聞こえ、シヨウは振り返った。声の主はシヨウのすぐ後ろでケラケラと笑う。人を馬鹿にしたように碧眼の瞳を細め、シヨウを見上げる少年。シヨウはすぐに剣に手をかけようとしたが、彼は本物の少年のような、一見無垢な笑顔でそれを諭す。

「こーんな街中で、子供に剣を向けたら大騒ぎになるよ、お兄ちゃん？」

シヨウは手を止め、それでも警戒の眼差しで子供を見る。

「……子供とか言う以前に神官だろう？ カイ」

苦し紛れにそう呟くと、相手は皮肉った笑みを浮かべる。神法協会の神官、カイは子供の姿に不似合いな、大人びた瞳をしている。

「まあねえ。年で言えばキミより少し上だけど」

「何をしに来た」

シヨウはカイを見据える。相手の動きによつては、すぐに剣を抜くことも出来る。カイはそれを見切った上で口を開く。

「そんなに彼女に近づかれるのが怖い？」

今のところ、僕は無害なんだけどねえ、と呟きながら、カイはミエルに視線を向ける。シヨウとは対称的に今にも飛びかかっていきそうなミエルの様子を眺めながら、カイは笑う。

「……今のところ、僕はGod's Seedには手を出さないつもりだよ。成り行きが面白そうだしね」

カイの皮肉な笑みに、シヨウは彼がすべてを知っていることを悟った。自分達の行動も、何もかも、知っているのかもしれない。神経を逆なでされる気分になったが、剣に手は伸ばさなかった。今にも吠え掛かろうとしているミエルを制し、カイに問いかける。

「……どこまで知ってるんだ？」

「さあね。意外と、キミの知らないところまで知っているかもよ？彼女が考えていること、とか」

一瞬、剣に手を伸ばそうかという考えが頭を巡った。シヨウは深く息を吐き、その考えを否定する。その様子を見ていたカイは面白いものを見たように、喜び、笑う。

「そうそう、一つ教えてあげるよ。その隣にいる犬、元はあの神官……コウの兄が彼女に与えたものなんだけどね」

気を良くしたのか、カイはミエルを指差して続ける。

「シェディーラウスの進めている研究の実験用だったんだよ」

「え……？」

シヨウがミエルを振り返ると、カイはさも楽しそうなものを語るような口調で続ける。

「覚えてる？アキ・ファーラが協会と決別した日、襲ってきたあの魔物。あれを創る、実験だよ。正確に言えばその犬は、実験用に飼われてただけで、使われてはいないけど」

シヨウはあの時の魔物を思い浮かべた。あの後、アキに魔物のことを聞いたが、はつきりとした答えは返ってこなかった。ただ、協会と関係があるのかもしれないと、アキは言葉を濁していた。

シヨウはカイを睨みつける。

「……何をする気なんだ？」

「知りたい？シヨウ・レイン」

カイに名前を呼ばれるたびに、足元から不快な感触が躍り上がってくるような感じがする。シヨウは相手を睨んだまま、言葉を返さなかった。しかし、カイは楽しそうに目を細めると、呟く。

「知りたくても、知りたくなくても。いつか知ることになるよ、シヨウ・レイン」

その表情は、何よりもシヨウの神経を逆なでする。そして、彼は更にせせら笑った。

「……キミはね」

部屋の中にいたアオイは、日が暮れていくのを見つめながら、ベッドに寝転がった。眠気は無かったが、眠ること考えなくても済むのなら、ずっとそうしていたかった。アオイはベッドに顔を押し付けた。

明日、フェリアの案内で峠越えをすることになる。必要な荷物は散歩に行くシヨウを捕まえ、頼んでおいた。ミエルを連れて行かれたせいで暇になったが、仕方ないとアオイは息をつく。

考えることは沢山ある。これからのこと、シヨウの記憶のこと、東大陸に渡った後のこと。思い出すほどにアオイは頭が痛くなってくるような感覚に襲われる。何も考えたくない、とアオイは目を瞑った。しかし、やはり眠気はおきない。

そうこうしているうちに、ドアがノックされる音が聞こえた。アオイは体を起こす気にもなれず、ドアに向かって返事をする。すると、ドアを開けたシヨウがベッドに寝転んだまま、ぼうつとしているアオイを見て顔を顰めた。

「……おかえり」

アオイがそういうと、シヨウの足元からミエルが駆け寄っていった。シヨウは息を吐くと、買ってきた荷物をテーブルの上に置く。

「寝てたのか？」

「ううん」

アオイは体を起こすと、首を左右に振った。シヨウは言う。

「寝ぼけた顔してるけどな」

「……何、素で寝ぼけてる顔してるってこと？」

睨み付けると、シヨウは笑ってそれを受け流す。アオイは足元に寄ってきたミエルの頭を撫で、何かを主張するように鼻を寄せてくる様子に首を傾げた。答えを求めるようにシヨウを見上げる。

「……何かあったの？」

シヨウは首を横に振ろうとして、途中でそれを止めた。船でカイに会ったことは、皆を不安にさせない為に黙っていたが、ここまできてはそうも言っていられない。シヨウは荷物をテーブルに並べ、一つ一つを確認しながら語り始める。

「……神官の一人に会った」

「！」

アオイはシヨウを見上げた。不安と、心配の入り混じった表情を浮かべている。シヨウは苦笑し、話を続けた。

「以前の神官じゃない。子供の姿をしたやつで……実は、船に乗ったときも会ったんだ」

「なんで言わなかったの？」

アオイは怒ることもなく、ただそう聞き返した。シヨウは息をつき、正直に答える。アオイの足元に座ったミエルが、同じようにシヨウの方を見つめていた。

「あの時は、みんなアオイの看病で疲れきってたし……」

「その人は何か言ってた？」

「いや、特に何も……。ただ、訳の分からないことを予言するだけ」

そう言いながら、そのわけの分からないことが、見事に命中していることも知っている。実際、アオイが目覚ます時期も、カイによつて言い当てられたのだ。あの皮肉な表情を思い出して、シヨウは首を振る。

そして思い出したようにアオイの顔を見る。

「アオイは神官の顔とか分からないのか？ 会ったこととか……」

神官は中央の協会に所属するものなのだといつかアキが言っていた。シヨウはそれを思い出しながら、アオイに問いかける。アオイは、うまく説明出来ないんだけど、と前置きして口を開いた。

「私のいた所は神法『協会』で、神官のいるところは『教会』。一言で言ってしまうえば対みたいなものだけど」

アオイはベッドの上に座りなおし、シヨウの顔を見る。

「両方に高等神官が1人ずついて、神官が3人ずついるわけ。神官は全員で6人になるから、六神官って呼ばれるんだけど……。ミナと、この間の神官は協会所属の服を着てたから、私のいた協会の神官だと思う」

アースメルティ一族の神官。シエルの弟だと名乗ったあの神官が、

協会側の人間だとしても違和感はない。アオイはその顔を思い出し、小さく息を吐いた。

そして自分の両手を見つめながら言う。

「『教会』は表向きの宗教思想を広めるための機関。『協会』はG o d's S e e dの育成とか……諸々の研究機関も兼ねてるって聞いたけど」

諸々の研究機関。シヨウはふとミエルに視線を向けた。アオイの隣で気持ちよさそうに目を瞑り、眠りかけている様からは、昔のこととは到底想像できない。

ふと顔をあげると、何処か疲れたような表情でミエルの頭を撫でているアオイの姿があった。無意識なのか、小さくため息をついている。

「……アオイ？」

声をかけると、アオイは何事もなかったかのように顔をあげ、首を傾げた。

「何？」

「あ……なんか、疲れてるように見えたからさ」

アオイはシヨウの顔を見て、首を振った。別に、とだけ答えると、枕元に置いてあった地図を手に取り、それを広げる。ハルから預かった地図は、広げるとアオイの顔を隠すことが出来るくらいに大きい。

アオイは地図を見つめたまま、ぽつりと言った。

「……東大陸に渡ったら、シヨウはどうするの？」

ハルやリヨウの旅は、そこで終わる。シヨウは腕を組み、地図の向こう側にいるアオイに答える。

「どうするって言われても……とりあえず旅は続けるつもりだけ
ど」

「……そう」

アオイはそっけなく、そう返した。眠りかけていたミエルがふと顔を上げ、アオイの方を向く。アオイはその後、何も言わなかった。その日一日、アオイは今後について何も口に出さなかった。アオイの様子がおかしいことを気にかけていたシヨウだったが、結局フエリアと共に街を出るまで、その原因を聞きだすことは出来なかった。

第4章 神々の神話

昨晚の寒さで冷えて硬くなった雪道を歩きながら、アオイは目の前に立ちはだかる峠を見つめていた。一日で越えられるか否か、フエリアでも分からないらしい。ただ、彼女が言うには山の奥の方に休憩出来そうな場所があるらしい。

アオイは先頭を歩くフエリアに並んで、問いかける。

「……フエリアは学者、なんでしょ？」

赤茶の髪を冷風に躍らせながら、フエリアはこちらを向き、形の良い唇で笑った。

「そう。興味あるの？青髪ちゃん」

「……アオイ」

「あ、そうそう、アオイちゃん」

名前覚えるの苦手なのよねえ、と言いながらフエリアは自分の両手に息を吹きかける。アオイは無言でその様子を見ていた。フエリアは両手を擦り合わせながら、口を開く。

「歴史とか、そっちの分野が専門なんだけど……時々宗教とか、思想とか、そうゆうのも研究してるわ」

「歴史？戦争とか、革命とか？」

「そう。興味ある？」

フエリアはアオイに視線を向ける。

「え……」

突然の質問にアオイは言葉を詰まらせた。歴史について詳しく知っているわけではないけれど、協会にいた頃はよく様々な文献に目を通していた。あの頃、全ては協会から逃れ、自分一人で生きていくためのものだった。

「嫌いではないと思う、けど……」

曖昧にそう答えて、アオイは黙り込んだ。フェリアはクス、と笑ってアオイの顔を覗き込む。茶の瞳が微笑みかける。

「まあ、そうゆうのは人それぞれよね。私も最初は歴史なんかには興味持ってなかったもの。神話とか、伝説とか……そうゆうのが好きだったわ。例えば……そう」

フェリアは人差し指を立てて、説明し始めた。アオイはフェリアの横顔を見つめながら、熱心な語りに耳を傾ける。少し後ろではミエルとシヨウが雪を踏み分けて歩く足音が聞こえてきた。

「天地創造の神話って知ってる？ 創造神は水、風、火、地、樹、雷、光、闇の8人の神を創り、彼らがこの世界と、神々の世界を創った……っていう話」

「そして人を創った、でしょう？」

アオイの声にフェリアは少し驚いたような声をあげる。

「あら。詳しいのね。……それじゃあ、人々が後に罪を犯してこの世界に堕ちたことは分かるわよね？ それと共に創造神は人を創った8人の神をも、神々の国から追放した」

「……そうなの？」

神話や思想についての勉強は協会にいた頃、嫌というほど教えられたが、その部分については知らなかった。アオイは首を傾げる。フェリアは頷いた。

「そうよ。8人の神は人の血の中に交わり、後に消えてしまうのだけれど……人を創り、世界を創ったその力が、魔法とか魔術とか、そういうものにあたるっていう考え方もあるわ」

でもそうしたら召喚士とか魔術師は神様の末裔よねえ、とフェリアは呟く。アオイはふと、フェリアの顔を見上げて言った。

「本当に全ての神が消えるの？」

「あら、彼らだって簡単に消えちゃったわけじゃないのよ。彼らの中には各地に散らばって、天地創造の力を使って、権力を手にした者もいるの。各大陸に残る遺跡とか信仰はそこから来てるみたいねまあ、あくまでも神話だけれど」

「……遺跡」

「そうそう、あと興味深いのは北大陸の『God's Seed』の信仰かしら」

「……！」

アオイは自分でも分かるくらいに、動揺が顔に出たことに気付いた。フェリアは一瞬首を傾げたが、すぐに先ほどの熱心な口調で話し始める。後ろからアオイ達に追いついてきたミエルが隣に並んで歩き始めた。

「神話は普通ここで終わるんだけどね、北の神話には続きがあるわ。……神々を地に堕とした創造神は、駄目なものの掃き溜めにな

つたこの世界に、一つの種を落とした。それが『God's Seed』。神様の種、という意味らしいけど」
「……その、種は、その後どうなったの？」

協会で、同じような神話を聞かされたことがある。種は開花する時が来るまで、その世界で眠りにについているのだと。開花する時という意味がその時は分からなかった。それでも、今なら理解出来る。協会は、そして後ろについている国は、『God's Seed』を利用して世界を敵に回そうとしているのだ。

アオイは、ため息を白く染める外気が頬を撫でていくのを感じ、誰にも気付かれないように手を握り締めた。

アオイの様子に気付いていないフェリアは、まるで当たり前のことを聞かれたように口を開いた。

「それはもちろん、開花したのよ」

「え……？」

「開花して、種を創った。花とか、植物ってそうじゃない」

当たり前のように瞳を向けてくるフェリアにアオイは戸惑いの表情を浮かべた。協会の教えでは、種は未だ開花していないと言っていた。そして、この間の神官の襲撃と、ミナの発言から、アオイはその『開花』が『戦争』を意味するものだと思っていた。

「いや、それはそうだけど……」

「でも不思議なのはあれよね。神話って曖昧な部分が多いけど、筋が通つてるところは通っているものなのに、『God's Seed』の神話については少し違うの。それに、大体……」

フェリアの言葉をかき消すように、ミエルが低く唸り声を上げた。アオイは、はっとして剣を構える。後ろにいたショウも同じように

剣を抜いた。肌のすぐ近くを、鋭利な刃が走っていくような、緊張。アオイはフェリアを後ろに下がらせ、気配を追う。それが人の気配ではないことに少しばかり安心した。そして切っ先を自分の斜め前方に向ける。そして、雪を蹴った。

「アオイ！」

後ろからシヨウの声が聞こえる。それにも構わず、アオイは茂みの中に剣を突き立てた。微かに何かを掠った感触が手に伝わる。それを頭が判断した直後、アオイは目の前に大きな茶の毛色をした獣が飛び出してくるのを見た。茂みから剣を引き抜き、首筋に噛み付こうと襲ってきた魔物に対して剣を一閃する。しかし、その一撃はアオイの思っていたより深手にはならなかった。

「！」

雪に足をとられ、アオイの体勢が崩れる。剣は魔物の体に押し当てられたままだったが、魔物はそのままアオイに襲い掛かってきた。覆いかぶさる形になり、アオイはそのまま体が後ろへ倒れるのを直感した。危険な倒れ方だ。アオイはどうか避けようとしたが、雪の地面に慣れていないせいで、体が思うように動かない。ミエルの鳴き声が聞こえた。

魔物の牙を間近に感じた瞬間、奇声が耳を貫いた。瞬間、真っ暗になっていた視界が開ける。魔物が後ろへ飛び退った。

アオイはすぐ近くに飛び散った血煙の跡と、剣を構えなおすシヨウの姿を見上げる。そしてミエルが寄ってくるのより先に起き上がった。

「……油断した」

アオイは憎々しくそう呟きながら、それが油断のせいだけではないことを知っていた。シヨウは何も言わず、視線を手負いの魔物へ向ける。先ほどの攻撃で、アオイの方が自分より弱いことに気付いたのか、魔物は先ほどと同じように跳躍し、アオイに襲い掛かる。アオイは剣の切っ先を向ける。しかし、それより先にシヨウが動いた。アオイの前に出て、先ほどアオイがそうしたように剣を振るう。速さとタイミングは、先ほどと殆ど同じに思えた。

「！」

しかし、アオイが声をあげるより先に、魔物の体に深く刃が食い込んだ。シヨウはそれを一閃させる。瞬間、魔物の体がアオイの横に倒れこんできた。アオイは虫の息になった魔物を見つめ、自分の剣に視線を移した。

シヨウは乱れた息を整え、顔を上げた。すると、少し離れたところで様子を見ていたフェリアが駆け寄ってくる。

「ああ、なかなかやるじゃない、お兄さんも。雪山初めてだって聞いてたから、不安だったんだけど、大丈夫そうね」

「……あ」

そういえば、とシヨウは思い出した。街を出た時は、雪に足を取られないか、という不安はあったが、実際に魔物を前にしてみると、さほど気にならなかった。否、気にならなかったというより、すっかり忘れていたといったほうが正しいかもしれない。

「そうそう、青髪ちゃんは大丈夫？」

フェリアの声にシヨウはアオイに視線を向けた。魔物と自分の間に剣を挟んだまま雪の中に転がり込みそうになっていたことを思い

出す。

「アオイ。怪我は？」

アオイは剣を仕舞わず、ただぼうつと雪の中に立っていた。ショウの声に気付いていないのか、じっと剣先を見つめている。

「アオイ？」

「……えっ、あ、何？」

2度目の問いかけにアオイはやつと顔をあげた。怪我は、と聞くと、首を左右に振る。ショウは先ほどアオイが口にした油断という言葉を思い出した。あの時、アオイは油断していただろうか。あの行動に無理は無かった。実際、再度同じ状況に陥った時、アオイと同じやり方で攻撃していた。あの瞬間、あの攻撃が一番効果的に思えたのだ。

フェリアは首を傾げ、ミエルはアオイの足元に擦り寄っていった。アオイはショウから視線を逸らすと、雪の中に倒れた魔物の亡骸を見つめながら、俯いていた。

足音の響く暗闇。視界には闇しか見えず、それ以外のものは存在の意味を成さない。彼はただ真っ直ぐに足を進め、そして辿り着く。

それは残酷なまでに静寂に満ちた空間。その中に、たった一つの灯りが灯る扉が見えてくる。

彼はそちらに向けて足を進める。扉は大きくもなく、小さくもない。ドアノブに手を伸ばすと、その下の鍵穴から光が漏れていることに気付く。彼は口の端を上げ、片手でドアをノックした。静寂にすいこまれるように、その音は消えていく。

「……入ってもいいかな？」

ふくみのある声で彼は尋ねる。中から返事は無かったが、彼は扉を開いた。すると闇の中に一筋の光が差し込んできた。部屋の明かりが、暗闇の中を照らし出す。

「ああ、やっぱりここにいたんだ。報告も兼ねて、来てみたんだけど……やっぱり感慨深いのかな？コウ」

部屋の中心に立っていた相手に、彼は話しかける。相手は表情のない顔で振り返り、彼を見下げた。

「……別に」

「なあんだ、つまらない。God's Seedとシエルのいた場所なのになえ……」

「……カイ。用件は」

ベッドの横に積み上げられた本の一つを手に取り、中に目を通していたカイにコウは尋ねる。カイはページを捲りながら、口端を上げる。

「彼女はどうかやらシヨウ・レインと共に行動を始めたようだよ。事情は大体察しがつくけどね」

「……」

カイはもう一つの本に手を伸ばし、そしてふとあるページに目を留めた。文字の羅列を指で追いながら、後ろにいるコウに語りかける。コウはいたるところに散らばった紙の一つを拾い上げ、目を通す。

「なんだか面白そうなことになっていたから、手出しはしないでおいたよ」

「……上からの指示は？」

「まだまだ先だよ。……でも君が考えているより、事は簡単に進むかもね」

含み笑いを漏らして、カイは本を閉じた。そして足元に散らばっている紙の一つを拾い上げ、コウに手渡す。辺りを見渡せば、いくつもの紙が床を埋めていた。カイは紙を踏まないようにとそれを避けて歩いた。

「……それにしてもこの人間は病的だよねえ、God's Seedが出て行った時のままだよね、これ。子供の帰りを待つ親じゃないんだし」

で、これは片付けていいものかな、と言いながらカイは紙を束ね、テーブルの上に重ねた。コウは頷くと、いくつかの本を本棚に納め始めた。

「ところで。僕はここにサラがいるって聞いていたんだけど？ 彼女は？」

「……別件で出て行った」

カイはある程度足元に散らばっていたものを整理すると、ベッドの上に腰をかけた。積み上げられた本を片付け続けるコウを眺めながら、問い返す。

「別件？……God's Seedは当分野放しの決定が出てるし、後は……ああ、ミナ・クレセントの件かな。彼女のおかげで計画がかなり遅れてしまったからね。でも、展開としては面白いと僕は思うんだけど」

どうも上の人間とは感性が合わないのかな、と呟くカイに、コウはふと手を止めた。

「……ミナ・クレセントと『凧』の動向は？」

「多分手を組んでると思って間違いはなさそうだけど。でも少し気になるのは、『凧』の動向かな……ここからどう出てくるのか……凄く興味深いね」

口の端をあげて、カイはベッドから飛び降りた。そして扉に手をかけると、コウの方を振り向いて言う。来たときのように、部屋の明かりが暗闇を照らし出す。

「そうそう、God's Seedがこちらに戻り次第、六神官以上の人間を集めて会議をするらしいよ。それまで、キミも休暇とってたら？」

それじゃあね、と言ってカイは扉を閉める。暗闇に戻った空間の中を、彼は一直線に歩いていった。自分の足音しか響かない空間の中で、彼はふと含み笑いを漏らす。笑いはそこから声を出した笑いになり、静寂の暗闇を震わせるように響きわたった。

日が暮れだしても、雪がまるで空を照らしているように薄ら明る。アオイは灰色に染まった空の下、ミエルと共に薪を拾っていた。山の中腹には旅人や商人が一時的に風や雪をしのぐ小屋が立っていた。フェリアの勧めで、アオイ達は夜をしのぐため、そこに落ち着くことに決めたのだ。そして寒い寒いと騒ぐフェリアの為に、アオイはミエルと薪を探しに外へ出た。

アオイは両手を擦り合わせ、空を見上げた。先ほどまでちらついていた粉雪が、段々と風を含んで吹雪になりつつある。ふと振り向くと、片側だけ雪にまみれたミエルの姿があった。

「……ミエル。見てるだけで寒いからやめてよ、それ」

どうやら面白がってやっているらしいミエルは、雪の中に飛び込んで更に真っ白になった。アオイは頭を押さえてため息をついた。

「……はあ」

薪から雪を払い落とし、アオイはそれを一箇所に集めた。そして薪の山に鼻を突っ込んでいるミエルに言う。

「で、ミエル。力仕事担当はどこまで薪拾いに行ってるわけ？まさかだけど、頭痛起こしてそこら辺に埋もれてないでしょうね」

アオイは薪を抱え込み、小屋に向かって歩き出した。小屋の中ではフェリアがこちらに手を振っている。アオイは引きつった笑顔を返し、隣を歩くミエルに呟く。

「……交換条件とはいえ、ああしていられるのは羨ましいかぎりだと思わない？」

アオイは小屋の前に薪を下ろし、改めて吹雪いてきた林に目を向ける。先ほど奥のほうに向かったシヨウの姿は見当たらない。アオイは首をかしげ、ミエルに視線を向けた。

「ミエル。シヨウを探してくるから、フェリアの方頼んでいい？」

ミエルはアオイを見上げ、そして素直に薪を加え、扉に向かって歩き出した。アオイはそれを見送り、先ほどシヨウが歩いていった方向に駆け出した。

林の中に入ると、吹雪はいくらかしのげるようになった。アオイは自分の足跡を何度か振り向き、目の前に続くシヨウの足跡に目を戻した。少々雪が積もってきてはいるが、どちらに向かったのか、判別できる。アオイは視線を上げ、森の先を見た。

「本当に、どこかで埋もれてんじや……」

「誰がだよ」

半分冗談でそう呟いた瞬間、後ろでそんな声が聞こえた。アオイは驚いて振り返る。そこには呆れたような表情で、立っているシヨウの姿があった。

「！……い、いつからいた？」

「いつからって……』どこかに埋もれてる』あたりには後ろにいたぞ？」

シヨウは肩の雪を払いながら、そう言った。片方の手には薪を抱えている。

「丁度入れ違いになったんだよ、気付かなかったのか？」

「入れ違いって……シヨウは一体、どこまで行ってたわけ」

向こうまで続く足跡を指差して、アオイは言う。シヨウはそれを見つめると、足跡から円を描くように小屋へのルートを示した。アオイはため息をついて頭を抑えた。

「……探しに来た私が馬鹿だった気がしてきた」

「それより、さっさと行くぞ。……吹雪いてきたしな」

先ほど歩いてきた方向を振り返ると、いつの間にか雪が斜めに降りている。風に流された雪が斜線を描き、その向こうは無数の雪で真っ白に染まっている。

先ほど歩いてきたらしいシヨウの足跡を踏むように歩きながら、アオイは前を歩くシヨウの背中に問いかける。

「……そういえば、頭痛は？最近調子いいみたいだけど」

シヨウは振り返らず、慣れた様子で雪を踏み分けて歩きながら答えた。

「西大陸に来てからは全然無いな。……そっちは？」
「私？」

アオイは足を止めた。意味が捉えきれていない様子に、シヨウは呆れたような顔で振り向く。

「ぼーっとしてただろ。……さつきも」

「！それは……」

アオイは慌てた様子で口走り、そこで言葉を詰まらせた。シヨウの視線を受けたまま、沈黙する。何処か遠くで風が轟いているのを聞きながら、アオイは俯いた。

「何かしたのか？」

「……剣が……」

言い表す言葉が浮かばないらしく、アオイは苦笑した。それは何処かに少しだけ、自嘲のような笑みも含まれていた。

「剣が、上手く振れないってどうか……」

アオイは剣の柄に手を伸ばした。慣れた動作で剣を抜くと、ずっと水平に刃を向ける。そこから流れるように剣先を滑らせた。白い息を切り、空気をも切断し、銀の刃先が冬の風の中を舞う。雪とは違う、鋭利な輝き。それでも、以前のような動きとは違う。

アオイはある程度腕を振り、そしてすぐに鞘にそれを戻した。言いくそうに口を開き、視線を逸らしたまま言う。

「気づいたのは、西大陸に着いてからなんだけど……」

起きた瞬間、体の感覚に違和感を覚えた。自分の体が、人の体を操っているように重く感じた。怪我をしていたせいかもしれないとも考えたが、原因は違う。

何度か皆に看病してもらっていた時、アキだけがいつも悲しげな表情をしていた。その意味に気付くまでかなりの間、考え続けた。

アオイはいつの間にか積もっていた肩の雪を払いもせず、自分の両手を見つめた。シヨウはアオイの傍に歩み寄ると、顔を覗き込み、口を開いた。

「……魔力と関係あるのか？」

「推測だけ……」

アオイは躊躇いがちに頷いた。そしてふと自嘲的な言葉を漏らす。

「自分のことなんだけど、ね……」

自分のことすら、はつきりと分かっていない。アオイはそう言いながら、また歩き始めた。今度はシヨウがアオイの後を追う形になる。シヨウは雪に足をとられつつも、前に進んでいくアオイの背中を見つめた。

「……誰も自分のことを全部知ってるわけじゃないだろ」

そう呟くと、アオイの足が止まった。

「……うん」

「知らないことは、これから知っていけばいい。……俺は、そう考えるようにしてるけどな」

アオイは横顔でそれに頷き、そして吹雪の向こうを見つめながら呟く。風の音以外に雑音はなく、林の中は静寂に満ちていた。

「……でも、知らなければいいことも、あるかもしれない……」

アオイの言葉だけが、名残のように響いた。

第4章 遺跡と封印

翌日は天候に恵まれ、晴天の中、山を降りた。麓の村に着くまで、雪の多さに苦労はしたが、特に魔物も出ずに下山することが出来た。アオイは辺りの家々を見回しながら、先を歩くフェリアに話しかける。

「で？私たちはどこまで一緒に行けばいいの？」

靴についた雪を払い落としていたフェリアはその声に振り向くと、体を起こし地図を広げた。そして村から少し離れた場所にある場所を指差した。

「この先にある村まで。大丈夫よ、今日中に行ける場所にあるから」

片目を瞑ってそう言うフェリアに、アオイは首を傾げる。

「でも雪が凄いいんじゃないの？」

改めて村の周辺を見渡してみると、山の頂上ほどではないがこの辺りも雪が積もった跡がある。村だから除雪されているのは当然だが、こんな辺境にある遺跡まで除雪されているはずがない。

雪山越えの苦労を思い出したミエルがうなだれたように尻尾を下ろした。シヨウも顔を顰め、嫌そうな顔をしている。

フェリアはあっけらかんとした顔で首を横に振った。

「雪はないわよ」

「……はあ？」

思わずそう声をあげたアオイに、フェリスは笑った。

「まあ、あんまり有名な遺跡じゃないから知らないのは仕方ないことかもしれないわね。でも大丈夫、雪が無いことは保証するわ」

アオイはシヨウを見上げ、顔を見合わせる。肩をすくめるシヨウに、アオイは仕方ないと呟いた。一度行ったことのあるフェリアが言うのだから、信じるしかない。

アオイはため息をつき、そして口を開いた。

「……分かった。まあ、雪があってもなくても行くことになるとは思ってたけど」

「あらあ、察しがいいわね」

フェリアの色気のある微笑に、アオイはさらに脱力した。横を歩くミエルが、アオイを慰めるように尻尾を振る。フェリアはアオイの後ろにいるシヨウに言う。

「それに……本当の案内役が、もしかしたら遺跡のほうにいるかもしれないわ」

完全に脱力しているアオイが、フェリアに視線を向けた。

「用事があってこれになかったんじゃないの？」

「それは本当よ。仕事のゴタゴタで来れなくなったから、とりあえず遺跡の方で待ち合わせするってことになったの。本当は、レイリアで会う約束をしたのに、あっちは仕事の関係で山のこっち側の港で降りたんですって。全く、約束を守らないのは男としてどうかと思うわ」

腰に手をあてて憤慨してる様子のフェリアに、アオイはシヨウに視線を向ける。

「そうゆうもの？」

「そういえば以前街を案内してもらった時にもすぐ女の子に声かけちゃって、説明は殆どしてなかったわ。そうそう急に用事が入ったとかでいなくなったりもしてたし、すぐそこらの娼婦に声かけちゃったりなんかして、周りにいる子達にどれだけ悪影響か考えても見てほしいもんだわ、本当に。ああ、そういえば2年前なんかは……」

シヨウは頬をかいて小声で言った。

「……………。俺に聞くなよ」

アオイは首を傾げ、どんどんエスカレートしていくフェリアを眺める。

「これで遺跡の方にもいなかったら、悪い噂にあること無いこと尾ひれを付けて、千年先まで苦しめてやるわっ。男って酒と煙草と遊べる女さえあればいいと思ってるのよね。本当に嫌だわ。ねえ、青髪ちゃん」

すっかり存在を忘れられているシヨウを不憫に思いながら、アオイはとりあえず頷いておく。

「え？ああ、うん……多分」

よく分からないけど、というアオイの呟きは完全に聞こえていな

いらしく、フェリアはそうよね、そうよねと頷いてアオイの腕を引っ張って歩き始めた。少し離れたところに取り残されたシヨウは、足元から見上げてくるミエルの視線を受け、頭を抑えた。

「……ミエル。見るなよ」

からかわれている様な感覚を覚え、シヨウは前の2人を追って歩き出す。その様子を見つめていたミエルは、尻尾を振りながらそれに続いた。

フェリアの案内で街から少し離れた川沿いの道を下る。その途中からアオイはふと辺りの景色が変わってきたことに気付いた。木々は白く変化し、地面は砂の中にガラスの破片が散りばめられたようにキラキラと光っている。ミエルが時折何かを気にしているように足を上げ、その地面を見つめている。

アオイはしばらくその様子を眺め、呟いた。

「凍ってる……？」

前を歩くフェリアが振り返り、頷いた。

「そう。ここは雪が殆ど降らない地域なの。でも気温は下がるから、

少しでも水分があれば凍ってしまうわ」

気をつけてね、とミエルの頭を撫で、フェリアは言う。アオイは刺すような冷気に時々奮えを起こしながらも、フェリアとシヨウの背中を追った。

「……シヨウ。寒くないの？」

先ほどから何回も『寒い』と連呼していたアオイは、何も言わずに黙々と歩いていくシヨウの姿を見てそう問いかけた。シヨウは隣に來たアオイに視線を向けて即答する。

「寒い」

「……全然寒そうに見えないんだけど」

2人のやり取りを聞いていたフェリアは首だけをそちらに向ける。

「お兄さんはどこの生まれ？もしかして寒い地方じゃないかしら」
「それは……」

覚えていない、と言おうとした瞬間、隣にいたアオイがそれを遮った。

「フェリアは？東大陸はそんなに寒い所じゃないって聞くけど」

シヨウを横目に、アオイはフェリアにそう問いかける。フェリアは何の疑問も抱かなかったらしく、すぐに口を開いた。

「私もあまり寒い所の出身じゃないから、結構堪えるわ」
「東大陸のどこら辺？」

「ガージルよ。名前だけで分かるかしら？工業都市が広がっている場所なんだけれど」

フェリアに寄っていったアオイを見つめ、シヨウは首を傾げた。記憶喪失だということについては、今更氣を使うようなことでもない。今まで何人かにそのことを話したことがあったが、その時は氣を使うような素振りを見せたことは無かった。

アオイの様子を窺っていたシヨウは、ふとその足が止まったことに気付き、同じように足を止めた。アオイはふと言葉を漏らす。

「……凄い……」

道を曲がった瞬間、3人の目の前に石壁で作られた遺跡が見えてきた。さほど大きいとは言えなかったが、それは小さな宮殿のようだった。所々朽ちかけている部分もあるが、時を経て風化した傷跡は、その長い歴史を感じさせるのに相応しかった。

近づき、アオイは改めて感嘆の声を漏らす。

「……これがフェリアの見たかった遺跡？」

「そう。この辺りは夏になっても気温が上がらないから、ずっと凍ったままになってしまっているのよ」

石壁はまるで精巧に作られた刃物のように輝いている。永年凍り続けた石の様に、アオイはふと手を伸ばす。それに気付いたシヨウは、慌ててその腕を掴んだ。

「馬鹿、触らない方がいいぞ」

「え、あ……」

言われて初めて気付いたように、アオイは困惑したような顔でシ

ヨウを見た。シヨウはため息をついてアオイの顔を見やる。どうやら、そういったものについての知識が無いらしい。少し離れたところから、フェリアが声をかける。

「大丈夫？」

「あ……なんとか」

シヨウはアオイの腕を放し、フェリアの方に歩き出したアオイの姿を目で追った。

アオイの知識にはいつもムラがある。協会で教わっていなかったり、知っていても昔の知識だったということも多い。故意にそうさせられてきたことを、本人も自覚している。それでも、知らないことが多すぎるのだ。

ふと考え込んでいるシヨウに気付いたフェリアが声をあげる。自分を呼ぶ声に我に返ったシヨウは、慌てて2人を追いかけた。

少し前を歩くアオイに聞こえないように、フェリアはシヨウに囁く。

「……ひとつ聞いてもいいかしら？」

シヨウは視線を向けず、無言で頷く。フェリアはアオイの背中を見つめながら口を開いた。

「彼女、随分箱入りのようだけど。……どこの出身？」

「詳しい出身は、俺にもよく……」

手掛かりは、アオイの見た夢。しかしそれさえも、本当なのか分からない。首を振るシヨウに、フェリアはそう、と答えた。

前を歩くアオイは、時折壁伝いに彫られた模様を眺めたり、ふと天井を見上げたりしている。本を読むのが好きなように、もともと

好奇心のある性格なのだと改めてシヨウは認識した。

フェリアはシヨウの横を歩きながら、眼鏡をつ、と押し上げる。

「……彼女に、『God's Seed』の神話の話をしたじゃない。この間」

God's Seed、という言葉に、シヨウは反応を示した。まさか急にその話をされるとは思っていなかったのだ。首を傾げるフェリアに、シヨウは首を振る。

「……それで？」

「彼女の持っているドレス・ソードは北大陸の神法協会のものよ」

フェリアの言葉に、初めてシヨウは視線を相手に向けた。

「協会の古いシンボルを模したマークが彫られているわ」

「それは……」

言い訳をしようと口を開き、その仕様がないうちに気付く。北大陸に行ったことがある、等という言い訳は、口の中に押しとどめた。フェリアは、シヨウの様子を見つめて溜息をつく。

「……ねえ、もしかして彼女は……」

そう言いかけたとき、前を歩くアオイの足が止まった。聞こえていたのだろうか、とシヨウは咄嗟にそう思ったが、アオイの口から出た言葉は、全く別の、感嘆の言葉だった。

「うわ、あ………」

アオイの目の前には、石で作られた庭園が広がっていた。建物の中だというのに、そこには外から差し込む光と、凍った植物が光り輝き、明るくなっているように見える。永久に凍り付いてしまった花々は、まるで時間が止まってしまったかのように、美しいままそこに存在していた。

フェリアは歩み寄り、そしてアオイの肩に手を置く。

「凄いでしょう？この氷の庭園。時間が止まっているみたいで素敵よね」

アオイは言葉をなくしたように、ただ頷いた。そして庭園の中に足を踏み入れる。2人を追いかけて、シヨウもその中に足を踏み入れた。

庭園には飛び石が置かれ、道の両端には何かの碑がいくつも置かれていた。消えかけた古代の文字を見つめるアオイに、フェリアが一つ一つ説明していく。

「この文字、全く私たちの文化とは違うの。ずっと昔に作られた文字だっという仮説や、何かの暗号のために作られたものだっという仮説もあるわ」

「でも、あまりに違いすぎない？今使ってる文字と」

氷から石に変化しつつある碑には、角ばった文字らしきものが彫られていた。するとフェリアは、今度は反対側の碑を指差して微笑む。

「でもあつちは、まったく反対よ」

振り返ると、今度はただの直線のようなものが彫られた碑が見えた。それは文字というよりも、ただの模様のようにも思える。時折

点や何かのマークが彫られているが、アオイにはそれがなんなのか、さっぱり分からなかった。

「……全然違う文字じゃない？」

「そうよ。不思議よね、世界には私たちの知らないことがもつと沢山あるって思い知らされるわ」

そう言つて、フェリアは一つ一つの碑を眺めて歩いた。アオイもまた、辺りをキョロキョロと見回しながら、庭園を先へ先へと進んでいく。

どこまでも続いていくのかと思われた空間は、ふとした場所で終焉を迎えた。アオイの目の前に、大きな碑が建てられていたのだ。小さな扉のような絵が描かれたその場所には、また、解読不可能な文字が描かれている。アオイはそれを見つめ、足を止めた。

「アオイ」

先に歩いていったアオイを追いかけて、ショウが追いついてくる。自分と呼ぶ声にも返事をせず、アオイはその文字に視線を通していった。

「……アオイ？」

アオイの瞳は、理解できない文字の羅列を追っている。肩に手を置くと、アオイはショウを振り返った。

「寒いのか？ 顔、真っ白だぞ」

「……ショウ」

アオイが顔面蒼白のまま、目の前にある碑を指差した。強張った

表情をシヨウに向ける。唇が震える。吐き出す息は、白く染まっていた。

「どうした？」

アオイはもう一度視線を碑に戻し、また一步、碑に近づいた。注意しようとシヨウが口を開いた瞬間、アオイの声が静かに響き渡る。

『……時の眠りし樂園に、白き光の差し込む時』
「？」

フェリアが顔をあげる。彼女が何かを言うより先に、アオイの言葉が後に続いた。文字の羅列の一部分が、光を帯びて輝き始める。

『我、願う。制限された未来の先を、螺旋の運命の終焉を』

アオイの言葉に呼応するように浮き出てきた金色の文字は、いつの間にか碑から空中に浮かび上がり、風に流される砂のように消えていく。アオイの背後にいたシヨウには、その様子がしっかりと見えていた。そしてふと、止めなければという思考が頭に浮かび、その手を動かした。

「アオイっ」

肩を掴む。しかし、アオイの視線は碑に向けられたままだ。フェリアもまた駆け寄ってくる。

『形なき空隙の中に、一つの祈りを。
無の淵に眠りしものを呼び起こし、此处に新たな時を』

ふと、碑に刻まれた文字の一行が、何かに弾かれたように光の粒を空中に散らした。まるでガラスが割れるように光が弾け、その破片は地面に落ちる瞬間に空気中に消える。

『時を、明日を、未来を、終わり無き世界を』

アオイはいつの間にか、目を瞑ったままその言葉を口にしていた。まるで自分の口にした言葉に呼応しているように、次の言葉が口について出てくる。この言葉を知っているような、どこかで聞いたことがあるような、そんな感覚が頭の中をよぎった。

『……そして』

ふと、そんな言葉が聞こえた。自分の声なのか、別な人間の声なのか、アオイには分からなかった。隣にいるシヨウやフェリアの気配も感じる事が出来ない。何処からか聞こえてきた声にふと目を開けると、そこは真っ暗だった。

『終焉へと導く者が、この世に生まれ来ることはないように』

頭の中で反響するように、そんな言葉が繰り返し聞こえた。追いかけるように次の言葉が続く。

『制限された未来の先を、螺旋の運命の終焉を』

暗闇。いや、闇すらない。アオイはふと、声の聞こえる方向を振り返る。しかしそこには何も無い。そしてふと気付く。自分の姿もまた、見えないことに。

『血肉によって成る世界に、連鎖の糸。暗闇こそが其の生きる糧』

もうアオイは言葉を発してはいなかった。静寂の暗闇の中、アオイはただ耳を塞ぐ。しかし言葉と同時に、その言葉の持つ意味や思い、憎しみまでもが肌を貫き、体の中に潜り込んでくるような不快感を覚えた。声を出すことさえも忘れてしまったように、体はただ小刻みに震える。

斬りつけられるように、体の何処かに痛みを覚える。空気が薄くなったように、息が苦しくなる。具現化したような憎しみの思い、悲しみの思い、そんなものが何も無いこの闇の中で溶け合っている。

『殺せや殺せ、其の生きる齒車、巧妙にして精巧な創られた存在』

頭の中を、様々な声が行き交っている。アオイは頭を抑え、座り込む。

『運命を知らぬ其の子、やがて終焉を呼ぶ、導く者……』

「アオイっ!？」

意識が途切れたように、アオイの体が後ろへと揺れた。バランスを失い、倒れこみそうになるのを、ショウとフェリアが支える。フェリアはアオイの体をショウに預けると、冷静に脈を確かめる。

「……気を失っているみたい。外に出ましょう、いったん街に戻ったほうがよさそうだわ」

ショウは頷き、アオイの様子を見つめた。先ほどまで碑の文字を読んでいたアオイは、途中でふと言葉を失ったようだった。フェリアはショウにアオイを背負わせ、碑を振り返る。

「もしかしたら……青髪ちゃんは封印を破ったのかもしれないわ」
「……封印？」

シヨウも同じように振り返り、碑に視線を向ける。そして歩き始めたフェリアの後を追った。背中に微かな体温を感じながら、アオイの体に負担をかけないように歩く。

フェリアは頷いた。

「ここはもともと『砂の民』が守っていた土地なの。その一族に聞いた話なんだけれど……この遺跡は、誰かの封印らしいわ。考古学的には仮説の一つに過ぎないけど」

アオイの青髪を撫で、フェリアはアオイの顔色を窺う。

「……。……とりあえず街に戻りましょう。気を失っているだけだとは思うけど、とりあえず青髪ちゃんを休ませないと」

遺跡の入り口付近まで来ると、眩しい程の光が外を満たしていた。シヨウはふと肩に頭を預けているアオイの様子を見る。顔色は先ほどより良くなってきたが、まだ目を覚ますような雰囲気はない。

まるでコウと戦った時と同じ。そんなことを考えて、シヨウは苦々しい思いに顔を顰めた。あの時と同じような思いはしたくない。

遺跡の入り口に視線を戻し、シヨウはそう思った。

フェリアは入り口付近まで来て、足を止めた。少し後ろを歩いていたシヨウは、フェリアが急に立ち止まったので、首を傾げる。

フェリアの後ろから顔を出すと、遺跡の外に誰かが立っているのが見えた。多分男だろう、片方は入り口の前で手を振っており、もう片方は辺りを見回すように立っている。2人共、逆光で顔は見えない。

片方がフェリアの姿に声をかける。

「よう、フェリア。悪かったな、遅れちまって。ちよつと予定が狂って……ん？」

手を振っていた長身の男が、シヨウに気付いたように首を傾げた。しかし、何かを言う前にフェリアが男に向かってずんずんと突き進んでいき、その襟元に掴みかかる。

「ちよつとっ！！遅いわよ、遅すぎるわよ！！一体港でどれだけ待ったと思ってるの！？」

「いや、こつちもちよつと諸事情が……つと、フェリア、暴力は止める、暴力はっ！！メガネっ子の暴力女はモテないって昔から言っ……ぐはあっ」

「予定が狂いそうなら前もってそう言っておきなさいよ、いつも言ってるでしょう！！ヴァーミリオン！！」

逆光で見えなかった相手の顔が、やっと見えた。シヨウはフェリアが掴みかかっている男と、興味なさそうにしている青年の顔を確認し、一瞬アオイを落とすようになった。呆れなのか、驚きなのか、自分でもよく分からない気分で、口元を引きつらせる。すると向こうにいた男の方がシヨウの姿に気付いた。

「……レイン」

男は短髪の黒髪をしていた。目を細めてシヨウの姿を見、そして一歩、二歩と近づいてくる。シヨウは無言で相手を睨み付けた。剣に手を伸ばしたいが、アオイを背負っているため、それが出来ない。2人の様子に気付いたのか、長身の男の方がそちらに視線を向けた。

「つと、やっぱレインか」

「え……？何、知り合い？」

今にも長髪の男の首を締め上げようとしていたフェリアが、ぽかんとした顔で手を止める。男はとりあえずその手を振り解き、苦笑した。

「レインは元々ティスニー国軍の軍の人間だからな」

黒髪の青年はショウに背を向け、街への道を歩き出す。乱れた襟元を直した男は、フェリアに向かって小声で囁く。

「……犬猿の仲ってやつだ。お互い、邪魔な存在だからな」

「……軍人と盗賊だから？」

男は肩をすくめてみせると、顔をあげてショウに視線を向けた。そして背中にいるアオイの姿も確認すると、口を開く。

「レイン。街に俺たちが使ってる宿がある。ついてこい」

「なっ……」

ショウは反論しようとするが、何かを言う前に男が顎でアオイを示した。

「そのカノジヨ背負って別な宿探す気かあ？止めといたほうがいいと思うがな」

「……」

アオイを背負っていることを思い出したショウは、苦々しい表情で次の言葉を飲み込んだ。長身の男はその様子を眺め、苦笑する。

「別に恩を売ろうってわけじゃないから安心しろ。……宿にはシンとミナがいるからな」

シヨウは顔をあげる。男は頷き、そしてフェリアとシヨウを街へと促した。そして背中にいるアオイの様子を見つめる。

六神官に襲われ、一人教会に残った少女。その時の様子を思い出し、今彼女がここにいることに、彼は満足そうに笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7635r/>

God's Seed

2011年7月18日23時58分発行